る者と雖も代位相續を爲すことを得るや　森　榮〔新聞〕明三八年　卷三一九號
長子相續の起源　岡村　司〔京法〕明四〇　二　一—二
相續法上に於ける胎兒の地位　牧野菊之助〔法政〕明四〇　二　三
家族に非すして相續人に指定せられたる者の戸主權の取得　牧野菊之助〔志林〕明四一　一〇　一
留保と遺留分　掛下重次郎〔明學〕明四一　一　一二一
家族制度と長子相續　石阪音四郎〔京法〕明四一　三　三
壻養子の相續權に就て　大原　早利〔新聞〕明四一　一　四九一
被相續人を死に致したる者の刑の確定前爲したる行爲の效力　乃川　覺治〔新聞〕明四一　一　四九四
被相續人を死に致したる者の刑の確定前爲したる行爲の效力　阪口　去水〔新聞〕明四一　一　四九六
遺留分の規定に違反したる財產留保の效力　牧野菊之助〔志林〕明四二　一　一〇
代承相續に就て　梅　謙次郎〔志林〕明四二　一　三
民法第九七三條の意義　島田　鐵吉〔新報〕明四四　二一　一
法定推定家督相續人の復籍と廢除の取消　A S 生〔新聞〕明四四　一　六九四
復籍と廢除取消との關係を論ず　齋藤　巖〔新聞〕明四四　一　七〇六
復籍と廢除取消との關係論に付て　渡邊菊之助〔新聞〕明四四　一　七一五
家督相續人の指定に付て　牧野菊之助〔評論〕大二　二　一〇
承祖相續　柳川　勝二〔評論〕大三　三　一三
家督相續人たる胎兒を論す　松本　烝治〔新報〕大三　二四　一
家督相續回復請求權拋棄の契約　牧野菊之助〔新報〕大三　二四　八
家督相續回復請求權は拋棄することを得ざる乎　横山勝太郎〔辯協〕大三　一八　一九一
仲繼相續に付て　牧野菊之助〔評論〕大四　四　四
相續人選定の必要と戸主たる親族一人のみ存する場合　牧野菊之助〔新報〕大四　二五　八
法定推定家督相續人の廢除及他家入籍後に於ける廢除の取消及復籍と相續權の回復　牧野菊之助〔新報〕大四　二五　九
家督相續人選定の爲めの親族會に就て　大橋　誠一〔新聞〕大四　一　一〇〇八
分家より復歸せし者と他の卑屬との相續爭　大橋　誠一〔辯協〕大五　二〇　一
分家より復歸したる者と他の卑屬間の相續順位　大橋　誠一〔新聞〕大五　一　一〇九九

家督相續人排斥の方法及效力　菱川　憲正〔新聞〕大五　年　卷　號
相續權回復、後見人免黜、親族會決議の無效又は取消、身分關係確定の訴と事物の管轄　牧野菊之助〔新報〕大六　二七　七
他人の養子たると同時に被相續人の家族たる直系卑屬と家督相續の順位　乾　政彥〔志林〕大六　一九　七
我が家督相續法と英國の一八八二年の Settled land act　松崎藏之助〔國家〕大六　三　八—九
民法施行前法定の推定家督相續人他家に入り其後該單身戸主死亡して家督相續開始したるも絕家と爲らさる場合と家及財產の處分方　牧野菊之助〔新報〕大六　二七　九
家督相續人たる壻養子の離緣と其效力に就て　神谷　健夫〔法論〕大七　一　八
胎兒と代承相續　大橋　誠一〔新聞〕大七　一　一四五四
胎兒と代承相續論を讀み大橋君に質す　三枝　生〔新聞〕大七　一　一四六二
推定家督相續人たる身分を回復せざる廢除取消の訴に就て　齋藤　巖〔新聞〕大七　一　一三七三
家督相續人選定の親族會の存續を論ず　齋藤　巖〔新聞〕大七　一　一三八二
代位相續法沿革一斑　中田　薰〔法協〕大七　三六　一二
家督相續開始と相續人選定との間に於ける權義の歸屬　穗積　重遠〔新報〕大八　二九　二
被相續人の爲したる納稅と家督相續人の公民資格との關係　關口健一郎〔國家〕大九　三四　二
胎兒の家督相續に關する地位　長島　毅〔新報〕大九　三〇　三
家督相續と胎兒　白旗　文一〔新聞〕大九　一　一六七四
法定の推定家督相續人たる壻養子なる者は男子を養子と爲すことを得ざるや　鈴木　久作〔新聞〕大九　一　一七一三
女戸主の法定推定家督相續人たる私生子と認知　島田　鐵吉〔新報〕大一〇　三一　八
被廢除者の指定及び選定に就て　中川善之助〔法政〕大一〇　一八　八
相續缺格とその宥恕　中川善之助〔法協〕大一一　四〇　五—六
推定家督相續人廢除の效力　鬼澤藏之助〔法政〕大一一　一九　九
朝鮮の慣習上男子なき者死

亡したる場合に於ける相續順位に就いて　金廣植〔朝司〕大一二年二卷五號
私生子の認知と女戸主の法定推定家督相續人に就て　藤井清治〔新聞〕大一二 一 二一一〇
民法第九八六條と同第一〇〇一條との解釋に付き通說に反す　藤井清治〔新聞〕大一二 一 二一二頁 二一二六頁
法定の推定家督相續人は認知に因りて父の家に入るか　長島毅〔法曹〕大一三 二 一
農業嫌忌と廢除に關する東京控訴院判決の批評　荒木櫻洲〔新聞〕大一三 一 二三一二
民法第九八六條と倫理との調和　松倉慶三郎〔新聞〕大一三 一 二三三三
未成年者と相續人の指定及轉籍の能力に關する宮城控訴院判例批判　荒木櫻洲〔新聞〕大一三 一 二三四一
家督相續回復請求權　中島玉吉〔法叢〕大一四 一四 二
分家の法定推定家督相續人が本家相續を爲す場合に於ける廢除手續の要否　三谷錦太郎〔正義〕大一四 一 六
相續人廢除に關する裁判管轄權に就て　福井才一郎〔新聞〕大一四 一 二四四七
最近の一大審院判決に對する疑問（相續人指定の遺言を無視せる親族會決議の效力に付いて）　中川善之助〔法政〕大一五 二三 三
相續人指定の遺言を無視せる親族會決議の效力に就て　菰淵清雄〔法政〕大一五 二三 四
廢嫡の原因止みたるの意義に就いて　中川善之助〔法曹〕大一五 四 四
家督相續權の順位に就いて　福井才一郎〔新聞〕大一五 一 二五五七

【家内工業（カナイコウギョウ）】

參照＝苦汗制度。

勞働問題の上より見たる家内工業　氣賀勘重〔國經〕明四〇 二 二一三
家内工業と工場工業　河津遐〔日經〕明四一 二 七
英國家内工業制度の變遷の現況　關一〔國經〕明四一 七 一
家中工業に就て　瀧本誠一〔經叢〕大五 二 三
家内工業管見　上田貞次郎〔商經〕大六 一 七

【金澤（カナザワ）】

反動後の福井金澤機業界　杉山義夫〔洋經〕大九 一 四九〇頁 五九〇四頁
舊金澤藩の鹽專賣　土屋喬雄〔經論〕大一五 四 四

栃内學士著「舊加賀藩地割制度」を讀みての雜感　福田德三〔國經〕大元年 一三卷 三號

【加奈陀（カナダ）】

南亞憲法草案と加奈陀及濠洲聯邦憲法　江木翼〔法協〕明四二 二七 四
加奈陀の移民問題　米田實〔外時〕大三 二〇 二三二
加奈陀排日案の運命　渡邊誠吾〔外時〕大四 二一 二五二
加奈陀の異民族問題　米田實〔國際〕大七 一六 一〇
加奈陀現時の移民　高田熊雄〔國經〕大八 二六 二一三
加奈陀下院總選擧の意義　臘山政道〔新報〕大一一 三二 一
聯邦加奈陀の研究　森口繁治〔法叢〕大一二 一〇 二一六頁
加奈陀の國際的地位　小山精一郎〔外時〕大一二 三八 四五二
刮目すべき加拿陀の經濟的發展　田中穗積〔外時〕明四三 一三 九
米加互惠協定の過去未來　田中穗積〔外時〕明四四 一四 一六八
加奈陀の保險業法改正案　麻生義一郎〔保雜〕明四四 一 一六九
加奈陀に於ける生命保險事業の現況及其概評　武井俊夫〔保評〕大六 一〇 五
加奈陀保險法の綱領　武井俊次〔保評〕大六 一〇 六一七
加奈陀に於ける最近經濟事情　原田龍平〔長彙〕大一二 二 二一四
加奈陀銀行制度の概要　青木一夫〔銀叢〕大一二 一四 二四六

【社會（シカイ）】

加奈陀工業紛議調査法實績　堀江歸一〔三學〕大三 八 六
社會政策より觀たる加奈陀官營年金制度　松崎壽〔三學〕大五 一〇 二
英領加奈陀に於ける勞働組合運動概況　水上鐵治郎〔社政〕大一二 一 三六
加奈陀製鋼職工罷業の顚末　大江武男〔社政〕大一三 一 四五

【金貸（カネカシ）】

印度に於ける金貸業者　津島壽一〔法協〕明四四 二九 六
高利貸業の新現象　黑澤和雄〔東經〕明四五 六六 一六六〇
札差に就きて　幸田成友〔三學〕大四 九 八一九

【株（カブ）】

株式を見よ

【株金（カブキン）】

株式を見よ

【株券（カブケン）】

株式を見よ

【株式（カブシキ）】

參照＝株式會社。株主總會。株式取引所。社債。優先株。利益配當。

株式の性質　岡野敬次郎〔法政〕明三一年卷二號　一三
株金の拂戻を論す　杉本貞治郎〔志林〕明三三　二　六
株金の拂込に就て　和仁　貞吉〔志林〕明三四　三　二三
株式競賣に因りて生したる餘剰金の歸屬權利者に就て　松本　烝治〔新報〕明三五　三　五
競賣に依り株式を取得したる者か次回の拂込を爲さざる場合に於ける前株主及其讓渡人の擔保義務に就て　岡崎　正也〔新聞〕明三五　一　六八
記名株式の質入　高根　義人〔內外〕明三六　二　二
株式の消却　岡野敬次郎〔新報〕明三六　一三　六
株式讓渡人の責任消滅を防ぐ方法　岸本　晋亮〔新聞〕明三六　一　一五一
株金の拂込は必ず金錢を以てするを要することを論ず　志方　鍛〔法記〕明三六　七　一四四
株金不拂に因る株主の失權に就て　松本　烝治〔法協〕明三七　三　二
會社の自己の株式の取得を論す　松本　烝治〔志林〕明三七　六　五五
記名株式に付き設定したる質權實行方法如何　櫻　蔭〔新聞〕明三七　一　二〇五
商法第一五三條の競賣　清家　宇吉〔新聞〕明三八　一　二八六
株金拂込に就て　三橋　久美〔法協〕明三九　二四　五
株式讓渡人の責任に就て　毛戸　勝元〔法政〕明三九　一〇　九
株金の拂込に就て　三橋　久美〔明學〕明三九　一　一〇一
記名株式讓渡の禁止　松波仁一郎〔明學〕明三九　一　一〇三
株式の競賣　平井彥三郎〔新聞〕明三九　一　三五八
所謂權利株賣買の無效　松波仁一郎〔新聞〕明三九　一　四三八頁　三八七頁
株式競賣に就て　飯島　喬平〔法協〕明四〇　二五　二
「一時に株金の金額を拂込むべき場合に限り株式の金額を二十圓までに下すことを得」との條文の意義　志田鉀太郎〔國經〕明四〇　三　二
株金の拂込に就て　岩井　尊文〔法協〕明四〇　二五　八
記名株式の擔保に就て　石原　三郎〔志林〕明四〇　九　一〇
所謂權利株の賣買に就て　原　嘉道〔辯協〕明四〇　一一　一〇九
相續に因る株式の取得は果して會社の定款を以て禁止するを得へき乎　一柳　貞吉〔新聞〕明四〇　一　四一六
株式の性質竝に會社存在中の株式と會社解散後の株式との差異　梅　謙次郎〔志林〕明四年卷一〇號　二
募集設立に於ける有價物の出資　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一〇　三
定款の規定により奪ふ事を得る株主權と然らざる株主權　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一〇　六
株式會社破產後に於ける株金の拂込　加藤　正治〔志林〕明四一　一〇　一〇
商法第一五三條第三項の場合にも第四四條第二項の適用ありや　西脇　晋〔志林〕明四一　一〇　一一
記名株式を目的とする質權の實行に就て　飯島　喬平〔法協〕明四一　三六　一三
會社の合併と株主の權利　森　作太郎〔新聞〕明四一　一　四七二　四七四
株券と債券　雨夜　亨〔東經〕明四一　五七　一四三一
權利株の賣買は果して株式讓渡の豫約なりや　山口　弘一〔國經〕明四一　六　五
株式消却の爲めにする權利株の賣買は有效なりや　西脇　晋〔志林〕明四一　二　五
株式社債の發行及引受　戸田　海市〔國經〕明四二　九　一—三
株主の固有權を論す　竹田　省〔京法〕明四三　五　七
優先株主の優先權は均一なることを要するや　和仁　貞吉〔志林〕明四二　二　七
優先株に就て　鳩山　一郎〔辯協〕明四二　一三　一三一
權利株の賣買と不法原因の給付に就て　西脇　晋〔志林〕明四三　一三　九
大株主の壓迫に對する小株主權利の保全　ロージヤース〔新聞〕明四三　一　六五三　六六二
株式投資の理由　服部　春一〔東經〕明四三　六二　一五六四
株式法產業組合法萬國會議　毛戸　勝元〔京法〕明四四　六　二
混水株の弊害を論ず　海老原竹之助〔國經〕明四四　一一　四
株式會社の自己の株式の取得に就て　西脇　晋〔志林〕明四四　一三　八—九
約束手形を以てする株式の拂込　黑澤　龍濱〔東經〕明四四　六三　一五九二
商法第一五三條第二項の二週間は發着何れの日より起算すべき歟　松澤常四郎〔新聞〕明四四　一　七一二
權利株の賣買と民法第七〇八條の適用に就て　吉野千代吉〔新聞〕明四四　一　七二一
會社解散の際に於ける未拂込金を對する處置　花岡　敏夫〔新聞〕明四四　一　七四七
株式讓渡人は會社の資本減少の決議に對して第三者に非ず　森　作太郎〔新聞〕明四四　一　七四八
無記名株券に就て　佐藤　雄能〔東經〕明四五　六五　一六四八　一六四九
優先株の種類及性質　佐藤　雄能〔東經〕明四四　六五　一六五三　一六五四　六六
株主の拂込に益金を充當す

る方法
國民經濟上に於ける株式界の地位を論ず　佐藤雄能〔東經〕明四五年 六六 一六五六號
株式名義書換に關する委任狀全廢論に就て　丹羽豐〔東經〕明四五 六六 一六六七
株式放棄論　大橋萬太郎〔東經〕明四五 六六 一六六七
記名株の讓渡に付て　黑澤和雄〔東經〕明四五 六六 一六六九 一六七四
株式の種類　竹田省〔新報〕大元 三三 八
株式の消却　上田貞次郎〔國經〕大元 三三 三
株券未發行の株式の讓渡に付て　西本辰之助〔三學〕大元 六 四
白紙委任狀附株券の流通を論して株券の裏書に及ぶ　松本烝治〔志林〕大二 一五 四
拂込未濟株金の整理法　毛戸勝元〔京法〕大二 八 九
第一回及資本增加の場合の拂込株金　佐藤雄能〔東經〕大二 六七 一六九一
我商法に於ける株金拂込請求權と株式質權との關係を論じ英國會社の Lien on shares の觀念に及ぶ　佐藤雄能〔東經〕大二 六八 一七二七
株式會社の自己株式取得の禁止に就て　花岡敏夫〔新報〕〔國經〕大三 二四 大三 一六 大
烏賀陽然良〔京法〕大三 九 一三

白紙委任狀附株券讓渡と株主の失權　松本烝治〔新聞〕大三 一 九三
白紙委任狀附記名株讓渡無效論に就き石坂博士に質す　猪股淇清〔新聞〕大三 一 九二九
株式の金額を論ず　佐藤雄能〔東經〕大三 六九 一七三八
株式會社應募超過額分當法　佐藤雄能〔東經〕大三 六九 一七四五
株式の消却　富永藤兵衛〔東經〕大三 六九 一七四八
株式會社發行證券の性質　丹羽豐〔東經〕大三 七〇 一七六一
株式の消却　烏賀陽然良〔京法〕大四 一〇 二一三
工的企業に於ける株式資本と株式資本と株式發行相場　高垣寅次郎〔國經〕大四 一九 三一六
記名株式の質權と失權の效果　花岡敏夫〔新聞〕大四 一 一〇二
記名株式の質權と失權の效力との關係に付商法の不備を論ず　花岡敏夫〔國經〕〔辯協〕大四 一九 五 大四 一九 一九八
株式失權後競賣手續完了前從前株主より株金拂込の申出ありたる時會社之を受領して失權株を從前株主に復活せしむることを得るや　柳田宗一郎〔新聞〕大四 一 一〇五七號
商法第一五一條と簿記計算　下野直太郎〔國經〕大五 二〇 四
株式名義の書換　水口吉藏〔國國〕大五 四 一一
株主の株金拂込義務と消滅時效を論ず　谷口嘉雄〔新聞〕大五 一 二〇一
株式の消却に就て　竹田省〔新報〕大六 二七 六
株券發行前に於ける株式の讓渡　有賀成可〔辯協〕大六 二一 六
額面以上の株式發行を論ず　眞野毅〔法協〕大六 三五 六一八
株式の額面超過額と所得稅　毛戸勝元〔京法〕大六 三 八
株式の額面超過と所得稅に關する普國、索逕及伊國の判例　毛戸勝元〔京法〕大六 三 八
新株のプレミアムに就て　中村茂男〔國國〕大六 五 九
額面以上の株式發行を論ず　佐藤雄能〔東經〕大六 七五 山一八八三 三八八六
株金第一回の拂込を論ず　佐藤雄能〔東經〕大六 七五 一八八八
株金拂込の延滯日歩に就て　富永藤兵衛〔東經〕大六 七五 一九〇〇
株式募集及引受　佐藤雄能〔東經〕大六 七五 山一九〇六 三一九〇七
記名株式の移轉と名義變換　西本辰五助〔三學〕大七 一二 八一九
株券發行前の株式の讓渡に就て　泉田吉次郎〔新聞〕大七 一 一四五九
株券に就いて　佐藤雄能〔會計〕大七 三 六 二
白紙委任狀附株券の讓渡に就て　入江眞太郎〔新報〕大八 二九 二
株式讓渡の禁止を論ず　松波仁一郎〔法政〕大八 一六 七
株式讓渡自由の制限に就て　高根義人〔辯協〕大八 二三 二
會社の合併に因る株式併合に就て　原嘉道〔辯協〕大九 二四 一
後取株に就て　佐藤雄能〔會計〕大九 七 二
株式のプリイミアムを論じて其課稅問題に及ぶ　中村茂男〔會計〕大九 七 三
未拂込株金の性質と其會計整理法　增嶋信吉〔會計〕大九 七 六
白紙委任狀添付の株券と公示確告に因る除權判決との關係を論ず　武田貞之助〔新聞〕大九 一 一六四七
株式の分布と課稅（株式會社株主に對する武藤氏の誤解）　汐見三郎〔經濟〕大九 一〇 五
汐見法學士に答ふ　武藤山治〔經濟〕大九 一〇 六
株金の分割改造論　眞野毅〔辯協〕大九 二四 一
未拂込株金論　大崎範一〔會計〕大一〇 九 二一三
物價より觀たる諸會社及株式の位置　安田與四郎〔洋經〕大九 一 巳一九〇六 巳九一一
株式の意義に就き　水口吉藏〔新報〕大一〇 三一 七
株式讓渡に因る株主權取得の本質を論ず　水口吉藏〔新報〕大一〇 三一 九一一〇
株式の前途如何　小池國三〔東經〕大一〇 八三 二〇九六

他人名義株式擔保に就て　草島定太郎〔銀研〕大二　年卷三　號二
株式打歩を準備金となすべき時期　中島　精二〔會計〕大二　一〇　五
株式發行割增金を論ず　下野直太郎〔商研〕大一〇　一　一
取締役の供託したる株券の性質　三谷錦太郎〔辯協〕大二　二七　一
株式金融論　荒木　秀一〔銀研〕大二　四　一
株式金融の研究　荒木　秀一〔銀叢〕大二　一　一—六
議決權株　西本辰之助〔法研〕大二　二　二—四
株式市價と金融內景氣との關係　池田　龍藏〔銀研〕大二　四　三
株式の消却と資本との關係に就いて（松本博士の所論を駁す）　佐藤　雄能〔會計〕大二　一三　三
銀爲替と株式と金融　丹羽　豐〔銀叢〕大二　一　三
株式金融の方法及批判　荒木　秀一〔銀叢〕大二　一　三
株式の消却を論ず　吉川信太郎〔法政〕大二　二〇　四
株式の消却と資本との關係に就て（佐藤雄能君の所論に答ふ）　松本　烝治〔會計〕大二　一三　四
名義株の配當は誰に課稅されるか、及之に對する判例　松野健太郎〔會計〕大二　一三　四
株券發行前に於ける株式讓渡の對抗條件　猪股　淇清〔法治〕大二　二　五
白紙委任狀附株券の危險　片山　千里〔銀叢〕大二　一三　一
債務の擔保を目的として自社株式に付き締結する契約　溪　淵　生〔新聞〕大二　一　二〇八九
株金を拂込まざる株式引受人も他の者と等しく權利を行使することを得るや　齋藤　巖〔新聞〕大二　一　二二五
白紙委任狀附株券の危險を讀む　高木武比古〔銀叢〕大一三　二　一
金融統計の種類と株式　石卷　良夫〔銀研〕大一三　六　二
被合併會社の清算所得と其株主の取得する拂込濟株式金額　織田　吉藏〔會計〕大一三　一四　三
株式金融とコールマネー　荒木　秀一〔銀叢〕大一三　二　五
株式擔保に就て　牧野清一郎〔銀叢〕大一三　三　五
白紙委任狀附記名株式の讓渡性　小野　久〔辯協〕大一三　二八　五
記名株券の喪失と公示催告　太田　義繁〔銀研〕大一三　七　六
株式金融政策　荒木　秀一〔銀叢〕大一三　三　一—二
大株整理問題　長永　義正〔財經〕大一三　一一　一六
株券法論　赤尾　元彥〔早法〕大一三　三　一
株主責任に關する判例の研究　濱田　德海〔會計〕大一四　一六　一

利益を以てする株式の消却に就て　三邊　金藏〔三學〕大一四　年卷一九　號三
無額面株式及轉化社債に就て　山本　俊麿〔正義〕大一四　一　四
本邦株式金融市場の構成　加藤　和根〔銀叢〕大一四　四　二—五
商法第一五一條の研究（銀行が自己株を擔保として受領することに就て）　多田　喜一〔法叢〕大一四　一三　五
株主の二重責任　濱田　德海〔會計〕大一四　一六　五
失權豫告附株金拂込催告に於ける拂込期間の起算點　竹田　省〔法叢〕大一四　一三　六
株配當の課稅を論ず　稻森　實〔經研〕大一四　二　二
株主の失權と其株式の所屬　岡村　玄治〔法曹〕大一四　三　一〇
株式現物業者の所得稅改正希望　神戶　正雄〔時經〕大一四　一　三〇
投資物として公債、株券並に社債の優劣　高城仙次郎〔法研〕大一五　五　一
債券及び株券の保護預り業務　栗栖　趙夫〔イン〕大一五　三　二—六
新株の價格を論ず　原口　亮平〔國經〕大一五　四〇　三
歲末株式の高潮と警戒要　神戶　正雄〔時經〕大一五　一　四三

【株式會社】

參照＝會社。株式。株主總會。監査役。社債。取締役。

社會問題の解決として株式會社を論す　伊吹山德司〔國家〕明三三　一四　一六四
現今經濟社會に於ける株式會社を論す　甲野　吉藏〔明學〕明三五　一　三四
英國の有限責任會社（株式會社）に關する新法律　セリム〔法記〕明三八　一五　一六〇
發起人團體論　松波仁一郎〔法政〕明三九　一〇　二
株式會社組織の弊害に就て　河津　暹〔日經〕明四〇　一　三—四
株式會社を論す　佐野　善作〔國經〕明四一　四　三
株式會社の支店に備付くべき定款及總會の決議に付て　河西善太郎〔新聞〕明四一　一　四七九
株式會社の發達及立法　松波仁一郎〔國經〕明四二　七　二
經濟上の株式會社　福田　德三〔東經〕明四二　六〇　一五一九
株式會社と營利事業　黑澤　龍濱〔東經〕明四三　六一　一五四二
株式會社の通弊　久米　良作〔新報〕明四四　二一　五
株式會社の統計的研究　福田　德三〔統集〕明四五　一　三六七
株式會社の形式と實質　上田貞次郎〔國經〕大二　一五　三
株式會社に關する上田教授の論說を讀みて・附松波青木兩博士の起源論に就て　福田　德三〔國經〕大二　一五　五—六
獨逸に於ける株式會社利潤統計調査に就て　福田　德三〔統集〕大二　一　三九一

			年	卷	號
株式會社の三大奇觀	兒林百合松	〔東經〕	大二	六七	一六八八
株式會社の起源に關して福田博士の教を請ふ	花岡 敏夫	〔國家〕	大三	二八	二
		〔新報〕	大三	二四	二
獨逸の有限責任會社と株式會社の比較並に其設立に就て	渡邊 鐵藏	〔法協〕	大三	三三	四
株式會社の起源に關する花岡學士の所說を讀む	松崎 壽	〔國家〕	大三	二八	四
株式會社論に就て福田博士に答ふ	上田貞次郎	〔國經〕	大三	一六	四
株式會社に於ける有限責任主義の經濟上の價値	關 一	〔新報〕	大三	二四	五
變態株式會社を論じて三井物產會社に及ぶ	福田 德三	〔財經〕	大三	一	五
花岡松崎兩氏の論文に就て	福田 德三	〔國經〕	大三	一六	五
株式會社の有限責任制度に就きて關博士に答ふ	上田貞次郎	〔新報〕	大三	二四	九
獨逸株式會社の營業成績	本庄榮治郎	〔京法〕	大三	九	一〇
大正三年下半期株式會社營業成績	渡邊 鐵藏	〔國家〕	大四	二九	九
本邦株式會社企業の利潤に就て	渡邊 鐵藏	〔統集〕	大四	一	四〇七
獨逸株式會社の營業成績	渡邊 鐵藏	〔國家〕	大五	三〇	一
株式會社整理論	毛戸 勝元	〔京法〕	大五	一一	一
株式會社の整理に就て	荒井誠一郎	〔法協〕	大五	三四	四
株式會社課稅問題	町田 成美	〔國家〕	大六	三一	一一三
支那に於て設立する日本株式會社に就て	柏田 忠一	〔亞經〕	大六	一	二
近世株式會社の起原に關する Lehmann の所說	小栗栖國道	〔京法〕	大七	一三	一
株式會社の起源に就て	上田貞次郎	〔國經〕	大八	二七	一
發起人團體の性質及設立行爲との關係	猪股 淇清	〔國國〕	大八	七	六
株式會社起源考	阿部 秀助	〔三學〕	大八	一三	一三
株式會社法の改造	猪股 淇清	〔國國〕	大九	八	一
株式會社實務法	橋本 良平	〔商事〕	大一一	一二	一一一六六八
株式會社資本組織の缺陷	兒林百合松	〔會計〕	大一一	九	五
株式會社の起原及沿革と株式會社法の發達	平野義太郎	〔新報〕	大一一	二二	四一〇
近世初期の英國株式會社に對するスコットの觀察	高木 壽一	〔三學〕	大一二	一七	一一二
株式會社の概念	猪股 淇清	〔辯協〕	大一二	二七	七
日本に於ける株式會社の起源	上田貞次郎	〔商研〕	大一三	二	三
		〔經研〕	大一三	一	一
株式會社の一觀察	小林 茂	〔金融〕	大一三	一	一

			年	卷	號
佛蘭西法に於ける勞働參加株式會社	西島彌太郎	〔法叢〕	大三	二	三
ミード氏著、株式會社財政論（第五版）	佐々木道雄	〔經論〕	大三	三	一
株式會社法と比例代表制度	田中 誠二	〔國家〕	大三	三八	一〇
米國に行はるゝ使用人を株主とする株式會社の政策に就て	吉川 義弘	〔商事〕	大一四	五	五
株式會社の人格	前田卯之助	〔企社〕	大一五	一	三
設立					
株式會社は其定款中に先取株に關する規定を設くることを得るや否を論ず	N	〔法記〕	明二七	四	二九
株金の拂戻を論ず	N				
株金の拂込に就て	杉本貞治郎	〔志林〕	明三三	二	一
株式引受の法律上の性質	和仁 貞吉	〔志林〕	明三四	三	二三
發起人の地位を論ず	松本 烝治	〔新報〕	明三八	一五	一
株式會社に於ける現物出資論	鈴木雄次郎	〔新聞〕	明三八	一	二六八
株金拂込に就て	鈴木雄次郎	〔新聞〕	明三八	一	二七〇
株金の拂込に就て	三橋 久美	〔法協〕	明三九	二四	五
株式會社不成立の場合に於ける發起人の責任	三橋 久美	〔明學〕	明三九	一	一〇一
	岩井 尊文	〔法協〕	明四〇	二五	八
	柏木 山人	〔志林〕	明四〇	九	九
株式會社の發起行爲に關する疑義	飯島 喬平	〔法協〕	明四一	二六	一
募集設立に於ける有價物の出資	和仁 貞吉	〔志林〕	明四一	一〇	三
商法第三五條但書の注意（財產出資の場合）	和仁 貞吉	〔志林〕	明四一	一〇	三
創立總會に於ける資本額變更の決議	片山 義勝	〔新報〕	明四一	一八	四
發起人の性質及責任	西脇 晉	〔志林〕	明四一	一〇	八
各株式に付き四分の一株金拂込は創立總會開催の前提條件なりや	和仁 貞吉	〔志林〕	明四二	一一	二
設立前の株式會社の性質	石阪音四郎	〔京法〕	明四二	四	三—五
無能力者による株式引受取消の會社設立に及ぼす効力	岡野敬次郎	〔新報〕	明四二	一九	六
發起人論	服部 春一	〔東經〕	明四三	六三	一六六 一六七
株式會社發起人の責任に就て	竹田 省	〔京法〕	明四三	五	一〇
株式會社の財產の評價に就て	岡野敬次郎	〔新報〕	明四四	二一	二
株式會社の機關と實際的運用に就て	上田貞次郎	〔國經〕	明四四	一〇	三
株式會社發起人の利得を論					

ず　上田貞次郎〔國經〕明四四 一一 五
約束手形を以てする株式の拂込　黑澤　龍濱〔東經〕明四四 六三 一五九一
有價物の出資に就て　高根　義人〔辯協〕明四五 一一 一六四
株式會社の設立費用　佐藤　雄能〔東經〕明四五 六六 ㊤一六七三 ㊦一六七四
發起人に此惡弊あり　海老原竹之助〔日經〕大元 一二 五
會社の發起人に經營の責任ありや　丹羽　豐〔日經〕大二 一三 八
英國會社法に於ける目論見書に關する發起人の責任　花岡　敏夫〔評論〕大二 二 一八
創立總會の權限に關する定款の規定　池田　秀雄〔新聞〕大二 一 八八八
株式會社の現物出資を論ず　鈴木富士彌〔辯協〕大三 一八 ㊤九〇、㊦九二
發起人の形式　猪股　淇清〔新聞〕大三 一 九七四
株式會社の機關と其作用　渡邊　二郎〔國經〕大四 一八 五一六
株式會社の發起人が受くる特別の利益及報酬に就て　佐藤　雄能〔東經〕大四 七一 一八二四
株式會社の現物出資を論ず　佐藤　雄能〔東經〕大四 七二 一八二八、一八三〇
株式會社發起人の責任に就て　松波仁一郎〔新聞〕大四 一 一〇二七、一〇三一
株式會社の創立總會の權限を論ず　松波仁一郎〔新報〕大五 二六 六
出資義務に就て　烏賀陽然良〔京法〕大六 一三 一
株式會社に於ける金錢以外の財產を以て出資の目的とする場合の會計問題　原口　亮平〔會計〕大六 二 二
株式引受及第一回株金拂込の欠缺と創立總會終結　猪股　淇清〔辯協〕大六 二一 三
株式の引受又は拂込の欠缺と會社の成立　水口　吉藏〔國國〕大六 五 六
株式會社發起人の責任を論ず　田中耕太郎〔法協〕大六 三五 八一一
株金第一回の拂込を論ず　佐藤　雄能〔東經〕大六 七五 一八八八
株式の引受又は第一回拂込の未濟と會社の不成立　岡村　玄治〔志林〕大七 二〇 三
株式會社設立無效の判決後の法律關係　齋藤　巖〔新聞〕大七 一 一三九四
株主名簿に就て　佐藤　雄能〔東經〕大七 七七 一九四四
株式會社の設立無效を論ず　松本　烝治〔新聞〕大八 一 ㊤一四九三 ㊦一四九四
株式會社發起人論　西本辰之助〔三學〕大九 一四 九一一二
現物出資論　猪股　淇清〔辯協〕大九 二四 九
發起人の意義　津田　進〔法記〕大九 三〇 一〇
株式會社財產の意義を論じて商法第一七四條第二項に及ぶ　持田　訣〔辯協〕大一〇 二五 四
株式會社設立費用の負擔者　豐原　清作〔辯協〕大一〇 二五 六
株式會社資本の概念　岡田　誠一〔經究〕大一〇 一 八
株式會社募集設立の場合に於ける物的出資は發起人に限る力　堀江專一郎〔辯協〕大一〇年 二五卷 八號
有價物出資者が金錢拂込を爲し得べき範圍　江口　繁〔辯協〕大一一 二六 一
發起人の利益として現物出資を論ず　橋本　良平〔商事〕大二 一 一
續株式會社發起人論　西本辰之助〔法研〕大二 一 四
設立經過中の株式會社に就て　石田文次郎〔國經〕大二 三二 五
所謂會社設立無効判決の確定したる場合に於ける發起人の責任を論ず　大西　利夫〔辯協〕大二 二六 七
株式會社定款の記載事項　佐藤　雄能〔會計〕大二 一一 ㊤三一六 ㊦一一四
勞務出資を論ず　中村　茂男〔商事〕大二 二 六
勞務出資に就きて　太田　哲三〔計理〕大二 一 一四
出資の目的物を論ず　下野直太郎〔商研〕大二 二 三
株式會社の設立　佐藤　雄能〔會計〕大三 一四 二一五
發起人論　佐藤　有恭〔新聞〕大一三 ㊤二八八 ㊦二八九
株式會社の現物出資に就て　中川十一郎〔法新〕大一三 一 一九
株式引受の性質（法律的概念に對する根本問題）　西本辰之助〔法研〕大一四 四 一
株主名簿記載の効力　水口　吉藏〔法治〕大一四 四 九一〇
株主に對する發起人の責任　猪股　淇清〔法公〕大一五 三〇 四
株式　株式を見よ
株主總會　株主總會を見よ
取締役　取締役を見よ
監査役　監査役を見よ
會社の計算　參照＝準備金。利益配當。
株式會社の配當金は各株主に對して必ず平等ならざる可からざるか　本野　一郎〔法協〕明二七 一三 三
株式會社の準備基金を論ず　アルテルヴーム〔內外〕明三七 三 一一三
少數株主權論　鈴木雄次郎〔新聞〕明三八 一 二七四
利益配當請求權に付て　片山　義勝〔新報〕明四〇 一七 五
定款に定めなき場合に於ける利益配當の標準　和仁　貞吉〔志林〕明四二 一一 六
準備金利用の方法　岡野敬次郎〔新報〕明四二 一九 九
配當金支拂請求權に就て　松本　烝治〔評論〕大元 一 一
新株式が事業年度の中途に於て拂込を爲したる場合には日割を以て利益配當を爲すべきや　高窪喜八郎〔評論〕大元 一 一
商法第一九六條に所謂開業の意義　猪股　淇清〔新聞〕大二 一 九一〇
商法第一九六條に所謂開業の意義　毛戸　勝元〔法記〕大三 二四 一
株式會社の虛僞計算　桑田　熊藏〔新報〕大三 二四 七

商法第一九六條に於ける開業の意義に付て　松本　烝治〔法記〕大三　二四　二
商法第一九六條第一項に所謂開業の意義を論す　志田鉀太郎〔法記〕大三　二四　二
第一九四條に於ける利益の意義　烏賀陽然良〔京法〕大四　一〇　五
商法第一九六條の開業の意義に付き　岸　清一〔辯協〕大四　一九　一九五
商法上株式會社の利益に關する疑點　太田　哲三〔會計〕大六　一　三—四
少數株主權の本質を論す　烏賀陽然良〔新報〕大六　二七　三
建設利息の不當配當を受けたる株主に對する會社債權者の權利存否　田中耕太郎〔新報〕大八　二九　六
株式を以てする配當は所得であるか　舞出長五郎〔國家〕大八　三三　一二
株式會社の利益配當保證に就て　打田　傳吉〔辯協〕大九　二四　七
會社の配當と賃價　佐藤　賢次〔計理〕大一〇　一　六
株式會社の爲めにする配當擔保契約　竹田　省〔法叢〕大一一　七　二
利益金の動搖と配當率の決定　橋本　良平〔商事〕大一二　三　六
株式會社の決算　橋本　良平〔商事〕大一三　四　四
商法第一九四條第一項の法定準備金に就て　加島　五郎〔新聞〕大一三　一—二二
株式會社の利益金に就て　吉川　義弘〔商事〕大一四　五　一
米國に於ける株式會社の行ふ利益配當に就て　吉川　義弘〔商事〕大一四　六　二

社債

社債を見よ

定款の變更

參照＝優先株。
株式會社資本の減少に就て　岡野敬次郎〔新報〕明三六　一三　五
一箇月を下らざる期間內の意義　平出　修〔新聞〕明三七　一　二三九
資本增加の法律的說明　岡野敬次郎〔新報〕明四一　一八　一
創立總會に於ける資本額變更の決議　片山　義勝〔新報〕明四一　一八　四
商法第二〇九條第四項の解釋　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一〇　五
株主に配當すべき利益を以て爲したる株式の消却と資本との關係　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一〇　九
各株主に付一株宛消却すへしとの決議の效力　西脇　晋〔志林〕明四一　一〇　一三
株主に配當すべき利益を以て未拂込額ある株式を消却する場合の手續　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一一　三
優先株主の優先權は均一なることを要するや　和仁　貞吉〔志林〕明四一　一一　七
資本減少論　横山勝太郎〔辯協〕明四一　一三　一三五
資本減少の登記期間　佐藤　雄能〔東經〕明四五　六六　一六六六
拂込株金額減少　松本　烝治〔評論〕大二　二　一
株式會社の資本增加を論ず　佐藤　雄能〔東經〕大五　七三　一八三四
株式會社の資本增加を論ず　竹田　省〔京法〕大六　一三　四
株主に配當すべき利益を以て爲す株式消却は資本減少と爲るや　水口　吉藏〔會計〕大七　三　五—六
新株發行に因る株式會社資本增加論　入江眞太郎〔法協〕大七　三六　六—八
株式會社の資本增加に就て　猪股　淇清〔國國〕大七　六　一三
缺損塡補の方法としての拂込株金額の減少　泉田吉次郎〔新聞〕大七　一—四一四三八　五一四三九
合併に因る株式會社資本增加の登錄稅に就て　毛戸　勝元〔新聞〕大七　一—四一三六二　五一三六三
資本減少方法の一例　佐藤　雄能〔東經〕大七　七七　一九四六
商法第二〇九條に違反した る所謂特別決議の効力に就て　齋藤　巖〔新聞〕大八　一　二〇〇六
株式會社の資本增加と新株の成立　梅　謙次郎〔志林〕大一〇　三三　一
合併に因る增資と優先株　近藤　民雄〔辯協〕大一二　二七　二
株式會社に於ける資本減少の原因　橋本　良平〔商事〕大一二　三　四
資本減少の方法　佐藤　雄能〔會計〕大一二　一三　六
株式會社資本減少論　赤尾　元彥〔早法〕大一二　二　一
株式會社の整理復興と追加拂による優先株制度　眞野　毅〔法曹〕大一三　二　一
變態增資論　橋本　良平〔會計〕大一三　一五　一
株式會社の資本減少に就て　松本　烝治〔民衆〕大一三　一　二
株式會社の減資　橋本　良平〔商事〕大一三　四　三

解散

株式會社合併に關する問題を論す　高窪喜八郎〔新聞〕明三九　一—四三七八　五三八三
合併に因りて消滅したる會社の株式に對する質權者の權利　森　作太郎〔新聞〕明三九　一　三七九
會社合併前の株式に對する質權　岩田　宙造〔辯協〕明三九　一〇　一〇一
再ひ合併會社の株式に對する質權に就て　高窪喜八郎〔辯協〕明三九　一〇　一〇三
　〔新聞〕明三九　一　三八七
謂ゆる株式會社の事實上の合併を論す　片山　義勝〔新報〕明四〇　一七　二
會社の合併と株主の權利　森　作太郎〔新聞〕明四一　一　四四七三　五四七四
會社解散の際に於ける未拂込金に對する處置　花岡　敬夫〔新聞〕明四四　一　七四七

裁判所の解散命令に付て　田中耕太郎〔志林〕大七年卷一一二號
合併に因る株式會社資本增加の登錄稅に就て　毛戸勝元〔新聞〕大七　一三六三
會社の合併に因る株式併合に就て　原嘉道〔辯協〕大九　二四　一
合併に因る增資と優先株　近藤民雄〔辯協〕大二　二七　二
株式會社の合併に關する疑義　三田勝〔法曹〕大一三　二　二
株式會社の合併　橋本良平〔商事〕大一四　五　一
株式會社の解散　橋本良平〔商事〕大一四　五　一
株式會社の解散　佐藤雄能〔會計〕大一四　一六　二　四

清算

株式會社清算の場合に於ける損益分配　岡野敬次郎〔志林〕明三六　五　四七
株式會社が事業に着手したる後其設立の無效を發見したる場合になすへき清算を論す　志田鉀太郎〔法協〕明四一　二六　四
株式會社破產後に於ける株金の拂込　加藤正治〔志林〕明四一　一〇　一〇
白紙委任狀に因る代理權の效力と會社の清算　梅謙次郎〔志林〕明四一　一〇　二
一旦定めたる債權申出期間を清算進行上の都合に依り清算人に於て任意に延長短縮することを得るや　和仁貞吉〔志林〕明四一　一　一
株式會社の利益及び殘餘財產分配の割合を論す　毛戸勝元〔京法〕明四一　五　三
株式會社の殘餘財產　佐藤雄能〔東經〕大二　六八　一七二九　一七三〇
株式會社の清算に就て　烏賀陽然良〔京法〕大三　九　五
清算中の會社に就て　烏賀陽然良〔新報〕大七　二八　三
株式會社の清算　佐藤雄能〔會計〕大七　三　三—四

【株式合資會社】

株式合資會社を論す　小澤政許〔新報〕明三二　九　九八
株式合資會社存廢論　松波仁一郎〔新報〕明四一　一九　八

【株式取引所】

參照＝株式。貨幣。恐慌。銀行。投機。取引所。

我國株式市場に於ける立會の方法　佐野善作〔國經〕明四〇　三　五
株式取引所と金融市場との關係　北內楢雄〔國經〕明四三　八　五—六
佛國巴里株式取引所の取引　棗田藤吉〔國經〕明四四　一〇　一
紐育株式取引所と金融市場　山室宗文〔法協〕明四四　二九　一
株式相場高低の原因を論ず　米澤貞二〔日經〕明四四　一〇　二—五
株式市場と經濟狀態　遠藤竹次郎〔東經〕明四四　六四　一六〇一

株式取引所改善策　奧田吉郎〔國經〕明四四年卷一一號
歐米株式取引所の現況　神田鐳藏〔洋經〕大二　一　六二三
株式相場論　丹羽豐〔東經〕大三　七〇一　七六二　七八〇
株式取引所增資問題に關し敎を戶田博士に請ふ　荒山泰〔國經〕大六　三　四
指定落による株式取引所仲買人の建株損益調査方法　島本得一〔會計〕大七　三　五
倫敦株式取引所の監督に就て　棗田藤吉〔國經〕大七　二四　五
現物市場としての株式取引所　井上豐太郎〔新聞〕大七　一三六二
株式取引所の計算整理方法及び仲買人の損益調査方法改良案　島本得一〔會計〕大七　三　一
島本君の株式取引所の計算整理方法改良案に就て　小山正之助〔新聞〕大七　一四〇一
株式仲買人と小口落　松永義雄〔辯協〕大九　二四　一一　一〇　二五
紐育株式取引所の精算方法と我國取引所の小口落方法　島本得一〔會計〕大一〇　九　一
株式相場　丹羽豐〔國經〕大元　一三　四—五
株式市場と金利と金融市場　左右田誠一〔銀研〕大二　五　三
株式取引二重上場問題の研究　島木篤次〔商事〕大三　二　六
紐育株式取引所に於ける新施設　井浦仙太郎〔商研〕大三　二　一
東京株式取引所の早受渡制度に就て　岡田純夫〔商事〕大三　四　四
物產の定期取引と株式定期取引の本質的差異　向井鹿松〔三學〕大一三　一八　一二
新設紐育株式交換團　棗田藤吉〔商經〕大一三　一四　一　三六　三七
株式限月短縮の經濟的考察　北崎進〔經商〕大一四　四　二
株式長期市場に於ける早受渡制度　山田敬太郎〔取引〕大一四　一　五
株式取引限月復活論　渡邊五郎〔金融〕大一四　二　八
株式取引所に於ける違約處分　島本得一〔商事〕大一四　五　六
米、株の相場（取引）と法律　原田鹿太郎〔民衆〕大一五　四　四
株式取引所に於ける早受渡制度に付て　長滿欽司〔銀叢〕大一五　六　四

【株主總會】

商法第一五六條の解釋及適用に就て　新井要太郎〔辯協〕明三五　六　五七
株主總會決議事項の範圍に就て　三浦雉城〔新聞〕明三六　一　三五

株式會社の總會決議の無效宣言を目的とする手續規定　富谷銓太郎〔志林〕明三六年五卷四四號
商法第一六三條の適用に就て　富谷銓太郎〔明法〕明三六 一 六四　〔法記〕明三六 一三 一三九
商法第一六三條の解釋に就て　奥西市太郎〔新聞〕明三八 一 二六七
少數株主權論　鈴木雄次郎〔新聞〕明三八 一 二七四
株主總會の決議の效力に就て　河西善太郎〔新聞〕明三八 一 三一九
株主總會招集の通知方法に關する判決に就て　森　作太郎〔新聞〕明三九 一 三三二
株主名簿に記載なき株主と株主總會招集の通知　志田鉀太郎〔國經〕明四〇 二 四
株主名簿に記載なき株主の議決權に就て　一柳　貞吉〔新聞〕明四〇 一 四一二
株主名簿に記載なき株主の議決權に關する一柳君の所說を駁す　澤田　例外〔新聞〕明四〇 一 四一四
株主總會の招集を論す　青木　徹二〔國經〕明四三 六 六
會社重役の議決權　高窪喜八郎〔辯協〕明四三 一三 一二九
株主の議決數の制限に就て　黑澤　龍濱〔東經〕明四四 六三 一六〇〇
株主の議決權　竹田　省〔京法〕大九 七 九
株式會社の臨時總會の權限を變更する佛一九一三年十一月二十二日の法律　毛戸　勝元〔京法〕大三 九 五
株主總會決議無效の請求　烏賀陽然良〔京法〕大三 九 八—一〇
取締役の候補者たる株主の議決權を論す　松波仁一郎〔新報〕大五 二六 一
株式會社の新株募集手續調査の爲めにする株主總會は通常の決議方法に依るべきや　谷口　嘉雄〔新聞〕大五 一 一一九五
少數株主權の本質を論す　烏賀陽然良〔新報〕大六 二七 三
株主總會決議無效判決の效力　竹田　省〔京法〕大七 一三 四
株式總會決議執行の時期を論ず　齋藤　巖〔新聞〕大七 一 一三九一
株主の議決權を論す　烏賀陽然良〔國經〕大八 二七 四—五
株主總會招集の場所　松井繁太郎〔新聞〕大八 一 二〇〇一—二〇〇三
本店の所在地以外に開きたる株主總會と其決議の無效　眞野　毅〔新聞〕大一一 一 一九六四
株主總會招集地に關する學說　Y T 生〔新聞〕大一一 一 二〇四四
本店所在地外に於ける株主總會　田中　豐〔法協〕大一二 四一 三
株式會社の總會決議の無效宣言を目的とする手續規定　矢追　秀作〔法政〕大一三年 二〇卷 八號
則の濫用　田中　誠二〔法協〕大一三 四一 九
社債募集と株主總會の特別決議　烏賀陽然良〔イン〕大一四 一 四
株主の議決權に就て　田中　誠二〔法協〕大一四 四三 八
商法第一六三條の三の擔保提供の請求　中村　武〔新報〕大一五 三六 一

參照＝**インフレーション。外國爲替。金。銀。銀行。金融。金輸出解禁。在外正貨。資本。商業。信用。貯蓄。物價。貿易。利子。**

【貨幣】

金銀本位論　添田　壽一〔國家〕明二一 二 一五
兩金貨制論　濱田健次郎〔國家〕明二二 二 一八
藩札處分を論ず（講演）　阪谷　芳郎〔國家〕明二二 二 二二
貨幣史上の大珍事　阪谷　芳郎〔國家〕明二三 四 四〇
金札の發行を主張せし原因　由利　公正〔國家〕明二三 四 四二
安政の貨幣事情　池部　駒勇〔國家〕明二六 七 八七
銀貨問題（講演）　志立鐵次郎〔國家〕明二七 八 八八
貨幣の價格　池部　駒勇〔國家〕明二七 八 八八
貨幣制度の改革を論す　金井　延〔國家〕明三〇 一一 一三三
貨幣の定義に就て　村田　俊彥〔國家〕明三二 一四 一五八
一圓兌換券　戶田　海市〔國家〕明三三 一四 一六二
貨幣の起源　內田　銀藏〔國家〕明三五 一六 一八〇
一圓銀行券に就て　山崎覺次郎〔法協〕明三六 二一 三
信用制度と通貨の節約　山崎覺次郎〔法協〕明三七 二三 五
價格の單位と之を表現する貨幣　山崎覺次郎〔新報〕明三九 一六 四
圓の起原に就て　山崎覺次郎〔新報〕明三九 一六 五
貨幣表章學說駁論の一例　福田　德三〔法政〕明三九 一〇 一二一
貨幣の新定義としてのカルタル、テオリー（貨幣法制史上の基礎）　福田　德三〔新報〕明三九 一六 一七 一三二
我國の兌換券制度及其運用　戶田　海市〔京法〕明四〇 二 三一五
我國通貨の整理　松方　正義〔日經〕明四〇 一一 一三二
理想的支拂の標準に關する提議を論じて金屬本位論に及ぶ　佐野　善作〔國經〕明四〇 二 六
經濟行爲の貨幣價値の解　福田　德三〔法政〕明四〇 一一 八
貨幣の性質に付て　戶田　海市〔京法〕明四〇 二 九
拙著貨幣と價値に對する福田博士の批評に答ふ　左右田喜一郎〔京法〕明四一 一三 一
貨幣流通の原理　田島　錦治〔京法〕明四一 三 一
輸出入平均と正貨準備論　河津　遲〔日經〕明四一 一二 二一三
兌換券制限外發行法を論す　堀江　歸一〔國經〕明四一 一 三
佐野教授新著貨幣論に對す

る批評に就て　原稜威雄〔國經〕明四年 四卷 三號
正貨保留の價値如何　河津遷〔日經〕明四一 三
グレシャムの法則に就て　山崎覺次郎〔國家〕明四一 三 三
銀貨の前途如何　芝本善次郎〔洋經〕明四一 一 四九九
カルタル、テヲリーの骨子　河田嗣郎〔京法〕明四 四 三
拙著「貨幣と價値」に對する福田博士の批評に答ふ　左右田喜一郎〔國經〕明四一 七 六
自由鑄造に就て　山崎覺次郎〔國家〕明四二 二四 一
貨幣法改正の結果に關する桂首相及び武富時敘氏の意見を論評す　山崎覺次郎〔志林〕明四二 三 四
指數と貨幣の購買力　財部靜治〔京法〕明四二 五 四
ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論に就ての愚考　福田徳三〔國家〕明四二 二四 六
祓除と貨幣の關係に就ての愚考　福田徳三〔國家〕明四三 二四 七
通貨稅と銀行稅　河津遷〔國經〕明四四 一〇 一二
アダム・スミスの貨幣學說　松崎壽〔國經〕明四四 一一 四
金貨の流通せざる金本位國　山崎覺次郎〔法協〕明四四 二九 五
貨幣の價値を論ず　山崎覺次郎〔日經〕明四四 九 七
高橋日銀總裁の通貨と物價論に就て　山崎覺次郎〔國家〕明四四 二五 五六
天野爲之〔洋經〕明四五 一 五九二
貨幣の意義　十龜盛次〔國經〕大元 一三 一一二
金の國際移動　神戸正雄〔京法〕大二 八 一一
金產增加の貨幣上の惡影響を除去する方法に就きて　神戸正雄〔新報〕大二 二三 三
正貨の危機　近澤定吉〔日經〕大二 一四 四
世界的物價騰貴に於ける金と信用　戸田海市〔京法〕大二 八 一一 三
貨幣の將來　神戸正雄〔國經〕大二 一五 三
貨幣の本質　神戸正雄〔三學〕大二 七 一
貨幣價値に就きて　神戸正雄〔京法〕大二 八 二
貨幣價値の不動に就て　神戸正雄〔京法〕大二 八 三
日本に於ける貨幣の流通速度　河上肇〔京法〕大二 八 三
金貨國と銀貨國との間に於ける爲替相場の變動と貿易の消表　海老原竹之助〔國經〕大二 一四 一
通貨膨脹、物價騰貴、生活難の關係に就いて福田博士の批評に答ふ　河上肇〔京法〕大二 八 四
貨幣數量說と貨幣制度との關係を論じて通貨の膨脹と生活難との交涉に關する福田博士對河上教授の論爭に及ぶ　寺尾隆一〔國經〕大二 一四 四

寺尾教授に答ふ　河上肇〔國經〕大二年 四卷 五號
誤解されたる貨幣數量說　高城仙次郎〔國經〕大二 一四 五
通貨膨脹、物價騰貴、生活難の關係に就て（河上教授の答へに答ふ）　寺尾隆一〔國經〕大二 一四 六
再び寺尾教授に答ふ　河上肇〔國經〕大二 一五 一
通貨膨脹、物價騰貴、生活難の關係に就て　寺尾隆一〔國經〕大二 一五 一
貨幣の價値を調整せんとするフィッシャー教授の考案に就て　山崎覺次郎〔國家〕大二 二七 六
フイ氏調整貨幣案の批評の批評　神戸正雄〔國家〕大二 二七 八
貨幣價値に就て神戸博士に答ふ　高城仙次郎〔國家〕大二 二七 八
貨幣と預金との關係に就きて河上教授に答ふ　高城仙次郎〔日經〕大二 一三 九
貨幣問題に就きて重ねて高城教授に答ふ　神戸正雄〔國家〕大二 二七 一〇
三度び貨幣數量稅と物價調節策とに於けるフィッシャー氏の論理的矛盾を指摘して河上教授の再答に答ふ　寺尾隆一〔國經〕大三 一六 一
貨幣の價値に關して再び高城教授に答ふ　山崎覺次郎〔國家〕大三 二八 一
寺尾教授の駁論に答ふ　高城仙次郎〔國經〕大三 一六 三
貨幣價値に就きて神戸山崎兩博士の反問に答ふ　高城仙次郎〔國家〕大三 二八 四
河上學士の誤算と誤解と矛盾　高城仙次郎〔京法〕大三 九 四
高城君に答ふ　河上肇〔京法〕大三 九 七
高城ドクトルの數理上の矛盾　高田保馬〔京法〕大三 九 八
寺尾氏に答ふ　高城仙次郎〔國經〕大三 一七 三
河上學士に答ふ　高城仙次郎〔京法〕大三 九 一〇
高城氏の答文に就て　河上肇〔京法〕大四 一〇 二
再び金貨の流通せざる金本位國に就て　山崎覺次郎〔法協〕大三 三一 四
將來の貨幣　伊藤增太郎〔國經〕大三 一六 一
伊藤氏の新貨幣案に就て理想的貨幣果して得らるべきや　海老原竹之助〔國經〕大三 一六 三
憂慮すべき正貨問題　海老原竹之助〔國經〕大三 一六 四—五
金と物價と賃銀　堀切善兵衛〔財經〕大三 一 一二 九
在外正貨と兌換制度　近澤定吉〔日經〕大三 一五 一一二
交戰國に於ける正貨在高　伊藤欽亮〔財經〕大三 一 二
我兌換券の制度の危機　戸田海市〔國經〕大三 一七 四
　〔京法〕大三 九 二一六

ベルナルド・ダヴンヅアチの貨幣論　高橋誠一郎〔三學〕大三年八卷九—一〇號
正貨準備問題に關する積極主義の誤謬　戸田　海市〔財經〕大三　一　一
兌換停止の議　本多　精一〔財經〕大三　一　一
兌換制度の本體と變體　堀江　歸一〔三學〕大三　八　八
正貨補充問題と積極政策　高城仙次郎〔三學〕大三　八　二
國際貨幣制度論　青木　得三〔法協〕大三　三　三
通貨政策と歐洲大戰　高島佐一郎〔國經〕大四　一八　二—三
正貨政策と爲替政策の矛盾を奈何　北崎　亡羊〔東經〕大四　七—二　一八—二四
造幣局と其の職分　三枝　茂智〔國家〕大四　二九　三—四
正貨と日本經濟　尾上登太郎〔國家〕大四　二九　五—六
正貨の激增と其の利用　加藤敬三郎〔財經〕大四　二　二
日貨排斥と其の善後策　中橋德五郎〔財經〕大四　二　二
排貨政策と經濟外交　蜷川　新〔外時〕大四　三　二五—七
金貨流出防止策　尾上　利治〔國經〕大四　一九　五—六
貨幣本質新說　松浦　要〔國經〕大四　一八　一
不換紙幣論　神戸　正雄〔京法〕大四　一〇　五—六
利子論上の貨幣說　河上　肇〔商經〕大五　一　三
河上博士の資本の概念及利子論の貨幣說を讀む　池田　實〔商經〕大五　一　四
續正貨蓄積論　小川鄕太郎〔經叢〕大五　三　一
小川博士の正貨蓄積論を讀む　三宅嘉十郎〔三學〕大五　一〇　四
維新後に於ける通貨數量と物價　飯島　幡司〔國經〕大五　三　四—五
維新後に於ける通貨制度の概觀　飯島　幡司〔國經〕大五　三　二—三
歐洲戰亂と通貨の減價　飯島　幡司〔國經〕大五　三　五
元文年度に於ける金銀貨改鑄　中村　孝也〔國國〕大五　四　八
交戰國貨幣低落と其防止策　三宅嘉十郎〔三學〕大五　一〇　六—一〇
正貨の增加と物價騰貴の關係　三宅嘉十郎〔三學〕大五　一〇　一一
貨幣の對外價値と其維持策　山崎覺次郎〔國家〕大五　三〇　三—五
猫眼の如き政府の正貨政策　堀江　歸一〔財經〕大五　三　九
紙幣の減價に關するウヒテカー教授の分類に就て　山崎覺次郎〔國家〕大五　三〇　一〇
貨幣辨濟力　尾上　利治〔國經〕大五　二〇　一
不換紙幣流通の根據に就て　作田　莊一〔經叢〕大五　二　四
吉宗時代の貨幣問題及び米價問題　中村　孝也〔國國〕大五　四　六—七
不換紙幣の價格に就て　戸田　海市〔經叢〕大五　二　二
不換紙幣流通の根據に就て　戸田　海市〔經叢〕大五　二　六
戸田博士の不換紙幣論を讀みて　福田　德三〔經叢〕大五　三　一
不換紙幣流通の根據に就て

福田博士に答ふ　戸田　海市〔經叢〕大五年三卷三號
青木學士著「貨幣論」を讀む　松崎　壽〔國經〕大五　二〇　四
紙幣の下落　河上　肇〔經叢〕大五　二　四
不換紙幣論　大野　辰見〔國經〕大五　二一　四
正貨重視の思想排す可からす　飯島　幡司〔國經〕大五　二〇　六
代表紙幣と獨立紙幣　作田　莊一〔經叢〕大五　三　四—六
正貨の激增と其利用　武富　時敏〔東經〕大五　七四　一八五九
紙幣の下落と國際貿易　丸谷　喜市〔國經〕大六　二三　二
金本位制の將來　山崎覺次郎〔國家〕大六　二一　九
貨幣の價値差と會計とに就いて　中村　茂男〔會計〕大六　一　一
貨幣の職分を論ず　西村文太郎〔國國〕大六　五　一
慶長より元文に至る貨幣制度の變遷　增井　幸雄〔三學〕大六　一　二
不換紙幣の價格に付て河上博士に答ふ　戸田　海市〔經叢〕大六　四　二
グレシヤムの法則と德川時代の經濟學說　增井　幸雄〔三學〕大六　一　一
「貨幣問答」を中心として觀たるサー・キリアム・ペチイの貨幣論　高橋誠一郎〔三學〕大六　一一　六—七
國民經濟に於ける貨幣の地位　安原　太郎〔國經〕大六　二三　二
歐洲戰時に於ける通貨、物價、爲替相場　堀江　歸一〔三學〕大六　一一　五—六
貨幣論上の限界効用學說　左右田喜一郎〔國家〕大六　三一　一—二
貨幣の價値　田中　金司〔國經〕大七　二四　二—三
文政年度に於ける金銀貨の改鑄　中村　孝也〔國國〕大七　六　九
明和安永の金銀貨改鑄　中村　孝也〔國國〕大七　六　六—七
銀貨に關する研究　小林　武男〔三學〕大七　一二　七
小額紙幣に就て　山崎覺次郎〔國家〕大一〇　三三　三
元祿年間貨幣改鑄の由來　藤田　元春〔經叢〕大七　六　六
流通貨幣の數量と信用　高城仙次郎〔三學〕大七　一三　昭一〇　二一
ハリファックス卿の貨幣改鑄を中心として喚起せられたる貨幣論爭　高橋誠一郎〔三學〕大七　一二　八　一三　一二　一三
貨幣價値の成因に關する諸說に就て　松崎　壽〔商經〕大七　一　一三
戰亂と紙幣增發　堀內　泰吉〔國經〕大七　二四　三
戰爭と信用通貨並に財政　堀江　歸一〔三學〕大七　一二　五—九
小額紙幣の發行と其將來　上田貞次郎〔財經〕大七　五　一
漫然たる通貨縮少論を排す　氣賀　勘重〔財經〕大七　五　二
通貨の膨脹　舞出長五郎〔國家〕大七　三三　三
通貨膨脹を論ず　田中　金司〔國經〕大七　二五　四—六
本邦通貨指數の算定に就て

			年	卷	號
飯島幡司君に教を乞ふ	福田	徳三〔國經〕	大七	二五	二
通貨と物價との統計的比較に就て福田博士に答ふ	飯島	幡司〔國經〕	大七	二五	三
所謂通貨收縮論の眞價	氣賀	勘重〔三學〕	大七	三	一〇
通貨膨脹と物價騰貴	神戸	正雄〔經叢〕	大七	七	二
通貨の膨脹	堀江	歸一〔三學〕	大七	一二	一〇
物價調節と通貨收縮に就て	藤山	雷太〔財經〕	大八	大	一〇
我國現時の物價騰貴と通貨との關係	汐見	三郎〔經叢〕	大八	八	二
當面の通貨問題と公債政策	濱口	雄幸〔財經〕	大八	六	一三
紙幣の減價に就て	高田	保馬〔經叢〕	大八	八	四—六
歐州戰亂と貨幣制度	山崎覺次郎	〔國家〕	大八	三三	六
物價騰貴と通貨との關係に就て汐見學士の教を乞ふ	福田	徳三〔經叢〕	大八	八	三
物價騰貴と通貨との關係に就て福田博士に答ふ	汐見	三郎〔經叢〕	大八	八	五
貨幣價値の變動に關する私見	松崎	壽〔商經〕	大八	一	一五
文化的欲望と貨幣消費	岡田	重次〔國經〕	大八	二七	一—二
惡貨横行か優貨弘通か	作田	莊一〔亞經〕	大八	三	二—三
貨幣價値調節策	德地屋初之進	〔國經〕	大八	二七	一
貨幣の新觀念	山崎覺次郎	〔國家〕	大八	三三	九
貨幣價値と限界利用說	坂西	由藏〔國經〕	大八	二六	五
貨幣論上の限界效用學說	左右田喜一郎	〔國經〕	大八	二七	一
德川時代紙幣の諸名辭	今田	知二〔政治〕	大八	一	二
戰後の通貨收縮と物價	今田	知二〔政治〕	大八	一	一
物價騰貴に因る通貨膨脹	舞出長五郎	〔國家〕	大八	三三	四
通貨縮少に就て	高木友三郎	〔國家〕	大八	三三	一三
カンリッフ委員會の報告を讀みて	河津	暹〔國家〕	大八	三三	八
通貨收縮の急務	山崎覺次郎	〔國家〕	大八	三三	四
通貨の膨脹と物價との關係に就て汐見學士の教を乞ふ	戸田	海市〔經叢〕	大八	九	四
通貨殊に兌換券の增減と銀行預金との關係	南	嘉一〔國經〕	大八	二七	三
ラフリン新著「貨幣及物價」を讀みて	岡本兵太郎	〔商經〕	大八	一	一四
幣制改革に依る物價調節策	高島佐一郎	〔國經〕	大九	二九	三
兌換制度の改善問題	豐崎善之介	〔財經〕	大九	七	二
國際貨幣制度論	松崎	壽〔商經〕	大九	一	一八
衣食住と貨幣と經濟生活	三浦	武美〔國經〕	大九	二九	一
補助貨幣に就て	大野	辰見〔商經〕	大九	一	一七
通貨及物價政策について	山崎覺次郎	〔經學〕	大九	一	一
デヴイド・ヒームの貨幣論	北崎	進〔東經〕	大九	八一	二〇五三
ロバート・リーフマンの貨幣學說	高橋誠一郎	〔三學〕	大九	一四	三
	福田	徳三〔我等〕	大九	二	一
貨幣の國際的移動	平井常次郎	〔商經〕	大九	一	二〇
貨幣に關する獨想	瀨谷佐次郎	〔同論〕	大九	一	一
戰時に於ける獨逸貨幣論の發達	山口正太郎	〔國經〕	大九	二九	六
貨幣の價値に就て	松崎	壽〔志林〕	大九	二三	一
銀行預金、物價及通貨	マツケチ	〔東經〕	大九	八一—四二〇五四	一
金と物價との關係	竹內	謙二〔統集〕	大九	一	四七五
貨幣國定學說梗概	宮田喜代藏	〔國經〕	大九	二八	二—三
江戸時代に於ける尊米賤貨論	中村	孝也〔國國〕	大一〇	九	六—七
希臘に於ける貨幣及び利子學說	高橋誠一郎	〔三學〕	大一〇	一五	三
貨幣制度調整論	三浦	武夫〔國經〕	大一〇	三〇	三
貨幣の價値成立論上の限界效用說	福定與四郎	〔國家〕	大一〇	三五	一
自然貨幣と金屬貨幣	竹島富三郎	〔商經〕	大一〇	一	二三
信用貨幣の意義	竹島富三郎	〔商經〕	大一〇	一	二四
フイシヤーの貨幣調節論	古屋	美貞〔同論〕	大一〇	一	五
フイヒテの法律哲學に於ける所有及び貨幣の理論	久保	正夫〔同論〕	大一〇	一	六
ジンメルの貨幣官能價値論	山口正太郎	〔同論〕	大一〇	一	六
貨幣の經濟內在的機能	增井	光藏〔國經〕	大一〇	三一	五
絕對本位貨幣論に就て	植野	勳〔國家〕	大一〇	三五	三
Ricardo に於ける貨幣概念の進步	福田	敬太郎〔國經〕	大一〇	三一	一
貨幣理論の一般的基礎	福田	敬太郎〔國經〕	大一〇	三〇	二
リーフマンの貨幣論	福田	敬太郎〔國經〕	大一〇	三〇	一
經濟的緊要政策＝通貨收縮法	志立鐵太郎	〔財經〕	大一〇	八	五
正貨問題の解決策	武富	時敏〔財經〕	大一〇	八	一〇
戰後諸國の通貨問題	平野	清〔商經〕	大一〇	一	二一—四二
國際間の通貨並に信用問題	堀江	歸一〔三學〕	大一〇	一五	二一—三二
貨幣の交換經濟的職能	福田	敬太郎〔國經〕	大一二	三〇	三
貨幣問題に關するキトソン並にヴイザアスの論爭に就て	平野	清〔國經〕	大一〇	三一	六
リカルドオの通貨論	小泉	信三〔三學〕	大一〇	一五	八—一〇
マツケナ氏の通貨預金及物價の關係に就て	川口	酉三〔商經〕	大一〇	一	一
貨幣の換算に就て	山崎覺次郎	〔統時〕	大一一	一	三
貨幣又は金融に關する卑見の批評に對して	山崎覺次郎	〔經論〕	大一一	一	一
カッセル教授の「購買力平價說」に就て	山崎覺次郎	〔經論〕	大一一	一	二
幣制改革と名目論	田宮準一郎	〔國國〕	大一一	一〇	三
信用鑄貨—特に補助鑄貨—に就て	竹島富三郎	〔商經〕	大一一	一	二六
Devalvation の概念に就て	鈴木	平吉〔商研〕	大一一	一	三

紙幣の特質並に種類に就て　竹島富三郎〔商經〕大二　年一　卷二七　號
貨幣及び貨幣制度の發達　石濱　知行〔新報〕大二　三三　四
貨幣中心の經濟學　大野　辰見〔商經〕大二　一　同二六　同二九
戰後貨幣價値暴落問題に關する文獻
信用貨幣の分類標準　鈴木　平吉〔商研〕大二　一　一—二
貨幣の效用に就て　竹島富三郎〔商經〕大二　一　二五
貨幣の本質　渡邊孫一郎〔商研〕大二　一　三
貨幣論上に於ける金屬主義と名目主義　增井　光藏〔國經〕大二　三三　大
貨幣の「哲學」に就て　宮田喜代藏〔國經〕大二　三三　一
世界の貨幣問題　增井　光藏〔國經〕大二　三三　一
ヘルツフエルダーの靜態貨幣價値說　平野　清〔國經〕大二　三三　一
貨幣の價値　增井　光藏〔國經〕大二　三三　六
通貨收縮と金解禁及在外正貨準備廢止問題　生島廣次郎〔國經〕大二　三四　六
クナップ貨幣國定學說の研究方法　三宅嘉十郎〔銀研〕大二　三　四
貨幣購買力變動の豫測　宮田喜代藏〔國經〕大二　三三　大
貨幣の論理　高城仙次郎〔法研〕大二　一　四
貨幣の價値　山口正太郎〔我等〕大二　四　七
マーシャルの貨幣信用及貿易論　谷田　義一〔國經〕大二　三四　一—二
平野　清〔商經〕大二　一　二二

クナップの貨幣國定學說に就て　宮田喜代藏〔商叢〕大二　年一　卷一　號
初期の貨幣學說に就いて　久保田明光〔國經〕大二　三五　六
物價趨勢より見たる通貨問題　左右田誠一〔銀研〕大二　四　六
貨幣の法制的研究　今津　治助〔商研〕大二　二　三
貨幣問題より見たるアダム・スミス　山崎覺次郎〔經論〕大二　二　二
貨幣に關する若干の譬喩　山崎覺次郎〔經論〕大二　三　一
日本及英國に於ける幣制史上の一考察　平野　清〔國經〕大二　三七　二
山崎博士と跛行本位　櫻田　助作〔洋經〕大二　一　二一〇
跛行本位に就て　山崎覺次郎〔洋經〕大二　一　二一五
山崎博士の跛行本位に就て　櫻田　助作〔洋經〕大二　一　二二〇
「跛行本位」問題に就て櫻田君に答ふ　山崎覺次郎〔洋經〕大二　一　二二八
ベンデイクセンの貨幣學說　大竹　虎雄〔法政〕大二　二　六—七
貨幣の對外價値と對內價値との關係を論ず　青木　得三〔國家〕大二　三八　六
貨幣に關するカッセル教授の見解　橋爪　明男〔經論〕大二　三　二
貨幣起原の考察　中村　佐一〔法政〕大二　二　八—一〇
貨幣債權說に就て　橋爪　明男〔經論〕大二　三　一
經濟社會と貨幣概念　土方　成美〔社雜〕大二　一・一一

英國と金本位制回復　野瀨秀太郎〔銀研〕大二　四　七
貨幣價値と金利步合　白井　廉久〔銀研〕大二　四　六
自由貨幣運動　河田　嗣郎〔經叢〕大二　一二　三
銀貨鑄造益金の使途　神戸　正雄〔時經〕大二　一　九
世界的貨幣問題とカッセル教授の學說　小川福太郎〔經叢〕大二　一六　四
貨幣の概念の變遷に就て　竹島富三郎〔商經〕大二　一　三二
貨幣の成生と其形態の變遷　高垣寅次郎〔商研〕大二　二　一
貨幣價値の變動と損益計算　增地庸治郎〔商研〕大二　二　三
リーフマンの價格理論一斑並に貨幣の側よりする其變動　小畑　茂夫〔商研〕大二　二　三
貨幣價値の成立と租稅の作用　土方　成美〔經論〕大二　一　三
ゼノア會議と通貨並に信用問題　平野　清〔國經〕大二　三五　四
貨幣の名目的概念一　宮田喜代藏〔國經〕大二　三四　六
エルスターの貨幣概念　增井　光藏〔國經〕大二　三五　二
日貨排斥に就て　下田　禮佐〔長彙〕大二　二　五—六
マーシャルの貨幣論　鈴木　平吉〔國經〕大二　三四　一—二
信用と通貨と物價　片倉藤次郎〔商事〕大二　四　一
通貨と物價政策　河津　暹〔經論〕大二　一　三
貨幣價値低落問題　加藤　和根〔銀叢〕大二　一　二
兌換券と物價指數との關係　蜷川　虎三〔經叢〕大二　一七　四

貴金屬の貨幣商品たるに至る過程　松下　芳男〔法政〕大二　三　二一　同一一　號一二
貨幣論上の限界効用說に就て高垣教授に答ふ　土方　成美〔經論〕大二　三　一
貨幣概念を中心として（土方教授並に坂西教授の批評に答ふ）　左右田喜一郎〔商研〕大二　三　三
通貨問題の一考察　岩崎　博〔銀研〕大二　六　六
通貨膨脹の意義と對策　竹島富三郎〔商經〕大二　一　三五
勢州松坂に於ける銀札の沿革　三井　高陽〔三學〕大二　一八　三—五
我國に於ける正貨の增減と金融繁閑との關係　小川鄕太郎〔經叢〕大二　一九　六
世界の貨幣交通　作田　莊一〔經叢〕大二　一九　三—四
購買力の平價に就て　下林　一生〔銀研〕大二　七　六
國富論に現はれたる貨幣理論　谷口彌五郎〔金融〕大二　一　二
英國に於ける貨幣問題に關する二論爭　平野　清〔商經〕大二　一　三五
貨幣價値に關しての私論二題（左右田博士の所論を中心としたる Polemik に就て）　高垣寅次郎〔商研〕大二　三　三
近時貨幣論考　平野　清〔商經〕大二　一　三三

			年	卷	號
外資輸入と通貨膨脹に就て	榊原 二郎	〔銀研〕	大一三	六	三
正貨減小對策に就て	榊原 二郎	〔銀研〕	大一三	六	四
キーンスの貨幣改革論	木村 重夫	〔商經〕	大一三	—	三六
貨幣の價値の變動と會計問題	木村 彌藏	〔會計〕	大一三	一四	三
貨幣廢止論	中西 仁三	〔經叢〕	大一三	一八	六
名目派の貨幣論と貨幣の本質	中西 仁三	〔經叢〕	大一三	一八	二—三
キーンスの貨幣改革論を讀みて	平野 清	〔銀研〕	大一三	七	二
貨幣の必然性	ヒルフアーディング	〔原雜〕	大一三	二	一
カッセル教授の金本位制復歸論	松崎 壽	〔銀研〕	大一三	七	三
ギルドと幣制に就て	田中 忠夫	〔國經〕	大一三	三六	三
輓近金本位制に對する挑戰	アレン	〔商叢〕	大一三	二	—
金利引下論に於ける通貨論の誤謬	遠山 貞一	〔銀研〕	大一三	六	四
金本位制の回復に就て	黒川 芳藏	〔同論〕	大一三	—	一五
世界的金本位復活問題	山下 春三	〔銀研〕	大一三	七	六
經濟組織の發達と貨幣の職能	増井 光藏	〔國經〕	大一三	三七	二
仙臺通寶と琉球通寶	土屋 喬雄	〔經論〕	大一三	三	三
圓價下落に就て國際投機の一考察	丹羽 豐	〔銀叢〕	大一三	三	六
アダム・スミスの觀たる貨幣理論	高垣寅次郎	〔商研〕	大一三	三	一
中世寺院法の貨幣說	山口正太郎	〔我等〕	大一三	六	一一
金貨本位制度に關する根本問題	堀江 歸一	〔三學〕	大一四	一九	七
兌換制度に關する疑問	堀江 歸一	〔エコ〕	大一四	三	四
我國幣制改革論に對する堀江博士の所說	平野 清	〔銀研〕	大一四	八	四
キーンスの「幣制改革論」	大内 兵衛	〔原パ〕	大一四	—	一八
購買力平價說批評	平野 清	〔商經〕	大一四	—	三九
フアイレン著「貨幣の循環速度—貨幣經濟の對象論並範疇論に關する研究」を讀みて	本多 謙三	〔商研〕	大一四	五	一
德川時代の通貨政策	倉持 德久	〔經研〕	大一四	二	二
通貨の購買力と其測定	土方 成美	〔社科〕	大一四	一	二
通貨と資金とを區別する理由	高橋 龜吉	〔銀研〕	大一四	九	三
通貨政策に於ける算術と迷妄	廣瀨田一郎	〔銀研〕	大一四	八	四
通貨の價値の變動及び長期貸借の決濟に就て	藤澤利喜太郎	〔國家〕	大一四	三九	六
銀行と貨幣との關係	高宮 誠	〔金融〕	大一四	二	九

			年	卷	號
貨幣數量說並に貨幣品質說を否定す	勝田 貞次	〔銀研〕	大一四	八	四
マーカンテイリズムに於ける貨幣觀念の發展	高垣寅次郎	〔商研〕	大一四	五	二
圓價下落は重大問題	武藤 山治	〔洋經〕	大一四	—	一二九
シユムペーターの「貨幣理論基本方程式」に就て	德重 伍介	〔國經〕	大一四	三九	四
貨幣經濟發展極致としての振替及支拂現象	谷田 義一	〔國經〕	大一四	三八	六
貨幣と價値	林 要	〔同論〕	大一四	—	一六
貨幣概念の經濟學的社會學的意義	土田 杏村	〔銀研〕	大一四	五	三—四
貨幣並に通貨の成立	土方 成美	〔經研〕	大一四	二	三
貨幣價値の靜的考察	三宅鹿之助	〔經研〕	大一四	二	三
貨幣及銀行兩主義の貨幣理論と銀行券發行制度	中西 仁三	〔經研〕	大一四	二	二
貨幣指圖證說の主張と其批判	高垣寅次郎	〔商研〕	大一四	四	三
再びキーンズの所謂 Managed currency に就て	平野 清	〔商經〕	大一四	—	三八
初期貨幣理論に現はれたる貨幣の實體觀と法律觀	谷田 義一	〔國經〕	大一四	三九	二—三
オウイン及び其一派の貨幣觀	赤神 良讓	〔經商〕	大一四	四	一—二
鑄貨の起原と最古商業國の考證	勝矢劍太郎	〔經商〕	大一四	四	七
勝矢學士の考證的批評に對して	赤神 良讓	〔經商〕	大一四	四	八
信用と通貨とに關する一考察	土方 成美	〔經研〕	大一四	二	二
Gold Standard 乎 Managed currency 乎	岩崎 博	〔銀研〕	大一四	八	五
スミス以前に於ける貨幣價値論の二潮流	萩原吉太郎	〔三學〕	大一四	一九	一
現在不換紙幣問題	小島 淑郎	〔銀叢〕	大一四	五	五
貨幣の價値と其否定	高垣寅次郎	〔商研〕	大一四	四	三
金本位の復歸に對するカッセル教授の論文	青木 孝義	〔法政〕	大一四	三	六
名目學說と貨幣制度改革	内藤 章	〔商研〕	大一四	五	二
金本位制の回復の價値如何	鈴木 喜藏	〔銀叢〕	大一四	四	二
正貨拂下の效果	成瀨 義春	〔財經〕	大一四	一二	五
カッセル教授購買力平價說に於ける一疑點	柴田三四治	〔銀叢〕	大一四	四	二
貨幣購買力の意義と景氣の基調	勝田 貞次	〔銀研〕	大一四	八	一
貨幣の對内及び對外價値の變動と貿易並びに爲替との關係を論ず	谷口 吉彥	〔經叢〕	大一四	二〇	二—四

			年	卷	號
貨幣と物價との關係を論ず	勝田 貞次	〔銀研〕	大一四	九	四
銀行と通貨創設	越智 昌三	〔經叢〕	大一四	二	三
金貨本位へ復歸の經路	藤澤利喜太郎	〔國家〕	大一四	三九	二
通貨改策に就て	橋爪 明男	〔經論〕	大一四	四	一
金紙幣本位制	作田 莊一	〔經叢〕	大一四	二〇	一
不換紙幣と物價	高城仙次郎	〔三學〕	大一四	一九	一
貨幣法の改正は不可	菊川 早三	〔洋經〕	大一四	一	一三—一九
德川時代に於ける惡貨濫造の結果に就て	瀧本 誠一	〔三學〕	大一四	一九	一〇
金本位制復歸問題に就て	山內 一雄	〔銀研〕	大一四	八	六
金本位の將來に就て	岩崎 博	〔銀研〕	大一四	九	三
金本位制復歸の謬妄	川島清治郎	〔エコ〕	大一四	三	昭一六 紙二〇
通貨は多過ぎるか少な過ぎるか	遠山 貞一	〔銀研〕	大一四	八	四
マッケンナア氏の金本位復舊問題	春日井 薫	〔銀研〕	大一四	八	五
金單本位論	川村 環一	〔評理〕	大一五	一	一
備前岡山の藩札	黑正 巖	〔社科〕	大一五	二	三—四
リカアドオの貨幣理論と貨幣制度論	橋爪 明男	〔經論〕	大一五	四	三
貨幣の起源に關する考古學的及び土俗學的考察	西村 眞次	〔早商〕	大一五	二	一
藩札の濫發と農民の疲弊	黑正 巖	〔經叢〕	大一五	三	五
貨幣制度に於ける金の地位	田中 金司	〔國經〕	大一五	四〇	一—二
封建制度の崩潰、中央集權的國家出現の時代に於ける貨幣學說	高橋誠一郎	〔社科〕	大一五	二	五
貨幣價値と物價指數	森田 優三	〔國經〕	大一五	四〇	六
マーシャル教授の貨幣及價格論	土方 成美	〔社科〕	大一五	二	一
新貨幣の觀念と金融	川島清治郎	〔金融〕	大一五	三	一
我國に於ける正貨準備の維持と外債政策	土方 成美	〔經研〕	大一五	三	二
貨幣の起原に關する一考察	谷田 義一	〔國經〕	大一五	四〇	五—六
金核本位制度	橋爪 明男	〔經研〕	大一五	三	二
兌換券流通高とコール歩合	高城仙次郎	〔銀研〕	大一五	一〇	三
アリストーテリーズの貨殖論	高橋誠一郎	〔三學〕	大一〇	一五	一
貨幣政策と物價安定論	安藝 國雄	〔商經〕	大一五	一	四二
貨幣論の出發點に就て	中西 仁三	〔經研〕	大一五	三	一
物價と通貨の數量	土方 成美	〔經研〕	大一五	三	一
印度					
印度貨幣制度改革及其影響に就て（講演）	阪谷 芳郎	〔國家〕	明二六	七	七
印度幣制改革始末抄錄		〔國家〕	明二七	八	明九〇 紙九一
金爲替本位と印度通貨	向井 鹿松	〔三學〕	大三	八	九—一〇
印度の貨幣並に金融制度に關する研究	堀江 歸一	〔三學〕	大五	一〇	二

			年	卷	號
印度金貨史	海老原竹之助	〔國經〕	大五	二〇	四
印度幣制に關する高島學士の所說に就て	海老原竹之助	〔國經〕	大五	二〇	五—六
海老原學士の批評の批評	高島佐一郎	〔國經〕	大五	二〇	六
印度現時の金貨問題	海老原竹之助	〔國經〕	大五	二一	一
再び印度の幣制に關する高島學士の所說を難ず	海老原竹之助	〔國經〕	大五	二一	六
近世印度通貨政策史論	德重 伍介	〔亞經〕	大七	二	二—四
印度幣制上の二問題	海老原竹之助	〔商經〕	大八	一	一—二
印度幣制委員報告を讀む	尾山 利治	〔國經〕	大九	二八	一四
銀價騰貴時代の印度通貨問題				二九	二—三
印度幣制に關するメルワンヂーダラル氏の少數報告	堀江 歸一	〔三學〕	大一〇	一五	一
印度幣制委員報告發表以後に於ける經過	尾山 利治	〔國經〕	大一〇	三〇	五—六
支那及印度兩替の實際	尾山 利治	〔國經〕	大一〇	三一	一—二
印度の金爲替本位制に就て	小林 四三	〔商事〕	大一二	三	四
印度の幣制を論ず	利倉文之助	〔商事〕	大一四	六	二
印度に於ける日貨排斥問題	平野 清	〔商經〕	大一四	一	四〇
英國		〔商工〕	大一五	一	三
倫敦金融市場と事變通貨の供給	堀江 歸一	〔三學〕	大四	九	五
英國兌換制度の將來	堀江 歸一	〔三學〕	大六	一	一
英國戰時貨幣政策に對する批評	三浦 武美	〔國經〕	大九	二九	六
英佛兩國の金貨爭論	青木 得三	〔國知〕	大二	三	五
英國に於ける貨幣問題に關する二論爭	平野 清	〔商經〕	大一三	一	三五
日本及英國に於ける幣制史上の一考察	平野 清	〔國經〕	大一三	三七	二
英國の貨幣改策	堀江 歸一	〔エコ〕	大一三	二	一九
英蘭銀行の發行法と新貨幣制度の樹立	太田黑敏男	〔經商〕	大一四	四	一
英國金本位復歸の意義	田中 金司	〔國經〕	大一四	三九	三
英金貨本位制の報告書を讀む	堀江 歸一	〔エコ〕	大一四	三	一五
英國新金本位法と幣制改革論	中村 重夫	〔銀研〕	大一五	一〇	五
支那					
清國貨幣改革難	根岸 佶	〔國經〕	明三九	一	五—六
上海に於ける貴金屬及通貨の賣買習慣	大平 賢作	〔國經〕	明三九	一	七
支那に於ける紙幣の起源に就て	淺井 虎夫	〔京法〕	明四〇	二	一
清國の幣制に就て	佃 一豫	〔日經〕	明四〇	一	二—四
清國に於ける貨幣通用の實況	吉野 作造	〔日經〕	明四三	五	三

		年	卷	號
清國の四國借款と幣制改革	山本唯三郎〔東經〕	明四四	六三	一五六
清國幣制の改革如何	植松　考昭〔洋經〕	明四四	一	白五九 紅五六
支那上古の貝貨幣並に貝に因める文字の研究	田崎　義介〔日經〕	大元	一一	五—一〇
支那貨幣事情	堀内　干城〔京法〕	大三	九	二
支那の貨幣制度及其沿革	〔資料〕	大四	一	一
支那に於ける日貨排斥の眞相	山本唯三郎〔財產〕	大四	二	五
支那幣制改革論	作田　莊一〔亞經〕	大六	一	一
支那幣制改革問題の經過	只見　徹〔亞經〕	大六	一	一
支那上古の貨幣に就て	田中　忠夫〔亞經〕	大六	一	二
宋の理宗時代の貨幣	田中　忠夫〔亞經〕	大六	一	一
ワーゲル氏の支那幣制改革案と其批評	三枝　茂智〔國家〕	大六	三	一三
貨幣流通の現狀	善生　永助〔財經〕	大六	四	七
支那の新補助貨幣に就て	黄　英　廣〔國經〕	大六 七	二三 二四	一六
三國貨幣史論	田中　忠夫〔亞經〕	大七	二	三
最近支那幣制整理に關する公文	井上　翠〔亞經〕	大七	二	四
支那金本位制の實行に就て	作田　莊一〔亞經〕	大七	二	四
支那幣制改革の實行方法如何	善生　永助〔財經〕	大七	五	五
支那の紙幣改革に就て	村田　俊彦〔國家〕	大七	三	六
支那幣制改革雜記	堀江　歸一〔三學〕	大七	三	三
支那幣制改革問題	服部文四郎〔國經〕	大八	二五 二六	一—三 六
支那の幣制改革問題	河田　嗣郎〔經叢〕	大七	七	五
支那の金本位問題に就て	戸田　海市〔經叢〕	大七	七	二—三
支那の銀貨統一計畫	吉田　虎雄〔亞經〕	大八	三	三
支那の日貨排斥運動	戸田　海市〔經叢〕	大九	一〇	二
遼代貨幣史論	田中　忠夫〔亞經〕	大九	四	三
北宋貨幣史論	田中　忠夫〔亞經〕	大九	四	四
銀元	清水　久行〔國經〕	大九	二九	四—五
ヴイセリング氏の支那幣制改革意見と青島及關東州の貨幣制度	三枝　茂智〔國家〕	大九	三四	九—一〇
上海兩と上海の通貨	池田　龍藏〔三學〕	大九	一四	一一
唐代貨幣史論	田中　忠夫〔國經〕	大一〇	三〇 三一	五—六 一一二
南北朝貨幣史論	田中　忠夫〔國經〕	大一〇	三一	三—四
北宋貨幣史論	田中　忠夫〔亞經〕	大一〇	五	一
漢代貨幣史論	田中　忠夫〔亞經〕	大一〇	五	四
支那の銀幣に就て	谷　喬木〔亞經〕	大一〇	五	四
上海に於ける近時の貨幣及金融に就て	西山　榮久〔亞經〕	大一二	七	三
短陌に就て	田中　忠夫〔亞經〕	大一二	七	四
支那及印度兩替の實際	小林　四三〔商事〕	大一二	三	四
莊票論	西山　榮久〔亞經〕	大一三	八	一
銀錠に就て	田中　忠夫〔亞經〕	大一三	八	二
支那近代の貝貨に就て	田中　忠夫〔亞經〕	大一三	八	三

		年	卷	號
飛子に就いて	田中　忠夫〔國經〕	大一三	三七	六
支那に於ける日貨排斥運動	〔資料〕	大一三	一〇	五
支那貨幣の進化に就て	田中　忠夫〔亞經〕	大一四	九	四
錢莊の發行する莊票について	及川　恒忠〔三學〕	大一四	一九	五
獨逸				
獨逸に於ける金貨準備	〔國經〕	大四	一八	二
戰爭と獨逸の金融及通貨政策	高島　誠一〔國經〕	大七	二四	四—五
獨逸に於ける貨幣價値下落の原因及之が救治策	今田　知二〔政治〕	大八	一	二
戰後獨逸の貨幣政策	山口正太郎〔商經〕	大一〇	一	二四
獨逸貨幣の對內購買力	平野　清〔商經〕	大一一	一	二五
獨逸貨幣の對內購買力補遺	平野　清〔商經〕	大一一	一	二七
馬克相場の安定に關する國際委員會の提案を評す	高城仙次郎〔法研〕	大一二	二	一
馬克安定策如何	青木　得三〔國知〕	大一二	三	二
獨逸馬克下落の經過	山口　巖〔銀研〕	大一二	四	二
獨逸馬克貨幣事情と獨逸の物價	神戸　正雄〔時經〕	大一二	一	八
大戰物發前後に於ける獨逸の兌換制度	松島　喜作〔銀叢〕	大一三	二	一
獨逸國貨幣價値の安定を論ず	青木　得三〔金融〕	大一三	一	一—二
マルクの下落と私法關係	小町谷操三〔志林〕	大一三	二六	二—一〇
戰後獨逸の財政通貨及び富	鈴木　平吉〔國經〕	大一三	三六	六
獨逸レンテン・バンク並にレンテン・マルクに就て	佐久間　勝〔保險〕	大一三	二八	三〇三
馬克の安定問題に於て	宇都宮　鼎〔國家〕	大一三	三八	一〇
現行の獨逸貨幣法	竹島富三郎〔商經〕	大一四	—	四〇
獨逸の新本位制	宮田喜代藏〔國經〕	大一四	三八	六
獨逸の通貨問題に就て	宇都宮　鼎〔國家〕	大一四	三九	九
佛蘭西				
佛蘭西銀行の紙幣發行制限擴張に就て	堀江　歸一〔國經〕	明三九	一	一
佛國の戰時紙幣發行	〔國經〕	大三	一七	六
佛國現行貨幣制度變遷を論す	松崎　壽〔國家〕	大三	二八	一一
佛國に於ける通貨と物價との關係	松崎　壽〔國經〕	大四	一八	四
英佛兩國の金貨爭論	青木　得三〔國知〕	大一二	三	五
米國				
米國に於ける應急通貨の發行並に回收	十龜　盛次〔日經〕	大四	一六	九—一〇
米國の金準備問題	三宅嘉十郎〔三學〕	大六	一一	七
北米合衆國の通貨制度	三宅嘉十郎〔三學〕	大六	一一	白一〇 紅一一
米國貨幣制度發達史論	松崎　壽〔商經〕	大七	—	白一一 紅一二
米國舊準備制の缺陷と新準				

備制の組織及運用　奥田　勳〔銀研〕大一三　年　七卷　一號

歐羅巴

一九一四年歐洲戰亂と金貨問題　宗像　久敬〔法協〕大三　三　九
歐洲交戰國に於ける金貨匿藏と兌換停止　山崎覺次郎〔國家〕大四　二九　三
歐洲諸國現時の紙幣に就て　山崎覺次郎〔國家〕大九　三四　九
北歐諸國の貨幣問題　平野　清〔商經〕大一三　一　三六
歐洲現下の通貨問題と金　青地玄三郎〔長彙〕大一三　四　五一六
歐洲に於ける通貨改革問題　岩崎　博〔銀研〕大一四　八　一

露西亞

露國紙幣問題　野村　徹〔外時〕大八　三〇　三六二
重大なる露國貨幣問題　野村　徹〔國際〕大九　一八　七
誤れる過激派の貨幣經濟　松野清次郎〔商經〕大九　一　一九
露國と其正金の運命　柏田　忠一〔亞經〕大一〇　五　四
勞農露國に於ける幣制改革問題　谷口　吉彥〔經叢〕大一三　一九　一一二
勞農露西亞の通貨と銀行業　平野　清〔商經〕大一三　一　岡二九 岡三〇
輓近露國幣制の推移　鈴木　平吉〔國經〕大一四　三九　四一大
戰時共產主義時代に於ける勞農露國通貨改策の歸趨　波多野義熊〔亞經〕大一四　九　一〇　ア一四 二
ロシアに於ける一九二四年の本位改革　宮田喜代藏〔商濟〕大一一　三　一

其他

海峽植民地幣制改革　內池　廉吉〔國經〕明三九　一　二
アルゼンタインの幣制顚末　笠間　杲雄〔國家〕明四三　二四　一
臺灣に於ける貨幣制度　菅　武時〔日經〕明四四　九　六
膠州灣保護領貨幣制度　瀧波　正勝〔國家〕大四　二九　三
全米貨幣制度統一の計畫　堀江　歸一〔三學〕大五　一〇　五
全米貨幣統一案　河田　嗣郎〔經叢〕大五　二　六
滿洲に於ける金貨普及問題　一宮房次郎〔財經〕大六　四　七
滿洲洋票兌換問題　尾上　利治〔國經〕大六　二三　六
西伯利亞の通貨事情　肥田　啓造〔財經〕大九　七　二
滿洲の通貨と金建問題　西原　龜三〔東經〕大一〇　八三　二〇八五
青島の通貨並に金融　武田　和吉〔長彙〕大一四　六　二
墺國幣制安定經過概要　鈴木　平吉〔國經〕大一四　三八　三
チェッコ國幣制改革問題　鈴木　平吉〔國經〕大一四　三九　一
法の變遷の一例として見たるポーランド・マルクの下落問題　西島彌太郎〔商論〕大一五　一　一

貨幣數量說

通貨數量說に就て　鹽澤　昌貞〔洋經〕明四三　一　五八九
貨幣數量說に就て　上田貞次郎〔國經〕大九　三　五
フィッシャー氏の新貨幣數量說　高城仙次郎〔國家〕大九　二六　一三
貨幣數量說に關する諸說　神戶　正雄〔三學〕大二　七　三
貨幣及び信用に關する數量說に就きて　飯島　幡司〔國經〕大三　一七　五一六
利子論上に於ける貨幣數量說　高城仙次郎〔三學〕大六　一　四一五號
戰前の物價と貨幣數量說　三浦　武美〔國經〕大八　二七　五一六
アンダソン教授の貨幣數量說の反對論に就て　古屋　美貞〔同論〕大九　一　三
數量說　田中　金司〔國經〕大一〇　三〇　四
貨幣數量說の研究　山口　茂〔商研〕大一一　二　一
Das Geld als Qualität.　Berliner〔經論〕大一二　二　一
ディビット・リカードと貨幣數量說　長谷田泰三〔經論〕大一三　三　二
貨幣數量說の史的考察　萩原吉太郎〔三學〕大一三　一八　一
需要供給論と貨幣數量說　山口　茂〔商研〕大一四　四　三
貨幣數量說に就て田中學士の教を乞ぶ　佐野　包治〔銀叢〕大一四　四　五
貨幣の數量に就て　山崎覺次郎〔經論〕大一四　四　二
ウキザースの貨幣數量說　小津　新一〔銀研〕大一四　八　一
貨幣數量說並に貨幣品質說を否定す　勝田　貞次〔銀研〕大一四　八　四
數量說管見　平野　清〔商經〕大一五　一　四二

【紙】

本邦西洋紙の需用と製紙業　水野　良高〔日經〕明四〇　一　八
製紙場に於ける職工待遇法　山內　正瞭〔國家〕明四一　二三　一
本邦に於ける製紙業の趨勢　河東田經清〔東經〕明四五　六五　一六三一
支那に對する紙の販賣政策　河東田經清〔東經〕明四五　六五　一六三八
日本產業發達の裏面＝和洋製紙業　一知半解樓〔財經〕大四　二　六
戰後の製紙市場　足立　正〔洋經〕大五　一　卄四
紙　・〔財經〕大六　四　六一七
支那の外國紙需要　西村　生〔洋經〕大六　一　卄八
本邦の製紙工業　加藤　銀藏〔統集〕大七　一　岡四三二 岡四三三
我が製紙業の現狀と將來　藤原銀次郎〔財經〕大八　六　一一
舊岩國藩の制紙原料保護政策　吉川　元光〔經叢〕大一〇　一三　五一六
我が製紙工業の大勢　穴水　要七〔財經〕大一一　九　六

【硝子】

本邦硝子業の現狀　赤沼孝四郎〔日經〕大四一　四　二一五
硝子製品　〔財經〕大六　四　一
支那硝子工業　〔資料〕大九　六　四
湖南省の硝子工業　田中　忠夫〔亞經〕大一〇　五　三
硝子保險に就て　瀨戶彌三次〔經商〕大一一　一　四
米國硝子壜工場に於ける團體交渉　ヴォール〔社政〕大一一　一　一七
支那ガラス工業の既往と現在　西山　榮久〔亞經〕大一三　八　二

本邦硝子工業勞働事情　吉田　嶽〔社政〕大一三・一　巻四四號四六

【樺太】

樺太の漁業問題に關する研究　高橋　作衛〔國際〕昭九　四　10
臺灣又は樺太に法律を施行する勅令の効力　長岡隆一郎〔法協〕昭四一　二七　六
樺太に於けるライ麥販賣組合　川口順次郎〔東經〕大三　七〇　一七七一
樺太國勢調査事務取扱規定　外交時報社調査部〔統雜〕大八　一　四〇三
國勢調査員心得
樺太接壤地方の鮮支兩民族に就て　稲葉　岩吉〔亞經〕大一〇　五　三　〔外時〕大一三　三七　昭二〇〇　昭二〇一
樺太と日本との歴史的關係
樺太に於ける法令の整理に就て　杉生　紀〔新聞〕大一一　一　二一三五
樺太問題年表　二宮　丁三〔亞經〕大一四　九　三
國際石油問題と北樺平利權の價値　庵崎　貞俊〔外時〕大一五　四三　五一

【假差押】　強制執行を見よ

【假處分】　強制執行を見よ

【カルヴィン】(John Calvin, 1509-1565)

産業史上に於けるカルヴィン　藤谷光之助〔國經〕大六　二三　二一三
カルヴィンの政治思想　今中　治磨〔國論〕大一〇　一　六
宗教生活と經濟生活、カルヴィニズムの英國經濟に及ぼせる影響について　笹森　建三〔商經〕大一四　六　一

【カルカー】(Fritz von Calker, 1864-)

「完成」の思想（カルカーの法理論）　杉山　茂顕〔國家〕大一四　三九　昭一〇　一一三

【カルテル】　參照＝企業。トラスト。

カルテルの法律上の形式を決定するの困難　烏賀陽然良〔國經〕昭元　一　三
佛國に於けるカルテルの法律上の形式　烏賀陽然良〔國經〕昭元　一　五
企業家組合の起因及保護的關稅に對する其關係　氣賀　勘重〔國經〕昭四〇　三　四一五
我國に於けるカルテル熱の勃興　津村　秀松〔國家〕昭四一　四巻六號
商業政策に於けるカルテルの地位　笠間　杲雄〔國家〕昭四一　二三　一三
カルテルとトラストの關係に就て　海老原竹之助〔國經〕昭四四　10　三
カルテルとダンピング　松田　知之〔外時〕大六　二六　三〇八
戰時に於けるカルテル運動　田中　金司〔國經〕大八　二六　六
獨逸に於ける强制カルテル問題　〔資科〕大九　六　三一四
カルテル法律論　田中　鹹二〔法協〕大一一　四〇　一二一　四一

【カルナー】(Joseph Karner)

カルナー「法律制度の社會的機能」（譯）　恒藤　恭〔我等〕大九　二　10

【ガルニエ】(Joseph Clémens Garnier, 1813-1881)

利子利慾說上に於けるセニオルとガルニエ　寺尾　隆一〔國家〕昭四四　二五　10

【革】

本邦牛皮製革業の現在及將來　水郷　生〔東經〕大四　七一　一七八二
皮革及び皮革製品　〔財經〕大五　三　一三
戰後の皮革市場　浦邊　襄夫〔洋經〕大五　一　七四四
我が製革工業の將來　浦邊　襄夫〔財經〕大九　七　二

【爲替】　參照＝外國爲替。銀行。金融。

支那南洋貿易と爲替資金　山成　喬六〔財經〕大三　一　二
銀行內國爲替尻の操縱に就て　細井安太郎〔商經〕大五　一　二
爲替貸借の原理を論ず　兒林百合松〔會計〕大六　二　六
爲替資金の調達策に就きて　稲山　始〔東經〕大六　七五　一九〇七
爲替貸借理論　中島　精二〔會計〕大七　三　三
爲替貯金局より觀たる地方別金融　天岡　直嘉〔財經〕大八　六　昭一〇　一一
最近三年間に於ける爲替貯金業務の實況　天岡　直嘉〔財經〕大九　七　九
買入外國爲替轉賣の整理法　木村秀太郎〔銀研〕大一〇　一　一
支店間爲替取引の本店集中計算制　横山干代材〔銀研〕大一一　三　一
爲替事務（內國）取扱手續　藤野　豐治〔銀研〕大一一　三　三
銀爲替取引法　古矢　岩雄〔銀研〕大一一　三　一六六三
他店爲替尻拂込方法改良私案　岡上虎三郎〔銀研〕

輸入爲替取立實務誌　小林　弘三〔銀研〕大二　五　二
電信爲替と銀行の權利義務　妹尾　一雄〔銀研〕大二　五　二
爲替尻整理方法私見　小坂　珠城〔銀研〕大二　六　三
內國爲替實務誌に就て水野氏に教を乞ふ　貴田　秀一〔銀叢〕大二　二　五
內國爲替取引方法改良私案　松川　隷治〔銀研〕大二　七　一
爲替尻資金操縱に就て　大久保正喜〔銀研〕大二　七　三—四
爲替取引の無貸越制度　水野　淳二〔銀研〕大二　七　四
內國爲替事務要論　小坂　珠城〔銀研〕大二　八　一—二
爲替取引の發生事情に就て　松岡　都城〔銀研〕大二　八　五
外國爲替の賣買取引と其註文　利倉文之助〔銀研〕大二　八　六
電信送金爲替の法律的考察　妹尾　一雄〔銀研〕大二　九　二—三
內國爲替決濟の理想に就て　三好　和夫〔銀研〕大二　九　五
爲替取引口座制の法律的解釋　堤　正元〔銀研〕大二　一〇　一
內國爲替實務　桑野　傳三〔銀叢〕大二　一〇　六—一五
爲替尻付換の實益　小坂　珠城〔銀研〕大二　一〇　三
變則的なる爲替取引方法　廣瀨　清三〔銀研〕大二　一〇　五
爲替尻付替の研究　松川　隷治〔銀研〕大二　一〇　五—七
爲替取引の用紙統一に就て　相良　最〔銀研〕大二　一〇　七

【爲替訴訟】（カワセソショウ）

證書訴訟及び爲替訴訟を見よ

【爲替手形】（カワセテガタ）

手形を見よ

【川名兼四郎】（カワナカネシロウ）

嗚呼川名兼四郎先生　末弘嚴太郎〔法協〕大三　三　三

【川俣】（カワマタ）

川俣羽二重に就て　岡部菊太郎〔東經〕明四四　六四　一六〇九
川俣羽二重救濟策　岡部菊太郎〔東經〕明四五　六五　一六三五

【簡易保險】（カンイホケン）

小額の保險に付てベーテルス「國民保險及び其完成」（譯）　玉木爲三郎〔保雜〕明三四　六　六五
ベノジユヴオーナー「國民保險論」（譯）　粟津　清亮〔保雜〕明三六　八　四八八—九一
小額保險分離の必要　粟津　清亮〔保雜〕明三七　九　一〇九—一〇八
小口保險の改善　矢野　恒太〔保雜〕明三七　九　一〇〇
麻生義一郎〔保雜〕明四一　一　一四三
貯蓄銀行の小口保險兼業　麻生義一郎〔保評〕明四三　二　三
小口保險の意義並に英米に於ける其仕組　鈴木　太郎〔保評〕明四三　二　五
英國の郵便局保險に就て　伊藤萬太郎〔保評〕明四四　四　三
英國國民保險法案に就て　瀧谷　善一〔國經〕明四四　一　三—六
小口保險官營の是非（講演）　矢野　恒太〔保評〕明四四　四　五
小口保險官營に就て（講演）　海老原介太郎〔保評〕明四四　四　五
簡易保險論　稲田周之助〔日經〕明四四　九　一〇
ブルデンシアル會社の小口保險改善　麻生義一郎〔保雜〕明四五　一　一八—一
小口保險の責任準備金　麻生義一郎〔保評〕明四五　五　五
各國に於ける小口保險の梗概　下村　宏〔國經〕大三　一七　三
小口保險官營反對論　窪田隆次郎〔日經〕大三　一五　六
小口保險官營の可否　清水文之輔〔保評〕大三　七　七
最近獨逸に於ける小口保險會社の設立に就て　日吉　平吉〔法協〕大三　三　一〇
小口保險官營の得失如何　高野　金重〔保評〕大三　七　一一
小口保險官營の可否　宮島　綱男〔財經〕大三　一　一〇
小口保險官營是非　大多和耕人〔東經〕大三　六九　一七五—二
所謂小口保險の官營を論す　粟津　清亮〔保險〕大四　一　二—二四
簡易保險法案解說　松本　烝治〔法協〕大四　三　一—三
簡易保險官營の理由　下村　宏〔國家〕大四　二九　一—二
小口保險制度調査委員會に於ける調査決定の要領　〔國家〕大四　二九　一
簡易保險尙早論に對する意見　下村　宏〔國經〕大四　一八　一
社會政策學會に於ける簡易保險案討議の經過　〔國經〕大四　一八　二
簡易保險官營反對意見　矢野　恒太〔國經〕大四　一八　二
所謂簡易保險に付て　志田鉀太郎〔國家〕大四　二九　三—五
簡易保險反對論に對する辯明　下村　宏〔國經〕大四　一八　三
簡易保險と郵便貯金　戸田　海市〔京法〕大四　一〇　四
簡易保險官營問答　矢野　恒太〔國家〕大四　二九　五
官營簡易保險及び之に關する當局の提案　石川　文吉〔新報〕大四　二五　五
簡易保險案に對する生命保險協會の批評を讀みて　三邊　金藏〔三學〕大四　九　七
獨逸に於ける國民保險問題　三浦　義道〔保雜〕大四　一　二一〇—二二二
社會政策としての簡易保險　堀切善兵衛〔三學〕大五　一〇　四
簡易保險法　淺野　陽吉〔國國〕大五　四　四
日本政府簡易保險の將來をトす　森　莊三郎〔保雜〕大五　一　二一〇
簡易保險更張の一方面　財部　靜治〔經叢〕大五　三　六
英國國民保險法解說　行德　三郎〔保雜〕大六　一　二四三
英國國民保險法解說　星野　苑衛〔保雜〕大六　一　四二三—四二四
小口保險會社の契約者に對

する安事幸福增進事業に就て　石坂　泰三〔保雜〕大七　一　二五六
英國小口保險戰時死亡率　竹下　清松〔保雜〕大七　一　二六二
英國小口保險に對する批難と其改善計畫　竹下　清松〔保雜〕大九　一　二六二
簡易保險積立金の運用と社會事業　桑山　鐵男〔社政〕大一〇　一　一〇
民間保險との分野を亂す簡保　矢野　恒太〔東經〕大一〇　八三　二〇八六
羊頭苦肉的簡易保險　北里袈裟男〔東經〕大一〇　八三　二〇八六
簡易保險積立金の運用狀況　桑山　鐵男〔東經〕大一〇　八三　二〇八六
簡易保險限度引上げ反對　志田鉀太郎〔東經〕大一〇　八三　二〇八六
簡易保險の保險料に就て　佐藤　保兒〔國經〕大一一　三三　二
簡易保險の死亡表　佐藤　保兒〔國經〕大一一　三三　四
簡易保險の改正保險料を評す　佐藤　保兒〔國經〕大一一　三三　六
再度改正の簡易保險料を評す　佐藤　保兒〔國經〕大一三　三七　四
簡易火災保險官營反對論　北澤　宥勝〔保評〕大一四　一八　九
簡易年金保險　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四四

【感化事業】

參照＝監獄。少年裁判所。少年犯罪。犯罪。不良少年。免囚保護。

アッペール「感化院の制を論す」（譯）　城　數馬〔法協〕明三〇　五　三七
感化院の濫觴　田中　太郎〔統集〕明三一　一　二〇七
感化事業の必要及效果を論す　小河滋次郎〔志林〕明三四　三　二三
感化事業　留岡　幸助〔法協〕明三五　二〇　九
感化教育の施行法に就て　小河滋次郎〔志林〕明四〇　九　二
索漏生國に於ける感化救濟事業　長谷川久一〔國家〕明四二　二三　八
感化事業に就て　平沼騏一郎〔刑評〕明四三　二　六
斬新奇拔なる感化院　田中　太郎〔刑評〕明四三　二　一三
感化事業の分業的設備　三宅　鑛一〔刑評〕明四四　三　一
精神病と感化事業　片山　國嘉〔刑評〕明四四　三　四—五
感化院巡り　池田　隆德〔刑評〕明四四　三　七—八
階級的種別的感化院設立の必要を論す　小林　正金〔新報〕明四五　二三　一
英國に於ける感化事業　平沼騏一郎〔法記〕明四五　三三　二十三
東京市の感化救濟事業　田中　太郎〔統集〕大三　一　四〇二
都市と感化事業　阪谷　芳郎〔新聞〕大三　一　九五四
感化事業の實驗　留岡　幸助〔新聞〕大三　一　九五五
教育上より見たる感化事業　乙竹　岩造〔新聞〕大三　一　九五七
英國の感化事業殊に其年少犯人取扱に就て　富田　山壽〔京法〕大四　一〇　一〇
統計上より觀たる感化救濟事業　布川　孫市〔統集〕大四　一　四二

自然と感化事業　稻岡　幸助〔新聞〕大四　一　一〇五二
感化法に就て　小河滋次郎〔法政〕大七　一五　三—五
獨逸刑法草案に現はれたる感化及保安の制度　花村　美樹〔明司〕大一一　一　二—三
感化院の內部より見たる不良少年教化事業　川口　寬二〔統集〕大一一　一　四九〇　四九二
新時代の少年保護と感化事業　和田　一次〔臺法〕大一二　一七　一八　一二　一

【官業】

參照＝企業。市營事業。專業。

公業制度維持に關する意見　山內　正瑛〔國家〕明四一　三　四
官營事業と私營事業　佐伯勝太郎〔東經〕明四二　六〇　一五〇五
供給不足は獨占官業に於て最も甚だし　谷奧　利吉〔洋經〕明四四　一　五七
官業の價値に就て　馬場　鍈一〔新報〕大元　二二　九—一〇
減稅及官業拂下の世論　田島　錦治〔京協〕大二　八　七
非官業拂下論　滿淵　實吉〔東經〕大三　一〇　一七〇
公企業負擔に付て　美濃部達吉〔新報〕大三　二四　七
官業整理と其の得失　石渡　敏一〔財經〕大四　二　八
官業整理の實績如何　橋本圭三郎〔財經〕大四　二　八
官業整理と財政　小川鄕太郎〔經叢〕大四　一　三
官業事業の調査　澤　來太郎〔國國〕大四　三　一〇
官業論　北崎　亡羊〔東經〕大四　七　四八二　一八二
公企業の特許　美濃部達吉〔新報〕大五　二六　三—四
官業經營の財源に關する私案　本多　精一〔財經〕大六　四　六
官業問題に就きて　神戸　正雄〔經叢〕大六　四　一—四
生產と營利の觀念に就て（附福田博士の公企業論に關する疑問）　瀨谷佐次郎〔同論〕大九　一　三
公業廢止論　伴野喜三郎〔臺法〕大一〇　一五　九
明治初年の官營と金融　土方　成美〔經論〕大一五　四　四

【韓國】

朝鮮を見よ

【監獄】

參照＝感化事業。刑罰。犯罪。免囚保護。

監獄の死亡　今井　武夫〔スタ〕明二〇　一　一四
獄政論　穗積　陳重〔國家〕明二一　二　一三
監獄スタチスチック一斑　觀堂　居士〔スタ〕明二三　一　四八
監獄論　石渡　敏一〔新報〕明二四　一　八
監獄問題　小河滋次郎〔新報〕明二五　二　二一
監獄制度略論　曲木　如長〔法記〕明二五　二　九—一〇
監獄改良と刑法改正　長島鷲太郎〔國家〕明二六　七　明七—七　大六—八
監獄事業の大體　曲木　如長〔國家〕明二七　八　明八—四　大六—八
獨逸に於ける假出獄　小山　松吉〔法記〕明二八　五　四五

刑法草案に對し監獄學上より觀察したる管見　小河滋次郎〔國家〕明三一　三　一三
獄制改正の前途　小河滋次郎〔國家〕明三一　三　一二八
監獄の目的　仲小路　廉〔法記〕明三四　一一　一一〇
日本に於ける監獄現時の實況　和田千松郎〔統雜〕明三四　一　一八二
索國司法監獄署に就て　小秋元三八吉〔法政〕明三四　五　四五
衛生上より觀察したる分房制　小秋元三八吉〔法政〕明三五　六　六三
支那監獄の起原　田能村梅士〔法協〕明三六　二一　一〇
支那監獄の起原を讀みて　鈴木　宗吉〔法協〕明三七　三　一
獄制改良の著手に關して當局有司の注意すべき要件を論す　小河滋次郎〔法政〕明四〇　一一　八
監獄統計調査法　高橋　二郎〔統集〕明四〇　一　二一六
獄制に對する事蹟の一斑に就て　小河滋次郎〔法協〕明四一　二六　二
監獄外に於ける囚人の獄衣に就て　横山勝太郎〔辯協〕明四一　一三　一一七
監獄統計に就て　花房直三郎〔統集〕明四二　一　三四二
普國監獄視察談　谷田　三郎〔法記〕明四三　二〇　五—六
囚人の樂書　寺田　精一〔刑評〕明四三　二　六
青年感化監獄の必要　留岡　幸助〔刑評〕明四三　二　六—八
清國の獄制　小河滋次郎〔刑評〕明四三　二　九—一〇
敢て全國の司獄官に訴ふ　横山勝太郎〔辯協〕明四三　一四　一四七
獨逸國に於ける司法警察官と檢事との實務取扱上の關係及び檢事と司獄官との執務上の關係　岡田　庄作〔法記〕明四四　二一
獨房制の弊　石川三四郎〔刑評〕明四四　三　三
忘られぬ獄中生活　福田　英子〔刑評〕明四四　三　四
コンコルド感化監獄の現況　小鹽　高恒〔刑評〕明四四　三　五
獄中吟草　栗原　亮一〔刑評〕明四四　三　六
監獄改良私見　山口　弧劍〔刑評〕明四四　三　九
人種改良家の監獄觀　海野　幸德〔刑評〕明四五　四　二
露西亞監獄の遇囚一班　吉田　知道〔刑評〕大元　四　一二
出獄者と監獄の下附金　原　胤昭〔新聞〕大二　一　八四三
司獄官　花井　卓藏〔辯協〕大三　一八　一八八
囚人の最大危機　泉二　新熊〔評論〕大四　三　二一
米國に於ける監獄制度　田宮準一郎〔國國〕大七　六　二
獄中生活　宮本平八郎〔辯協〕大七　三　六
假出獄制度の實況　山岡萬之助〔新聞〕大七　一　一四一七
司獄官の感想（講演）　花井　卓藏〔新報〕大八　二九　三
亞米利加の監獄改良策　泉二　新熊〔新報〕大九　三〇　五
監獄學の研究　佐々木英夫〔法政〕大九　一七　七
未決囚の待遇を論す　杉本　榮次〔臺法〕大一〇　一五　一〇
監獄最高政策の立場から（監獄工業の刷新）　寺崎　勝治〔法政〕大一〇　一八　一一

接見禁止と飲食の差入禁止　草野豹一郎〔志林〕大一〇　二三　一二
監獄統計の現はれたる病者　羽柴瑪之助〔統集〕大一〇　一　四八四
監獄事業の教育的使命　寺崎　勝治〔法政〕大一一　一九　二
監獄作業時間問題　辻　敬助〔臺法〕大一一　一六　六
監獄視察記　中野　清〔社政〕大一一　一　一九
監獄制度改良私議　緒方　清繼〔臺法〕大一二　一七　二
歐米に於ける少年裁判及監獄制度　笠井健太郎〔朝司〕大一三　三七—一二
國際監獄會議　正木　亮〔志林〕大一三　二六　一
拘禁者の自由研究　寺崎　勝治〔臺法〕大一三　八　一二
囚人と粗食　夢　村〔新聞〕大一三　一　二三一三
第九回國際監獄會議の議題「監獄內の二十五年」を讀む　大塚　郷二〔志林〕大一四　二七　八
監獄見學の旅（國際刑務會議團の巡視旅行）　大森　洪太〔法政〕大一四　三　六—八
　　大森　洪太〔法曹〕大一五　四　二—三

【監査役】

取締役及監査役の資格發生及消滅の時效を論して大審院及東京地方裁判所の判決に及ぶ　片山　義勝〔法協〕明三六　二一　一一
取締役又は監査役と會社との間の關係に就て　松本　烝治〔法協〕明三六　二一　一三
會社重役の辭任に關する慣例の誤を正す　岸本　辰雄〔明法〕明三六　一　五五
　　〔辯協〕明三六　七　六五
　　〔新聞〕明三六　一　一四七
取締役又は監査役と會社との關係に就て松本法學士の高教を仰ぐ　松本　烝治〔法協〕明三七　三　三
取締役又は監査役と會社との關係に付き片山君に答ふ　片山　義勝〔法協〕明三七　三　一
監査役豫選の當否に付て　松本　烝治〔法協〕明三七　三　三
小數株主權論　渡邊　暢〔新聞〕明三七　一　二〇四
監査役の任期を論して之かせらるゝことを得ざるや　鈴木雄次郎〔新聞〕明三八　一　二七四
　　林　龍太郎〔新聞〕明四〇　一　四四〇
法規の改正を求む　清瀨　一郎〔京法〕明四一　三　八
法人は會社の監査役に選任せらるゝことを得ざるや　鹿野清次郎〔國經〕明四一　四　六
我國の監査役に就て　林　瀧太郎〔新聞〕明四一　一　四七八
監査役の補員選擧に就て　角　利助〔新聞〕明四一　一　四八〇
監査役の任期に就て　林　龍太郎〔新聞〕明四一　一　五〇九
株主の監査役選擧に就て　松波仁一郎〔法協〕明四二　二七　六
英國監査役　高橋　義雄〔東經〕明四二　五九　一四七八
監査役の改善を望む　河東田經清〔東經〕明四二　六〇　一五二一
免許監査人設置說に就て

監査役制度改革の方法如何　大越　盛德〔東經〕明四二年 六〇卷 一五二號
官選監査役の必要及公證人をして之に當らしむるの議　倉場隼太郎〔新聞〕明四二 一 五六一
監査役の選任方法　森　作太郎〔新聞〕明四二 一 五六五
株式會社の監査制度に就て　岡野敬次郎〔法協〕明四三 二八 一
會社重役の刑罰　稲田周之助〔日經〕明四三 八 四
監査役制度の改正問題に付て　松本　烝治〔法協〕明四三 二八 五
會社重役嚴罰論　松波仁一郎〔京協〕明四三 五 九
監査役問題に關する世論を評す　松本　烝治〔新聞〕明四三 一 六一五
株式會社監査役選擧の方法　高木祥二郎〔辯協〕明四三 一四 一三九
商法改正と公認檢査制度に就て　〔新聞〕明四三 一 六九六
會社重役の任期に就きて　大原　信久〔新聞〕明四三 一 六一〇
株式會社の重役の議決權　野村　嘉六〔新聞〕明四四 一 六九六
監査役は虚僞の貸借對照表の公告に責を負ふ　高窪喜八郎〔評論〕大元 一 一
帝國議會議員は保護會社重役たらしむべからざるか　松波仁一郎〔法記〕大二 二三 九一〇
小數株主權の本質を論す　稲田周之助〔日經〕大三 一五 七
監査役制度の改善に就て　鳥賀陽然良〔新報〕大六 二七 三
　　吉田　良三〔國經〕大九 二九 五
監査役たる株主は商法第一九八條の檢査役選任の申請を爲し得るや　廣瀬　正雄〔新聞〕大一〇 一 一八五八
銀行重役の責任　松波仁一郎〔新聞〕大二 一 二〇七二
會社重役の私財提供を論ず　松波仁一郎〔新聞〕大二 一 二〇七二
松波博士の銀行重役の責任を讀みて偶感　高木友三郎〔新聞〕大二 一 二一四
監査役の制度改正に就て　花岡　敏夫〔イン〕大一五 三 二
監査役制度論　濱田　德海〔會計〕大一三 一五 三
會社重役の責任について　松本　烝治〔エコ〕大一五 四〇 一三

【管子】

管子の獨占政策　田崎　仁義〔日經〕大二 一三 一〇

【慣習法】

慣習法起源諸說の批評　江木　衷〔法協〕明一七 二 五
慣習法の性質　一木喜德郎〔法政〕明三一 二 一七
慣習法を論して民法商法に及ぶ　松本　重敏〔辯協〕明三一 二 二三
慣習法を論す　岡　實〔志林〕明三四 三 一六
慣習法の觀念に就て　島田　俊雄〔法政〕明三七 八 二
慣習の法力　市村　光惠〔京法〕明三九 一 五
慣習法を論す　石池音四郎〔京法〕明四〇 二 卷 九號
慣習法　菊池　武夫〔新報〕明四四 二 四
南洋の土民間に於ける慣習法　山本美越乃〔京法〕大五 一一 三
グミュール教授の慣習法論　岩田　新〔志林〕大九 三 三、四 一一、一二

【干渉】 參照＝モンロー主義。

國際干渉論　花井　卓藏〔新報〕明二九 六 五九
國際法上干渉權の有無を論ず　長岡　春一〔法協〕明三三 一八 一
干渉を論ず　松原　一雄〔國家〕明三六 一七 二〇三
續干渉論　松原　一雄〔國家〕明三六 一七 二一〇
干渉の定義竝主權と國際法　立　作太郎〔國際〕明三六 二 二
干渉の定義　蜷川　新〔國際〕明三六 二 一
モンロー主義と干渉との關係　秋山雅之助〔志林〕明四二 一一 一〇
外國の內亂に對する不干渉の義務　有賀　長雄〔國家〕明四五 二六 二
外國の內亂の場合に於ける不干渉の義務並に新國家又は新政府の承認　立　作太郎〔國家〕明四五 二六 三一四
外國の動亂と干渉　蜷川　新〔國際〕明四五 一〇 三一四
干渉權及干渉の定義　蜷川　新〔國際〕大元 一一 二
高橋博士の干渉の說を批駁す　千賀鶴太郎〔京法〕大三 九 二
干渉論　立　作太郎〔國家〕大三 二八 三
他國の君位繼承事件と干渉　蜷川　新〔外時〕大四 二三 二六三
出兵と干渉　立　作太郎〔外時〕大七 二七 三三六
干渉と協力　立　作太郎〔外時〕大一三 三九 四六五

【官制】 參照＝官吏。

改正官制俸給令と既定歲出豫算と官制　長陵　學人〔新報〕明二四 一 六
官制制定權を論ず　小林丑三郎〔法政〕明三〇 一 六
鎌倉室町兩幕府の官制に就て　鐵史樓主人〔新報〕明三三 一〇 一二六
大寶令に見えたる官位の稱呼竝に畫指について　中田　薰〔法協〕大元 三〇 一〇

【關稅】 參照＝租稅。貿易。

輸出稅金廢せざるべからず　田口　卯吉〔國家〕明二五 六 貳六一、貳六二
海關稅を論じて尾崎三良、前田正名二氏の妄を辯す　黑板　勝美〔法協〕大八 三七、二一三
通商條約と關稅制度　岩村　茂〔國家〕明二七 八 九一
關稅論　井上辰九郎〔國家〕明二八 九 四九
　　田島　錦治〔新報〕明二九 六 六〇

題目	著者	誌名	年	卷	號
日本海關稅論	三浦 賴道	〔國家〕	明二九	一〇一	一一九
濠洲關稅事件	高橋 作衛	〔外時〕	明三五	五	一一一
關稅報復竝關稅互惠を論ず	堀江 歸一	〔國經〕	明三九	一	三四一
關稅同盟	山崎四男六	〔國家〕	明三九	二〇	三四三
現行條約の不備と關稅定率法の改正	津村 秀松	〔國經〕	明三九	一	三
關稅定率法改正の要點	武田 英一	〔國經〕	明三九	一	五
我國の協定稅率を論じて條約改正に及ぶ	河津 遲	〔日經〕	明四〇	一	一
企業家組合の起因及保護的關稅に對する其關係	加藤政之助	〔日經〕	明四〇	一	七—八
關稅の改正及び內國稅の革新	氣賀 勘重	〔國經〕	明四〇	三	四—五
保護關稅と國民經濟	丹羽 寶	〔國經〕	明四一	五	三
保護稅と國利民福	丹羽 豐	〔國經〕	明四一	五	三
帝國關稅政策論	丹羽 筑山	〔東經〕	明四二	五九六〇	四七九九四
關稅制度上に於ける內國稅と戾說	津村 秀松	〔國經〕	明四一	六	一
復關稅率問題に關して森本駿君に答ふるの書	津村 秀松	〔國經〕	明四二	六	二
米穀輸入稅改正につきて	河津 遲	〔志林〕	明四二	一一	一—五
農業關稅論		〔日經〕	明四二	五	一—二
條約改正に關し複關稅率制度地關稅問題に付て	矢作 榮藏	〔日經〕	明四二	五	二—三
關稅同盟と自由貿易說	小林丑三郎	〔東經〕	明四二	六〇	一一五一一八
再び關稅同盟と自由貿易說に就て	小林丑三郎	〔東經〕	明四	六〇	一五二〇
關稅の內外に於ける利害の衝突	小林丑三郎	〔東經〕	明四二	六〇	一一五一一二二二
關稅問題に付て	鹽澤 昌貞	〔外時〕	明四二	二	一二
輸入品に對する內國課稅	天野 爲元	〔洋經〕	明四二	一	四七七四七八
關稅改正と輸出貿易	安屋源次郎	〔日經〕	明四二	七	二
新關稅定率法第六條に就て	河津 遲	〔日經〕	明四三	七	二—三
關稅政策か社會政策か	關 一	〔日經〕	明四三	七	三
關稅改革顚末	河田 嗣郎	〔國經〕	明四三	八	二
誤解せられたる改正關稅定率	武田 英一	〔國經〕	明四三	八	五
關稅保護と萬國自由貿易大會	武田 英一	〔國經〕	明四三	九	一
關稅同盟論	鹽澤 昌貞	〔外時〕	明四三	一三	一〇
ペイン關稅法を論じて其改正問題に及ぶ	津村 秀松	〔國經〕	明四三	九	四—六
新通商條約と關稅改正	松井 啓介	〔國經〕	明四四	一	二—六
關稅及廉賣地域	河津 遲	〔國家〕	明四四	二五	九—一三
對英關稅問題の解決如何(河津博士の意見を讀む)	川上英一郎	〔東經〕	明四四	六三	一五九四
米價の將來と米糊	植松 考昭	〔洋經〕	明四四		一 五四六
	河津 遲	〔日經〕	明四五	一	一
の利害を論ず	津村 秀松	〔國經〕	明四一	五	五
米穀輸入稅改正に就て	福島 平	〔新報〕	明四二	一九	五
歐州關稅改策の現狀	小倉 和市	〔三學〕	明四二	一	五
諸大家の關稅改正意見を讀む	河津 遲	〔日經〕	明四二	五	八—九
現行通商條約の最惠國條款に依り本邦輸出品が外國に於て受くる關稅利益		〔國經〕	明四二	六	四
米及米關稅に關する統計調査	水野 良高	〔日經〕	明四二	六	五—六
原產地證明	津村 秀松	〔國經〕	明四二	六	六
歐州諸國の關稅定率法及び關稅改策	オッグ	〔國家〕	明四二	二三	六
チャンバーレン氏關稅政策	大越 成德	〔東經〕	明四二	五七	一四三八一四三九
關稅問題に付て	井上辰九郎	〔東經〕	明四二	五九	一四七二
關稅發達の概觀	瞑鵬 散史	〔東經〕	明四二	五九	一四七五
關稅改正の問題	飯田 義一	〔東經〕	明四二	五九	一四八〇
來るべき條約改正に關する國定稅率及び協定稅率如何	津村 秀松	〔國經〕	明四二	七	二—三
關稅法上の複稅率制度	稻田周之助	〔新報〕	明四二	一九	一〇
輸入關稅の負擔者	田中 穗積	〔國經〕	明四三	七	五
關稅問題の梗概	松崎藏之助	〔日經〕	明四三	五	一一
報復關稅論	大西猪之助	〔東經〕	明四二	六〇	一一〇一一五〇四
米價暴騰と米糊輸入稅の關係	莊田 秋村	〔東經〕	明四五	六五	一六三七
米糊關稅廢止論	小林丑三郎	〔東經〕	明四五	六五	一六四五
汽船輸入稅輕減の急務	山本唯三郎	〔東經〕	明四五	六五	一六五一
關稅法上の貨物	坪根 久松	〔評論〕	大元		一
關稅政策(講演)	田尻稻次郎	〔新報〕	大二	二三	五
外米關稅廢止問題と議會	莊田 秋村	〔東經〕	大二	六七	一六八九
米の供給と關稅	鈴木梅四郎	〔財經〕	大三	一	七
獨逸と穀物關稅問題	阿部 秀助	〔三學〕	大四	九	一
戰爭と關稅制度		〔資料〕	大四	一	一
日本及支那に於ける關稅の史的觀察	田崎 仁義	〔國經〕	大四	一八	二—三
中歐關稅同盟論	松岡 均平	〔國家〕	大五	三〇	四—六
戰後の關稅團體の計畫	戶田 海市	〔經叢〕	大五	二	六
戰後の關稅政策	堀江 歸一	〔三學〕	大六	一一	四五
禁輸及關稅に依る包圍攻擊	神戶 正雄	〔經叢〕	大六	四	六
殖民地の關稅制度を論ず	渡邊 秀雄	〔國家〕	大六	三一	六—七
特惠關稅制度に就いて	河津 遲	〔國家〕	大六	三一	七
製鐵事業と保護關稅との關係	今泉嘉一郎	〔財經〕	大八	六	二—三
我が製鐵事業と保護關稅の必要	今泉嘉一郎	〔財經〕	大八	六	五
關稅警察事務と犯則の防止	井出秀和太	〔臺法〕	大八	一三	六
小麥定期取引と關稅問題	諸井 四郎	〔財經〕	大一〇	八	七

題	著者	誌	年	卷	號
關稅改正要項	志立鐵次郎	〔財經〕	大一〇	八	一〇
生絲輸入稅撤廢問題	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	九
米穀關稅免除延期の可否	河田　嗣郎	〔エコ〕	大一三	二	四
應急關稅政策の更正	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	一九
協定關稅の改訂	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	二三
奢侈品關稅の問題	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	二五
外米關稅と內地米價	半澤　耕貫	〔社政〕	大一三	一	四四
誤れる關稅政策	稻畑勝太郎	〔エコ〕	大一三	二	一五
綿絲關稅撤廢論の不合理	神坂靜太郎	〔エコ〕	大一三	二	二三
小麥及小麥粉關稅引上是非	河田　嗣郎	〔經叢〕	大一三	一九	五
科學的關稅概論	小林　行昌	〔國經〕	大一四	三八	一一二
毛織物關稅の引上は不可	垣內幸太郎	〔エコ〕	大一四	三	五
米價と關稅との關係に就て	河田　嗣郎	〔經叢〕	大一四	二〇	六六
關稅自主權收回の根據	汪　榮寶	〔外時〕	大一四	二一	五〇二
關東州產品輸入稅免除法に就て	今井　俊彥	〔外時〕	大一四	四一	四八九
贅澤品關稅の經濟社會に及ぼせる影響	土方　成美	〔經論〕	大一四	四	一
關稅の外國貿易に及ぼす影響に就て	菱沼　勇	〔經研〕	大一四	二	一
わが關稅改正の目標	靑木　得三	〔エコ〕	大一四	三	二二
關稅と物價の關係	小林　行昌	〔早商〕	大一四	一	一
國際平和と關稅問題	野村　次夫	〔國經〕	大一四	三九	六
砂糖關稅改正と本邦製糖業	三宅鹿之助	〔經研〕	大一五	三	一
國際課稅の主義論爭	神戸　正雄	〔經叢〕	大一五	二三	二
我國の關稅	〔資料〕		大一五	一三	二
本邦鐵關稅の沿革と製鐵業	岸本誠二郎	〔經研〕	大一五	三	二
本邦關稅沿革と其生產業に及ぼしたる影響	生松　淨	〔經研〕	大一五	三	二
本邦綿絲關稅の沿革と紡績業	鈴木　武雄	〔經研〕	大一五	三	二
本邦穀物並に砂糖關稅の沿革	三宅鹿之助	〔經研〕	大一五	三	二
關稅政策と帝國主義	松下　芳男	〔國家〕	大一五	四〇	三
關稅と勞賃との關係について	瀨川　次郎	〔同論〕	大一五	一	二〇
銑鐵關稅引上問題	神戸　正雄	〔時經〕	大一五	一	四二
關稅調查委員會の常設	神戸　正雄	〔時經〕	大一五	一	四三
銑鐵關稅に代るべき製鐵奬勵金	神戸　正雄	〔時經〕	大一五	一	四四
印度綿製品關稅引上の可能性	神戸　正雄	〔時經〕	大一五		四四
我國綿製品の海外に於ける關稅攻め	神戸　正雄	〔時經〕	大一五	一	四四
印度の關稅改正と我對印貿易	町田　成美	〔外時〕	大五	二三	二七二
印度地方各州と關稅	國吉　省三	〔亞經〕	大一一	六	二一三

題	著者	誌	年	卷	號
英領印度の關稅政策	瀧谷　善一	〔國經〕	大一二	三五	三
英國					
獨逸の海運擴張と英國關稅改革	小西　虎雄	〔國經〕	明四一	五	二
英國特惠關稅論	丹羽　豐	〔日經〕	明四一	五	五
英國關稅問題の狀勢	河津　遲	〔外時〕	明四一	一一	一一
日英關稅問題に就て	河津　遲	〔日經〕	明四三	八	六
		〔外時〕	明四三	一三	一三
再び日英關稅問題を論ず	河津　遲	〔日經〕	明四四	八	九
日英關稅問題と我金巾製織	谷奧　利吉	〔洋經〕	明四四	一	三三三
日英間の關稅問題に付帝國議會に期す	有賀　長雄	〔外時〕	明四四	一四	一五八
英國特惠稅問題	戶田　海市	〔經叢〕	大六	五	一
英帝國特惠關稅制度の我國貿易に及す影響を論ず	河津　遲	〔國家〕	大六	三	八
英國の特惠關稅問題に就て	神戸　正雄	〔外時〕	大六	二五	三〇三
大英帝國互惠關稅問題	瀧谷　善一	〔國經〕	大七	二五	五
最近に於ける英國の關稅政策	瀧谷　善一	〔國經〕	大六	三七	二
英國の關稅改革問題	堀江　歸一	〔エコ〕	大二	一	一八
近世英國關稅政策	島田　靜夫	〔外時〕	大一四	四二	四九五
英國の絹物關稅	神戸　正雄	〔時經〕	大一四	一	三五
關東州					
關東州特惠關稅に就て	野添　孝生	〔エコ〕	大一四	三	五
關東州特惠關稅	神戸　正雄	〔時經〕	大一四	一	三二
支那					
支那關稅改正問題	吉田　虎雄	〔日經〕	大二	一四	五
支那關稅增徵問題	津村　秀松	〔國經〕	大二	一五	六
支那關稅改正と帝國	根岸　祐	〔外時〕	大二	一八	二七
支那關稅改正問題と條約	及川　恒忠	〔外時〕	大三	一九	二三五
日本及支那に於ける關稅の史的觀察	田崎　仁義	〔國經〕	大四	一八	二一三
關稅の制度及其の變遷（經濟上の支那十一）	善生　永助	〔財經〕	大六	四	一
支那關稅改正と產業保護	根岸　佶	〔亞經〕	大六	一	一
支那の關稅改正問題	木村增太郎	〔亞經〕	大六	一	二
支那引入と關稅改正問題	河津　遲	〔國家〕	大六	三	四
日支貿易と關稅改正問題	善生　永助	〔財經〕	大六	四	四
支那と關稅問題	阿部　秀助	〔三學〕	大六	一	四一六
支那關稅改正の要求を拒絕せよ	馬場　義典	〔財經〕	大六	四	五
支那關稅引上と日本紡績業	神戸　正雄	〔經叢〕	大六	四	五
再び支那關稅問題を論ず	河津　遲	〔國家〕	大六	三	五
支那關稅問題と日本	津村　秀松	〔國經〕	大六	三	五
支那關稅引上反對意見書を讀む	河津　遲	〔國家〕	大六	三	六
支那關稅問題と我對支貿易	稻山　始	〔東經〕	大六	七五	四一八九二
支那の裁釐加稅問題	木村增太郎	〔經叢〕	大六	五	一八九四 二

支那引入と支那關稅改正問題　神戸　正雄〔外時〕大六・二五　二九七
支那關稅問題の側面觀　齊藤　良衛〔外時〕大六・二五　三〇三
支那に於ける內國關稅　高柳松一郎〔國家〕大七・三　二一四
支那輸入關稅改訂實施の影響　善生　永助〔財經〕大八　六
裁釐加稅の研究　吉田　虎雄〔亞經〕大九　四　二
支那關稅改訂と日本の立場　善生　永助〔財經〕大一〇　八　三
支那の關稅改正に就て　末廣　重雄〔經叢〕大一一・一四　四
支那の關稅改正問題に就て　木村增太郎〔亞經〕大一一　六　三
支那古來の關稅と現行關稅　大村　欣一〔亞經〕大一一　六　三一四
支那關稅改正と日支經濟關係　高柳松一郎〔財經〕大一一　九　一四
支那の裁釐加稅問題に就て　吉田　虎雄〔亞經〕大一二　七　一
支那關稅の過去及び將來に就て　下田　禮佐〔商濟〕大一三　四　二
支那關稅引上と其對策　〔資料〕大一二　九
民國財政部農商部會呈關稅臨時研究會決議案に就て　宮脇賢之介〔亞經〕大一三　八　一
支那關稅金貨徵收案　長岡　克曉〔亞經〕大一三　八　三
支那關稅特別會議に就て　吉田　虎雄〔亞經〕大一三　八　三
日支關稅問題　長永　義正〔財經〕大一三　一一　七八
支那稅關の獨立問題　宮脇賢之介〔亞經〕大一四　九　一
支那の關稅制度及び其改訂問題一班　田崎　仁義〔長彙〕大一四　五　一
關稅問題に對する支那民間の意嚮　堀內　干城〔外時〕大一四　四一　四九一
關稅會議と對支借疑整理問題　勝田　主計〔外時〕大一四　四一　四九二
來るべき支那關稅會議　稻原　勝治〔外時〕大一四　四一　四九三
支那の關稅改正と我が對策を論ず　木村增太郎〔亞經〕大一四　九　四
關稅特別會議に就て　末廣　重雄〔經叢〕大一四　二一　五
關稅會議の極東討議院案　橋川　浚〔外時〕大一四　四二　五〇一
關稅會議と文の控頭　後藤　新平〔外時〕大一四　四二　五〇二
支那の財政と關稅問題　河瀨　蘇北〔國知〕大一四　五　九
關稅特別會議員集と其議題　西澤　英一〔財經〕大一四　一一　一七
支那關稅政策と日本　堀江　歸一〔エコ〕大一四　三　一七
支那の關稅自主權　西澤　英一〔財經〕大一四　一三　一八
支那關稅會議と其對策　木村增太郎〔エコ〕大一四　三　二〇
支那の關稅增徵と我國の利害　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　三四
支那の關稅改正問題　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　三九
支那關稅會議と我國　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　四一
支那關稅問題と裁釐加稅問題　木村增太郎〔法集〕大一四　一　一
支那關稅會議の經過　高柳松一郎〔外時〕大一五　四三　五〇六
支那關稅會議詳史（外交時報社調査部）〔外時〕大一五　四三　五〇七
關稅特別會議と日本　末廣　重雄〔外時〕大一五　四三　五〇七
支那關稅會議は如何に進むべきか　河瀨　蘇北〔外時〕大一五　四五　五〇九
民國の更生と關稅會議　陳　覺生〔外時〕大一五　四三　五一〇
支那關稅問題　根岸　佶〔外時〕大一四　四三　五一一・一二
支那關稅問題　小林　行昌〔早商〕大一五　二　一
關稅會議と日本原案の撤回　西澤　英一〔財經〕大一五　一三　四
對支關稅對策の變更　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四四
支那關稅改正の影響　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四六

朝鮮

朝鮮の關稅に就きて　神戸　正雄〔經叢〕　五　四
朝鮮關稅定率令改訂意見　山內　勝雄〔亞經〕大七　二　四
朝鮮關稅制度の改正に就て　河津　暹〔國家〕大七　三・四　四一五

獨逸

獨逸に於ける關稅法改正の顚末　田中　穗積〔外時〕明四一　一一　一二
獨逸輸出稅に就て　服部文四郎〔洋經〕明四二　一　明四八・五　明四八・六
羽二重に對する獨逸の關稅待遇　守屋源次郎〔日經〕明四四　八　八
獨逸の農業保護關稅と食料品自給力　河田　嗣郎〔國經〕大四　一九　二一三
獨逸關稅政策の沿革　牧野　義智〔國國〕大七　六　一

佛蘭西

佛國に就て本邦產絹織物が歐洲產と異りたる關稅待遇を受くるに至りたる顚末　千葉　蓁一〔國經〕明四二　六

佛國

佛國關稅の研究　柴崎雪次郎〔國經〕明四〇　三　三一四

米國

歐洲對米國關稅戰鬪　河津　暹〔日經〕明四二　五　一一二
米國輸入稅率改正に就て　鹽澤　昌貞〔外時〕明四二　一三　四
米國に於ける關稅改正　田中　穗積〔外時〕明四二　一三　一〇
米國に於ける關稅改正の顚末　河津　暹〔法協〕明四二　二七　明一〇・一二
北米合衆國の關稅改正　河津　暹〔外時〕明四三　一三　六
米國の新關稅法と通商諸國　津村　秀松〔國經〕大三　一六　一一二
米國に於ける新關稅改革の概要　水野　智彥〔三學〕大一〇　一五　九一一〇
一九二一年亞米利加合衆國緊急關稅法制定　高橋　康順〔經叢〕大一一　一七　一
米國の新關稅法に就て　栃倉　正一〔外時〕大一四　四二　五〇四
米國現行保護關稅法と其效果　〔資料〕大一四　一一　一三
亞米利加合衆國關稅制度の發達

露西亞

露國の關稅保護　フアリンスキー〔日經〕明四二　五　一三
露國及極東露領の關稅政策　堀切善兵衛〔三學〕大五　一〇　九

【間接訴權】

債權ー債權の效力を見よ

【官廳】

參照＝官吏。

		年	卷	號
李國官衙の實況	木場 貞長〔國家〕	明三一	二	一三
官廳の觀念に關する管見	小原 新三〔法協〕	明三五	二〇	三
文部大臣權限論	櫻井熊太郎〔辯協〕	明四〇	一一	一一
官廳の訴訟行爲	皮本 生成〔辯協〕	大三	二八	一八四
	〔新聞〕	大三	ー	九二六
ベルナチックの論文「人格の概念特に官廳の人格」の內容	田村 德治〔京法〕	大七	一三	六ー八

【間諜】

志士と間諜	淺倫太郎〔新聞〕	明三七	ー	二二三	二二八
間諜に關する佛國の法規	石見林生〔新報〕	明三八	一五	一	
宣傳と間諜	建部遯吾〔外時〕	大一	三六	四一〇	

【カンチロン】

(Richard Cantillon, 1680-1734)

經濟學の發端 Richard Cantillon　福田敬太郎〔國經〕大九 二九 四一五

【姦通罪】

告訴の拋棄と强姦致傷罪	卜部喜太郎〔新報〕明三〇	七	七二	
姦通罪と婚姻方式との關係を論ず	岩味 隆次〔新聞〕明三六	ー	一四八	一四九
姦通を論ず	勝本勘三郎〔京法〕明四〇	二	五	
姦通に就て	加藤 弘之〔法協〕明四一	二六	一	
	〔辯協〕明四一	三	一二六	
被教唆者の强姦致死罪に對する强姦教唆者の責任の根據	牧野 英一〔新報〕明四一	一八	三	
男爵加藤先生の姦通論を拜讀し民法八一三條刑法三五四條改正刑法一八四條に及ぶ	一瀨勇三郎〔新聞〕明四一	ー	四七六	四七七
支那法と姦罪	東川 德治〔志林〕大六	一九	四	
新刑訴と姦通罪其の他との關係	上內恒三郎〔臺法〕大一一	一六	九	
强姦致傷の罪と刑法第二〇七條との關係に就て	伊藤 三秋〔新聞〕大一一	ー	二〇一七	
姦淫成傷罪に就いて	小齋甚治郎〔正義〕大一四	一	四	

【ガンディ】

(Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-)

大聖ガンディが事ども	村上源太郎〔社政〕大一一	ー	一九	
ガンヂの非協英運動	鹿子木員信〔外時〕大一一	三五	四一八	

【鑑定】

證據を見よ

【カント】

(Immanuel Kant, 1724-1804)

カントの學說	戶水 寬人〔法協〕明三八	二三	八ー九		
カントの國家論	上杉 愼吉〔法協〕明三七	二二	五		
カント認識論と純理經濟學	左右田喜一郎〔國經〕大四	一九	五		
カント國家及法律哲學と論理形式主義經濟學	福田 德三〔三學〕大六	七一一	一一二	一一二	
自由民政及永久平和（カントの學說を評す）	稻田周之助〔新報〕大七	二八	三		
カントと輓近の社會主義	米田庄太郎〔經叢〕大七	七	三ー六		
新カント派認識論と經濟學	山口正太郎〔商經〕大七	ー	一二		
カント「法律學の形而上學的原理」の緒論	恒藤 恭〔同論〕大一〇	ー	五		
カント契約的國際社會論	今中 次磨〔外時〕大一一	三五	四一九		
カントの政治思想	今中 次磨〔同論〕大一一	ー	八		
カントの法理論	船田 享二〔法政〕大一一	一九	九ー二		
カントの法律哲學に就いて	上田 和夫〔法叢〕大二	九	四ー五		
カントに歸つて經濟學を論ず	勝田 貞次〔三學〕大二	一七	五		
フォルレンダー「カントと社會主義」（譯）	船田 享二〔我等〕大二	五	五ー七		
國際平和思想より觀たるカントとウヰルソン	神川 彥松〔國際〕大二	二三	三		
カントの國家論	關 榮吉〔社雜〕大二	ー	三		
ザウアーの新カント派法理學辯護論	今川 赴夫〔國家〕大二	三八	三ー四		
カントとフランス革命	船田 享二〔法政〕大二	二一	四		
カントの歷史哲學と社會哲學	柳澤 泰爾〔法治〕大二	三	五ー六		
人としてのカント	高橋 正彥〔國知〕大二	四	五		
カントの法理學	大谷 美隆〔法治〕大二	三	五ー七		
大哲カントに就て	岸 與詳〔長覺〕大二	四三	一六	一三	
近世文化の哲學者としてのカント	桑木 嚴翼〔社雜〕大二	ー	七		
カントの生涯とその著書	松永 材〔社政〕大二	ー	四三		
カントの社會思想	兒玉 達童〔社政〕大二	ー	四三		
カントの理性道德と現代の社會思潮	友枝 高彥〔社政〕大二	ー	四三		
カントの「國際法」論	高橋 正彥〔國知〕大二	四	七		
カントに至る平和思想の進					

展
カントの法律哲學　柳澤　泰爾〔法治〕大一二　卷九一二　號
カントと人類の結合　山下　博章〔法政〕大一四　二三　一一〇
カント「判斷力批判」の問題と文化の合目的性　村瀨武比古〔法治〕大一四　四　二
「純粹理性批判」に於けるゲマインシャフト即ち相互作用の概念　川村　豐郎〔商研〕大一四　五　二
デボーリン「カントに於ける辯證法」（譯）　米田庄太郎〔社雜〕大一四　一　〇
　福本　和夫〔社科〕大一五　二　六

【關東州】

旅順威海衛に關する清英露獨の交渉　有賀　長雄〔外時〕明三一　一　五
浦潮斯德と旅順及大連　下村　宏〔外時〕明三五　五　五六
旅順口法權問題　松原　一雄〔新報〕明三六　一三　二
租借權の性質と關東州の租借地　篠田　治策〔國際〕明三九　五、二一三　〔辯協〕明三九　一〇　四四一〇二
國際地役を論じて滿州鐵道の布設權及關東州の租借地の法律上の性質に及ぶ　岩井　尊文〔京法〕明三九　一　四四一〇一一
獨逸帝國保護領たる膠州灣制度の一二を說き我が關東州に及ぶ　江木　翼〔國家〕明三九　二〇　一三
關東州に於ける我邦法權の發動　川島　行司〔新報〕明四一　一八　二
清國領土の保全を研究して關東州租借地の法律上の性質に論及す　高橋　作衛〔國際〕明四五　一〇　七
日清戰爭後の露佛獨三國干涉、所謂 Cassina 密約及び露國の旅大租借の眞相に就て　矢野　仁一〔外時〕大一〇　三三　四三九三　四三九四
　善生　永助〔財經〕大一〇　八　六
大連取引所建値問題　蜷川　新〔外時〕大一一　三六　四三四
旅大租借地問題と國民の決意　清水　泰次〔外時〕大一一　三六　四三五
支那に於ける租借地還附について　清水　泰次〔國際〕大一二　二三　三
關東州還附論に就て　矢野　仁一〔外時〕大一二　三七　四三六
遼東回收論の論理　末廣　重雄〔外時〕大一二　三七　四三六
旅大還附の條件　蜷川　新〔外時〕大一二　三七　四三八
旅大問題と內外の輿論　青柳　篤恒〔外時〕大一三　三七　四四〇
關東州租借地還附問題解決案　副島　道正〔外時〕大一三　三七　四四二
旅大問題は華府會議失敗の結果也

三國干涉から露西亞の旅大租借まで（再び）　矢野　仁一〔外時〕大一二　年卷　三八　號　四五一
虐げられつゝある關東州民　小野　實雄〔新聞〕大一二　一二〇八三
關東州司法制度改善論　小野　實雄〔新聞〕大一二　一二〇八
關東州阿片令に就て科刑不當改正を要す　小野　實雄〔新聞〕大一三　一三四一
關東州特惠關稅に就て　野添　孝生〔エコ〕大一四　三　五
關東州特惠關稅　神戶　正雄〔時經〕大一四　一　三二
關東廳戶口調査（調査法）に就て　宮本　基〔統雜〕大一四　一　四六六

【關東大震災】

震災（大正十二年）を見よ

【カントロヴィッツ】

(Hermann Kantorowicz (Pseud. Gnaeus Flavius). 1877-.

參照＝フラヴイウズ。

カントロヴィッツの法律社會學　田中　誠二〔法協〕大二三　四一　九一一〇
カントロウキッチに於ける「社會學建設」への試み　酒井正三郎〔社科〕大一四　一　五

【カンニンガム】

(William Cunnungham, 1849-1919)

カンニングハム「自由貿易興廢史論」（譯）　河上　肇〔日經〕明四〇　一　四
カンニンガム博士逝く　本庄榮治郎〔經叢〕大九　一〇　一

【カンパネルラ】

(Tommaso Campanella, 1568-1639)

トマツソ・カムバネルラの「日の都」　高橋誠一郎〔三學〕大九　一四　四

【官吏】

參照＝官廳。官制。

英佛獨墺比較官吏法（殊に登傭法）　末岡　精一〔法協〕明一〇　五　四四三　四四四
官吏の任命　斯波淳六郎〔法協〕明二三　七　六六
國家と官吏　木場　貞長〔國家〕明二四　五　四三六　四三七
墺國文官統計　高橋　二郎〔統集〕明二六　一　一三九
官吏侮辱罪意見　花井　卓藏〔新報〕四一九　六　六八
官吏の職務上の過失に因る賠償責任　穗積　八束〔新報〕明三〇　七　七三
官吏の性質　渡邊清太郎〔法政〕明三一　二　一五
俸給論　山石　正文〔新報〕明三一　八　八四
違法命令に對する官吏の責任　渡邊清太郎〔法政〕明三二　三　二三
何を官吏と謂ふか　穗積　八束〔法協〕明三三　一八　一〇
官吏の職務執行の際損害を

受けたる者は其賠償を請求することを得るや若し得るとせば其相手方如何　副島　義一〔法政〕明三三　四　一六五
竄罪者に對する國家賠償責任　岡田朝太郎〔國家〕明三三　一四　一三〔明法〕明三三　一　二一〔新聞〕明三三　一　三一六
任官の性質に關する學說を論ず　木澤　定夫〔明法〕明三四　一　二一
國家は官吏の不法行爲に對し民事上の責任ありや否や質問に答ふ　松波仁一郎〔法政〕明三四　五　五一
無資格者を官吏に任用したる場合の處分を論ず　遠藤　源六〔國家〕明三四　一五　一七八
官吏の民事上の責任　織田　萬〔內外〕明三五　一　一
官吏の觀念に關する管見　小原　新三〔法協〕明三五　二〇　五
懲戒及刑罰に就て　岡　實〔新報〕明三五　三　七
行政官吏服從の義務　清水　澄〔新報〕明三五　三　七八
官吏責任論　清水　澄〔法協〕明三六　二　一四一
代理者の過失に因る國家の責任　シミユー〔內外〕明三六　二　四一六
官吏の身元保證金　織田　萬〔內外〕明三六　二　一五
會計法に依る保證金の性質　中山成太郎〔志林〕明三六　五　四六
官吏の忠實の義務　清水　澄〔志林〕明三六　五　四七
官吏の俸給に付て　島村他三郎〔新報〕明三七　一四　六
獨逸國に於ける「無罪の被逮捕者に關する損害賠償法」の制度　副島　義一〔新報〕明三七　一四　七八
令限分の解釋と教授の言論　岡田朝太郎〔國家〕明三八　一九　一〇〔志林〕明三八　七　九
官吏の忠實義務に就て　ラドニツキー〔法協〕明三八　二三　一
外國人は之を官吏に任することを得るか　市村　光惠〔明學〕明三八　一　九
官吏公吏及議員の私心の效力　岩田　宙造〔志林〕明三九　八　二
裁判所書記か其保管に係る競落代金を費消したるときは國家は賠償の責を負ふや　谷田　三郎〔法記〕明三九　一六　二
國家か私人の利益を侵害したる場合に於ける賠償責任を論ず　美濃部達吉〔法協〕明三九　二四　二六
ピンチングの職務犯罪論　美濃部達吉〔國家〕明三九　一九　三
官吏か職務違反の行爲に因り他人に損害を加へたるときは民法不法行爲の規定に從つて賠償の責に任すべきか　佐々木惣一　岡松參太郎〔京法〕明三九　年卷一　號四
官吏の任命は何れの時より其效力を生するか　美濃部達吉〔法政〕明三九　一〇　七
官吏の從順の義務　美濃部達吉〔法協〕明三九　二四　一三
官吏か公權執行に當りて爲したる不法行爲に因る官吏の責任　森　作太郎〔新聞〕明三九　一　三五四
官吏不法行爲論　一柳　貞吉〔新聞〕明三九　一　一
官吏責任論　美濃部達吉〔志林〕明四〇　九　一一四
官吏の任命に就て　清水　澄〔法政〕明四〇　一一　一三
官吏の品位に就て　大濱　隆〔新聞〕明四〇　一　四二九
同一人に對し二重になしたる官吏任命の效力　島村他三郎〔志林〕明四一　一〇　一一二
官吏の職務上の不法行爲に基く民法上の賠償責任　梅　謙次郎〔志林〕明四一　一〇　二
殖民地官吏の養成及任用　江木　翼〔國家〕明四一　二三　三
官吏の本質を略說す　筧　克彥〔新報〕明四一　一八　六
官吏と雇員　佐々木惣一〔辯協〕明四一　一三　一三
官吏服務紀律と公共小學校教員　〔新報〕明四一　一八　七
遺族扶助料を受くるの權利に關する疑義　島村他三郎〔志林〕明四一　一〇　八
官吏の忠實の義務　佐々木惣一〔國家〕明四一　二三　一〇
　　佐々木惣一〔新報〕明四一　一八　一二
懲戒裁判制度　高窪喜八郎〔辯協〕明四一　一二　一二八
官吏の俸給　馬場　鉄一〔明學〕明四一　一　一二四
官吏法の制度に就き　清水　澄〔志林〕明四二　一一　一
獨逸民法に於ける官吏の賠償義務　佐々木惣一〔國家〕明四二　一二　一一三
官吏の不法行爲に基く國家の責任　キノール教授〔國家〕明四二　一二　三
外國人を日本官吏に任するを得るや　美濃部達吉〔國家〕明四二　一二　一一
懲戒裁判制度　高窪喜八郎〔辯協〕明四二　一三　一二八
在韓文官の登用法論　羽山〔新聞〕明四三　一　六五七
文官任用令の解釋に就て　末松偕一郎〔國國〕大二　一　八
判事側より見たる文官任用令　〇△生〔新聞〕大二　一　八五一
官吏登用試驗と大學制度　織田　萬〔京法〕大三　九　五
官吏としての黨人　市村　光惠〔京法〕大三　九　一一
文官任用令問題　小川　平吉〔國國〕大三　二　一一
無辜者に對する國家の賠償問題　大場　茂馬〔新聞〕大三　一　九二四
近世の國家に於ける官僚の地位　村田岩次郎〔三學〕大四　九　四
官吏の任用及其地位保障　清水　澄〔法協〕大四　三三　五
印度文官任用試驗規則　〔國際〕大四　四一三　八
竄罪者に對する國家の賠償責任に就て　原　嘉道〔新聞〕大五　一　一〇八六

冤罪要償に法の存在を要せず　松本　重敏〔新聞〕大五　一　一二七
誤判と國家の賠償責任　大場　茂馬〔國家〕大五　四　九
大場茂馬氏の「誤判と國家の賠償責任論」は根底に誤あり　松本　重敏〔新聞〕大五　一　一二七八
出納官吏の賠償責任　田中　貢〔法政〕大七　一五　七八
官吏の待遇を論じて警察官の優遇問題に及ぶ　小川郷太郎〔法論〕大七　一　一四
憲法と文官任用令　松本　重敏〔新聞〕大七　一　一四八六
文官の任用制度に就て　馬場　鍈一〔國國〕大八　七　七
政府に對する保證金の返還請求權の性質及其處分に就て　作間　耕逸〔辯協〕大八　二三　二
官吏の待遇を論ず　小川郷太郎〔經叢〕大九　一〇　三
官吏組合權に關する佛國の新法案　末松嚴太郎〔法協〕大一〇　三九　二
無罪免訴の場合に於ける國家損害賠償論　三上　英雄〔新聞〕大一〇　一　一九〇一　一九〇二
清朝文官の任用について　清水　泰次〔國家〕大二　三七　九
官吏執務時間改正案の立消に就て　天　覓子〔新聞〕大一三　一　二三四九
文官任用の範圍　船田　中〔法政〕大一四　二三　九一一
傳令と躬行（行政整理より）も急務は行政官吏の心得の改良）　播磨　龍城〔新聞〕大一四　一　二三五四
判檢事對普通文官俸給令の制度比較論　荒木　櫻洲〔新聞〕大一四　一　二三九五
社會民主國家に於ける官吏法　杉村章三郎〔國家〕大一五　四〇　五一六
文官任用令改正と裁判所書記の境遇　豐島　武夫〔新聞〕大一五　一　二五〇六

生活

官吏生活の窮狀　三木　甫水〔統雜〕明三一　一　一四八
官吏の生活に就て　河合　利安〔統集〕明三九　一　二九九
官吏增俸の必要　瀧本　美夫〔日經〕明四一　四　三
官吏社會の困難時代　瀧　臺水〔東經〕明四一　五七　一四二七
官吏增俸に伴ふ吾人の希望　守屋源次郎〔日經〕明四二　六　七
判任官生活の實狀　汐見　三郎〔經叢〕大九　一〇　一
獨逸高等官の生活費　岡崎　文規〔經叢〕大三　一六　四
本邦に於ける官公吏敎員及會社員の生活費　榊原　平八〔統集〕大一四　一　一四二三　一四二四

キ部

【キイデルレン・ウエヒター】(Kiderlen-Waechter, 1852-1912)

キーデルレン・ウエヒテル　重德　來助〔外時〕大二　一七　一九八

【生絲（キイト）】

參照＝織物。蠶業。蠶絲。製絲。
一八八二年世界生絲出產統計　本野　一郎〔統集〕明一五　一　二三
本邦生絲一ヶ年の產額　今井藤四郎〔スタ〕明三三　一　一四八　二五二
生絲貿易と製絲業者　瀧　臺水〔東經〕明四一　五七　一四二三
本邦生絲業の生產組織　男全　萬治〔國經〕明四一　六　四一五
敢て生絲業者に共同販賣所の設置を勸告す　河東田經清〔東經〕明四三　六一　一五四〇
生絲相場の變動　飯島千代太〔日經〕明四四　一〇　二
生絲相場及其品質　飯島千代太〔日經〕明四五　一一　一
生絲の直輸出と商館　河田以備三〔日經〕明四五　一一　七
生絲相場管見　飯島千代太〔日經〕大元　一一　一〇
如是生絲の前途　河田以備三〔日經〕大元　一一　一〇　二一〇
生絲市場活躍の時期　飯島千代太〔日經〕大元　一一　六
生絲貿易と取引所　河田以備三〔日經〕大二　一一　四
生絲貿易の危機　飯島千代太〔日經〕大三　一五　一〇
生絲市場開戰後の失敗　飯島千代太〔日經〕大四　一七　二
生糸金融に就て　內藤　章〔國經〕大五　二一　六
我が生絲市場に對する希望　上田貞次郎〔財經〕大五　三　七
本邦生絲の生產　丹治　三郎〔統集〕大五　一　四四二六　二八
群馬縣生絲販賣組合の研究　上田貞次郎　緒方清〔國經〕大七　二五　四
我が生絲貿易の前途如何　堀越善重郎〔財經〕大八　六　八
生絲貿易の前途　堀越善重郎〔財經〕大一〇　八　一〇
生絲輸入稅撤廢問題　神戸　正雄〔時經〕大一二　一　九
議論の餘地なき生絲輸出港問題　池田　龍藏〔エコ〕大一二　一　一七
生絲輸出港問題と農家の立場　河田　嗣郎〔エコ〕大一二　一　一八
生絲金融の諸問題　太田　義繁〔銀研〕大一三　六　四
生絲問屋金融制度の改善傾向　高山　武雄〔銀研〕大一三　六　六
生糸融資拒絕問題　池田　龍藏〔エコ〕大一三　二　七
生糸取引改善と共同市場問題　一戸　正侯〔エコ〕大一三　二　九
生絲金融の問題　神戸　正雄〔時經〕大一三　一　二二
東西生絲市場優劣論　河上　福平〔商經〕大一三　一　三三
我國の生絲貿易と其將來　大平　賴母〔商經〕大一三　一　三六
生絲輸出港の分散制に就て　高山　武雄〔商事〕大一四　五　一
生絲業者の金融實務　須戸　勇〔商事〕大一四　五　一一二
生絲の格付と清算取引の標準格　井阪　孝〔取引〕大一四　一　一

神戸生絲金融問題管見　高山　武雄〔銀叢〕大一四　年四　卷一　號二
生絲清算市場の缺陷　河杉　信勇〔取引〕大一四　一　二
輸出生絲市場論　太田卯之助〔商事〕大一四　五　二
生絲相場の騰落　井坂　孝六〔取引〕大一四　一　六
米國に於ける生絲賣買取引規定　頓戸　勇〔商事〕大一四　六　一

【ギイルケ】(Otto Friedrich von Gierke, 1841-1921)

ギルケー教授憲法論　小倉　和市〔三學〕明四三　三　五
雇傭契約發展の史的考察（ギールケの「雇傭契約の起原」に就て）　末川　博〔法叢〕大一〇　五　五
ギールケ教授の永逝を聞きて　牧野　英一〔志林〕大一一　二四　一
Otto Fr. von Gierke に就て　木村　龜二〔國家〕大一一　三六　一—二
ギールケに於ける有機體の概念　船田　享二〔法政〕大一三　二一　一—五
ギールケの有機體及び社會法の概念（グルキッチ）　能勢　克男〔同論〕大一三　一　一三
Gierke 目錄について　岩田　新〔商研〕大一四　五　二

【キインス】(John Maynard Keynes, 1883-)

キインスの貨幣改革論　木村　重夫〔商濟〕大一三　三　一
キインスの貨幣改革論を讀みて　平野　清〔銀研〕大一三　七　三
再びキインズの所謂 Managed currency に就て　平野　清〔商經〕大一四　一　三六
キインスの「幣制改革論」　大内　兵衛〔原パ〕大一四　一　一八

【歸化】參照＝外國人。

歸化學（講演）　三崎龜三助〔國家〕明三一　二　二一
英國人は日本に歸化することを得ざるか　松井慶四郎〔法協〕明四三　九　一
歸化を論ず　卜部喜太郎〔新報〕明三八　五　五三
米國歸化法に於ける日本人の排斥　山田福三郎〔明法〕明三五　一　三二
米國歸化法に就て　山田　三良〔國家〕明四一　二三　三
米國の新舊歸化法　川崎巳之太郎〔國家〕明四一　二三　七
川崎氏の米國新舊歸化法に就て　〔新聞〕明四一　一　二〇〇八
山田博士の答論に就て　山田　三良〔新聞〕明四一　一　五一三
日本人歸化權を論じて條約締結に及ぶ　〔國家〕明四一　二三　八
敵國民の歸化　川崎巳之太郎〔新聞〕明四一　一　五四〇
米田　實〔國際〕明四三　八　八
牧野　英一〔國際〕大五　一四　五

【機械】

大工業と小工業との競爭を論じて小發動機の經濟上に於ける効力に及ぶ　高野岩三郎〔國家〕明三九　年　一〇　卷　二二　號
機械を論ず　財部　靜治〔京法〕明四〇　二　四—六
器械と失職との關係を論ず　佐々木勝三郎〔日經〕大三　一五　六
機械と道德　植原悅二郎〔日經〕大三　一六　四
電氣機械製造業の發達　關口　眞靜〔洋經〕大五　一　七四六
機械率配賦法に於ける補充率に就て　中西　寅雄〔國家〕大一〇　三五　五
リカルドオの機械論　小泉　信三〔三學〕大一〇　一五　三
機械と勞賃との相互關係に就てのマルクスの見解　山本　勝市〔經叢〕大一三　一九　四
農業生產の機械化と其條件　河田　嗣郎〔エコ〕大一三　二　一〇
機械生產の創生と其必要性に關するシスモンディ說　猪谷　善一〔商研〕大一四　五　一

【議會】參照＝貴族院。憲法。國會議員。衆議院。政治。選擧法。比例代表。

ベンサム氏國會統御術（譯）　坂谷　芳郎〔國家〕明二一　二一—二一〇
衆議院は選擧人の全體を代表せず　本野　一郎〔國家〕明一三　四　四四
議院建築意見（講演）　金子堅太郎〔國家〕明二四　五　五一—五一〇
帝國議會は立法の府なり　花井　卓藏〔新報〕明二五　二　一三
第七回臨時帝國議會　佐脇　安文〔國家〕明二七　八　九四
歐洲古代の國民總會　美濃部達吉〔新報〕明三六　一三　一
第十九世紀に於ける英國國會の發達　美濃部達吉〔法政〕明三六　二　二—四
帝國議會の性質　井上　密〔法政〕明三六　七　六
社會代表　〔明法〕明三六　一　五三
代表論　穗積　八束〔新報〕明三六　一三　二
帝國議會の國法上の性質　横田千之助〔辯協〕明三六　七　六三
議會の國法上の性質に關する一新說　美濃部達吉〔法政〕明三六　七　六三　一二　八
議會は國民の代表機關なり　美濃部達吉〔國家〕明三七　一八　二〇〇
代人關係と代表關係との區別　美濃部達吉〔明學〕明三八　八八
英國代議制度の發達　穗積　八束〔志林〕明三九　八　一
歐米各國の議院に就て　美濃部達吉〔國家〕明四一　二三　七
國會と人民代表　林田龜太郎〔東經〕明四二　五九　四八〇
社會道德と議會政治　上杉　愼吉〔志林〕明四四　一三　二
立憲君主國に於ける議會の地位　莊田　秋村〔東經〕明四四　一　一六二五
第三十一議會　村田岩次郎〔三學〕大二　七　三
第三十一議會の重要問題　本多　精一〔財經〕大三　一　二
法理上より觀たる第二臨時　鵜澤　總明〔國國〕大三　二　三

議會
第三十三議會小觀　植原悅二郎〔國國〕大三　二
民意代表　吉川　義章〔國國〕大三　二
軍國議會　上杉　愼吉〔法協〕大三　三
帝國議會に就て　今村力三郎〔辯協〕大三　一八
民意論　清水　澄〔新聞〕大四　一
國會と憲法　上杉　愼吉〔法協〕大四　三
國民意思及び民意代表　上杉　愼吉〔新報〕大四　二五
人民の代表に就て　稻田周之助〔新報〕大四　二五
帝國議會に就て　佐藤丑次郎〔京法〕大四　一〇
ハッチエック教授の獨逸帝國議會論　清水　澄〔新聞〕大四　一
露國の議會　村田岩次郎〔三學〕大五　一〇
議會の懲罰問題　有川　治助〔國家〕大五　三〇
國會開設勅諭煥發の事情　高野　金重〔辯協〕大六　二
第三十九議會に於ける感想　市村　光惠〔法論〕大六　一
英帝國議會の進展　小川郷太郎〔法論〕大六　一
平民政治家の議會觀　占部百太郎〔三學〕大六　一一
國會論　布施　辰治〔新聞〕大六　一
第四十議會觀　松本　重敏〔新聞〕大六　一
立憲政體に於ける帝國議會と政府との關係　不破　清警〔新聞〕大七　一
現代議院政治の試金石　松本　重敏〔新聞〕大七　一
大山　郁夫〔我等〕大八　一
呪はれたる第四十三議會　大山　郁夫〔我等〕大九　二
混合代表に就きて　小栗栖國道〔法叢〕大一〇　五
英國國會制度の起源　占部百太郎〔三學〕大一〇　一五
英國會と種族會　占部百太郎〔法研〕大一一　一
英國會の眞意義　占部百太郎〔法研〕大一一　一
帝國議會の規制　稻田周之助〔新報〕大一一　三
ノルマン國會　占部百太郎〔法研〕大一一　一
ルソーとコールの議會否認論　今中　次麿〔我等〕大一一　四
議會と政府　不破　清警〔新聞〕大一一　一
帝國議會批判　稻田周之助〔新報〕大一一　三
帝國議會史前記　尾佐竹　猛〔法治〕大一一　一
アングロ・サクソン國會　占部百太郎〔法研〕大一一　一
內閣對議會關係の考察　高木　信威〔新報〕大一二　三
イルバート「英國議會政治」（譯）　小山　基一〔法政〕大一二　一〇
議會と國民の實生活　成瀨　義春〔財經〕大一三　一〇
佛國の新傾向と通級議會　廣瀨　哲士〔外時〕大一三　二八
議會制度の不信用と其改革　板倉　卓造〔法研〕大一三　三
議會と大衆運動　エンゲルス〔マル〕大一三　一
職能代表と國會の組織　小野塚喜平次〔國家〕大一四　二九
國會及び政黨の不信用　稻田周之助〔新報〕大一五　二六
第五十一議會の趨勢觀　播磨　龍城〔新聞〕大一五　一
議會の組織　參照＝貴族院。衆議院。選擧法。

議院法第一五條の解釋　副嶋　義一〔明學〕明三五　一　三八
二院制度論　美濃部達吉〔國家〕明三七　八
二院制度と一院制度と孰れが立憲國の法制に適すべきや其根據如何　吉野　作造〔國家〕明三八　一九　三
議會の二院制論及其根據の概要　鵜澤　總明〔國家〕明三九　二〇　一
議會兩院制論　佐藤丑次郎〔明學〕明三九　一　一〇四　一〇七
上院對下院　水野錬太郎〔國家〕明四一　二三　二
衆議院資格問題　花井　卓藏〔新聞〕明四二　一　五五三
上下兩院の權衡　清水　澄〔新報〕明四五　三三　七
貴衆兩院論　村田岩次郎〔三學〕大五　一〇　三
英國の衆議院　伊藤　龜雄〔外時〕大一三　二八七
第二院の問題　佐々木惣一〔法叢〕大一四　一四三　四一二　四一〇　四一一　二
何を兩院制度の精神と謂ふか　稻田周之助〔新報〕大一四　三五　二
議會の會議
議長の表決權を論ず　林田龜太郎〔國家〕明二二　三　二四二　二七
帝國議會議事規則革案一班（講演）　有賀　長文〔國家〕明二三　四　四五
契約と合議との區別　穗積　八束〔新報〕明三〇　七　七
多數決　戶水　寬人〔法協〕明三二　一七　三
兩院協議會に關する法律上の疑義　小原　新三〔國家〕明三三　一三　一四六
選擧法に所謂請負の意義　弦間照太郎〔辯協〕明三五　六　五七
貴衆兩院の協議會　丸山　長渡〔新報〕明三五　一三　三
所謂解散の法理を難す　家本　生〔新聞〕明三六　一　一七五
多數決　上杉　愼吉〔法協〕明三七　二三　一
衆議院の解散を論ず　清水　澄〔新報〕明三七　一四　一
議會の停會とは何ぞや　清水　澄〔新報〕明三七　一四　五
解散後の議會は如何なる議會なるや
議院規則に關する疑義一則　清水　澄〔志林〕明三七　六　五六
議事の報告　小原　新三〔法政〕明三八　九　五
議事規則と議事妨害　佐々木惣一〔法協〕大二　三　四一五
臨時議會の召集に就て　上杉　愼吉〔新報〕大三　二四　三
帝國議會の召集開會閉會停會休會及衆議院の解散　馬場　鍈一〔新報〕大三　二四　七
議會無討論の原因　上杉　愼吉〔國家〕大三　二八　一〇
衆議院の解散に就て　三浦鐵太郎〔洋經〕大三　一　六六五
政府の提出案と調査書　清水　澄〔新報〕大四　二五　二
議會の會議日數の繼續委員制　工藤　重義〔國家〕大六　三二　一
解散　工藤　重義〔國家〕大六　三二　二
第三五回議會解散の眞相　上杉　愼吉〔國國〕大六　三二　三
議會解散の一批判　植原悅二郎〔國國〕大四　三　二
帝國議會停會の要件　大山　郁夫〔我等〕大九　二　四
停會の先例　稻田周之助〔新報〕大一五　三六　五
花井　卓藏〔新報〕大一五　三六　五
議會の權限

總決算に對する帝國議會審査權の範圍　豫算議定額の範圍に就て　軍備問題に對する議員の質問に對し政府は答辯の責務を有するや　議會の請願書受領及送附の權　帝國議會の決算審査權　立法權と豫算議定權　議會の與ふべき事後承諾の不成立　議會の質問權　佛國に於ける議會の豫算發案權濫用に就て　帝國議會と財政監督權　議會の質問權　議會の質問權に關する列國制度の比較　岩波一郎〔新報〕明二七年 四巻 四五號　加來竹次郎〔法政〕明三〇 一 七　山谷道人〔新報〕明三一 八 八九　美濃部達吉〔國家〕明三九 二〇 四—六　副島義一〔明法〕明三五 一 六—九　穗積八束〔新報〕明四〇 一七 二

【機會均等】

機會均一とは何ぞや　機會均等主義に就て　有賀長雄〔外時〕明四〇 一〇 一二　菊池駒次〔志林〕明四一 一一 一二　美濃部達吉〔國家〕大六 六 三一 一—四　清水澄〔志林〕明四一 一〇 四　ラバンド〔國家〕明四一 二三 九　フエルリー〔日經〕明四一 五 六　稻田周之助〔新報〕大五 二六 八　美濃部達吉〔國家〕大五 三〇 三　滿洲に於ける機會均等問題に就て　權力平均と機會均等　經濟上にも門戸開放機會均等　支那外交規範「機會均等」主義と「廿一箇條」の考察　門戸開放機會均等論　鹽澤昌貞〔外時〕明四一 一三 二　寺尾亨〔法協〕明四四 二九 九　本多精一〔財經〕大八 六 三　塚本毅〔外時〕大一三 三七 四四三　丸山嘉八郎〔外時〕大一二 [illegible]

【期間】

期間の更新　相當なる期間の指定　放野充安〔新聞〕大五 一 一二五　岡松參太郎〔新報〕大一〇 三一 一

【毀棄の罪】

我刑法の毀棄の罪及其詳論　刑法二六一條の解釋に關し文展墨塗事件の判決を評論す　器物毀棄罪を論す　毀棄罪の沿革　大場茂馬〔新報〕明四一 一九 八　西村勘之助〔新聞〕明四五 一 七七　泉二新熊〔法政〕大六 一四 五　岡田朝太郎〔法治〕大一二 二 一〇 四

【機業】織物を見よ

【企業】參照＝カルテル。官業。金融。經營。事業。シンジケート。トラスト。

企業心理論　福田德三〔內外〕明三六 二 二　企業形態の變遷　福田德三〔法政〕明三六 七 [illegible]　企業倫理論　福田德三〔內外〕明三八 四 四　企業の意義　藤本幸太郎〔國經〕明三九 一 一　英國に於ける企業市營の狀況　坂西由藏〔國經〕明三九 一 四　企業聯合論　河津遜〔國家〕明四四 [illegible]　滿韓の企業　小澤愛次郎〔明學〕明四〇 一 [illegible]　企業家組合の起因及保護的關稅に對する其關係　氣賀勘重〔國經〕明四〇 三 四—五　米國の金融と事業　山內正瞭〔國家〕明四〇 二 二　企業聯合及び合同の輸出奬勵案　關一〔國經〕明四一 四 五　企業家の社會的設備　關一〔國經〕明四四 七 二—三　經營と企業の意義に就て　關一〔國經〕明四三 九 四　企業及經營の意義に關する疑問　上田貞次郎〔國經〕明四三 九 五　企業界と公債借換　黑澤龍濱〔東經〕明四三 六一 一五三九　企業と經營　坂西由藏〔國經〕明四四 一〇 一　再び企業と經營との意義に就て　關一〔國經〕明四四 一〇 二　企業の聯合及合同と勞働者の地位　氣賀勘重〔國經〕明四四 一〇 二　企業同盟に關する注目すべき新立法　松岡均平〔國家〕明四四 二五 三　企業資金の財源　山室宗文〔國家〕明四五 二六 三　獨占企業の法律關係を論ず　美濃部達吉〔法協〕明四五 三〇 三—四　企業合同の經濟上に及ぼす影響を論ず　海老原竹之助〔國經〕大元 一二 一—六　企業家破綻の原因　黑澤和雄〔東經〕明四五 六六 一六六六　藝術の企業化に就て　岡田重次〔國經〕大元 一三 三　支那に於ける企業　米澤清治〔國家〕大元 二六 一一　南洋貿易及企業　松尾音次郎〔國國〕大二 一 七　中世企業史に關する研究　阿部秀助〔三學〕大三 八 一　大企業に於ける兼業の發達　氣賀勘重〔三學〕大三 八 二—二一　企業經營法と投機　宍道虎吉〔日經〕大三 一五 三　民族の企業化　阿部秀助〔三學〕大三 八 四—五　獨逸に於ける企業聯合の近況　松崎壽〔國家〕大三 二八 七　企業の危險と犯罪　市村富久〔評論〕大三 二 一九　興業界發展の根本的方策　二宮基成〔日經〕大三 一四 九　企業者の本質　關一〔國經〕大三 一六 五

大企業と經濟調査機關　〔資料〕大四一三
工的企業に於ける株式資本と株式發行相場　高垣寅次郎〔國經〕大四一九二一六
企業合同に對する米國の新立法　松崎壽〔志林〕大四一七七一〇
企業の安全と準備金　渡邊鐵藏〔法協〕大四三三九
企業の流動力並に我國大銀行の實際研究　渡邊鐵藏〔國家〕大四二九一一
我事業界の缺陷と其救濟問題　湯川宗戒〔國國〕大五四七
在支企業論　木村增太郎〔亞經〕大六一一
現代事業と人物の研究　南川〔法論〕大六一二一三
企業財產評價の原則を論ず　渡邊鐵藏〔新報〕大六二七七
企業財產の組織　渡邊鐵藏〔國家〕大六三三二一三七
南洋企業の前途　原岱江〔東經〕大六七五一八九七
銀行と企業金融　富岡久次郎〔國家〕大七三三二一三
近世經濟史上に於ける企業家の地位　阿部秀助〔三學〕大七三五一一〇
獨逸に於ける强制的企業合同　河合榮治郎〔國家〕大七三三六
最近企業統計の解剖　中西次郎〔國家〕大八三三四
現時の企業狀態と限界生產力說　山口正太郎〔國經〕大八二七六
企業と原價計算　吉田良三〔國經〕大九二八二
社會主義者と企業者の職分　上田貞次郎〔國經〕大一〇三〇一
支那將來の企業と勞働問題　前田幸太郎〔亞經〕大一〇五五
商工企業大經營の現狀と其經濟　高島佐一郎〔國經〕大一〇三一二一三
事業資金と資金銀行の發達　泉俊秀〔銀研〕大一〇一三
事業濫興と財界反動の善後策　善生永助〔財經〕大一〇八四
企業聯合の促進を高唱す　諸井四郎〔財經〕大一〇八四
企業組織の改善問題　石塚英藏〔財經〕大一〇八四
民衆事業と官僚事業　清水文之輔〔東經〕大一〇八三二〇八六
日支合辦事業經營の要諦　小林陽之助〔財經〕大一〇八一
企業の收益力を論ず　中西寅雄〔國家〕大一一三六二一四
資本主義の成熟と企業者の地位　增井光藏〔國經〕大一一三三二
企業統計學に就て　中瀨勝太郎〔會計〕大一一一〇四
企業評價論　中西寅雄〔經論〕大一一一二
事業整理の要諦　池田龍藏〔エコ〕大一二一八
企業豫算論より觀たる現物出資の一面　中村茂男〔會計〕大一二三四一五
企業財產の評價及會計損益　中村茂男〔會計〕大一三一五一
企業豫算管理と銀行業　管谷重平〔銀叢〕大一三三四
企業としての農業　大內武次〔經商〕大一三三四一五
企業の發展と有價證券　福田敬太郎〔國經〕大一三三七五
企業に於ける危險負擔の數理的解說　津田武二〔國經〕大一三三六
事業經營の二大脅威　渡邊廣重〔エコ〕大一三一三二一八
リイビッヒの法則と企業資產の釣合　中村茂男〔會計〕大一四一七二
日支關係を中心として見たる支那企業並勞働問題　前田幸太郎〔亞經〕大一四九三
金融と事業　松崎〔金融〕大二五
企業能率の測定　西尾清一〔會計〕大一四一六三一六
職業的企業家の成立と資本家との鬪爭　向井鹿松〔三學〕大一四一九三
事業界の不安と金融界の混亂　越戸佳三〔銀叢〕大一四五六
市町村の混合企業に就て　小山田小七〔經叢〕大一四二一六
企業資金の供給と金融機關　宗像久敬〔金融〕大一四二八
本邦企業集權の現勢　〔資料〕大一四一一四四八
如何なる企業を國營とするか　永富守之助〔エコ〕大一四三一四
內地人の經營にかゝる在支企業を撤退せよ　山本顯彌太〔エコ〕大一四三一五
對支企業家のとるべき態度　大倉喜八郎〔エコ〕大一四三一七
經濟單位としての企業　林健二〔國經〕大一五四〇一
ステインネス企業團の蹉跌　西尾清一〔イン〕大一五三一
近代產業秩序の下における企業原理　油木豐吉〔經論〕大一五四三
企業金融機關の新陣容　後藤登喜男〔イン〕大一五三三一五
企業經營者の服すべき道德的戒律の見地より科學的經營法を批判す　村本福松〔商經〕大一五一四一

【飢饉】

饑饉は衞生に大關係あり　杉亨二〔スタ〕明二一一二二
饑饉饌の豫備　杉亨二〔スタ〕明二一一二六
露國の飢饉　伊東祐穀〔統集〕明二五一出一三〇 歸一三二
北支那の飢饉　戶田海市〔經叢〕大九一一五
支那饑饉の慘狀と救濟策　善生永助〔財經〕大九七一一
ロシヤ大飢饉と其救濟運動　森戶辰男〔原バ〕大一三一七
飢饉の話　佐野學〔我等〕大一一四一一

【菊池武夫】

故菊池博士と法學教育　石山彌平〔辯協〕明四五一六一六六

【期限】

條件及期限　志田鉀太郎〔法政〕明三七八三一五
期限附法律行爲の性質　富井政章〔法協〕明四二二七一
期限に就て　橫田秀雄〔國國〕大九八一

【奇災保險】 傷害保險を見よ

【技術】 參照＝能率。

エコノミックスとテクニックス　金井　延〔新報〕明三五 年 三 卷 五 號
技術と經濟　神戸　正雄〔國家〕明三五　一六　一八三
工業の進歩及技術改良の前提たるべき職工の技能啓發に就きて　坂田　貞一〔日經〕明四一　二　七
經濟と技術　增井　光藏〔國經〕大四　一八　一一四
經濟と技術　舞出長五郎〔國家〕大六　三一　一一
近代產業組織と技術者の地位　出井　盛之〔我等〕大一一　四　八
「工」及び「工的技術」　田崎　仁義〔長彙〕大一四　五　二

【僞證の罪】

刑事に關する僞證罪の性質　淺野豐三郎〔明法〕明三四　一　二五
民事證人の僞證罪　戸水　寛人〔法協〕明二一　六　五三
僞證囑託罪に就て　渡邊　暢〔新聞〕明三六　一　一三八
實體事實に偶中する僞證罪を論ず　岩味　隆次〔新聞〕明三七　一　一七
僞證囑託罪に關する大審院の判例を讀む　横山勝太郎〔辯協〕明四一　一　二九
僞證罪を論ず　江木　衷〔辯協〕大一一　二六　八九

【雉本朗造】

故雉本博士の回想　牧野　英一〔志林〕大一一　二四　五

【汽船】 參照＝海運。商船。造船。

各國主要汽船會社財政一覽表　渡邊水太郎〔國經〕明三九　一　一
キュナード汽船會社の現況　渡邊水太郎〔國經〕明三九　一　四
モルガン汽船合同の過去及現在　渡邊水太郎〔國經〕明四〇　二　四
最近十箇年汽船業概觀　渡邊水太郎〔國經〕明四三　八　一一二
外國汽船輸入に就て　倉田　庫太〔國經〕明四四　一〇　三四
再び外國汽船の輸入に就て　倉田　庫太〔國經〕明四四　一一　一
汽船の發達　小林俊太郎〔法論〕大七　一　八

【起訴】 公訴を見よ

【貴族】 參照＝華族。

貴族院の研究　松本潤一郎〔日社〕大八 年 卷 四—五 號
貴族小史　德川　喜翰〔法叢〕大一一　六　四—六
古典的貴族主義と近代的貴族主義の崩壞　長谷川　萬次郎〔我等〕大一一　五　一〇
私有財產制と貴族市民及勞働階級　長谷川　萬次郎〔我等〕大一四　七　四

【貴族院】 參照＝議會。

貴族院の組織を論ず　清水　澄〔國家〕明三七　一八　二〇七
貴族院の獨立　穗積　八束〔國家〕明三八　一九　一
貴族院論　稻田周之助〔新報〕明四一　一八　八
貴族院の選擧規則改正問題　美濃部達吉〔國家〕明四二　二三　三
昨年來の英國上院の憲法問題　穗積　八束〔新報〕明四三　二〇　二
英國上院の豫算拒否權　上杉　愼吉〔新報〕明四三　二〇　三
英國上院問題　末廣　重雄〔京法〕明四三　五　四
英國の貴族院問題　林　毅陸〔三學〕明四三　四　三
輓近の英國政界に於ける上院問題　小野塚喜平次〔法協〕明四三　二八　八
英國の上院問題　小野塚喜平次〔國家〕明四三　二四　八
貴族院の將來　富井　政章〔國家〕明四三　二四　一
上院と豫算否決權　莊田　秋村〔東經〕明四三　六一　一五三五
伯子男爵議員の選擧　上杉　愼吉〔新報〕明四四　二一　四
貴族院の職分と構成　上杉　愼吉〔法協〕大二　三一　六
貴族院論　佐藤丑次郎〔京法〕大五　一一　六—七
上院論　水野錬太郎〔國家〕大五　三〇　八—一〇
英國貴族院の改造　占部百太郎〔三學〕大八　一三　九—一〇
貴族院の組織につき考慮すべき條件　清水　澄〔新報〕大一一　三三　一
貴族院改造論　山田　保〔辯協〕大一三　二八　一—二
貴族院論　市村　光惠〔法叢〕大一三　三　二—三
各國憲法に於ける上院の地位　山崎又次郎〔法研〕大一三　三　一
貴族院伯子男爵議員選擧規則　稻田周之助〔新報〕大一三　二四　八
貴族院令の改正增補　稻田周之助〔新報〕大一三　二四　八
貴族院改造問題　稻田周之助〔新報〕大一三　二四　一
貴族院改革問題　占部百太郎〔財經〕大一三　一一　二
貴族院改造私見　德川　義親〔新聞〕大一三　一　二五二
貴族院自體の覺醒を待つ　森口　繁治〔新聞〕大一三　一　二七七
貴族院改革の限度　上杉　愼吉〔國家〕大一四　二七　一
貴族院員の互選方法に就て　森口　繁治〔法叢〕大一四　一三　二
貴族院令改正案の修正權　稻田周之助〔新報〕大一四　二五　五
貴族院改革の可能性　稻田周之助〔新報〕大一四　二五　三
見過し難き多額互選規則の缺陷と多額議員選擧に於ける現內閣及樞府の責任　原　夫治郎〔新聞〕大一四　一　二四五六

貴族院改革と勞資問題　五來　欣造〔社政〕大一四年一卷五號
貴族院改革私見　齋藤　隆治〔新聞〕大一四　一—二三六四
貴族院の改革　石井　謹吾〔新聞〕大一四　一—二三七五
貴族院改善私案要綱　加藤順次郎〔國家〕大一五　四〇　三

【喜多梅二郎】

喜多梅二郎君を悼む　瀧川　幸辰〔法叢〕大八　二　五

【寄託】

參照＝倉庫營業。

無賃委託に約因なきや　高橋　捨六〔法協〕明四二　六　四六
無賃の受託者は委託物件に就き特別財産權を有するや否や　富岡恒二郎〔法協〕明四二　六　四七
高價品の意義に就きて　花岡　敬夫〔辯協〕明三九　一〇　九五
物の保管の意義　吾孫子　勝〔志林〕明四〇　九　一
不可抗力の意義（商法第三五四條第一項の解釋）　松本　烝治〔評論〕大九　一　一
物上保證委託契約論　齋藤　巖〔新聞〕大三　一　九三〇
委託玉の成否と其の報告　小山正之助〔新聞〕大六　一—一三五
解合の法性及解合の委託者に及ぼす效力　井上豐太郎〔新聞〕大七　一—一三六四
委託玉の成否　井上豐太郎〔辯協〕大七　三　一〇
委託者の同一に關する錯誤受寄者の賠償義務と所有者に非ざる寄託者の請求　井上豐太郎〔新聞〕大八　一—一五一九
寄託物返還請求權と消滅時效　岡村　玄治〔法記〕大九　三〇　五
消費寄託論　横田　俊夫〔朝司〕大一一　二　一
　吾孫子　勝〔志林〕大一一　二五　四一九

【キッチン】(Frederick Harcourt Kitchin, 1867-)

キッチン「火災保險の原理」（譯）　松本　高〔保評〕明四五　大二　六　三一

【ギディングス】(Franklin Henry Giddings, 1855-)

ギディングス「近世社會學論」（譯）　若宮卯之助〔東經〕明四一　五八　三四九
ギディングスの歷史學說　野村兼太郎〔三學〕大一〇　一五　三一五
ギディングスの觀たる社會發達の方面　小松堅太郎〔國經〕大一三　二四　四
ギディングスの社會心の問題　不破　祐俊〔法治〕大一三　三　一—五
ギディングスの社會哲學に對する二三の疑問　岩崎　卯一〔社政〕大一四　一　四六一
ギディングス門下の社會學　岩崎　卯一〔社政〕大一五　一　四二六

徒達

【キトソン】(Arthur Kitson, 1860-)

貨幣問題に關するキトソン並にヴイザアスの論爭に就て　平野　清〔國經〕大一〇　三　六

【絹】

參照＝織物。蠶業。蠶絲。

國產として本邦絹工業　飯島　反鳥〔日經〕明四四　八　五一九
絹業試驗場設置論　岡部菊太郎〔東經〕明四四　六四　一六一三
本邦絹業の勃敵　岡部菊太郎〔東經〕明四四　六四　一六一八
本邦絹業の發達策　岡部菊太郎〔東經〕明四五　六五　一六二〇、一六三一
絹布工場の設備及經營　本庄榮治郎〔京法〕大三　九　一三
戰中戰後の米國絹業界と我蠶絲業　吉川　興山〔洋經〕大五　一　七三九
輸出絹業開發諸案　岡部菊太郎〔洋經〕大八　一　八六〇、八六一
絹に關する外國語　財部　靜治〔經叢〕大九　一〇　二
輸出絹業革新論　岡野菊太郎〔東經〕大九　八一　二〇四八、二〇四九
人絹の發達と其對策　深澤甲子男〔財經〕大一三　一一　二〇
英國の絹物關稅　神戶　正雄〔時經〕大一四　一　三五

【義務】

權利及び義務を見よ

【キャナン】(Edwin Cannan, 1861-)

カンナン教授の人口論　伊藤　眞雄〔商經〕大五　一　二
キャナンの富の概念に就きて　石川　興二〔經叢〕大九　一〇　一—三
全部效用と消費者餘剩（キャナン）　古屋　美貞〔同論〕大一三　一　一四

【キュウノー】(Heinrich Cunow, 1862-)

エアフルト綱領改正案に對するキューノーの批評　竹內　德治〔國家〕大一〇　三五　三

【救濟】

參照＝救貧。共濟組合。

救濟及其統計の概況　花房直三郎〔統集〕大五　一　四二九
救濟事業の調査に就て　神戶　正雄〔經叢〕大七　七　二
救濟調査會に就て　櫛田　民藏〔經叢〕大七　七　二
救濟事業の動機と其範圍　生江　孝之〔法政〕大七　一五　一〇
救濟事業の研究　生江　孝之〔法政〕大八　一六　一一—一五
社會的救濟と善導　長尾　景德〔臺法〕大八　一三　二
救濟事業調査會の設置と我が社會政策　森戶　辰男〔國家〕大七　三一　八

明代の救濟制度　清水　泰次〔經叢〕大一〇年三卷四號
救濟事業調査會の重要任務　高野岩三郎〔國家〕大七三一九

【玖馬】

玖馬、ポルトリコ、比律賓の殖民　東　讓三郎〔國際〕昭五一〇六—七

【救貧】

參照＝貧困。貧民。

貧民救濟策一斑附貧困豫防法　濱田健次郎〔國家〕明一三四四三
本邦窮民救助法の現況　早川千吉郎〔國家〕明二六七
救貧論　財部　靜治〔京法〕明元一
エルバーフエルト制度　神山　政良〔國家〕明四四三三
救貧恤窮事業に就て　黑澤　龍濱〔東經〕明四四二六〇一四九九
救貧法調査委員會報告と失業問題　堀江　歸一〔三學〕明四三四一二
窮民救助制の方針　桑田　熊藏〔國家〕明四三二四一
萬國人道會議所觀竝兒童救護一斑　眞木　喬〔刑評〕明四四三八
エルベルフエルド救貧制度　堀江　歸一〔三學〕明四五六一
戰亂と英國の救貧率　〔國經〕大四一八一
印度村落團體に於ける救貧制度　德重　悟介〔亞經〕大六一一
扶養義務か救貧籍か　財部　靜治〔經叢〕大七七一
國事救貧の原理　財部　靜治〔經叢〕大七七四—六
エルベルフエルト式救貧制度を論ず　平竹　辰〔社政〕大一〇一九
社會政策より見たる施療制度考　早田　正雄〔法政〕大三二〇五—七
救貧策の前途　賀川　豐彥〔辯協〕大一三二八五—七
救貧立法促進感　高山　和雄〔辯協〕大一四二九三
神社救貧制度の一例　黑正　嚴〔經叢〕大一五三二

【給料】

參照＝所得。賃銀。

市町村立小學校教員俸給の現狀　巖水　惠〔統集〕明三九一三〇三
給料支拂の根本方法　戶田　海市〔京法〕明四三五九
女子の給料勞賃に就きて　河田　嗣郎〔日經〕明四三七九
給料論　山崎　繁樹〔三學〕大六一七
小學校教員俸給の國庫支辨　澤柳政太郎〔財經〕大六四八
增俸の研究　小川鄕太郎〔經叢〕大一〇一三六
俸給及賃銀制度の改善に就て　堀　英文〔國家〕大一〇三五一一
婦人の報酬　芳賀　榮造〔社政〕大一〇一七
俸給賃銀並に物價調査の規準表に就て　堀　英文〔國家〕大一一年三六卷九號

【教育】

參照＝社會教育。商業教育。少年文化。政治教育。農業教育。勞働者教育。

學校生徒の近視眼　橫山　雅男〔スタ〕明一九一五
學齡者の成長　吳　秀三〔スタ〕明二〇一二〇
小學教育に關する意見　渡邊　洪基〔國家〕明二一二一〇
教育と犯罪との關係　河合　利安〔スタ〕明二一一二六
教育スタチスチックに就て　橫山　雅男〔スタ〕明二三一三五
本邦教育の分配　橫山　雅男〔スタ〕明二三一四六
教育統計論　臼井喜之作〔統雜〕明二五一七四
徵兵と學生の關係（講演）　曾我　祐準〔國家〕明二六七七
市立番町小學校生徒職業得點別　橫山　雅男〔統雜〕明二七一九三
本邦初等教育の狀況　岩井德次郎〔統雜〕明二七一一〇〇
統計師範學校及一般の統計研究　吳　文聰〔統集〕明二七一一三一
教育と犯罪との關係　和田千松郎〔統雜〕明二八一一〇
市町村立小學校正教員の狀況　岩井德次郎〔統雜〕明二八一一三
小學女生徒の健康の有樣　寺田　勇吉〔統雜〕明二九一一九
小學校教員の健康の狀態　臼井喜之作〔統雜〕明二九一三五
臺灣總督府直轄學校生徒父兄職業及年齡別　堀內　八郎〔統雜〕明三〇一三九
學生生徒健康上の狀況　寺田　勇吉〔統雜〕明三〇一一三三
教育統計一斑　世良　太一〔統雜〕明三一一一四四
學校兒童發育取調報告　三島　通良〔統雜〕明三一一一四八
市民の普通教育　橫山　雅男〔統集〕明三一一二〇一
國際學藝教育協會　有賀　長雄〔外時〕明三三三二九
教育統計大意　寺田　勇吉〔統雜〕明三三一一六二
教育家と統計の關係　花房直三郎〔統雜〕明三四一一八六
大學制度管見　高根　義人〔內外〕明三五一五
本邦學齡兒童の歩合　岩井德次郎〔統雜〕明三六一二〇五
半途退學者に就て　石川　帷安〔統雜〕明三七一二二二
統計と教育　橫山　雅男〔統雜〕明三七一二二〇
分限令の解釋と教授の言論　岡田朝太郎〔國家〕明三八一九一〇
教育と統計との關係　橫山　雅男〔統雜〕明三九一一四四
市町村立小學校教員俸給の現狀　巖水　惠〔統集〕明三九一三〇三
在內國外人教育の權利義務　中村　進午〔外時〕明四〇一〇一一
學齡兒童就學歩合　巖水　惠〔統集〕明四〇一三三
日本現在の地位と教育方針　有賀　長雄〔外時〕明四一一三
レックス博士所說犯罪と遺傳及び教育との關係　ルイ　プリデル〔法協〕明四一二六二二
高等教育に關する謬見　高木　信威〔日經〕明四一五五
犯罪と教育の關係　武田　慧宏〔刑評〕明四三二一
我國目下の社會問題　戶田　海市〔日經〕明四二七四—五
教育史上の自然主義　石田新太郎〔三學〕明四三三四—六

			年	卷	號
ブローダ「女子教育の將來」	藤澤 穆	〔日經〕	明四三	六	二
不良兒の保護教育法	乙竹 岩造	〔刑評〕	明四三	二	二
公務及自由業就中教育に關する有業者の死に就て	二階堂保別	〔統雜〕	明四三	一	二八九、二九六
經濟上より見たる我教育	植松 考昭	〔洋經〕	明四三	一	三二六
高等小學讀本と統計	横山 雅男	〔統雜〕	明四五	一	三〇九
高等小學校に於ける統計思想	横山 雅男	〔統集〕	明四五	一	三七
政治と教育	鵜澤 總明	〔國國〕	大二	一	十
國民教育と宗教	相原 介一	〔國國〕	大二	一	二
良心の自由と學問の獨立	鵜澤 總明	〔國國〕	大三	二	一
教育界の紛擾問題	松影 山人	〔國國〕	大三	二	二
學生と政治運動	福田 德三	〔國商〕	大三	二	三
普通教育の刷新と經費問題	田中 穗積	〔財經〕	大三	一	五
官吏登用試驗と大學制度	織田 萬	〔京法〕	大三	九	五
教育上の重要問題	鵜澤 總明	〔國國〕	大三	二	八
新大學令に就て	田宮準一郎	〔國國〕	大三	二	九
京大問題	吉田三市郎	〔辯協〕	大三	一八	一八二
學校兒童に於ける成績と服裝との相關係數	小林 良輔	〔日社〕	大三	一	一一二
ブレヴドルフ「丁抹の庶民高等學校より」(譯)	三浦 哲郎	〔日社〕	大三	一	三
壯丁と小學教育	横山 雅男	〔統集〕	大三	一	三九八
政治と學生	松田 義雄	〔國國〕	大四	三	三
學制問題に就て	富井 政章	〔新聞〕	大四	一	一〇四三
學制改革の急務	鵜澤 總明	〔國國〕	大四	三	八
青年教育問題と獨逸	田中 義一	〔國國〕	大四	三	一〇
大學令案に就て	鵜澤 總明	〔國國〕	大四	三	一二
我國教育の根本問題(講演)	川合 貞一	〔日社〕	大四	三	一一二
教育と社會	吉田 熊次	〔日社〕	大四	二	三十四
社會學と教育學	小林 照朗	〔日社〕	大四	三	一一二
帝國教育の根本方針	日本社會學院調査部	〔日社〕	大四	四	一一二
諸校學生入學年齡に關する統計	鈴木文太郎	〔經叢〕	大五	二	一
戰後教育の根本方針(講演)	下田 次郎	〔日社〕	大五	四	一一二
戰後教育の根本方針(講演)	小西 重直	〔日社〕	大五	四	一一二
戰後教育の根本方針(講演)	平沼 淑郎	〔日社〕	大五	四	一一二
戰後教育の根本方針(講演)	諸橋 轍次	〔日社〕	大五	四	一一二
帝國教育の根本方針について	建部 遯吾	〔日社〕	大五	四	一一二
戰後教育の豫想案	澤柳政太郎	〔日社〕	大五	四	一一二
教育制度の改正方針に就て	三浦 哲郎	〔日社〕	大五	四	一一二
帝國教育の主義と手續	江部 淳夫	〔日社〕	大五	四	一一二
教育界現狀打破	山内雄太郎	〔日社〕	大五	四	一一二
德教の基準について	岩井 龍海	〔日社〕	大五	四	一一二
智育の大方針について	諸橋 轍次	〔日社〕	大五	四	一一二
體育について	今井 時郎	〔日社〕	大五	四	一一二
帝國教育の根本方針	日本社會學院調査部	〔日社〕	大五	四	一一二

			年	卷	號
補習教育義務の可否	財部 靜治	〔經叢〕	大五	三	一
開戰前後に於ける獨逸の青年教育並青年團の活動	二宮 治重	〔國國〕	大五	四	八
市町村財政と小學校費の負擔	本多 精一	〔財政〕	大五	三	一一
手の器用と其修養	財部 靜治	〔經叢〕	大五	三	三
歐洲戰後の教育問題	水野錬太郎	〔法政〕	大六	一四	二
國定教科書に現はれたる法制問題の解說	市村 光惠	〔法論〕	大六	一	五一七
文教の源泉如何	鹽入 太輔	〔辯協〕	大六	二一	七
小學校教員俸給の國庫支拂義務教育費國庫補助の方法及び程度	澤柳政太郎	〔財經〕	大六	四	八
本邦の學事統計に就て	本多 精一	〔財經〕	大六	四	八
子弟の教養と經濟的考慮	濱田 富吉	〔統集〕	大六	一	明四三一、四三五
教育家待遇問題	稻山 始	〔東經〕	大六	一	一九一七
藏前工業專修學校生徒概況	市村 光惠	〔法論〕	大七	一	九
細民區兒童教育問題資料	原田 高博	〔統雜〕	大七	一	三八五
臨時教育會議の決議を讀む	朝倉 每人	〔經叢〕	大八	八	二
國民教育改良案	中島 玉吉	〔法叢〕	大八	二	一
新學制異見	櫻根考五進	〔我等〕	大八	一	一四
同志社創立の回顧	播磨 龍城	〔新聞〕	大八	一	一五〇四
國民教育の普及程度	ラルネッド	〔政治〕	大八	一	一
大學教授の研究の限界	野村秀三郎	〔統集〕	大八	一	明四三六、四六〇
萬國學士院聯合會創立巴里會議	佐々木物一	〔法叢〕	大九	三	三
教育者の生活難	小野塚喜平次	〔國家〕	大九	二四	七
生活調査を論ず(京都市小學校教員生計調査)	高橋 正熊	〔社政〕	大九	一	二
夜間中學校設立の急務	汐見 三郎	〔經叢〕	大九	二	六
夜間中學制度設置の急務	安東 正臣	〔新聞〕	大九	一	一六八
京都市小學校教員生計調査	安東 正臣	〔新聞〕	大一〇	一	一八二五
教育勅語に就て(講演)	汐見 三郎	〔經叢〕	大一〇	三	一
市町村教育費輕減問題	山岡萬之助	〔法政〕	大一〇	一八	一
實業補習教育に就いて	澤柳政太郎	〔財經〕	大一〇	八	一
教育費用(講演)	青柳 榮司	〔日社〕	大一〇	八	三十五
我國の初等及中等教育に於ける改善の新方面(講演)	澤柳政太郎	〔日社〕	大一〇	八	三十五
教育組織(講演)	林 博太郎	〔日社〕	大一〇	八	三十五
我國教政問題管見(講演)	佐々木吉三郎	〔日社〕	大一〇	八	三十五
教政問題に就て(講演)	江部 淳夫	〔日社〕	大一〇	八	三十五
我國の補習教育(講演)	塚原 政次	〔日社〕	大一〇	八	三十五
教政問題特に女子教育行政に就て(講演)	十倉 精一	〔日社〕	大一〇	八	三十五
實業補習教育の刷新に就て(講演)	小林 照郎	〔日社〕	大一〇	八	三十五
我國教育制度の缺陷と其改善策	伊藤 仁吉	〔法政〕	大一〇	一八	四
	增島六一郎	〔財經〕	大一〇	八	八

小學教育費の研究　小山田小七〔經叢〕大一〇　一三　年卷號
自由教育の制度的基礎　大山　郁夫〔我等〕大一〇　三　九
勞働運動、政治運動、教育運動　高橋　正熊〔社政〕大一〇　一　一〇
教育上の自由平等を論ず　廣川　捨吉〔法政〕大一一　一九　二
大學生の一年間の學費　藤野　靖〔經叢〕大一一　一五　二
教育の國際化　下中彌三郎〔國聯〕大一一　二　七
最近教育運動の基調と勞働者教育　中島久萬吉〔社政〕大一一　一　二八
國定歷史讀本の解說　依田　豐〔法政〕大一二　二〇　六九
大學の使命に對する青年の態度の變遷　大山　郁夫〔我等〕大一二　五　八
應報威嚇から教育善導へ　寺崎　勝治〔法政〕大一二　二〇　九
教育の社會性と國家性　大山　郁夫〔我等〕大一三　六　一〇
對支研究と我中等教育　西山　榮久〔亞經〕大一四　九　一
學校卒業生の就職難と生活難　田中　貢〔社研〕大一四　一　二
九大事件起訴猶豫の批判　原　夫次郎〔新聞〕大一四　一　二四四〇
教育制度の法律化に就て　播磨　龍城〔新聞〕大一四　一　二四四六
支那南洋より觀た日本教育　後藤朝太郎〔外時〕大一四　四二　四九四
小學教育に對する監督官廳の無理解　三浦鐵太郎〔洋經〕大一四　一　二四九
教育の社會化　岩井　龍海〔社研〕大一五　一　三
公民教育の施設に直面して　寺崎　勝治〔法政〕大一五　二三　一
教育の意義と學制改革の四綱領に就て　石川　興二〔彦パ〕大一五　一　一
國家的教化と神話の創造　長谷川萬次郎〔我等〕大一五　八　五
義務教育費の割當　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四六

獨逸

獨逸に於ける大學と社會との交渉　川島金五郎〔國家〕明四四　二五　六
伯林大學事情　小島愛三郎〔新聞〕大四　一　一〇〇三
獨逸植民地の教育制度　〔資料〕大七　四　一
戰後獨逸の大學生數　岡崎　文規〔經叢〕大一二　一七　四

米國

學生隔離と米國憲法の保障　米田　實〔國際〕明四一　八　一
米國に於ける社會改良と教育　佐々木吉三郎〔日社〕大七　六　一一三
北米に於ける法科大學　中島　玉吉〔法叢〕大八　一　三
米國教育界の危機　石川　文吾〔新報〕大八　二九　二
アメリカに於ける成人教育　澤田　謙〔社政〕大一四　一　五六

其他

佛蘭西の小學教育に就て　日高　眞實〔國家〕明二五　六　四六四　六六
一九〇一年孛漏斯國教育統計調査法　相原　重政〔統集〕明三六　一　二六八
清國國民教育の方針　青柳　篤恒〔外時〕明四〇　一〇　一一五
普國未成年者保護教育法　〔法記〕明四一　一八　三
韓國人の教育　黑澤　龍濱〔東經〕明四二　六〇　一四九八

伊太利大學一斑　寺田　四郎〔國國〕大九　年卷號　八　八—二
英國の成人教育　菊池　勇夫〔國家〕大一五　三九　一

【教會法】 寺院法を見よ

【恐喝の罪】

被教唆者の欺罔取財罪に對する恐喝取財教唆者の責任　牧野　英一〔新報〕明四一　一八　三
脅迫と恐喝との區別及民法上の强迫との關係　牧野　英一〔志林〕明四一　一〇　八
恐喝罪の成立と被害の心理狀態　泉二　新熊〔新報〕明四二　一九　一〇
恐喝取財に於ける不法の意義　川島　英晃〔刑評〕明四五　四　二

【供給と需用】 需用と供給を見よ

【恐慌】 參照＝金融。景氣。投機。失業。

商業社會の恐慌を說く　土子金四郎〔國家〕明三一　二　一—六
經濟恐慌論　神戸　正雄〔內外〕明三六　二　七　一—二
避くべきは恐慌の聲なり　吉川　宗充〔日經〕明四〇　一　三
最近の紐育恐慌の經過　瀧本　美夫〔國經〕明四一　四　二
恐慌觀　熊崎　良〔東經〕明四一　五八　一四五
一九〇七年の恐慌　內池　廉吉〔國經〕明四一　四　二
マクドナルド「最近米國五大恐慌通有の原因」（譯）　河田　嗣郎〔日經〕明四一　二　一三
紐育恐慌が日英の輸出貿易に及ぼせる影響　河田　嗣郎〔日經〕明四一　三　六
スプレーグ「一九〇七年の米國恐慌」（譯）　筑山　生〔東經〕明四一　五八　四六四　四六七
米國恐慌の際に於ける現金代替制　鹽田　環〔國家〕明四二　二三　二
一九〇七年の恐慌後の一年　瀧谷　善一〔國經〕明四二　六　六
經濟恐慌に付て　岩田　幸美〔國家〕明四三　二四　九
恐慌の原因　インクランド夫人〔三學〕大二　七　四
恐慌と利子歩合　高城仙次郎〔三學〕大六　一一　一二
カウツキー「恐慌と資本家經濟」　櫛田　民藏〔我等〕大九　二　八
目下の恐慌及び失業　戶田　海市〔經叢〕大九　一〇　六
恐慌の對策と銀行業者　大森　研造〔經叢〕大九　一〇　六
恐慌と勞働市場　河津　遐〔國家〕大九　二四　七
西紀三十三年の經濟恐慌　高橋誠一郎〔三學〕大九　一四　七
恐慌論　河津　遐〔新報〕大九　三〇　一〇

滯貸と恐慌　野崎　龍七〔洋經〕大九年　一卷　一號
恐慌の必然性　堀　潮〔經究〕大一〇　一　二
恐慌の原因に就て　松崎　壽〔國經〕大一〇　三〇　一
恐慌に就ての一考察　川西　正鑑〔金融〕大一一　二　一二
ヒルファーディングの「恐慌の原因」　友岡　久雄〔經研〕大一四　二　一
レーデラー教授の恐慌論　大森義太郎〔經論〕大一四　四　二
ヒルファディングの恐慌の意義について　谷口　吉彥〔經叢〕大一四　二一　六
ヒルファデンクル「恐慌の性質の變遷」（譯）　友岡　久雄〔法集〕大一四　一　一
恐慌と其對策　岩崎　靜也〔銀叢〕大一五　六　四

【共濟組合】　參照＝生命保險。勞働組合。

共濟會に就て　磯谷敬之助〔保雜〕明三四　六　六一
帝國鐵道廳職員救濟組合に就て　栗津　清亮〔保雜〕明四〇　一　一三四
職工保護の要項（救濟組合の組成）　栗津　清亮〔日經〕明四一　三　五
保險學理と救濟組合　栗津　清亮〔志林〕明四〇　九　一
經濟上より見たる濟生會　星野　勉三〔三學〕明四四　五　四
官設共濟組合制度の概要及批評　桑田　熊藏〔國經〕明四五　一三　二
專賣局現業員共濟組合概說　青木　道〔國家〕明四五　一三　二一四
國有鐵道現業員保護救濟施設　永井　亨〔國家〕大七　三一　五一七
鐵道院に於ける共濟組合に就て　永井　亨〔法協〕大七　三六　四
我國最近の共濟組合　芳賀　榮造〔社政〕大九　一　二
共濟組合の基礎計算に就て　野坂竹太郎〔保雜〕大一〇　一　二九〇
北米合衆國に於ける協同組合運動　澤田　謙〔社政〕大一二　一　二九
ソヴイエット・ロシアに於ける協同組合運動　國際勞働局〔社政〕大一四　一　五五
綿絲紡績工場に於ける職工共濟組合　片山　早苗〔社政〕大一五　一　六七
妙心寺派教團の共濟制度　中川與之助〔經叢〕大一五　二三　五　六九

【共產主義】　參照＝個人主義。社會主義。ボルシエヴイズム。無政府主義。

社會主義と共產主義　高橋誠一郎〔三學〕明四一　二　一
村落共產體の發達　本庄榮治郎〔經叢〕大五　三　四
トーマス・モーアのユートピアと共產主義的思想　高橋誠一郎〔三學〕大八　一三　四一六
「社會主義及び共產主義文書」　櫛田　民藏〔經學〕大九　一　一
共產宣告に見はれたる唯物史觀　河上　肇〔社問〕大九　一　一六
獨逸共產主義者の暴動と其公判　宮本　英脩〔法叢〕大一　八　三
「共產宣言」の英譯本について　河上　肇〔經叢〕大一一　一四　六
ウキリアム・モリスの共產主義　加田　哲二〔三學〕大一一　一六　八一一〇
古代希臘に於ける共產主義的革命　ベアー〔我等〕大一一　四　一三
原始基督敎と共產主義的思想　三邊　金藏〔三學〕大一三　一七　一一二
英國勞働黨と共產主義　田中　貢〔經商〕大一三　二　二
共產の原理　恒藤　恭〔經叢〕大一三　一七　三
「共產宣告」の一草稿たるエンゲルス稿「共產主義綱領」　福田　德三〔商研〕大一一　二　一
無政府主義、共產主義、國家社會主義　小泉　信三〔財經〕大一三　一〇　二一三
スパルタに於ける共產主義　ベアー〔我等〕大一三　五　三
エツセネ敎團の共產主義　高橋誠一郎〔三學〕大一三　一七　三
カウツキーの「修道院的共產主義」を讀む　小島　幸治〔三學〕大一三　一七　八
共產社會の自存的形式と寄生的形式　恒藤　恭〔我等〕大一三　五　八
ドイツ共產黨の現勢　〔マル〕大一三　一　一
露國共產黨と勞働者敎育（ジョッス）　上田　茂樹〔マル〕大一三　一　二
英國に於ける勞働黨と共產黨との關係　西　雅雄〔マル〕大一三　一　三
フイジー島の原始共產制　河上　肇〔經叢〕大一三　一八　三
共產主義の經濟的基礎に就て　伊藤　秀一〔三學〕大一三　一八　五一六
共產黨インターナショナルの過去現在及未來　ジノヴイエフ〔マル〕大一三　一　六
「共濟黨宣言」剽竊問題　平井　新〔三學〕大一四　一九　六
マルクス共產體の研究　石濱　智行〔社科〕大一四　一　六
露西亞の共產主義　稻田周之助〔外時〕大一四　四一　四八三
獨逸共產黨の政策　稻垣　守克〔社政〕大一四　一　五五
二ツの社會化綱領（ブハーリンの「共產黨綱領」とバウアーの「社會主義への道」とに現はれたる社會化諸方策の管見）　岩城　忠一〔商論〕大一五　一　二
ケルン共產黨事件の眞相　嘉治　隆一〔我等〕大一五　八　四
「共產黨宣言」前史の一齣　平井　新〔三學〕大一五　二〇　六
露國共產黨內訌の眞相　茂森　唯士〔外時〕大一五　四三　五一四
支那反共產運動　高山　謙介〔外時〕大一五　四三　五一五

【行政】

参照＝營造物。官制。官廳。官吏。行政處分。行政整理。行政訴訟。行政法。警察。權限爭議。財政。訴願。政治。地方行政。都市。

		年	卷	號
行政科統計論	岡松　徑〔統集〕	明一五	一	一〇二
行政及司法を論ず	奥田　義人〔法協〕	明一八	三	一二三
行政組織の一斑を論ず	富井　政章〔法協〕	明一九	四	二八
行政學比較研究の必要を論ず	末岡　精一〔國家〕	明二〇	一	一
行政の目的及範圍	井上　毅〔國家〕	明二三	三	二五
法治主義を論ず	穂積　八束〔國家〕	明二三	三	三三
ブラーツアク「裁判所及行政廳の權限に付主義上の區畫」（譯）	應當　融〔法記〕	明二五	二	一
法治國の辯	冷　眼子〔新報〕	明二六	三	二三
內訓又は訓令の性質	式甫　散人〔新報〕	明二九	六	六六
法治行政	穂積　八束〔新報〕	明二九	六	六七
行政區の名稱境界に關する私議	那珂　通世〔國家〕	明二九	一〇	一一八
法治國の行政	江木　衷〔新報〕	明三〇	七	八一
行政の觀念に關する管見	小原　新三〔國家〕	明三三	一四	一六四
行政統計	花房直三郎〔統集〕	明三四	一	二四七
行政的統計拾遺	光岡　正彰〔統集〕	明三四	一	二四八
蘭領爪哇行政一斑	岡　實〔志林〕	明三四	三	二四九

		年	卷	號
法治國の本義	菊池　武夫〔新報〕	明三四	一	二七
行政の意義に就てモンテスキューの三權分立論	竹井耕一郎〔國家〕	明三四	一五	一六六
國法學と財政學との關係	市村　光惠〔內外〕	明三六	二	四
權力分立論一斑	岡　實〔志林〕	明三六	五	四一
國家作用の區別	美濃部達吉〔新報〕	明三七	一四	二一四
訓令と服務命令	筧　克彥〔新報〕	明三八	一四	一四一
法治國の壓制	美濃部達吉〔法政〕	明三八	一〇	六一二八
行政學の範圍及政治學との限界	菱谷　精吉〔法政〕	明三九	一〇	一一
三權分立	一木喜德郎〔國家〕	明四〇	二	二
立法司法及行政の區別及其意義	佐々木惣一〔新報〕	明四〇	一七	二
自由行政と所謂「憲法上の大權」	美濃部達吉〔明學〕	明四〇	一	二一一
權力の分立	美濃部達吉〔志林〕	明四〇	九	一一
國學作用と三權分立	穂積　八束〔法協〕	明四一	二六	一
特別權力關係	佐々木惣一〔京法〕	明四一	三	三
特別の權力關係の性質に就て	一木喜德郎〔法協〕	明四一	二六	五
行政行爲の性質及種類を論ず	美濃部達吉〔志林〕	明四二	一	四
立法、司法、及び行政	美濃部達吉〔國家〕	明四二	二三	一一二
	上杉　愼吉〔新報〕	明四三	二〇	一〇

		年	卷	號
普魯西に於ける行政改革	井上　密〔京法〕	明四四	六	一二
輿論政治と行政	村田岩次郎〔三學〕	大四	九	一一
立憲國に於ける行政、司法立法三權の關係	植原悅二郎〔國國〕	大五	四	九
立憲政體と立法司法及行政	松本　重敏〔新聞〕	大六	一	一三四一
行政行爲の無效	美濃部達吉〔法協〕	大九	三八	一九
諸國行政統計書梗概	財部　靜治〔經叢〕	大九	一〇	四
行政の概念構成に於ける「技術」の意義	蠟山　政道〔國家〕	大一三	三七	二一三
行政學の本領と法律學の使命とに關する人生觀的考察	田村　德治〔法叢〕	大一四	一一	六
社會行政の新領域	鈴木　義男〔社政〕	大一四	一	六〇
新なる行政區劃の單位リージョン	リード〔都問〕	大一四	一	六
ヤストロヅ「行政學とは何ぞや」	宇治伊三助〔法叢〕	大一五	一五	五
行政及財政組織の單純化	成瀨　義春〔財經〕	大一五	一三	七

【行政裁判所】

参照＝行政訴訟。

		年	卷	號
行政裁判所及司法裁判所の權限	田部　芳〔法協〕	明二四	九	三
行政裁判所廢止論	石山　彌平〔新報〕	明三	八	八六
行政裁判所制度を概論して改正法案に及ぶ	清水　澄〔內外〕	明三五	一	四
行政裁判所の改善問題に就て	卜部喜太郎〔辯協〕	明三九	一〇	九九
行政裁判所の權限に關する疑義	水野錬太郎〔國家〕〔辯協〕	明四一	一三	四
行政裁判所に就て	清水　澄〔法協〕	明四一	二七	四
再び行政裁判所に就て	清水　澄〔法協〕	明四一	二七	五
行政裁判所の權限擴張に就て	副島　義一〔國家〕	明四二	二三	五
行政裁判所の存在目的	花岡　敏夫〔辯協〕	明四三	一四	一四三
行政裁判所權限と所謂自由裁量問題	美濃部達吉〔新報〕	明四三	二〇	二一〇
行政裁判所の再審制度に就て	元田　肇〔新報〕	明四四	二一	四
行政裁判所評定官免官問題に就て	副島　義一〔志林〕	明四四	一三	一
行政裁判所評定官免官問題に就て副島博士の說を駁す	清水　澄〔志林〕	明四四	一三	四
行政裁判所評定官免官問題に關する清水博士の駁論を駁す	副島　義一〔志林〕	明四四	一三	五

行政裁判所と司法裁判所　清水　澄〔法記〕六　二三　一七
行政裁判所の權限擴張問題と覆審制度問題　南部　皆治〔辯協〕六　六　二一　四
行政裁判例と權限擴張の可否　加藤　勝藏〔新聞〕大一三　一　二二八

【強制執行】

民事訴訟法第六編を讀む　長島鷲太郎〔法協〕明二七　一二　〔新報〕明二七　四　三四
強制執行方法の變遷　吾孫子　勝〔新報〕明三六　一三　四
強制執行に於ける執達吏と執行債權者との法律關係に就て　富谷鉎太郎〔法記〕明三六　一三　一二六
強制執行權の基礎　加藤　正治〔新報〕明三八　一五　五
實質的訴權と強制執行との關係　仁井田益太郎〔新報〕明三八　一五　六
強制履行及強制執行　雉本　朗造〔京法〕大元　七　二一
妻の同居義務と強制執行　寺崎　福彦〔新聞〕大元　一　八一
強制執行の優先主義及平等主義（對人信用制度の消長）　雉本　朗造〔京法〕大四　一〇　一一
執達者の賠償責任　伊藤　正介〔臺法〕大八　一三　一〇
強制執行に依る權利保護條件一般　宮田龜之助〔辯協〕大一三　二八　四六
強制執行改正私議　橋本　膺督〔新聞〕大一五　一　二五四
強制執行の要件　錦山　生〔新報〕明二七　四　元
假執行に就て　木村誠次郎〔志林〕明三四　二　一四
假執行に關する諸國の法制を論ず　中村　進午〔新報〕明三五　三　四
外國判決の執行　泉二　新熊〔新報〕明二七　一四　三
內國民事判決の內國に於ける效力　倉橋集太郎〔新聞〕明二八　一　二六六
公正證書の正本に就て　森　作太郎〔新聞〕明二九　一　三三〇
公正證書の效力に就て　賤乃家學人〔新聞〕明三九　一　三四九
新國席判決と職權的假執行の宣言　竹田孝太郎〔新聞〕明三九　一　三九二
確定判決の效力と執行文付與　頓宮悟一郎〔新聞〕明四〇　一　四六五
強制執行後に於ける承繼問題　加藤　正治〔志林〕明四一　一〇　七九
上告審に於ける假執行の宣告　板倉松太郎〔志林〕明四一　一〇　八
民事訴訟法第五〇一條第三號第二の欠席判決の意義　伊藤　悌治〔新報〕明四一　一八　一〇
控訴裁判所か第一審の本案判決を是認したる場合に於ける強制執行の債務名義　河保川生〔新聞〕大九　一　一六七六
韓國理事廳の判決は內地に於て執行せられ得るや　山崎　行一〔新聞〕大一一　一　一九七〇
假執行の宣言と判決　太田孝之助〔新聞〕大一三　一　二三一〇
脫退せる被告に對し執行をなす場合の執行文附與手續　八ヶ代義則〔新聞〕大一三　一　二三二四
支拂命令送達後の債務者死亡と相續人に對する執行命令　前田直之助〔新報〕大一三　二四　一〇
公正證書の作成に就て事實に吻合せざる公正證書の意義　喜頭　兵一〔朝司〕大一三　三　五
公正證書に依り執行文の附與を求め得べき者と給付の訴　山崎　行一〔新聞〕大一五　一　一三二
未成年者に爲されたる執行行爲の通知　菅原　春二〔新報〕大三　二四　八
公正證書不實記載と虛僞行爲　前田直之助〔新報〕大一三　二四　一〇
社員の持分に對する執行と現行法の缺陷　菅原　清瀨　一郎〔法協〕明四一　二六　一
假執行免除の宣言に就て　山田　正三〔京法〕大元　七　一〇
執行機關改造の急務　齋藤　孝治〔新聞〕大四　一　一〇三〇
公正證書に對する執行文附與の時期に就て　細野　長良〔新報〕大五　二六　一〇
公正證書の執行力を論ず　細野　長良〔新報〕大五　二六　一
執行命令の送達に就て　藤波　元雄〔法記〕大六　二七　一三
執行命令の送達に關する辯護士太田孝之助君の所論を讀みて　眞野　毅〔辯協〕大七　三　七一二
民事訴訟法第五三六條に依る執達吏の命令に債務者應ぜざる場合　小野村胤敏〔法政〕大九　一七　九
執行文附與に關する一二の問題に付て　山本　晴造〔新聞〕大九　一　一六五五
債務名義に就て

強制執行に對する救濟方法

強制執行の停止命令に就て　三宅　長策〔新報〕明三六　三　三〇
競賣手續の停止に付て　高橋　捨六〔新聞〕明三四　一　五四
民訴法第五四九條第一項末段に付て　古谷新太郎〔新聞〕明三七　一　二一八
執行參加に關する疑義、附屋人の證人資格に付て　齋藤　覃夫〔新聞〕明三七　一　二三四
再び民訴法第五四九條を論ず　古谷新太郎〔新聞〕明三七　一　二四二
執行參加訴訟に就て　高橋巳千治〔新聞〕明三八　一　二五九
請求に關する異議の訴の性質に就ての學說　前田道之助〔明學〕明四〇　一　一一九　四一　一　一二一

債務者占有中の第三者の所有物に對する強制執行に異議を申立さりし第三者か執行完了後に爲す不當利得の主張　中込　宗造〔新報〕明四一年一八卷九號
假執行の停止取消變更認可の當否に付ての判決　平井彦三郎〔新聞〕明四一　一　四八三
民訴第五四五條第三項の規定と訴の變更　森　作太郎〔新聞〕明四三　一　六四三
第三者の執行異議の訴請求に對する異議の訴　仁井田益太郎〔法協〕明四四　二九　三
請求に關する異議と執行文附與に對する異議　雉本　朗造〔新報〕大二九　三　一一二
強制執行停止命令の效力存續時期　岡村　玄治〔志林〕大七　二〇　六
民訴法第五〇一條第四號、第五四八條の規定に依る手續と強制執行　阿部文二郎〔新報〕大八　二九　六
第三者の執行異議權と原因反對給付に繫る強制執行に對し異議の訴を以て反對給付が契約の本旨に適合せざることを主張するの可否　阿部文二郎〔新報〕大八　二九　九
伊藤　綱城〔新聞〕大八　一　二〇〇四
阿部文二郎〔新報〕大一〇　三一　二
執行命令に對する故障申立に基く辯論に於て當年者一方の闕席したる場合と其裁判　前田直之助〔新報〕大一　三一　六
民訴法第五四七條末項の受訴裁判所の裁判を提出すべき機關　前田直之助〔新報〕大一　三一　一
執行異議事件の判決　小野　實雄〔新聞〕大一四　一　二四一八
執行手續
轉付命令に就て送達前の債權轉付命令の效力に就て　高木　豐三〔法記〕明三六　三　一九
債權の差押に就て恩給は差押ふべからず　平山銓太郎〔新報〕明三六　三　三〇
取立命令と轉付命令の區別　高橋　覺〔新報〕明三七　四　三五
强制競賣の性質　錦山　生〔新報〕明三七　四　三七
保險金の差押に付きて不動產强制競賣の賣得金の配當に關し民事訴訟法は民法の規定に依り自然改正を受けたることを論ず　本田　康直〔法政〕明三三　三　二三
公權の差押に付て競落不動產の引渡命令に就て　松岡　義正〔法政〕明三三　四　三六
野村安次郎〔新報〕明三三　一〇　二五
川島　龜夫〔辯協〕明三四　五　四五
幽谷　居士〔新聞〕明三五　一　六六
神尾　肇〔新聞〕明三五　一　一〇三

船舶の股分に對する强制執行に就て　長谷川協輔〔新聞〕明三五年一卷一〇三號
取立命令に就て民訴第六四九條に就て　板倉松太郎〔志林〕明三六　一　五一
永代供地權は强制執行の目的とすることを得るや　櫻　蔭〔新聞〕明三六　一　一三五
ヘルツ「電話機及び郵便爲替金の差押に就て」（譯）　長谷川菊太郎〔新聞〕明三六　一　一四九
タシャウ「郵便爲替金の差押に就て」（譯）　平島　及平〔法記〕明三七　一四　一四九
合資會社社員に對する債權執行に就て　平島　及平〔法記〕明三七　一四　一五一
土地明渡强制執行に於ける執達吏の職權　永易政次郎〔新聞〕明三八　一　二七一
土地明渡强制執行に於ける家屋取壞命令の要否　中西惣三郎〔新聞〕明三八　一　二七六
判事野村定次君に答ふ　野村　定次〔新聞〕明三八　一　二八一
相續人が相續登記を爲さゞる不動產の競賣手續　中西惣三郎〔新聞〕明三八　一　二八五
不動產强制競賣開始決定に對しては抗告を爲すことを得さる乎　森　作太郎〔新聞〕明三八　一　二九二
裁判所書記の其保管に依る競落代金を費消したるときは國家は賠償の責を負ふや　森　作太郎〔新聞〕明三八　一　三〇九
民訴第六八八項前競落人に對する不足額等請求權は何人に在るや　谷田　三郎〔法記〕明三九　一六　二
差押假差押に關する補正私見　村上亨三郎〔新聞〕明三九　一　三七〇
金錢債權に對する數個の差押の間に於ける效力　池水　浩光〔新聞〕明三九　一　三八三
轉付命令を論ず　齋藤　覃次〔新聞〕明三九　一　三九八
配當要求の時期と轉付命令との關係　梅　謙次郎〔志林〕明四〇　九　一一
民事訴訟法に依る競賣と競賣法による競賣との區別　前田直之助〔明學〕明四〇　一　一一六
市町村財產の差押　板倉松太郎〔志林〕明四一　一〇　三
建物を撤去し土地を明渡すべしとの判決の强制執行　板倉松太郎〔志林〕明四一　一〇　三一七
勳章年金の差押に就て　平井彦三郎〔新聞〕明四一　一　四八〇
假差押を爲したる債權轉付命令を發することを得るや　守谷富之助〔新聞〕明四一　一　五〇二
一個の債權に對して發せられたる數個の轉付命令が同時に送達せられたると　岩本勇次郎〔志林〕明四二　一一　六

きの效力
民事訴訟法第七三四條の意義
公吏の俸給權は全部差押へらるべきものなるか　板倉松太郎〔志林〕明四三　一二　七
有體動産差押の效力を論ず　岩本勇次郎〔志林〕明四二　一一　一〇
清國に於ける執行の效力に就て　川手　忠義〔新聞〕明四二　一　五九九
言渡を爲さざる決定と送達　法叢　學人〔新聞〕明四三　一　六四八
前の執行に就て　光井　深〔新聞〕明四三　一　六六四
作爲及不作爲債權の强制執行　雲外　居士〔新聞〕明四三　一　六七八
債權に對する强制執行と最近大審院の判例　石坂音四郎〔京法〕明四四　六　三
讓渡禁止の特約ある金錢債權と轉付命令　横田　秀雄〔志林〕明四四　一三　六
民事訴訟法第七三六條の疑義　前田直之助〔新報〕明四四　二　七
差押の競合と轉付命令　武川　佳海〔新聞〕明四四　一　七六〇
差押命令と移付命令とを同時に發することを得る乎　齋藤　巖〔新聞〕明四五　一　七七七
俸給歳費に對する强制執行　齋藤　巖〔新聞〕明四五　一　七九〇
所謂將來の收入に對する轉付命令　板倉松太郎〔志林〕明四五　一四　六
債權は二重に差押ふることを得るや　天野宗太郎〔新聞〕大元　一　八一九
財産權に對する强制執行に關する主要問題　横田　秀雄〔評論〕大二　二　七
執行停止命令ありたる債務名義に基く再度の强制執行　板倉松太郎〔志林〕大二　一五　九
金鵄勳章の年金に對して轉付命令を發することを得る乎　岩田　一郎〔新報〕大二　二三　一
代替物と民訴法第七三二條の轉付命令　榊原周次郎〔新聞〕大二　一　八七九
過分なる數箇の不動産の差押　庄野　理一〔新聞〕大二　一　八九二
銀行貸金契約に於ける擔保流用文句と債務者に對する强制執行及び債務者の破産　加藤　正治〔志林〕大三　一六　七
民訴第六二五條第二項と其手續　雉本　朗造〔京法〕大四　一〇　八
照査手續の性質及び效力　前田直之助〔新報〕大五　二六　三
强制執行處分の當否と家資分散の宣告　板倉松太郎〔志林〕大五　一八　一三
辨濟供託金に對する强制執行　加藤　正治〔志林〕大六　一九　三

行
供託金に對する債權差押の第三債務者に就て　眞下　五郎〔新聞〕大六　一　一三〇四
船舶に對する强制執行を論ず　新田　繁永〔新聞〕大七　一　一三八四
電話加入權に對する强制執行に就て　小町谷操三〔新報〕大八　二九　六
有體動産に對する强制執行は何時終了するや（執達吏が競賣代金を受取りたる時乎債權者が其交附を受けたる時乎）　作間　耕逸〔辯協〕大八　二三　七
民事訴訟法第六二三條の法意　齋藤　巖〔新聞〕大八　一　一五九三
動産の同時差押　阿部文二郎〔新報〕大九　三〇　一
執行停止決定ありたる後に於ける照査債權者の差押手續續行の許否　片山　通夫〔法記〕大一〇　三　八
滯納處分に因る不動産差押の效力發生時期　吉田常次郎〔新報〕大一〇　三　一〇
債權轉付命令と抵當權　宿利　英治〔新報〕大一一　三一　六
家屋明渡の執行と抵抗　崎元武兵衛〔臺法〕大一一　一六　七
不動産引渡命令の效力　前田直之助〔法政〕大一三　三　一二
田崎　浩久〔辯協〕一四　二九　四〔新聞〕大一四　一　二三七〔法新〕一四　一　三三

執行保全

假差押の告　鈴木　充美〔法協〕明二五　一〇　一〇
假差押を論ず　八重洲閑人〔新報〕明二九　六　六五
債權及不動産假差押に就て　飯田　半助〔新聞〕明三四　一　四三三〔同三三〕〔同三四〕
書損に因る假處分命令の更正　梅　謙次郎〔志林〕明三五　四　三八
假差押假處分に就て　高橋　捨六〔新聞〕明三五　一　八二
不動産假差押の效力に就て　森　作太郎〔新聞〕明三八　一　二七一
假處分の效力　根本仙三郎〔新聞〕明三八　一　〔明二七〕〔三七八〕
保證を立てしめて爲す假處分の取消に就て　賤乃家學人〔新聞〕明三八　一　三七一
差押假差押に關する補正私見　池水　浩光〔新聞〕明三九　一　三八三
假處分執行の取消又は之を許さざるか　平井彦三郎〔新聞〕明四〇　一　四六〇
假處分命令に對する不服は如何なる裁判所が管轄するか　平井彦三郎〔新聞〕明四〇　一　四六四
假處分執行の取消に就て本紙四六四號所載假處分執行取消申請事件の判決を評す　平井彦三郎〔新聞〕明四一　一　四七四
假差押の效力　板倉松太郎〔志林〕明四一　一〇　一〇
期限の至らざる債權に付き

假差押命令を發したる後裁判所が申立により債權者に對し本訴を提起すべきことを命じたる場合に於ける訴の性質　中込　宗造〔新報〕明四二年一九巻八號
假處分取消申立に對する違法の裁判と不服申立の方式に就て　大野　豹吾〔新聞〕明四二　一　五七九
假差押に付て所感を述ぶ　一瀬房之助〔辯協〕明四三　一四　一三九
假差押と配當要求の效力　前田直之助〔新報〕明四四　二一　三
小作人の立稻假差押に就て　頓悟　道人〔新聞〕明四四　一　七二
假差押執行の防止を目的とする供託　雉本　朗造〔京法〕大三　九　一二
假差押と假處分　淺野　謙二〔新聞〕大三　一　九一七
私訴假差押處分の許否　大橋　誠一〔辯協〕大五　二〇　三
不服の申立と假執行に關する裁判　〔新聞〕大五　一　一〇九八
假差押又は假處分命令若は其執行と申請人の取消　前田直之助〔新報〕大五　二六　四
民事訴訟法第七四六條に所謂訴訟の意義に關する大審院の判決に就て　阿部文二郎〔新報〕大六　二七　六
假差押又は假處分保證供託金の取戻に就て　平井恒之助〔新聞〕大六　一　二八二
假處分に關する取扱　齋藤　巖〔新聞〕大九　一　二七二
假差押命令の管轄　前田直之助〔法記〕大一〇　三一　一
本案か上告審に在る場合と假差押の管轄　井上直三郎〔法叢〕大一〇　五　二
急迫なる場合に於ける假處分命令の管轄に就て　阿部文二郎〔新報〕大一〇　三一　九
急迫なる場合に於ける假處分命令の管轄に就ての尾高判事の所論を讀みて　尾高　武治〔新聞〕大一〇　一　一八七三
執行保全手續の性質と立法に就て　石井　純一〔新聞〕大一〇　一　一八八〇
本案繫屬前の假差押に於ける起訴命令と支拂命令の送達　宮田龜之助〔法政〕大一二　二七　三
數裁判所管轄權を有する場合に於て一裁判所の起訴命令に依り（假差押に基く）他の裁判所に其の事件に關し起したる訴と假差押との關係　前田直之助〔新報〕大一二　三三　四
敗訴と不法假差押の推定　前田直之助〔新報〕大一三　二四　九
現代の要求と假處分　多田　吉鍾〔朝司〕大一三　三　一〇
不動產に對する假差押命令の執行に就て　寺崎　勝治〔法政〕大一四　二三　四
渡邊　純〔朝司〕大一五　五　六號

【行政處分】

參照＝公用徵收。

願屆及許可認可　穗積　八束〔法協〕明三〇　一五　五
處分命令に對する新法語　倉知　鐵吉〔法協〕明三〇　一五　九
執行罰に付て　副島　義一〔志林〕明二四　三　一七
行政の區域に於ける契約　ステンゲル〔法政〕明三七　八　四
公法上に於ける契約と合同行爲　エリネック〔志林〕明三七　八　一
便宜の原則　上杉　愼吉〔志林〕明三八　七　四
行政官廳が法律に基き與へたる免許は誤謬ありとして其官廳自ら之を取消し又は訂正する權能ありや　鈴木　充美〔辯協〕明三九　一〇　一〇一
自由行政と所謂「憲法上の大權」　美濃部達吉〔志林〕明四〇　九　一一
行政上の私法行爲　織田　萬〔新聞〕明四〇　一　出四〇一　出四〇一
行政處分の取消變更　穗積　八束〔新報〕明四一　一九　一
行政處分の取消を論ず　美濃部達吉〔新報〕明四一　一九　一
行政犯の性質を論じて警察犯に及ぶ　佐々木惣一〔京法〕明四一　四　三
行政上の强制執行　美濃部達吉〔國家〕明四二　二三　八
默示の却下　織田　萬〔京法〕明四四　六　二
行政處分の成立及效力發生　清水　澄〔新報〕明四四　二一　一〇
行政裁判所の判決は違法の行政處分を直接に取消變更する效力ありや　太田　資時〔辯協〕明四四　一五　一五八
公法上の契約を論ず　市村　光惠〔京法〕大二　八　一〇
行政處分に對する救濟を論ず　中村德重郎〔辯協〕十二　一七　一七四
行政處分の瑕疵附行政行爲の觀念　佐々木惣一〔京法〕大四　一〇　四
執行罰　織田　萬〔京法〕大四　一〇　九—一〇
行政處分に就て　清水　澄〔新報〕大六　二七　四
行政處分の無效及取消を論ず　市村　光惠〔京法〕大六　一一　四一一
許可認可等の用語　織田　萬〔京法〕大六　一三　一一
行政執行法　市村　光惠〔法論〕大六　一　二—三
行政處分の效力發生の時期及確定の時期　清水　澄〔新聞〕大七　一　出一四二二　出一四二二
行政法上の强制手段　田中　貢〔法政〕大八　一六　二
公法上の金錢給付義務と其の强制方法　織田　萬〔法叢〕大九　三　一
行政處分と第三者殊に其の行政訴訟提起の期間に就て　宿利　英治〔新報〕大一三　三三　二

【行政整理】 參照＝綱紀肅正。

		年	卷	號
行政整理の沿革	山崎四男六〔國家〕	明三三	一三	四二四三
冗員淘汰の方針	森　三溪〔東經〕	明四二	六〇	一五〇一
行政整理難	莊田　秋村〔東經〕	明四四	六三	一五九九
司法整理と我司法省	磯部　尙〔辯協〕	明五	一六	一六一
司法部の行政整理如何	原　嘉道〔新聞〕	明四五	一	七六二
行政整理と物價調節	成瀨　義春〔財經〕	大一	九	八
行政整理と司法省	三上　英雄〔新聞〕	大二	一	二〇一三
新行政整理案	神戸　正雄〔時經〕	大三	一	一三
司法省部內の行政整理には供託局を廢止して貰ひたい	Y・H生〔新聞〕	大一三		二二九七

【行政訴訟】 參照＝行政裁判所。

ショルシュ・アッペール「行政裁判論」（譯）	城　數馬〔國家〕	明二〇	一	一一〇	二
行政訴法	穗積　八束〔法協〕	明三	七	六六	一〇
行政裁判法典を論ず	富塚　玖馬〔法協〕	明三	八	六七	六
今川法學士に質し併せて我行政裁判法を論ず	柴田　家門〔法協〕	明三	八	八	八〇
民事と行政事件	江木　衷〔新報〕	明二六	三	二	二五
訴願と行政訴法の立	倉知　鐵吉〔法協〕	明三〇	一五		六
行政裁判法第二三條中裁決なる文字に就て	錦　城〔新報〕	明三〇	七		七〇
行政訴訟に於ける對手	江木　衷〔新報〕	明三〇	七		七七
行政訴訟と訴願との區別及其關係	長島鷲太郎〔法政〕	明三三	四		三二
行政裁決及行政裁判に關する諸法案	織田　萬〔內外〕	明三五	一		二
行政裁判と訴願との區別に付て	美濃部達吉〔志林〕	明三七	六		五八
行政裁判の缺點	石山　彌平〔辯協〕	明三九	一〇		九七
行政裁判を論ず	清水　澄〔法協〕	明四〇	二五		二一四
行政裁判の確定力	藤井　眞信〔法協〕	明四一	二六		六一七
獨逸の行政裁判制度	美濃部達吉〔國家〕	明四一	二二		一一〇
行政裁判の本質に就て	渡部　廉吉〔國家〕	明四二	二三		六
行政裁判法一斑	美濃部達吉〔國家〕	明四二	二三		二三
行政裁判再審法案に就て	石山　彌平〔辯協〕	明四二	二三		二二九
行政裁判訴訟手續の改善策	石山　彌平〔辯協〕	明四二	二三		二三二
獨墺行政裁判制度概要	渡邊　廉吉〔國家〕	明四三	二四		三一九
行政裁判制度に關するシュルッエンスタイン博士の講話	渡邊　廉吉〔國家〕	明四三	二四		三
行政裁判の效果を論じて神戸裁判所の判決に及ぶ	太田　資時〔新聞〕	明四三			

		年	卷	號
行政裁判改正之議	新井要太郎〔辯協〕	明四三	一四	四二四五
オ・ミュルラー氏行政裁判論	渡邊　廉吉〔國家〕	明四四	二五	二一三
營業稅課稅標準額の決定と行政訴訟	高野　金重〔保評〕	明四四	四	一〇
行政裁判所の判決に對する論評	宮古啓三郎〔辯協〕	明四四	一五	一四九
行政裁判所の判決は違法の行政處分を直接に取消變更する效力ありや	太田　資時〔辯協〕	明四四	一五	一五八
行政裁判法論	猿渡駒之助〔新聞〕	明四四 大元	一	七一四 七八九
行政裁判に就て	清水　澄〔新聞〕	明四五	一	七三一 七六二
行政裁判法施行の必要	原　嘉道〔辯協〕	大二	一七	一七八
秩父行政訴訟の疑義	石山　彌平〔辯協〕	大三	一七	一七三 一八八
行政裁判に就て	竹內　熊二〔新聞〕	大三	一	九九二
行政裁判決の參加人に對する拘束力	佐々木惣一〔京法〕	大五	一一	
行政裁判の觀念	織田　萬〔京法〕	大七	一三	六
行政處分と第三者殊に其の行政訴訟提起の期間に就て	宿利　英治〔新報〕	大三	三三	二
行政裁判制度改正問題	美濃部達吉〔法協〕	大三	四一	九一〇
行政訴訟事項の範圍	清水　澄〔新聞〕	大三	一	二〇六九

【行政法】 參照＝行政。

日本行政法を研究するの必要及方法を論ず	金子堅太郎〔國家〕	明二〇	五		四
憲法と行政法	劔西　學人〔新報〕	明三三	一〇		二一五
行政法の研究に就て	岡　實〔國家〕	明三五	一六		一八四
行政法と公私法の接觸	織田　萬〔明學〕	明三八	一		八九
行政法統一の必要	織田　萬〔京法〕	明三九	一		三
行政法に關する獨逸近著概要	美濃部達吉〔國家〕	明三九	二〇		八
地方行政法規の效力	山室　宗文〔法協〕	明四〇	二五		一
行政法學の將來	佐々木惣一〔京法〕	明四一	三		七
行政法の編別に就て	美濃部達吉〔新報〕	明四四	二一		八
行政法總則に關する近時の研究	美濃部達吉〔新報〕	大元	二二		一
美濃部博士著「日本行政法」第三卷批評	市村　光惠〔京法〕	大四	一〇		二
海事行政法規概觀	村上　恭一〔海法〕	大五	一		一
拙著「日本行政法」上卷中の誤謬に就て	美濃部達吉〔國家〕	大五	三〇		七一〇

【競爭】 參照＝產業組合。需用と供給。獨占。トラスト。

自由競爭に對する新學派の

說を評す　小林丑三郎〔明法〕明三六　一　一六三
自由競爭に就て　藤本幸太郎〔國經〕明三九　一　一
專賣價格と競爭價格の決定　下村壽一〔東經〕明四一　五八　一四六八
競爭の弊　平田東助〔日經〕明四一　三　六
不正競爭取締論　河津遐〔日經〕明四三　七　七十九
不正競爭を論ず　戶田海市〔國經〕明三八　一　四一五
匿名組合の營業者と競業禁止　松本烝治〔新報〕明四四　二　三
不正競爭法案の批評　伊藤直之助〔東經〕明四四　六四　一六二一　三
不正競爭取締法論　玉木三郎〔商經〕大五　一　二
競爭價格成立の理法を論ず　丸谷喜市〔國經〕大七　二四　二
競爭の公正に關する諸問題　東晉太郎〔國經〕大一〇　三五　五
自由競爭と獨占　土方成美〔經論〕大三　二　一
獨占の制限と競爭の永存　上山辨太郎〔商濟〕大三　三　一
競爭價格と獨占價格　土方成美〔經論〕大三　二　一
不正競爭の制限に就て　田中忠夫〔亞經〕大一三　八　四
クラアクの競爭並に獨占理論　油本豐吉〔經論〕大一四　三　四
自由競爭の限界　宮本英雄〔法叢〕大一五　一五　六

【供託】

供託論　石坂音四郎〔京法〕大二　八九—一二
假差押執行の防止を目的とする供託　雉本朗造〔京法〕大三　九　一一
供託の性質及其法律關係　雉本朗造〔京法〕大四　一〇　三—一三
供託局の事務改善に就て　木冠〔新聞〕大八　一　一九九三
供託法の改正に就て　川村淳〔臺法〕大一〇　一五　一〇
日佛供託制度比較概論　松岡邦〔新聞〕大一〇　一　一七八五—一八二五
一般供託局をして現實に供託物の取扱をなさしめられんことを望む　天覓子〔新聞〕大三　一　二一三三
供託局の存否に就て　天覓子〔新聞〕大一三　一　二三〇九

【共通法】

共通法案に付て　松村眞一郎〔志林〕大七　二〇　二
共通法案に就て　山田三良〔法協〕大七　三六　四—七
共通法に就て　山田三良〔法協〕大七　三三　七
〔國際〕大七　一六　八—九
第四十議會に於ける共通案に關する政府委員の答辯觀　孫兵衛〔新聞〕大七　一　一四五九
共通法上の地域に就て　青篤世〔朝司〕大一一　一　六

【京都】　參照＝西陣。

豫審事件より見たる京都　大濱隆〔新聞〕明四三　一　六二八—六三一
京都に於ける破產統計　山田正三〔京法〕大二　八　一〇
京都府の港灣　川崎兼秀〔統雜〕大五　一　三二七
京都に於ける舊時の鹽屋仲問　本庄榮治郎〔經叢〕大七　六　四
生活調査を論ず（京都市小學校教員生計調査）　汐見三郎〔經叢〕大九　一一　六
京都市小學校教員生計調査　汐見三郎〔經叢〕大一〇　三　一
京都市に於ける家賃の統計的研究　岡崎文規〔經叢〕大一二　一七　五
京都五人組編制の年代　中田薰〔國家〕大一三　三八　二
京都市公同組合の研究　吉川季治郎〔都問〕大一五　二　二

【共同海損】　海損を見よ

【共同訴訟】　訴訟當事者＝共同訴訟を見よ

【競賣】

民事訴訟法に依る競賣と競賣法による競賣との區別　板倉松太郎〔志林〕明四一　一〇　一三
競賣に就て　黑澤龍濱〔東經〕明四二　六〇　一五一〇
株式の競賣金額が滯納金額に滿たざる場合と讓渡人の關係　片山義勝〔新報〕明四三　二〇　八
强制競賣の場合に於ける賣主と擔保責任　橫田秀雄〔新報〕明四三　二〇　九
强制競賣の場合に於ける賣主と擔保責任　西川一男〔新報〕明四三　二〇　九
維納に於ける官設競賣所の組織に就て　橫田五郎〔法記〕明四四　二　一三
抵當不動產增價競賣に要する擔保提供の時期　松本靜史〔新聞〕大六　一　八一四
抵當權の設定せられたる不動產の强制競賣と同地上永小作權　西村孝三〔新聞〕大六　一　八一九
競賣法に依る競賣の性質及び競賣開始の効力　雉本朗造〔京法〕大二　八　八
一個の不動產の一部に對する增價競賣の申立の適否　鈴木眞一郎〔評論〕大五　四　二
不動產再競賣の場合に於ける不足額請求權者及請求權行使方法に關する判例及其批評を評論す　西村勘之助〔新聞〕大五　一　一八九
競落不動產の管理人は法定果實を收集する權利なきか　奧戶善之助〔新聞〕大六　一　二四八
他人の物の競賣と不當利得者　白旗文一〔新聞〕大九　一　一六七
民法第五六八條と競賣手續との關係　岡村玄治〔志林〕大一〇　三三　六
競落人の引受けざる耰耕權增價競賣の請求及其申立　寺井嘯逸〔臺法〕大一〇　一五　一一
片山通夫〔法記〕大一一　三三　三

競落人の引受けざる不動産　伊藤　正介〔臺法〕大三　一七巻　九號
民事訴訟法第六編及競賣法
改正私見　久田　博人〔新聞〕大一五　一　二五五八

【脅迫の罪】

脅迫と恐喝との區別及民法
上の强迫との關係　牧野　英一〔志林〕四一　一〇　八

【共犯】

正犯と從犯との區別
教唆の教唆は刑法上如何に
處分すべきや　豐島　直通〔法政〕明三三　四　三二
共犯論
從犯を論ず　平沼騏一郎〔法政〕明四四　五　四七
實行正犯と從犯との區別の
標準竝共犯の一人犯罪を
中止したる場合の責任關
係を論ず　卜部喜太郎〔新報〕明四四　二　一三七
共犯　池田　直江〔法政〕明三六　七　四
教唆罪
間接正犯　金子富次郎〔新報〕明三六　一三　四二二
間接正犯、間接教唆犯及間
接從犯　小疇　傳〔法政〕明三七　八　四一七
仲小路　廉〔新聞〕明三七　一　四一
岡田朝太郎〔法協〕明三七　三　一三
泉二　新熊〔新報〕明三八　一五　八
間接教唆及間接從犯に就て
責任共擔附因果關係の精神
的連絡　小疇　傳〔法政〕明三八　九　九
强竊盜の爲に見張を爲す所
爲は同罪の共同正犯なり
や將た從犯なりや　中西惣三郎〔新聞〕明三八　一　二七四
共犯論
共犯の處分に就て　小疇　傳〔新報〕明三九　一六　二
責任無能力者の行爲に對す
る共犯ありや　鷲尾　健治〔京法〕明三九　一　九一一
牧野　英一〔法政〕明四〇　一　一〇
不作爲犯と間接正犯　泉二　新熊〔法政〕明四〇　一　四一一
被教唆者の强姦致死罪に對
する强姦教唆者の責任の
根據　牧野　英一〔新報〕明四一　三　三二一
豫め障礙を與ふることを期
して犯罪を教唆したるも
のの處分　牧野　英一〔新報〕明四一　一八　三
共犯の基礎觀念　牧野　英一〔新報〕明四一　一八　五
間接正犯の成立時期及び間
接正犯の成立に必要なる
犯意の存在時期　牧野　英一〔志林〕明四二　一一　四
賭博の見張行爲に付て
共同正犯に就て　小疇　傳〔新聞〕明四三　一　四七七
島　集〔新聞〕明四三　一　五九二
牧野　英一〔志林〕大六　一九　一

共同正犯
共犯の從屬的性質に就て
必要的共犯
間接正犯の著手時期を論ず
間接正犯の著手時期に就て
五十嵐君の所說を駁す
共同正犯と從犯との區別
共犯の從屬的性質に就きて
共謀と實行正犯
共同正犯の觀念と大審院判
例
共犯ある場合の追徵
從犯の從屬性說を駁す
共犯概論
教唆犯の本質を論じて其效
果に及ぶ
强竊盜の見張と共同正犯(正
犯と從犯との區別)
助勢過失論
或る共犯事件　岡田　庄作〔國家〕大六　五巻　五號
瀧川　幸辰〔京法〕大六　三　九
瀧川　幸辰〔法叢〕大八　一　二
五十嵐清太郎〔法政〕大八　一六
藤田　善祠〔法政〕大八　一六　四
武田鬼十郎〔新報〕大九　三〇　二
藪中　隆〔法政〕大九　一七　九
牧野　充安〔新聞〕大一〇　一　一九〇〇
藤波　元雄〔法記〕大一　三二　一一四
河村　靜水〔朝司〕大一　一　四
鏡　一以〔朝司〕大一　一　五
德永　平次〔新聞〕大一　一　一九四〇
横田長次郎〔法政〕大一三　二〇　二

【共犯】【共有】【漁業】

宮本　英脩〔法叢〕大一三　一　四
大濱　信泉〔早法〕大一三　三　一
飯塚　敏夫〔法政〕大一四　二三　一〇

【共有】

參照＝所有權。

中山成太郎〔法政〕明三　二　一四
共有權の意義
共有物の分割に就て
共有物の競賣に關する判例
を讀む　伊藤　善人〔新聞〕明三四　一　五六
共有者の持分の擔保に就て　梅　謙次郎〔志林〕明三五　四　三
共有物の分割　杉山直次郎〔法政〕明三八　九　一
共有に就て　池田寅二郎〔法協〕明四一　二六　二
共有者は單獨にて第三者に
對し共有物に付所有權確
認の訴を提起することを
得るや　横田　秀雄〔新報〕大一一　三二　一
共有及び持分　富永　義通〔朝司〕大一一　一　九
共有物分割の訴の構成及び
其の訴繫屬中共有權讓渡
の效力　能勢　克男〔同論〕大一二　一　一〇
加藤　正治〔法協〕大一四　四三　六

【漁業】

參照＝水產。

一八八三年佛國海洋漁業統
計　相原　重政〔統集〕明二三　一　一〇七
萬國公法上に於ける千島密
獵問題　稻垣滿次郎〔國家〕明二六　七　八一
英米國に於ける漁業問題　高橋　作衛〔國家〕明三〇　一一　一二三
白令海區納膳獵業に關する
英米兩國の爭議　立　作太郎〔國家〕明三〇　一一　一三〇

白令海の漁業問題　高橋　作衛〔國際〕明三八年　卷四　號一
白令海臘虎漁業問題　秋山雅之助〔國際〕明三八・三九　四　四五
白令海臘虎漁獵問題の概要　秋山雅之助〔志林〕明三八・三九　七　九—一二
白令海密獵問題に就て　寺尾　亨〔法協〕明三九　八　一　九
樺太の漁業問題に關する研究　高橋　作衛〔國際〕明三九　四　一〇
遠洋漁業と我外交　片山　潛〔洋經〕明四一　一　四六
臘納獸保護條約問題　米田　實〔國際〕明四三　九　一
海獸會議の結果に就て　道家　齊〔國際〕明四四　一〇　二
トロール漁業問題に就て　桑田　透一〔東經〕明四四　六三　二五七七
臘納獸保護條約の目的　北原　多作〔外時〕明四五　一五　一七四
海獸獵禁止救濟法案の缺點　角　利一〔東經〕明四五　六五　二六三七
汽船トロール漁業と海底電信　米田奈良吉〔國際〕大元　一一　一—二
漁業に就て　エ・ペリエ〔國際〕大元　一一　二
漁業論　坪根　久松〔評論〕大元　一　一
本邦の漁業統計に就て　相原　重政〔統集〕大二　一　三六四
日本海獸獵業の發達　角　利一〔國家〕大二　二七　八—九
トロール漁業に就いて　山本美越乃〔京法〕大二　八　三
我トロール漁業の將來に就て　山本美越乃〔京法〕大二　八　三
クレーメル「沿岸海の範圍と漁業權」　田中耕太郎〔法協〕大二　三　三
膠州灣の漁業　〔資料〕大四　一　一
漁業の統計其の他に就て　吳　文聰〔統雜〕大四　一　三四七
國際漁業警察　泉　哲〔三學〕大五　一〇　九—一〇
本邦漁業に關する統計　加藤　銀藏〔統集〕大一〇　一　四八四・四八八
爆藥使用漁業に就て　元橋曉太郎〔朝司〕大一一　一　一〇
漁船の遭難に就て　蜷川　虎三〔經叢〕大一三　一九　三
有望なる魚類養殖事業　田中　穗穗〔洋經〕大一三　一　一〇九二・一〇九三
錬漁業勞働の季節的移動　遊佐　敏彥〔社政〕大一三　一　一〇六三・一〇六七

【漁業權】

公有水面の性質より漁業權を論ず　公道　學人〔新報〕明三一　八　八七
公有水面に於ける漁業の爭訟に關する裁判管轄　岸　清一〔法政〕明三三　四　三三
〔辯協〕明三三　四　三〇
漁業權及漁業法　花井　卓藏〔新聞〕明三六　一　一四〇
漁業權侵害に對する救濟手段　島村他三郎〔志林〕明四一　一〇　一〇
漁業法第四條及第五八條の解釋に就て　佐々木文治〔新聞〕明四四　一　七五五
漁業權假處分に就て大審院判例を論ず　山本　喜勇〔新聞〕大二　一　一八六二・一八六三
漁業權の賃貸借登錄に就て　板倉松太郎〔志林〕大五　一八　一一
漁業權告示の效力如何　小林　俊三〔新聞〕大五　一　一二六
漁業權を論ず　吉田　敬直〔法政〕大七　一五　六

【局外中立】

參照＝戰時禁制品。戰爭。

國際公法先例（局外中立の部）　高橋　作衛〔法協〕明三九年　卷二　號七
巴里宣言　戶水　寬人〔法政〕明三三　三　一八
アラバマ號事件論　清水　有國〔新報〕明三三　一　二七
アラバマ號事件論　山內　四郎〔新聞〕明三七　一　一九三・一九四
中立國の權利義務　ハイルボルン〔國家〕明三四　一五　一六八・一七〇
武裝中立　遠藤　源六〔法協〕明三五　二〇　一〇
日本帝國の中立始末　高橋　作衛〔國際〕明三五　一　一〇
被捕中立船舶の船長　高橋　作衛〔志林〕明三五　四　三一
巴里宣言の將來　松原　一雄〔法政〕明三六　七　三
巴里宣言の由來　松原　一雄〔新報〕明三六　一三　四—五
石炭供給問題　高橋　清一〔國際〕明三七　三　二
マンジュール號事件を論ず　蜷川　新〔新報〕明三七　一四　四
朝鮮國中立の價値　高橋　作衛〔國際〕明三七　二　五
滿洲の永世中立を論ず　石山　彌平〔新報〕明三七　一四　五—七
マンジュール號事件論　高橋　作衛〔國際〕明三七　二　六
中立國領水內に於ける交戰國の軍艦地位を論ず　佐分利貞男〔國際〕明三九　四　六
二十四時間規則　高橋　作衛〔法協〕明三七　三　一
中立國の港灣並其沿海の利用に就て　松山得四郎〔法協〕明三七　三　一一・一二
日露戰爭と清國の局外中立　蜷川　新〔新報〕明三七　一四　一
中立國逃入の交戰國軍艦マンジュール號武裝撤去を論ず　中村　進午〔志林〕明三七　六　六一
日露開戰に於ける清國の國際法上の地位　楫　水　生〔明法〕明三七　一　六九
清韓の局外中立問題　有賀　長雄〔外時〕明三七　七　七三
船舶賣買と中立政府の義務　松原　一雄〔外時〕明三七　七　一四
局外中立國船舶に關する露國の態度　有賀　長雄〔外時〕明三七　七　一六
清國中立法規の缺點　松原　一雄〔外時〕明三七　七　八三
中立國船の擊沈　中村　進午〔外時〕明三八　八　一
中立國船の擊沈　パナー〔國際〕明三八　四　二
中立國留置者の裁判權　ホルランド〔國際〕明三八　四　二
ラブラデル教授の石炭供給拒絕論　中村　進午〔法政〕明三八　九　二
海上中立財產の過去現在を敍し巴里宣言に及ぶ　篠崎　昇〔法協〕明三八　二三　五—六
日露戰爭と中立法規　立　作太郎〔新報〕明三八　一五　七—一〇
中立領海に於ける交戰國艦隊　高橋　作衛〔國際〕明三八　三　一〇・〔法政〕明三八　九　五—六
中立義務の種別　ホルランド〔國際〕明三八　三　一〇
中立に就て　立　作太郎〔法協〕明三八　二三　一三
各中立國二十四時間法　中村　進午〔法政〕明三九　一〇　二
中村　進午〔內外〕明三九　五　三

不完全中立と局外中立　中村　進午〔國際〕明元年　四卷　五號
中立國石炭供給問題　中村　進午〔法政〕明元　一〇　六
國際法協會と中立　牧野　英一〔外時〕明四〇　一〇　三
永世中立國　松島　肇〔國際〕明四一　七　二―三
局外中立と第二回平和會議　立作太郎〔法政〕明四一　一二　二―四
日露戰爭中各國の局外中立　遠藤　源六〔國際〕明四一　六　五
武裝中立　海戰に於ける中立國の權利義務を論ず　青木　得二〔國家〕明四一　二三　七
永世中立國に就て　秋山雅之助〔志林〕明四一　一〇　九
第一回武裝中立の眞相　高橋　作衛〔新報〕明四三　二〇　一
日本と局外中立　高橋　作衛〔國際〕明四四　九　五―一〇
歐洲の中央に忘れられたる中立鄉モレスネー　高橋　作衛〔新報〕明四四　二一　一―二
中立領域の不可侵　立作太郎〔新報〕大二　二三　七
中立領域の庇護を論じ第二回平和會議條約の一誤謬に及ぶ　立作太郎〔新報〕大二　二三　一〇
永久中立國を論ず　立作太郎〔法協〕大四　三三　四
局外中立の權利義務に關する英米間の爭議　立作太郎〔外時〕大四　二三　二六〇
歐洲に於ける永世中立點　泉　哲〔國家〕大四　二九　一
現戰爭に於ける中立領土の侵害問題　立作太郎〔外時〕大五　二三　二七四
現戰爭に於ける中立國の無線電信　立作太郎〔國家〕大五　三〇　七
戰時中立の性質　立作太郎〔國家〕大五　三〇　一〇
現戰爭開始の際獨逸の白耳義に對する行動に就て　遠藤　源六〔國際〕大五　一四　一〇
戰爭と永世中立條約　牧野　義智〔國國〕大五　四　一三
航空機と中立國　小山精一郎〔國際〕大七　一七　四
中立國船中の郵便物の押收　立作太郎〔國際〕大七　一六　四
國際組織計畫に於ける永世中立の問題　綠蔭生〔法政〕大七　一五　九
永世中立國の將來　泉　哲〔外時〕大八　三〇　三五九
中立船內の敵貨と敵船內の中立貨　板倉　卓造〔三學〕大八　一三　六―一〇
局外中立規程の過去及び將來　稻田周之助〔新報〕大一三　二四　七
Neutralisation と International ism　松原　一雄〔國際〕大一五　二五　三

【極東】東洋を見よ

【極東共和國】

極東共和國の出現　泉　哲〔外時〕大九　三一　三七四
極東共和國憲法正文　市村　光惠〔法叢〕大一一　八　五

【拒絕證書】手形―拒絕證書を見よ

【虛無主義】參照＝無政府主義。

虛無主義論　木村誠次郎〔志林〕明三三年　一卷　四―五號

【希臘】參照＝東方問題。バルカン半島。

希臘人の海外移住を論ず　鈴木　文治〔國家〕明四一　二三　一一
一九〇七年希臘國詮査斯の結果　高橋　二郎〔統集〕明四三　一　三五四
白耳義希臘及支那の現在の地位　蜷川　新〔國際〕大六　一五　九
希臘領域內に於ける金銀の增加　高橋誠一郎〔三學〕大一〇　一五　二

政治

官革對抗の希臘　神川　彥松〔外時〕大五　二四　二九九
希臘の政局　米田　實〔國際〕大九　一九　二
希臘の政治組織　森　凱雄〔國國〕大一〇　九　一一
希臘政局の動搖に就て　長瀨　鳳輔〔外時〕大一〇　三三　三九二
近東形勢の一面（希臘の政情）　米田　實〔外時〕大一三　三七　四三六
ギリシヤ政爭管見　煙山專太郎〔早政〕大一五　一　三

對外關係

希土緊張の原因　長瀨　鳳輔〔外時〕大三　二〇　二三二
希土緩和の眞相　長瀨　鳳輔〔外時〕大三　二〇　二三三
巴爾幹の政局と希臘　重德　來助〔外時〕大四　二一　二五二
講和會議と希臘　米田　實〔外時〕大八　二九　三四七
近東の一大問題（希臘政局變動と外交關係）　米田　實〔國際〕大一〇　二〇　二―三
マケドニア問題の再燃　長瀨　鳳輔〔外時〕大一四　四二　五〇五

【希臘】（古代）

希臘人及羅馬人の政治思想　津島　壽一〔國家〕明四四　二五　二
希臘詭辯學者の哲理及び國家論　筧　克彥〔法協〕大二　三二　五
希臘經濟思想の特質及び價値　舞出長五郎〔國家〕大六　三一　八
希臘に返りて　長谷川萬次郎〔我等〕大八　一　七
古代希臘に於ける國家理論　森口　繁治〔法論〕大七　一　一二
羅馬に於ける希臘思想の體系と其政治思想　今中　次麿〔同論〕大九　一　二
ギリシヤ思想の體系とその政治思想の內容　今中　次麿〔同論〕大九　一　一
希臘思想家の富に關する觀念　高橋誠一郎〔國經〕大一〇　二〇　二
希臘に於ける貨幣及び利子

學說　高橋誠一郎〔三學〕大一〇年一五卷三號
希臘唯一の法曹テオフラストと希臘私法　寺田　四郎〔國國〕大一〇　九
古代希臘法制　寺田　四郎〔國國〕大一〇　九　七
希臘羅馬時代の同盟　牧野　義智〔國際〕大一〇　一〇
古代希臘及び羅馬に於ける經濟思想　闕　未代策〔國國〕大一一　一〇九　一二一
古代希臘に於ける共產主義的革命　ペアー〔我等〕大一一　四　三
希臘經濟思想概觀　梅北　未初〔商研〕大一一　二　一
希臘思想の背景と經濟論の萌芽　谷口彌五郎〔我等〕大一三　五
希臘に於ける自然法の觀念　船田　亨二〔法協〕大一三　四一　一一四
ヒーシオドスの「エルガ」　高橋誠一郎〔三學〕大一三　一八　八
古代希臘のデモクラシーと其國民性　三浦　新七〔商研〕大一四　五　二
希臘悲劇の基調　伊東勇太郎〔長彙〕大一四　五　二
希臘時代の金融業に就て　高野　忠雄〔金融〕大一四　二　七一八
古代希臘上期の詩歌中に現れたる社會狀態　高橋誠一郎〔三學〕大一五　二〇　五
ギリシヤの奴隸制度　柳澤　泰爾〔法治〕大一五　五　六

【基督教】

參照＝寺院法。宗教。

國際法と耶蘇教との關係　井上　毅〔國家〕明四四　五　五三
支那人民の排外的精神殊に基督教に對する嫌惡な情は竟に變移するの途なきや乎　矢野　仁一〔外時〕明三五　五　五五
對米問題の難澁と日本基督教徒の責任　片山　潛〔洋經〕明四二　一　五〇〇
基督教と社會主義　瞑鵬　隱史〔東經〕明四二　五九
基督教と法律問題　久　古〔新聞〕明四三　一　六四二
舊約全書に現はれたる社會思想　高橋誠一郎〔三學〕大二　一七　一一一
佛教とキリスト教との異同　姉崎　正治〔法政〕大六　一四　八
支那の國教問題と基督教徒　桑宗　隨藏〔外時〕大六　二五　二九七
ケッテレル僧正と其の「勞働問題及び基督教」　高橋誠一郎〔三學〕大六　一一　一二
道德生活に於ける教會の位置　佐々木英夫〔法政〕大九　一七　二
基督教會と徵利問題　高橋誠一郎〔三學〕大一〇　一五　七一二
舊約書中の律法　石橋　智信〔法協〕大一一　四〇　三一四
支那反基督教運動の一考察　清水　安三〔我等〕大一一　四　六
基督教文明の發展概論　財部　靜治〔經叢〕大一一　一四　六
中世教會史要領　佐々木英夫〔法政〕大一一　一九　四一〇　一一二
原始基督教と共產主義的思想　三邊　金藏〔三學〕大一三年一七卷一一二號　一七　一六
加特力教の社會論者に就て　田島　錦治〔經叢〕大一三　一六　三
原始基督教と社會問題　高橋誠一郎〔三學〕大一三　一七　五一六
原始基督教の社會思想　高橋誠一郎〔三學〕大一三　一七　八
米國に於ける基督教會と勞働運動　水上鐵次郎〔社政〕大一三　一　三〇
加特力教經濟學の衰滅　高橋誠一郎〔社政〕大一三　一　四九
加特力教徒と對米問題　稻畑勝太郎〔外時〕大一四　四二　四九五
基督教の影響を受けたる社會思想　尾形　繁之〔商經〕大一四　一一　四〇
舊約聖書の法律觀　穗積　重遠〔民衆〕大一五　二　四一　六

【寄留法】

寄留法施行の結果と現住人口の調方　石川　惟安〔統集〕大四　一　四〇八
戶籍法改正案及寄留法案に就て　山內確三郎〔法記〕大三　二四

【ギルド】

參照＝組合。

ギルドの起源に就て　石卷　良夫〔國經〕明四二　七
マヂシヤル教授のNational-Guilds評論梗概　三邊　金藏〔三學〕大八　一三　一三
中世Guildsの文化史上に於ける意義　野村彙太郎〔三學〕大九　一四　四一六
ナショナル・ギルヅと國家主權との關係に就て　中島　重〔同論〕大九　一　二
ギルドの起原に就て　園　乾治〔三學〕大一〇　一五　一
ギルド制度の下に於ける產業組織　古賀　進〔社政〕大一〇　一　一五
ギルド政策論　土田　杏村〔我等〕大一一　四　一
英國の建築ギルド　松岡　尙義〔社政〕大一一　一　一八
ギルドと幣制に就て　田中　忠夫〔國經〕大一三　三六　三
チュルゴーのギルド解散令と水野越前守の問屋組合禁止令　瀧本　誠一〔三學〕大一四　一九　二
歐洲に於ける中世ギルドの起源に就て　松崎　實次〔商工〕大一五　一　三

【ギルド社會主義】

參照＝社會主義。勞働組合。

集散主義及サンヂカリズム批評としてのギルドソシヤリズム　小泉　信三〔國家〕大六　三　五一六
ペンチーの組合社會主義論　河田　嗣郎〔經叢〕大八　九　一
ギルドソシアリズムの社會學的考察　高田　保馬〔政治〕大八　一　二

ギルド社會主義の國家觀　加田　忠臣〔三學〕大九　一四　二一三
再論 Guild Socialism　小泉　信三〔三學〕大九　一四　二一四
ギルト社會主義者の「價格」及び「地代」觀　津田　武二〔國經〕大一〇　三〇　一
ギルドソーシアリズムの職能聯邦國　中島　重〔同論〕大一〇　一　五
組合社會主義に對するウイザアスの批評　三邊　金藏〔三學〕大一〇　一五　七
ギルド社會主義の批評　上田貞次郎〔我等〕大一一　四　一
ベーア「ギルド社會主義の起源と本質」（譯）　小泉　鐵〔我等〕大一一　四　一
ギルド社會主義に對するウエッブ氏の批評　平木　泰治〔商研〕大一〇　一　二
ギルド・ソーシャリズム二ケ年間の實驗　高橋　正熊〔社政〕大一一　一　二五
ギルド社會主義者の銀行管理論　上田貞次郎〔財經〕大一三　一二　二

【金（キン）】

金銀比價變動の一影響　金井　延〔法協〕明二七　一三　四
從一四九三年至一九〇〇年貴金屬史　小塚　貞義〔統集〕明三五　一　二五〇
金銀比價の變動を目的とする數種の考案に就て　山崎覺次郎〔國家〕明三七　一八　二〇六
上海に於ける貴金屬及通貨の賣買習慣　大平　賢作〔國經〕明三九　一　七
金產額と物價との關係　瀧谷　善一〔國經〕明四二　七　一一二
金產出額の增加に就て　君島　一郎〔國家〕明四三　二四　一〇
倫敦市場と貴金屬の集散　田中鐵三郎〔國家〕大二　二七　三
地金銀の市場に就て（講演）　小野英二郎〔國家〕大二　二七　八
我邦に於ける金及銀の產額に就て　相原　重政〔統集〕大三　一　三九七
金銀に關する一般的統計　三枝　茂智〔統集〕大四　一　四一四
金地金の價格騰貴に就て　河上　肇〔經叢〕大六　五　五
金地金の價格騰貴に關する河上博士及び福田博士の論文を讀みて　山崎覺次郎〔國家〕大六　三一　一二
國際間の金の移動の停止　戶田　海市〔經叢〕大七　六　一
金の將來　植野　勳〔經究〕大一〇　一　二一三
希臘領域內に於ける金銀の增加　高橋誠一郎〔三學〕大一〇　一五　二
瑞典の金排除政策　松崎　壽〔商經〕大一二　一　三一
金拂下價格引上の問題　神戶　正雄〔時經〕大一三　一　二九
金に對する一考察　赤神　良讓〔經商〕大一三　三　三一一
金價政策の變更を論ず　小川鄕太郎〔イン〕大一四　一　一
世界に於ける金及銀の生產

及消費　中川　友長〔統集〕大一三　一　五一九
貨幣制度に於ける金の地位　田中　金司〔國經〕大一五　四〇　一一二

【銀（ギン）】

金銀比價變動の一影響　金井　延〔法協〕明二七　一三　四
支那に於ける銀價低落の物價に及ぼす結果　多久米三郎〔統集〕明二七　一　四一一　五一六〇
金銀比價の變動を目的とする數種の考案に就て　山崎覺次郎〔國家〕明三七　一八　二〇六
銀價騰貴の原因並に其影響　堀江　歸一〔國經〕明四〇　二　一
銀價の前途如何　芝本善次郎〔洋經〕明四一　一　四六九
銀價の高低と對淸貿易　海老原竹之助〔國經〕大二　一四　四
地金銀の市場に就て（講演）　小野英二郎〔國家〕大二　二七　八
我邦に於ける金及銀の產額に就て　相原　重政〔統集〕大三　一　三九七
金銀に關する一般的統計　三枝　茂智〔統集〕大四　一　四一四
銀に就て　尾上　利治〔國經〕大六　三一　一
鴉片と銀　矢野　仁一〔亞經〕大六　一　一
英米政府の銀塊購入　門脇　龍雄〔國經〕大七　二四　三
銀價に關する研究　小林　武雄〔三學〕大七　一三　六
倫敦銀塊市場の研究　門脇　龍雄〔國經〕大九　二八　三
支那に於ける銀の問題　善生　永助〔財經〕大九　七　五
銀價の前途と我が財界　梶原　仲治〔東經〕大九　八二　二〇六九
支那の銀に就て　水田　淳亮〔亞經〕大一〇　四　一四
銀の將來　高木友三郎〔經究〕大一〇　一　三
銀の現勢　中村三之丞〔銀研〕大一〇　一　三
希臘領域內に於ける金銀の增加　高橋誠一郎〔三學〕大一〇　一五　二
對支貿易と銀塊相場　高木友三郎〔經究〕大一〇　一　四
最近數年間に於ける銀價の動搖　堀江　歸一〔三學〕大一〇　一五　六
銀に就て　梶原　仲治〔東經〕大一〇　八三　二〇八七
ビットマン條令と銀塊相場　山口　巖〔商事〕大一二　四　二
世界に於ける金及銀の生產及消費　中川　友長〔統集〕大一三　一　五一九
紐育銀塊市場の一斑　高山　武雄〔銀叢〕大一四　五　二一四

【緊急狀態（キンキユウジヨウタイ）】

參照＝犯罪—違法を見よ

【緊急命令（キンキユウメイレイ）】

參照＝命令。立法。

必要を失したる緊急命令は緊急命令を以て取消すべし　江木　衷〔新報〕明四四　一　七
緊急勅令論　鹿野吾一郎〔國家〕明五　六　巳六二　壬六五
緊急勅令の廢止　一木喜德郎〔法協〕明三〇　一五　二
憲法上の疑義二則　穗積　八束〔國家〕明三一　一四　一六四
穗積博士の憲法上の疑義に

就て　上野　貞正〔國家〕明三三　一四　一六五
緊急勅令を以て憲法上の立法事項を規定することを得るや　島田　俊雄〔法協〕明三三　一八　一〇
岩田宙造君に答ふ　島田　俊雄〔法協〕明三三　一八　一三
緊急勅命に事後承諾を與ふるを非とする說　花井　卓藏〔新報〕明三三　一〇　一二三
緊急勅令に關する疑義及私見　曾根虎之助〔法協〕明三四　一九　一
法律に代るべき命令　江村忠之助〔法協〕明三四　一九　七
憲法第八條第一項に依り法律規定を變更又は廢止する勅令を發し之を帝國議會に提出し承諾を得さる爲め其將來に效力なきことを公布したるときは元の法律復た行はるべきや　副島　義一〔法政〕明三四　五　五二
緊急命令論　清水　澄〔內外〕明三六　一　三
選擧取締に關する緊急勅命の發布は憲法違反なり　吉見謹三郎〔新聞〕明三六　一　一三四
緊急勅令に就て　清水　澄〔明學〕明三八　一　九六
緊急命令の承諾　上杉　愼吉〔志林〕明三八　七　一〇
緊急勅命を以て議會承諾前の緊急勅命を廢止するは違憲なり　美濃部達吉〔新報〕明三九　一六　一
緊急命令は議會の不承諾に依りて當然其效力を失ふものなりや否やを論ず　美濃部達吉〔志林〕明三九　八　一
法律に代るの勅令の議會承諾前の廢止　穗積　八束〔新報〕明三九　一六　三
非立憲　上杉　愼吉〔法政〕明三九　一〇　三
緊急勅令の廢止及提出に關する實例と學說　水野錬太郎〔法協〕明三九　二四　四
緊急命令の議會承諾前の廢止に就て穗積博士に答ふ　美濃部達吉〔國家〕明三九　二〇　四
緊急勅令論　井上　密〔法政〕明三九　一〇　四—五
緊急命令の廢止　清水　澄〔志林〕明四一　一〇　一
緊急命令の起源を論ず　メンチエル〔國家〕明四二　二三　三
緊急勅命の廢止を論じ非常大權命令及豫算との關係に及ぶ　井上　密〔京法〕明四二　四　五
法律を廢止したる緊急勅命に就て　美濃部達吉〔國家〕明四三　二四　三
法律を廢したる緊急勅令　花井　卓藏〔新報〕明四三　二〇　四
帝國議會に提出するを要せざる緊急勅命有り得べきや　副島　義一〔法協〕明四三　二八　五
緊急勅令を論ず　清水　澄〔法協〕明四三　二八　七

憲法第八條の緊急勅令に付て　清水　澄〔新報〕大八　二九　八
帝國憲法第八條緊急勅令發布の要件につきて　清水　澄〔新報〕大八　二九　二
再び緊急勅令につきて　清水　澄〔新報〕大九　三八　五
緊急勅令の提出　稻田周之助〔新報〕大二　三三　二
緊急勅令論（大正十二年十二月十七日貴族院に於て）　花井　卓藏〔新報〕大三　三四　三
緊急勅令の效力　稻田周之助〔新報〕大三　三四　五

【キング】(Gregory King, 1648-1712)

グレコリー・キングの法規　戶田　海市〔京法〕大四　一〇　三
キングの法則と米麥價　河田　嗣郎〔經叢〕大六　四　五

【キングスレー】(Charles Kingsley, 1819-1875)

基督敎社會主義者としてのキングスレー　橫濱　禮吉〔三學〕大二　一六　一〇

【銀行（ギンコウ）】

參照＝貸付。株式。株式取引所。貨幣。爲替。金融。金利。證券。信託。信用。貯蓄銀行。手形交換所。取引所。農業信用。預金。利子。割引。
日本銀行課稅論に就て　阪谷　芳郎〔國家〕明二六　七　七一
國立銀行始末　土子金四郎〔國家〕明二六　七　七八
銀行とは何ぞや　山崎覺次郎〔法協〕明三八　二三　八
銀行及資本家の國民的義務　三倉　滋〔京法〕明三九　一　三
兌換券制限外發行法を論ず　堀江　歸一〔國經〕明三九　一　三
外國通貨銀行金融に關する要報　堀江　歸一〔國經〕明三九　一　三
銀行の資本金に就て　堀江　歸一〔國經〕明三九　一　三
國際銀行業の將來　山崎覺次郎〔法協〕明三九　二四　四
日本興業銀行改正法と商法　藤本怒一郎〔國經〕明三九　一　六
銀行正貨準備論　高橋　槃三〔法協〕明三九　二四　七
兌換券制限外發行法を論す　山內　正瞹〔國家〕明三九　二〇　八
保證準備制限擴張論　堀江　歸一〔國經〕明四〇　三　三
中央銀行增資論　堀江　歸一〔國經〕明四〇　三　三
保證準備發行力擴張の議を排す　堀江　歸一〔國經〕明四〇　二　四
我國の兌換券制度及其運用　無名氏〔日經〕明四〇　二　四
理想的支那の標準に關する提議を論じて金屬本位論に及ぶ　戶田　海市〔京法〕明四〇　二　四—五
銀行組織　佐野・善作〔國經〕明四〇　二　六
保證準備擴張論を排す　山內　正瞹〔國家〕明四〇　二一　二
日本銀行見返り品制度　田中　穗積〔國經〕明四一　四　一
日獨中央銀行の制限外發行　宇佐見美刀〔國經〕明四一　四　四

		年	卷	號
に就て	山崎覺次郎〔國經〕	明四一	五	四
殖民銀行政策論	山内　正瞭〔國家〕	明四一	三	一〇
移動銀行論	阿部　輝司〔國家〕	明四二	三	一
國際銀行論	加賀覺次郎〔國經〕	明四	六	一
手形交換所の銀行檢査	武田　英一〔國經〕	明四	七	一
アブヅルハミットの財産及外國銀行	副島　義一〔外時〕	明四	三	七
中央銀行の制限發行に就て	山崎覺次郎〔保評〕	明四	二	七
日本興業銀行と外資輸入	添田　壽一〔東經〕	明四	六〇	一五〇〇
商法第二六條第二項の改正と銀行業	米澤　貞二〔日經〕	明四	八	二
不動産抵當銀行の資本金に就て	上野　精一〔國家〕	明四	二四	三
勸業及農工銀行を土地抵當銀行となすの不可を論ず	横井　時敬〔日經〕	明四	七	六
銀行の投機的事業	氣賀　勘重〔三學〕	明四	三	六
當下半期の銀行業	米澤　貞二〔日經〕	明四	七	一二
銀行券	菅　武時〔國家〕	明四	二四	七
日本銀行の營業年限延長に就て	山崎覺次郎〔法協〕	明四	二八	九
銀行間に於ける取引關係	長島　毅〔新報〕	明四	二〇	一〇
日本銀行兌換銀行券發行稅法に就て	堀江　敏郎〔新聞〕	明四	一	六七一
不動産銀行問題を論ず	矢作　榮藏〔法協〕	明四四	二九	二一四
銀行券の性質	菅　武時〔日經〕	明四四	九	三
銀行の貸借對照表と其保證債務問題	宇佐美　力〔國經〕	明四四	一〇	五
通貨稅と銀行稅	河津　暹〔國經〕	明四四	一〇	一二
國際貿易と銀行	服部文四郎〔國經〕	明四四	一〇	五一六
銀行資本金の性質並に其運用法	服部文四郎〔國經〕	明四四	一一	六
日本勸業銀行法第十七條に就て	松崎藏之助〔日經〕	明四四	八	七
銀行預金準備論	山室　宗文〔國家〕	明四四	二五	九—一一
最近國際金融市場と日本銀行	肥部文四郎〔外時〕	明四四	一四	一六九
證券銀行論	服部　春一〔東經〕	明四四	六三	一二七六
兌換券の膨脹と兌換準備	服部文四郎〔日經〕	明四五	一一	三
中央銀行の正貨準備	山崎覺次郎〔法協〕	明四五	三〇	四
商業銀行と工業資金	松崎　壽〔日經〕	明四五	一一	五
國民經濟上に於ける中央銀行の位地	服部文四郎〔志林〕	明四五	一四	六
銀行の預金債權に就て	平能　北堂〔新聞〕	明四五	一	七五
平能北堂君の所論に就て	Y・T生〔新聞〕	明四五	一	七八一
銀行賣買の現象	黑澤　和雄〔東經〕	明四五	六六	一六六八
銀行員の不法行爲の原因及防止	黑澤　和雄〔東經〕	明四五	六六	一六七七
歐洲に於ける特異なる三種の銀行	小原喜三郎〔三學〕	大	六	四
保證準備發行額間接制限法の得失	服部文四郎〔國經〕	大	一二	一六
動産銀行の債券	服部文四郎〔國經〕	大	一四	三
東西銀行の基礎並に營業振りに就て	積　羽生〔日經〕	大	一四	三—六
近世に於ける銀行の集中運動に就て	高島佐一郎〔三學〕	大	七	四
商業銀行の工業放資を論ず	松崎　壽〔國經〕	大	一五	三
晝夜銀行に就て	黑澤　和雄〔東經〕	大	六七	一六八〇
生命保險業者と銀行業者との關係	岩間　六郎〔保評〕	大	六	四
銀行株を定取引に付するの利弊	黑澤　和雄〔東經〕	大	六七	一六八一
銀行財政の交錯點並に預金組織への進展運動殊に米國の聯合準備の新法に就て	高島佐一郎〔三學〕	大	八	二
無盡講と銀行條例	岩田　宙造〔新聞〕	大	三	一
保證準備制限を擴張すべき六箇條	清水文之輔〔東經〕	大	三	七〇
銀行業と生命保險業	高島佐一郎〔三學〕	大	四	九
日支銀行を論ず	村田　俊彥〔國家〕	大	四	二九
企業の流動力並に我國大銀行の實際研究	渡邊　鐵藏〔國家〕	大	四	二九
銀行支店網の利益と其普及難の理由	秋守常太郎〔洋經〕	大	四	一
本邦銀行業の集中に就て	高野岩三郎〔統集〕	大	四	一
銀行內國爲替尻の操縱に就て	細井安太郎〔商經〕	大	五	一
戰爭と兌換銀行券	服部文四郎〔國經〕	大	五	二〇
兌換券と物價と輸出入の關係を論ず	小川鄕太郎〔經叢〕	大	五	三
日支銀行法案概評	三宅嘉十郎〔三學〕	大	五	一〇
船舶抵當銀行問題	〔資料〕	大	五	二
日支銀行と滿洲銀行	一宮房次郎〔財經〕	大	五	三
兌換制度の停止と復興	堀江　歸一〔三學〕	大	五	一〇
保證準備の內容及本位	服部文四郎〔國家〕	大	五	三〇
貯蓄銀行取締役の責任	眞下　五郎〔辯協〕	大	五	二〇
地方金融の改善と銀行組織	本多　精一〔財經〕	大	五	三
貯蓄銀行條例第六條の優先權の性質及其の執行方法	板倉松太郎〔志林〕	大	五	一八
地方金融と銀行組織に關する補論	本多　精一〔財經〕	大	五	三
工業金融の改善と日本興業銀行	添田　壽一〔財經〕	大	五	三
地方銀行合同の急務	中根　忍〔東經〕	大	五	七四
銀行條例施行細則の改正が				

銀行簿記勘定科目の分類に及ぼせる影響　吉田良三〔會計〕大六一一
銀行業の原價計算　松村光三〔會計〕大六一一四一一二
銀行券發行の原理に就て　飯田靜次郎〔商經〕大六一一五
銀行の仕拂承諾勘定に就て　細井安次郎〔商經〕大六一一五
勸業農工銀行立法の精神　添田壽一〔財經〕大六一四八
銀行類別の學理的根據　西村文太郎〔國國〕大六五八一一〇九
勸業農工銀行方法の精神に就て　佐伯貴範〔財經〕大六四九
取引所と銀行との關係　河津暹〔新報〕大六二七一一
勸業兩行合併と銀行制度　添田壽一〔財經〕大六四三
日本銀行の見返品擴張を論ず　中村茂男〔國國〕大六五三
保證準備擴張問題　原信太郎〔東經〕大六七六一九二一
地方銀行の破綻に就て　鵜澤總明〔新聞〕大六一三一〇
銀行條例施行細則を論ず　下野直太郎〔會計〕大六七一
銀行なる名辭の由來に就て　武藤長藏〔國經〕大七二一一二六二六二
日本銀行保證準備擴張の議　大三藤奈良太郎〔財經〕大七五一一六二
日銀保證準備擴張を難ず　添田壽一〔財經〕大七五二
普通銀行貸借對照表の公告　只見徹〔亞經〕大七二二
保證準備擴張論と兌換券發行法の復古　服部文四郎〔國經〕大七二四二
勸業銀行と農工銀行との合併問題　矢作榮藏〔國家〕大七三二二一四
日本銀行保證準備擴張の是非　本多精一〔財經〕大七五二
勸業銀行と農工銀行との問題　河田嗣郎〔經叢〕大七六二一三
銀行と企業金融　富田久次郎〔國家〕大七三二二一三
勸業及農工銀行の合併に就て　戸田海市〔經叢〕大七六四
日本銀行兌換券發行法の改善に就て　高岡熊吉〔經叢〕大七七五
銀行會計上の新科目解說　細井安次郎〔商經〕大七一九
發券銀行と預金銀行　飯田靜次郎〔商經〕大七一一〇
銀行の工業化に就て　內藤章〔國家〕大七三二一
銀行業に於ける繰延資產と負債　大崎範一〔會計〕大八六三
銀行會計組織の改善　兒林百合松〔會計〕大八五四
我國銀行取引改善の根本方針　三宅嘉十郎〔三學〕大八一三四
銀行引受手形の流通　只見徹〔亞經〕大八三四
我國の銀行と手形引受業務　松崎壽〔國經〕大八二六六
國際銀行聯盟の必要　山成喬六〔財經〕大八六八
我國普通銀行の工業金融に就て　松崎壽〔商經〕大八一一三
再び銀行なる名辭の由來に就て　武藤長藏〔國經〕大八二六一一二八七一一四六
時代に逆行せる銀行恐慌の對策と銀行業者　岡部重一郎〔財經〕大九七五
銀行業の對財界策　大森研造〔經叢〕大九一〇六
銀行の支拂承諾の內容に就て　竹內常治〔東經〕大九八二二〇七一
我國銀行と貿易金融　三宅嘉十郎〔三學〕大九一四一三
近世銀行業の裏面　松崎壽〔銀研〕大一〇一一
銀行原價計算の研究　目白隱士〔銀研〕大一〇一一三
銀行信用調査の科學的考察　木村秀太郎〔銀研〕大一〇一二一三
事業資金と資金銀行の發達　勝田貞次〔銀研〕大一〇一二一三
銀行の本質に就て　泉俊秀〔銀行〕大一〇一三
銀行資金發達概觀　光山祐次郎〔銀研〕大一〇一三
勸農兩銀行合併問題に就て　飯田靜次郎〔商經〕大一〇一一
發券銀行の解放問題　青木得三〔經究〕大一〇一六
有意義なる勸農兩銀の合併　平野清〔商經〕大一〇一三一
日本銀行と輸入超過　黑田英雄〔東經〕大一〇八三二〇八二
勸農合併後の効果如何　今西彙二〔東經〕大一〇八三二〇九七
東洋銀行設立の議　志村源太郎〔東經〕大一〇八三二〇八三
銀行簿記に關し初學者に與ふる書　後藤新平〔外時〕大一〇三四四〇一
信託業務と銀行業務の交渉　鈴木喜代助〔銀研〕大一〇一二一一一一
銀行犯罪の實務的豫防法　榎並赳夫〔銀研〕大一〇一一一一一一一一一
私案カード式特別當座預金印鑑　水津木清〔銀研〕大一〇一一一一一一一一一
銀行營業部の新組織ユニット・システム　木村秀太郎〔銀研〕大一一三一
地方開發上より見たる銀行支店制度　青森忠恕〔銀研〕大一一三一
銀行組織問題管見　遠山貞一〔銀研〕大一一二一
萬國中央銀行の提案　鈴木良雄〔三學〕大一一一六一
銀行信用狀の研究　柄澤信吉〔銀研〕大一一三一一六
銀行券の特質と其發行政策　松崎壽〔銀研〕大一一二一
銀行三大機關設立論　遠山貞一〔銀研〕大一一二一
銀行內の諸規定　藤城敬二〔銀研〕大一一三二一三
我國に於けるビルブローカー銀行　紀清市〔銀研〕大一一三二
銀行の彙業主義と專業主義　春日井薰〔經商〕大一一一二一四
地方金融と勸業農工兩銀行の合同　志村源太郎〔財經〕大一一九二
事務取扱順序と所屬帳簿及傳票　鈴木喜代助〔銀研〕大一一二三
保險及び銀行事業の相互化に就て　栗津清亮〔國經〕大一一三三
「銀行研究」の旅　中村三之丞〔銀研〕大一一三三
特殊銀行解放の必要　堀江歸一〔銀研〕大一一三三
私論銀行發展策　田邊實郎〔銀研〕大一一二二一四
當座勘定に於ける積數の算定　白井廉久〔銀研〕大一一二三

ヴアンダーリップ氏の國際銀行案　松崎　壽〔銀研〕大一　二　三
當座勘定解法　木村秀太郎〔國經〕大一　三三　四—五
實地銀行事務　紀　清市〔銀研〕大一　三　四五　四六　一二
我國銀行經營の根本問題　松崎　壽〔銀研〕大一　三　四
本邦地方銀行問題管見　榎並　赳夫〔銀研〕大一　二　四—五
本邦貨幣銀行制度管見　平野　清〔銀研〕大一　三　五
銀行に於ける守衛の立場　守田　廣〔銀研〕大一　三　五
交換所組合銀行の報告に就て　宮本　一郎〔銀研〕大一　三　五
分業主義か兼業主義か　篠崎　成二〔銀研〕大一　二　五
日銀兌換券發行高の季節的變動　汐見　三郎〔經叢〕大一　一五　五
預金と準備金と貸出に關する考察　木村秀太郎〔銀研〕大一　二　五
生糸機關銀行設立論　草島完太郎〔銀研〕大一　三　六
出納係の組織　水津木　清〔銀研〕大一　二　六
證券銀行と兼營銀行　松崎　壽〔銀研〕大一　二　六
銀行營業費に對する考察　遠藤　孝一〔銀研〕大一　二　六
銀行の信用調査組織　寺澤進一郎〔銀研〕大一　二　六
國際中央銀行論　清水文之輔〔東經〕大一　八四　二一四
日本銀行國有論　清水文之輔〔東經〕大一　八四　二一九
日銀制度改革の根本問題　平野　清〔銀研〕大一　五　一—二
行員の技術的養成と人格的養成　川中・信他〔銀研〕大一　五　一
傳票の改良方法に就て　松川　隷治〔銀研〕大一　五　一
支拂準備金問題の考察　奥田　勳〔銀叢〕大一　一　一
銀行犯罪の考察と豫防の研究　伊藤由三郎〔銀叢〕大一　一　一—六
銀行の廣告と預金吸收策　左右田誠一〔銀研〕大一　五　一—二
銀行と會計士の相互關係　佐藤　壽吉〔銀研〕大一　五　一
最近米國に於ける銀行論の新著　平野　清〔銀研〕大一　四　一
銀行概念明定の必要を論ず　松島　喜作〔銀叢〕大一　一　一
金融機關の準備殊に銀行改善の要諦　杉　程次郎〔銀叢〕大一　一　一
安田銀行大合同の財界に及す影響　神戸　正雄〔銀叢〕大一　一　一
特殊銀行整理の標準　梶原　仲治〔エコヲ〕大一　一　一
當座元帳樣式の研究　坂井　正〔銀叢〕大一　一　一—二
保證準備擴張問題私見　佐野　包治〔銀叢〕大一　三　一
銀行會計に於ける支出勘定と原價計算　藤谷　國藏〔銀研〕大一　四　一
銀行の債券發行について　春日井　薫〔經商〕大一　二　三—四
出入金額欄位置改良私案　松川　隷治〔銀研〕大一　五　二
執務上より見たる組織改良の目標　松井　淳吉〔銀研〕大一　五　二
銀行代理事務獨立問題私見　榎並　赳夫〔銀研〕大一　五　二
銀行員たるべき資格　川島　朝輝〔銀研〕大一　四　二
銀行主要簿と其改善方法　藤城　敬二〔銀研〕大一　四　二
銀行の企業的性質を論ず　石黑　武松〔銀研〕大一　五　二
普通銀行の經營方針と銀行政策　細矢　祐治〔銀研〕大一　四　二—四
工業銀行組織改善に對する考察　松島　喜作〔銀研〕大一　四　二
爲替銀行本支店間計算制度に就て　川中　信也〔銀研〕大一　四　二
電信爲替と銀行の權利義務　妹尾　一雄〔銀研〕大一　五　二
銀行券の制限と預金の制限　奥田　勳〔銀叢〕大一　一　二
金融機關の整備殊に銀行制度改善問題の要諦　杉　程次郎〔新聞〕大一　三三　三
銀行合同及地方銀行協會設立論　榎並　赳夫〔銀研〕大一　四　三
出納員に與へ併せて銀行關係者の一考を求む　不遇　多生〔銀研〕大一　四　三
銀行檢査制度に就て　藤城　敬二〔銀研〕大一　五　三
銀行の被害程度と財界の前途　福井　源一〔銀研〕大一　五　三
積銀破綻の眞相と銀行改善の根本策　渡邊・仙南〔銀研〕大一　四　三
財團金融と日本勸業銀行　松崎　壽〔銀研〕大一　四　三
支店銀行制度に付て　奥田　勳〔銀叢〕大一　一　三
銀行資金の一考察　左右田誠一〔銀叢〕大一　一　三
本邦普通銀行と外國爲替業務　加藤　和根〔銀叢〕大一　一　三
特殊銀行の不始末を如何にする　堀江　歸一〔エコヲ〕大一　一　三
銀行條例を改正すべし　成瀨　義春〔財經〕大三　一〇　三
松崎教授著「銀行及金融」　細井安次郎〔銀研〕大一　五　三
銀行會館なる名辭が二百年前支那に存せし事實の發見　左右田誠一〔銀叢〕大一　一　三
爲替書類の整理私案　武藤　長藏〔商濟〕大一　二　一
銀行用度品購入の數理的研究　江浦　艇作〔銀叢〕大一　一　四
執務上より觀たる他店勘定元帳の樣式　二宮　皆太〔銀研〕大一　四　四
我國銀行政策の缺陷　森田　桂山〔銀研〕大一　四　四
銀行業整理問題　松崎　壽〔銀研〕大一　四　四
殖民地銀行問題　堀江　歸一〔エコヲ〕大一　一　四
銀行信用狀の統一　山本美越乃〔銀叢〕大一　一　四—五
本邦金融組織と當面の銀行政策　柄澤　信吉〔銀研〕大一　四　四
地方銀行と不動產金融　左右田誠一〔銀研〕大一　四　四
災害防禦と銀行業務　小池　充彥〔銀叢〕大一　一　五
爲替銀行改善問題私見　松島　喜作〔銀叢〕大一　一　五
　　松崎　壽〔銀研〕大一　四　七

		年	卷	號
擔保商品調査の要諦	木原　三郎〔銀研〕	大二三	四	七
本邦銀行帳簿式の創設者とその消息	瀬尾幸三郎〔銀研〕	大二三	四	七
銀行員の智識養成に就て	川中　信他〔銀研〕	大二三	四	七
銀行と保險會社との聯絡	荒木　秀一〔銀研〕	大二三	四	七
平易なる銀行論	松島　喜作〔銀研〕	大二三	四	七
地方銀行問題管見	榎並　赳夫〔銀研〕	大二三	二	六
救濟問題と銀行及金融	横田　義夫〔銀叢〕	大二三	一	六
銀行の保證債務の本質に就て				
銀行恐慌と銀行革命	石黒　武松〔銀研〕	大二三	四	六
銀行と黨弊（實は日銀改革問題）	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	六
信託會社と銀行	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	七
銀行監督問題	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	八
保證準備擴張と限外發行	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	九
銀行合同の氣運	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	一〇
銀行資本金制限の引上	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	一〇
普通銀行に於ける黨爭の弊	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	一三
シドニー・ウエッブの銀行國有論	松崎　壽〔商經〕	大二三	一	一三
銀行員の罪惡と部内突合法との關係	川村　環一〔計理〕	大二三	一	一四
銀行重役の兼業を禁ぜよ	清水文之輔〔東經〕	大二三	八五	二二四
我國銀行の破綻の原因	大館　堯壽〔洋經〕	大二三	一〇六	三一〇
特殊銀行と普通銀行	松崎　壽〔商經〕	大二五	一	三〇
銀行重役の責任	松波仁一郎〔新聞〕	大二三	一〇六	三一〇
松波博士の銀行重役の責任を讀みて偶感			一〇七	三一〇
我國銀行業の鳥瞰的考察	高木友三郎〔新聞〕	大二三	一	二一一四
震災と銀行文書	石澤久五郎〔金融〕	大二二	二一	一二
營業報告書に就て	藤城　敬二〔銀研〕	大二三	六	一
振替票計算區分に就て	二宮　皆次〔銀研〕	大二三	七	一
銀行保證業務の實際	松川　隷治〔銀研〕	大二三	六	一
銀行合同より銀行聯合へ	妹尾　一雄〔銀研〕	大二三	七	一
經濟調査機關と銀行信用調査機關	石卷　良夫〔銀研〕	大二三	二	一
銀行信用に關する一考案	高村　光次〔金融〕	大二三	一	一
Confirmed irrevocable bankers credits	五十子宇平〔金融〕	大二三	一	一二
證券銀行を特設せよ	松永　義雄〔辯協〕	大二三	二八	一
銀行原價計算と經費の解剖	南波　禮吉〔エコ〕	大二三	二	一
銀行に於ける原價計算	藤城　敬二〔銀研〕	大二三	七	一
「銀行に於ける原價計算」に就て太田哲三氏の教を乞ふ	太田　哲三〔金融〕	大二三	一	一
日銀發行制度改善と復興資金	木村秀太郎〔金融〕	大二三	一	三
	松崎　壽〔銀研〕	大二三	六	二

		年	卷	號
銀行とは何ぞや	中村　光次〔銀叢〕	大二三	二	二
銀行と信託會社の關係	細矢　祐治〔銀研〕	大二三	六	二—五
銀行事務精査方法	三木　守〔銀研〕	大二三	七	三
銀行業に於ける原價計算	陶山誠太郎〔商經〕	大二三	一	三—三
銀行の本質	多田　喜一〔銀研〕	大二三	七	三
今後の銀行界の趨勢	成瀬　正恭・神田　鎌藏・原　邦藏〔銀叢〕	大二三	三	三
一つの銀行理論	橋爪　明男〔經論〕	大二三	二	三
フランスに於ける新刊銀行論書	串本友三郎〔銀研〕	大二三	六	三
企業豫算管理と銀行業	菅谷　重平〔銀叢〕	大二三	三	四
商人救濟と債權銀行援助策	正岡　勝男〔銀叢〕	大二三	二	四
大陸銀行と英國銀行との差異に就て	小山　英次〔銀叢〕	大二三	三	四
銀行事業年度と其の名稱	高木　堅〔銀研〕	大二三	六	四
送金案内に就て	小坂　珠城〔銀研〕	大二三	六	四
銀行の本質	多田　喜一〔銀研〕	大二三	七	四
富豪經營銀行の株式組織化を論ず	橋本　良平〔銀研〕	大二三	七	四
銀行破綻研究	米山　英利〔銀叢〕	大二三	二	四
發行稅廢止と銀行の合同	鈴木　穆〔エコ〕	大二三	二	四
Confirmed bankers credits に就て	竹内　恕平〔銀研〕	大二三	七	四—五
銀行分課制度の諸問題	藤城　敬二〔銀研〕	大二三	六	五
出納係と計算係との連絡	松川　隷治〔銀研〕	大二三	六	五
銀行積立金の考察	奥田　勳〔銀研〕	大二三	六	五
地方銀行と信用調査組織	藤城　敬二〔銀研〕	大二三	七	五
吾財界の前途と銀行の任務	保井　猶造〔銀叢〕	大二三	三	五
銀行兼營と投資	竹内　恒吉〔銀叢〕	大二三	二	五
勞働銀行の勃興	河島　海雄〔銀叢〕	大二三	二	五
銀行の信用調査に就て	岩崎　靜也〔銀叢〕	大二三	二	五
工場財團抵當貸付手續	正岡　勝男〔銀叢〕	大二三	三	五
臺銀鮮銀の發行制度改善問題	松崎　壽〔銀研〕	大二三	三	六
行詰れる都合大銀行の實務對策	木村秀太郎〔銀叢〕	大二三	二	六
銀行業の公共性を論じ山崎博士の批評に答ふ	勝田　貞次〔三學〕	大二三	一八	一二
財界恢復と銀行業者	高柳松一郎〔銀叢〕	大二三	二	六
貸金庫取扱の理論と實際	山田　五郎〔銀叢〕	大二三	二	六
相續法上の留保と不動產抵當貸付	倉井　敏藏〔銀研〕	大二三	六	六
銀行引受手形の發達を望む	今村　幸男〔銀叢〕	大二三	三	六
銀行と保險との兼營	神戸　正雄〔時經〕	大二三	一	二〇
銀行と信託會社との關係	松崎　壽〔商經〕	大二三	一	三五
支拂承諾を論ず	稻坂　碪〔銀叢〕	大二三	二	五
銀行と手形引受業者との關係	松崎　壽〔商經〕	大二三	一	三六

保證準備擴張論と金利問題　結城豐太郎〔エコ〕大一三　二巻一〇号
ギルド社會主義者の銀行管理論　上田貞次郎〔財經〕大一三　一一　一一
保證準備擴張の是非　堀江歸一〔エコ〕大一三　二　一一
銀行の取引擴張策　マク・グレガー〔銀叢〕大一二一一　二二二四　一一六四五
金融界の渦紋と銀行の安處　伊庭謙造〔銀研〕大一四　九　一
銀行監督の現狀と銀行條例改正の急務　木村秀太郎〔金融〕大一四　二
銀行國有と獨立勞働黨　春日井薫〔銀研〕大一四　九
銀行の人事行政と其運用　藤城敬二〔銀研〕大一四　九
銀行の新經營法　勝田貞次〔銀研〕大一四　八
銀行營業部の分課と其改善　藤城敬二〔銀研〕大一四　八
銀行業發展策と行員問題　勝田貞次〔銀研〕大一四　九
銀行減配論（銀行業の裏面）　目白隱士〔銀研〕大一四　九
取立の技術的並に省察的要義　松岡都城〔銀研〕大一四　九
中世寺院法と銀行業　山口正太郎〔銀研〕大一四　八
銀行兼營論　松山五葉〔銀叢〕大一四　五
銀行預金の原價計算法に就て　末松留男〔銀研〕大一四　九
貨幣及銀行兩主義の貨幣理論と銀行券發行制度　中西仁三〔經研〕大一四　二
若干時論に關說されたる銀行論序說　高島佐一郎〔國經〕大一四　三九　二
銀行並に信託會社に對する政策　堀江歸一〔エコ〕大一四　三　二
銀行問題短評　早川清〔銀叢〕大一四　五　二
銀行營業部の分課組織改良案　勝田貞次〔銀研〕大一四　八　二
青年銀行員に對する希望　星野行則〔銀叢〕大一四　五　三
銀行減配問題と銀行監督の革新　石卷良夫〔銀研〕大一四　九　二
當座振入制度の改良を論じ併て各地組合銀行に望む　水野淳二〔銀研〕大一四　八　二
信用受授と銀行の責任　佐々木駒之助〔銀叢〕大一四　四　二
內外銀行金融鳥瞰　山村峻吉〔銀叢〕大一四　四　二—六
再燃したる銀行合同及極致點　松尾藤平〔銀叢〕大一四　五　二
財界の不況と銀行政策　本田文雄〔銀叢〕大一四　五　二
當座振込に就て小坂氏に質す　水野淳二〔銀研〕大一四　九　二
當座振込に就て水野氏に答ふ　小坂珠城〔銀研〕大一四　九　三
再び當座振込に關し小坂氏に質す　水野淳二〔銀研〕大一四　九　四
當座振込に關する檢討を評す　岡上虎三郎 高木武比古〔銀研〕大一四　九　五

銀行經營上原價計算の應用に就て　桐生梅吉〔銀叢〕大一四　四巻六号
家督相續による不動產擔保貸越契約の承繼に就て　太田義繁〔銀研〕大一四　八　三
地方銀行と不動產の制限的資金化　戶田常造〔銀叢〕大一四　五　三
銀行の出張所制度に就て　小坂珠城〔銀研〕大一四　八　三
日銀營業週報の見方　荒井海一〔銀研〕大一四　九　三
全銀行分課組織の基調　勝田貞次〔銀研〕大一四　八　三
銀行業發展策と預金扱收問題　勝田貞次〔銀研〕大一四　九　三
銀行出張所の事務取扱方法　小坂珠城〔銀研〕大一四　九　三
銀行と通貨創設　越智昌三〔經研〕大一四　三　三
電話擔保の理論と其手續　市川修三〔銀叢〕大一四　四　三
支拂承諾に就て　岡上虎三郎〔銀研〕大一四　八　三
再び仕拂承諾に就て　岡上虎三郎〔銀研〕大一四　九　三
銀行に於ける保證業務に就て　妹尾一雄〔銀研〕大一四　八　三—五
保證準備擴張の說　堀江歸一〔エコ〕大一四　三　三
保證準備擴張論　榊原二郎〔銀研〕大一四　八　三
銀行の諸給與規定研究　野口作平〔銀叢〕大一四　四　四
銀行關係法律問題　大田孝平〔銀叢〕大一四　四　四
銀行の信用と其利益　須佐美芳男〔銀研〕大一四　八　四
普通銀行の國際金融業務　松崎壽〔銀研〕大一四　八　四
銀行と貨幣との關係　高宮誠〔金融〕大一四　二　九
我國に於ける銀行集中の趨勢と銀行政策に就て　黑川芳藏〔同論〕大一四　一　一六
特殊銀行整理の目標　平野清〔エコ〕大一四　三　一五
爲替副報告再使用より起る銀行犯罪豫防法　中山茂樹〔銀叢〕大一四　四　四
銀行に於ける代表役員組織の運用と其效果　勝田貞次〔銀研〕大一四　八　四
銀行發展策と貸付業務の改善　勝田貞次〔銀研〕大一四　九　四
ブラットの「銀行破綻の原因と其對策」　木村祐雄〔銀研〕大一四　九　四
銀行に於ける貸金庫事務　藤城敬二〔銀研〕大一四　九　四—五
當座入金票の本質と印紙稅　早川四郎〔銀研〕大一四　八　五
最近東京に於ける銀行勘定　前田薰一〔金融〕大一四　二　九
銀行關係の稅制整理に就て　岡田純夫〔銀研〕大一四　九　五
特殊銀行整理の前提　成瀨義春〔財經〕大一四　一三　一五
銀行の社會的考察　黑川芳藏〔同論〕大一四　一　一八
銀行の本質と金融組織の歸趨　勝田貞次〔銀叢〕大一四　五　五
銀行と改正破產法に就て　末松留男〔銀研〕大一四　九　五
銀行制度の改善難　松崎壽〔銀研〕大一四　九　五
銀行制度に於ける兼營主義と分業主義との接近　田中金司〔國經〕大一四　三八　三九　一三
信託預金と銀行定期預金の

差異を論ず　武田貞之助〔新聞〕大一四　一　二五九
日英商事銀行の對照　松尾　藤平〔銀叢〕大一四　一一六
銀行制度の改善　高城仙次郎〔金融〕大一四　二　一〇
普通銀行と不動産貸付　豐田久和保〔金融〕大一四　二　七
銀行合同論　宗像　久敬〔金融〕大一四　二　一三
銀行組合法の制定を望む　石巻　良夫〔銀研〕大一四　八　六
銀行の廣告法に就て　小西　次郎〔銀研〕大一四　九八　一六
手形貸付動産擔保貸付の擔保品保管方法を論ず　大森　繁治〔銀叢〕大一四　五　六
銀行の減配勸告と協定勵行　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　三
我國銀行界の病弊　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　三三
送金の事務的要諦　都上　城三〔銀叢〕大一五　六　一一五
銀行檢査部實務誌　藤城　敬二〔銀研〕大一五　一〇　一一七
勞働銀行運動　木村秀太郎〔銀叢〕大一五　六　一一三
銀行に於ける原價計算　三木　守〔銀研〕大一五　一〇　一一七
都下五大銀行損益計算　稻葉新三郎〔銀研〕大一五　一〇　一
吾國商業銀行に適當なる信用調査方法　江崎　一造〔銀叢〕大一五　六　二一三
近代的銀行機能と經濟社會　多田　喜一〔經研〕大一五　三　一〇
吾が銀行生活　松山　五葉〔銀叢〕大一五　六　二一六
我國銀行の支拂準備金問題　山田秀苗 C.S.大島生 喜一 相關賀野信實〔銀研〕大一五　一〇　二
銀行の活動寫眞宣傳　林田和三郎〔銀叢〕大一五　六　三
日銀保證準備制度について　井上辰九郎〔銀叢〕大一五　六　三
歐洲諸國の發券銀行と幣制　鈴木　平吉〔國經〕大一五　四〇　三
銀行の固定貸付と其整理　堀江　歸一〔エコ〕大一五　四　五
銀行破綻の救濟策は銀行合同にあり　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇　三
再割引依賴銀行の法律上の地位　妹尾　一雄〔銀研〕大一五　一〇　三
銀行家の立場より見たる貸借對照表　長谷川忠平〔銀研〕大一五　一〇　三
銀行業務の刷新　成瀨　義春〔財經〕大一五　一三　九
銀行集中と銀行聯合　小西　次郎〔銀研〕大一五　一〇　四
我國銀行取付原因の一斑　慌井　品三〔銀研〕大一五　一〇　四
特別當座預金利息計算便法に就て　森下　武二〔銀叢〕大一五　六　四
銀行員の福祉的施設　早川　隆次〔銀叢〕大一五　六　五
「送金の事務的要諦」に關し都上氏の教を乞ふ　佐藤　正雄〔銀叢〕大一五　六　五
銀行の記帳規定　松山　岩根〔銀研〕大一五　一〇　五
特別當座預金照査事務に就て　中村　進午〔銀叢〕大一五　六　五
金錢借託と定期預金　細矢　祐治〔銀研〕大一五　一〇　五—七
銀行出張所原價計算の研究　竹田　英吉〔會計〕大一五　一八　五
景氣循環と銀行コール資金の移動と株式受渡　岩崎　勳〔銀叢〕大一五　六　六

渡　岡田　純夫〔銀研〕大一五　一〇　六
行員待遇の精神及方法　都上　城三〔銀叢〕大一五　六　六
預金係と出納係　末吉　留男〔銀研〕大一五　一〇　六
銀行合同の銀行經營及利潤に及ぼす影響　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇　六
銀行國營論に就て　三上　太一〔銀研〕大一五　一〇　六
普通銀行改善問題の要諦　松崎　壽〔銀研〕大一五　一〇　七
特別預金通帖喪失無效廣告　松村　勝利〔銀研〕大一五　一〇　六
銀行の本店支店及出張所に就て　武谷　成直〔銀研〕大一五　一〇　七
貯蓄銀行法の供託制度　服部　末治〔銀研〕大一五　一〇　六
日本銀行改善の問題　堀江　歸一〔エコ〕大一五　四　一〇
日本銀行の兌換準備　堀江　歸一〔エコ〕大一五　四　一二
銀行制度の改善　堀江　歸一〔エコ〕大一五　四　九
銀行社會化論　春日井　薰〔銀研〕大一五　一一　七
銀行と證券市場　菊本直次郎〔イン〕大一五　三　六
獨逸式銀行簿記法　串本友三郎〔銀研〕大一五　一〇　六—七
地方銀行の經營權　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四七
銀行合同　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四三
銀行合同と震災手形　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四五

英

英蘭銀行制度の缺點　山內　正瞭〔新報〕明三九　一六　八
英蘭銀行の利率引上策の實效　山崎覺次郎〔國家〕明四二　三　一
英獨兩國に於ける中央銀行問題　堀江　歸一〔國經〕明四一　七　六
英蘭銀行に關する研究　堀江　歸一〔三學〕明四三　三　一—二
英國の銀行準備金問題　堀江　歸一〔三學〕明四三　三　四—五
英蘭銀行の職務と組織　池島　誠三〔國家〕明四四　二五　九
倫敦金融と外國銀行支店　スギールデンゲ〔三學〕大二　七　二
英獨銀行經營の比較研究　高島佐一郎〔國經〕大四　一九　一—三
一九一四年八九月に於ける倫敦金融市場と英蘭銀行　〔三學〕大四　九　二十三
英國銀行條例停止顚末史料　飯島　幡司〔國經〕大五　二〇　四
英國貿易銀行設立計畫　飯島　幡司〔國經〕大六　二三　二
英國銀行條例改正論　堀江　歸一〔三學〕大七　三　五
英國銀行の一般備員に就いて　宿　瘤子〔財經〕大九　七　七
輓近英國銀行界の趨勢　小野　壽三〔銀研〕大一一　二　一
英國銀行制度の革新に就て　藤城　敬二〔銀研〕大一一　二　六
英國に於ける銀行合同の趨勢と其特色　堀江　歸一〔三學〕大一一　一六　七
英蘭銀行の兌換制度改善問題　松崎　壽〔銀研〕大一一　三　六
英獨銀行の比較研究　松島　喜作〔銀叢〕大一二　一　二
英國銀行合同論　十龜　盛次〔銀研〕大一三　五　二
英蘭銀行研究　北崎　進〔經商〕大一三　二　四—六
英蘭銀行準備金問題　青地玄三郎〔長彙〕大一二　二　二—三

倫敦市場に於けるビルブロ
ーカー業　池田了實〔銀研〕大一三　年卷六　號三
大陸銀行と英國銀行との差
異に就て　小山英次〔銀叢〕大一三　三
倫敦割引市場に就て　前田惟一〔銀研〕大一三　七　四
日英商事銀行の對照　松尾藤平〔銀叢〕大一四　一一六　五
英蘭銀行の發行法と新貨幣
制度の樹立　太田黒敏夫〔經商〕大一四　四　一一

支　那

支那に於ける外國銀行と其
改良　根岸佶〔國經〕明四一　五　五六
上海に於ける銀行組織　世古小次郎〔國經〕明四三　八　一一三
日支銀行を論ず　村田俊彦〔國家〕大四　二九　九
日支銀行法案概評　三宅嘉十郎〔三學〕大五　一〇　三
日支銀行と滿洲銀行　一宮戻次郎〔財經〕大五　三　三
支那に於ける外國銀行の爲
替業務　木村增太郎〔亞經〕大七　二　三
支那の錢莊　木村增太郎〔亞經〕大七　八　一一
支那新式銀行の發達　善生永助〔財經〕大一〇　八　一三
錢莊の發達に就て　及川恒忠〔亞經〕大一一　六　四
銀行會館なる名辭が二百年
前支那に存ぜし事實の發
見　武藤長藏〔商濟〕大一二　三　一
朝鮮
阪谷博士の朝鮮銀行監督權
論を駁す　黑澤龍濱〔東經〕明四四　六三　一五八七
鮮銀の改造　神戸正雄〔時經〕大一三　一　三
臺銀鮮銀の發行制度改善問
題　松崎壽〔銀研〕大一三　六　六
鮮銀不始末の眞因　鈴木穆〔エコ〕大一四　三　一八

獨　逸

獨逸銀行界の集中的新傾向　平尾丹治〔國經〕明四〇　三　一
日獨中央銀行の制限外發行
に就て　山崎覺次郎〔國經〕明四一　五　四
獨逸銀行事情一班　神戸正雄〔京法〕明四一　三　一
英獨兩國に於ける中央銀行
問題　堀江歸一〔國經〕明四二　七　六
獨逸に於ける地方團體共同
銀行の設立案　神戸正雄〔京法〕大二　八　一二
獨逸大銀行の發達　林屋友次郎〔三學〕大三　八　四—五
獨佛の海外銀行政策比較　豐崎善三助〔財經〕大三　一　一〇
獨逸大商事銀行の一端　十龜盛之〔東經〕大三　七〇　一七六四
英獨銀行經營の比較研究　高島佐一郎〔國經〕大四　一九　一一三
獨逸帝國銀行の振替業務　宗像久敬〔國家〕大四　二九　八—一〇
獨逸兼營銀行論　大矢和昇〔三學〕大七　三　五—七
戰時及戰後の獨逸銀行　棗田藤吉〔商經〕大八　一　幽一二 經一四
獨逸大銀行の取引所仲立業
に就きて　大森研造〔經叢〕大九　一〇　一

英獨銀行の比較研究　松島喜作〔銀叢〕大一三　年卷一號二
獨逸に於ける銀行及信用組
織發達の概要　住吉四郎〔銀叢〕大一三　一　一—三
獨逸銀行物語　中村三之丞〔銀研〕大一三　五　二
獨逸大銀行の組織部　オーブスト〔銀研〕大一三　五　三
獨逸大銀行の商工業に對す
る關係　須美芳夫〔銀叢〕大一三　一　六
獨逸に於ける銀行論の二名
篇と其著者　串本友三郎〔銀研〕大一三　四　七
獨逸の金融と中央銀行　堀江歸一〔エコ〕大一三　一　四一一—二
信用狀に關する獨逸銀行の
協定　濱野壽〔銀研〕大一三　七　一
獨逸レンテン銀行に就て　大森研造〔經叢〕大一三　一九　一—二
獨逸レンテン・バンク並に
レンテン・マルクに就て　佐久間勝〔保雜〕大一三　二八　三〇三
獨逸に於ける銀行勘定の支
拂方法　須美芳夫〔銀叢〕大一四　四　一
獨逸に於ける農業金融銀行　菅谷貫平 城戸住三〔銀研〕大一四　五　二
獨逸信用銀行の私經濟的研
究の資料　串本友三郎〔銀研〕大一四　九　四
獨逸に於ける工業銀行の發
達　串本友三郎〔銀研〕大一四　八　四
獨逸に於ける銀行と工業と
の關係　串本友三郎〔銀研〕大一四　八　五
獨逸信用銀行の本質　串本友三郎〔銀叢〕大一四　五　五
獨逸に於ける銀行と商業と
の關係　串本友三郎〔銀研〕大一四　八 九　六 二—三
獨逸帝國銀行の金券發行制
度　增井光藏〔國經〕大一四　二九　三
獨逸銀行業に於ける原價計
算問題　串本友三郎〔銀研〕大一四　九 一〇　四 一—四
最近獨逸に於ける Aufwer-
tung の問題　生島廣治郎〔銀叢〕大一五　六　一

佛　蘭　西

佛蘭西銀行の紙幣發行制限
擴張に就て　堀江歸一〔國經〕明三九　一　一
獨佛の海外銀行政策比較　豐崎善之助〔財經〕大三　一　一〇
佛蘭西銀行の戰時方策に關
する研究　高島誠一〔國家〕大四　二九　四一一—二
佛國動產銀行論　松崎壽〔商經〕大六　一　六
佛蘭西銀行特許延長と同行
及佛國政府間の新協定　高島誠一〔國經〕大七　二四　四
チエミナントの「佛伊の銀
行制度」　藤村忠〔銀研〕大一四　九　一
佛蘭西に於ける銀行集中の
概觀　小川福太郎〔商工〕大一五　一　三

米　國

米國銀行概畧　土子金四郎〔國家〕明三　四　二八

紐育銀行の概況（講演）　土子金四郎〔國家〕明二四　年　卷　號
米國中央銀行設立問題　松田　暢〔三學〕明四三　三　二—三
北米合衆國々立銀行券　山宝　宗文〔國家〕明四四　二五　八
米國投資銀行家協會の設立　丹羽　豐〔東經〕明四五　六六　一六七二
州立銀行の位置　武田　英一〔國經〕大二　一四　六
銀行財政の交錯點並に預金組織への進展運動殊に米國の聯合準備の新法に就て　高島佐一郎〔三學〕大三　八　二
州立銀行論　十龜　盛次〔日經〕大三　一四　二—二
ヤッフェ教授の米國銀行制度改革法案論　飯島　幡司〔國經〕大三　一六　二—三
米國聯邦準備法の價値　高島佐一郎〔國經〕大三　一六　五
米國聯合準備條例　飯島　幡司〔國經〕大三　一七　一—二
米國銀行制度の新型　堀江　歸一〔三學〕大五　一〇　六
米國聯邦準備銀行の現在及將來　中村三之丞〔銀研〕大一〇　一　一—四
合衆國に於ける非當座貸越主義の傾向　深山眞之助〔銀研〕大一一　二　一
再論米國聯邦準備制度の運用　高島佐一郎〔國經〕大一一　三一　一—三
米國銀行實務に關する新著　細井安次郎〔銀研〕大一一　三　六
米國に於ける割引改革の問題　松崎　壽〔國經〕大一一　二三　一—四
聯邦準備銀行の割引歩合變動の效果　平野　清〔商經〕大一　一　二六
北米合衆國聯邦準備制度　太田黑敏男〔經商〕大一三　二　一—七
米國銀行經營の實際と學說　松崎　壽〔銀研〕大一三　五　二
預金者の保護に關する米國の制度　松崎　壽〔國經〕大一三　一四　三
米國に於ける支店銀行制度と獨立銀行制度　勝田　貞次〔銀研〕大一三　四　二—四
米國に於ける放資銀行　北村廣太郎〔銀叢〕大一三　一　六
米國銀行組織の根本的精神　勝田　貞次〔銀研〕大一三　四　六
米國銀行と內國爲替業務　勝田　貞次〔銀研〕大一三　四　六
米國に於ける銀行信用制度の發達　スタイナー〔洋經〕大一三　一—一〇　四五
米國の聯邦農業銀行制度　春日井　薰〔銀研〕大一三　六　一
米國銀行と信用調査部　小山　英次〔銀叢〕大一三　二　六
米國勞働銀行の發達　岩城　弘一〔銀研〕大一三　六　三
米國割引市場の諸問題　岩崎　博〔銀研〕大一三　七　六
米國銀行制度史論　奥田　勳〔銀叢〕大一二　一—四　六
米國國立銀行制度史論　奥田　勳〔銀叢〕大一二　二—一四　一
米國國立銀行制度の缺陷　奥田　勳〔銀叢〕大一三　三　一
聯邦準備制度の創設及組織　奥田　勳〔銀叢〕大一三　三　二—六
米國銀行業研究　奥田　勳〔銀叢〕大一四　四　二—六
米國に於ける預金通貨制度の改革　勝田　貞次〔金融〕大一四　二　一—四
奥田　勳〔銀研〕大一四　九　四

米國銀行業の悲劇　三上　太一〔銀研〕大一四　年　九　卷　五　號
大戰後の聯邦準備銀行の機能　岩崎　博〔銀研〕大一四　九　五
紐育に於ける銀行貸付業務の研究　岩崎　靜也〔銀叢〕大一四　四　五—六
預金者の保護に關する米國の制度　太田黑敏男〔經商〕大一四　四　五—七
聯邦準備制度史論　奥田　勳〔銀叢〕大一四　五　六
米國勞働組合の銀行經營に付て　岩崎　靜也〔銀叢〕大一四　五　六
合衆國に於ける勞働銀行の發達　陸奥國太郎〔銀研〕大一四　八　六
米國聯邦準備銀行の割引政策　中村　重夫〔國家〕大一四　三九　八—九
米國に於ける勞働組合の銀行經營運動　長岡保太郎〔社政〕大一四　一　六〇
米國聯邦準備銀行と其の累進割引步合　古坂　嵜城〔經評〕大一四　一　一
米國勞働者運動の發達　金內　良輔〔金融〕大一四　二　一—九
米國に於ける支店銀行問題　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇　一
合衆國に於ける勞働銀行に就いて　松岡　孝兒〔經叢〕大一五　二三　三
米國に於ける銀行支店設置問題　加藤　信夫〔國家〕大一五　四〇　二—四
米國銀行界の面接しつゝある諸問題　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇　四
聯邦準備制度の發展（米國銀行制度史論五節）　奥田　勳〔銀叢〕大一五　六　六
米國に於ける銀行犯罪の實例　富井政治郎〔銀研〕大一五　一〇　七
滿洲
滿洲特設銀行問題に就て　服部文四郎　牛場信三郎〔日經〕大三　一五　八
日支銀行と滿洲銀行　一宮戻次郎〔財經〕大五　三　三
日滿合辨滿洲中央銀行設立の急務　西山　榮久〔外時〕大一五　四三　五〇八
歐羅巴
歐洲戰時の中央銀行　堀江　歸一〔三學〕大四　九　二
戰後に於ける歐洲各中央銀行　松野清次郎〔商經〕大八　一　三
歐洲に於ける銀行制度　〔資料〕大五　二　三
露西亞
露國銀行業一斑　〔資料〕大六　三　一〇
勞農露西亞の通貨と銀行業　平野　清〔商經〕大一三　一　一九—二〇
ロシアに於ける銀行の發達　田中　九一〔金融〕大一五　三　一
其他
墺匈國銀行の外國爲替政策　久山寅一郎〔三學〕明四三　三　四
瑞西の取引所及銀行　桑田　藤吉〔商經〕大六　一　四
印度に於ける中央銀行問題　海老原　竹之助〔國經〕大七　二五　一—二

埃匈銀行の破産及清算に就て　青木得三〔經究〕大一〇　一一一
南亞に於ける中央銀行設立加奈陀銀行制度の概要　松崎壽〔國經〕大一〇　三一　六
チエミナントの「佛伊の銀行制度」　青木一夫〔銀叢〕大一一　四　六　四

【禁治産者】參照＝能力。

禁治産者の行爲の效力　芳流學人〔新報〕四一九　六　六九
禁治産者の法律行爲と後見人の同意　乾政彦〔法協〕大三　三一　八一一
法定代理人の同意を得て禁治産者が爲したる法律行爲の效力　石坂音四郎〔志林〕大四　一七　一
丁抹國禁治産制度と我法例の關係　謝花寛淨〔新聞〕大七　一　一四七三
禁治産者の爲したる單に權利を得義務を免るべき行爲と其取消　長島毅〔新報〕大九　三〇　三
禁治産宣告前心神喪失の常況に在る者に對する訴狀送達の效力　多田吉鍾〔朝司〕大一　一　二

【禁酒】

禁酒と法律　海野幸德〔刑評〕四五　四　四
片山醫學博士の禁酒法案に就て　牧野英一〔法協〕大三　三一　一
米國禁酒法の經過　大內兵衛〔國家〕大八　三五　九
禁酒論の根柢　播磨龍城〔新聞〕大三　一　二二〇

【近東】

參照＝外債。會社。貸附。株式。株式取引所。貨幣。爲替。銀行。金利。經濟。恐慌。公債。國際貸借。財政。資本。社債。商業。運賃。信用。信用組合。投機。投資。物價。貿易。無盡。有價證券。

東方問題を見よ

【金融】

金融政策　添田壽一〔國家〕四七　八　一八二
金融に就て　田口卯吉〔國家〕四六　一七　二〇一
全國要地に於ける賃金移動の調査　奥井魯吉〔統來〕四三　一　二四〇
郵便爲替貯金賃金の運用　下村宏〔國經〕四六　一　三
外國通貨銀行金融に關する要報　堀江歸一〔國經〕四五　一　三
再び郵便爲替貯金賃金の運用を論ず　下村宏〔國經〕四四〇　三　一
財界の集權的趨向　松崎藏之助〔國經〕四四〇　三　四一六
經濟財政金融策　田尻稻次郎〔日經〕四一　四　一一
日本金融市場に就て　仁科眞太郎〔國經〕四一　五　一二
ファイナンシャーを論ず　關一〔國經〕四一　四　二
國庫と金融機關　無名氏〔日經〕四一　三　三五
戰後の金融　小林丑三郎〔明學〕四一　一　一三五
財界現下の趨勢　山形東根〔東經〕四一　五　一四四六
「現代金權史」を讀む　丹羽筑山〔東經〕四一　五　一四四八
外資輸入　田中栞〔國經〕四一　六　二一三
國際金融市場に於ける割引政策　服部文四郎〔外時〕四一　三　三
外資輸入に就て　河津暹〔日經〕四一　四　七
日本興業銀行と外資輸入　添田壽一〔東經〕四一　六〇　一五〇〇
金融と公債　阪田實〔東經〕四一　六〇　一五〇三
外資輸入に關する外人の意見　ジーエヌキプス〔洋經〕四一　一　四七二
外資輸入に關する外人の意見　ブレストン〔洋經〕四一　一　四七二
金融と外資　土方久徵〔洋經〕四一　一　四九〇
株式取引所と金融市場との關係　北內楢雄〔國經〕四三　八　五一六
非外金借入論　溝淵實吉〔東經〕四三　六一　一五四六
賃金調達論　服部春一〔東經〕四三　六二　一五六八　一五七三
賃金輸出論　岩村鄉太郎〔國家〕四四　二五　一一
最近國際金融市場と日本銀行　服部文四郎〔外時〕四四　一四　一六九
工業資金の調達に付て　井上準之助〔國家〕四五　二六　四
工業資金の調達に付て　添田壽一〔國家〕四五　二六　四
商業銀行と工業資金　松崎壽〔日經〕四五　二　五
低利資金の米價に及ぼせる影響如何　北崎進〔東經〕四五　六五　一六五二
在外資金に關する當局說明の矛盾　池島誠三〔日經〕四五　一　十一八
地方金融に就きて　神戸正雄〔日經〕大九　一一　一三
金融界に於ける仲立人　高島佐一郎〔國經〕大二　一五　一
下層金融機關に就て　小林丑三郎〔日經〕大二　一四　一
金融の去來　小島憲一郎〔日經〕大二　一四　二
資金利用の說　服部文四郎〔日經〕大二　一四　二
在外資金論　池島誠三〔日經〕大二　一四　二一四
近時の財政と金融　小林丑三郎〔日經〕大二　一三　六
工業資金問題　海老原竹之助〔日經〕大二　一三　七
澁澤氏の稿本日本金融史論を讀む　松崎壽〔日經〕大二　一三　八
下層社會の金融機關の公營　坂本陶一〔國經〕大三　一六　一
農工資金充實の急務　志村源太郎〔財經〕大三　一　一
金融會社の先驅及其類例　船尾榮太郎〔三學〕大三　八　二一五
基金制定の條件　鹽澤昌貞〔財經〕大三　一　三

題目	著者	誌名	年	巻	號
財界に對する我輩の希望	勝田・主計	〔日經〕	大三	一五	四
利子歩合に及ぼす外資輸入の影響	高城仙次郎	〔三學〕	大三	八	四
庶民金融に就て	志水　美英	〔日經〕	大三	一六	四
外資と戰爭	服部文四郎	〔國經〕	大三	一八	四
金融ツラスト論	十亀　盛次	〔國家〕	大三	二八	二
戰時財界雜感	志立鐵次郎	〔財經〕	大三	一	九
金融調節策如何	添田　壽一	〔財經〕	大三	一	九
最近の金融問題	谷村一太郎	〔經叢〕	大四	一	一
金融の大勢と金利	添田　壽一	〔財經〕	大四	二	三
戰洲戰爭と金融組織	高島佐一郎	〔國家〕	大四	二九	三
金融機關としての無盡業	馬場　鍈一	〔新報〕	大四	二五	二
戰後の我が金融	小林丑三郎	〔財經〕	大四	二	二
金融機關改善問題	添田　壽一	〔財經〕	大四	二	五
證券金融機關の將來	丹羽　豐	〔東經〕	大四	七一	一七九六
戰後世界の金融	小川郷太郎	〔經叢〕	大四	一	五
歐洲戰爭と資金の關係	片山　潛	〔洋經〕	大四	一	七一三
歐洲大戰と我國の財界	長島　隆二	〔國國〕	大四	三	九一一〇
憂ふべき財界の傾向	澁澤　榮一	〔財經〕	大四	二	二
米價の調節と農民の金融問題	山本美越乃	〔京法〕	大四	一〇	四
歐洲戰時に於ける米國の金融政策並に聯合準備金法の運用	堀江　歸一	〔三學〕	大四	九	八
金融に及ぼす大戰亂の影響	向井　鹿松	〔三學〕	大四	九	四—五
對支經營と金融機關	添田　壽一	〔財經〕	大四	二	九
一九一四年末に當り金融の將來を憶ふ	高島佐一郎	〔三學〕	大四	九	四
一九一四年十一月戰時金融の前途	高島佐一郎	〔三學〕	大四	九	六
金融調節の根策	堀江　歸一	〔財經〕	大四	二	二
工業金融について	山田　利淳	〔東經〕	大四	七一	一八〇五
下層金融と國民性	神戸　正雄	〔經叢〕	大四	一	二
金利と金融との關係	渡邊　鐵藏	〔國家〕	大五	三〇	三
再び金融と金利との關係に就て	渡邊　鐵藏	〔國家〕	大五	三〇	四
金融調節の效果如何	伊藤　欽亮	〔財經〕	大五	三	五
金融界に於ける自然淘汰	十亀　盛次	〔國經〕	大五	二〇	五—四
金融市場に於ける市況の研究	渡邊　鐵藏	〔國家〕	大五	三〇	六
長期貸借と短期貸借	高城仙次郎	〔三學〕	大五	一〇	六
金融情勢の逆轉	伊藤　欽亮	〔財經〕	大五	三	七
地方金融の改善と銀行組織	本多　精一	〔財經〕	大五	三	九
資金供給論	高城仙次郎	〔三學〕	大五	一〇	九
資金需用論	高城仙次郎	〔三學〕	大五	一〇	八
戰後の財界と覺悟	高橋　是清	〔國國〕	大五	四	一〇
地方金融と銀行組織に關する補論	本多　精一	〔財經〕	大五	三	一〇

題目	著者	誌名	年	巻	號
ウキザース氏の新著「國際金融」を讀む	飯島　幡司	〔國經〕	大五	二一	五
工業金融改良の點	佐伯　貴範	〔財經〕	大五	三	二
農工業金融に關する補論	本多　精一	〔財經〕	大五	二	二
倉庫と金融	清崎　昌雄	〔三學〕	大三	一〇	二
工業金融の改善と日本興業銀行	添田　壽一	〔財經〕	大五	三	三
生絲金融に就て	内藤　章	〔國經〕	大五	二一	六
工業金融に就て	志立鐵太郎	〔洋經〕	大五	一	二七三
戰中戰爭の世界財界	井上辰九郎	〔洋經〕	大五	一	七八
米價調節を兼たる農家金融便法	木村貞二郎	〔東經〕	大五	七三	一八三五
金融調節は景氣持續の要道	本多　精一	〔財經〕	大六	四	一
過去一ヶ年に於ける財政經濟の大勢	熊谷貞次郎	〔國國〕	大六	五	二
金融系統論	服部文四郎	〔國經〕	大六	三	二—三
本邦海外金融問題管見	飯島　幡司	〔國經〕	大六	三	三—四
貿易に對する金融の改善	戸田　海市	〔經叢〕	大六	四	五
金融政策に關する當面の諸問題	本多　精一	〔財經〕	大六	四	七
不動産資金化と銀行系統	古島　安二	〔財經〕	大六	四	二
地方金融改善の捷徑	若槻禮次郎	〔財經〕	大六	四	三
爲替資金の調達策に就きて	稲山　始	〔東經〕	大六	七五	一九〇七
戰後經濟準備と資金充實策	早川千吉郎	〔財經〕	大七	五	三
小工業と金融	服部文四郎	〔國經〕	大七	二四	四—五
東洋に於ける日本の經濟上及び金融上の位置	井上準之助	〔國家〕	大七	三一	八—九
國際金融中心の移動と我國の地位	服部文四郎	〔國經〕	大七	二五	四
資金融通の性質と利子歩合との關係	高城仙次郎	〔三學〕	大七	三	八—一〇
外交と金融	小島　意	〔國國〕	大七	六	一
我國に於ける船舶金融	細矢　祐治	〔日經〕	大八	二六	一—四
暖簾と資金との關係	中川　精吉	〔政治〕	大八	一	二
不動産金融の流通	志村源太郎	〔財經〕	大八	六	四
爲替貯金局より觀たる地方金融	天岡　直嘉	〔財經〕	大八	六	一〇—一一
我國普通銀行の工業金融に就て	松崎　壽	〔商經〕	大八	一	一三
滯貨と恐慌	野崎　龍七	〔洋經〕	大九	一	九—一〇
本邦現時の金融狀態に關する考察	高島佐一郎	〔國經〕	大九	二九	四—六
我財界は逆轉せしか	佐藤　三郎	〔國國〕	大九	八	五
財界の反動と工業上の對策	阪田　貞一	〔財經〕	大九	七	五
金融市場の前途豫測	米山　梅吉	〔財經〕	大九	七	二
財界動搖と金融機關の缺陷	阪谷　芳郎	〔東經〕	大九	八二	二〇六三
銀價の前途と我が財界	梶原　仲治	〔東經〕	大九	八二	二〇六九
銀行業の對財界策	竹内　常治	〔東經〕	大九	八三	二〇七一

			年	巻	號	頁
來年度豫算と財界の打撃	濱口　雄幸	〔東經〕	大九	八二	二〇七四	
戰後各國の貿易金融施設	依田信太郎	〔銀研〕	大一〇	一	二	
財界の前途と實業家の自覺	小林丑三郎	〔東經〕	大一〇	八三	二〇八三	
財界の大勢と注目すべき重要事項	井上辰九郎	〔東經〕	大一〇	八三	二〇八〇	
財界の前途は平靜か	清水文之輔	〔東經〕	大一〇	八三	二〇七五	
今後の財界に就て	安田與四郎	〔洋經〕	大一〇	一	一	
財界今後の進路	安田與四郎	〔洋經〕	大一〇	一	九九九九	九九一一
歐洲戰後財界の變化	小松　絲	〔東經〕	大一〇	八三	二〇八五	九九四四
最近に於ける內外財界の推移	田中鐵三郎	〔經究〕	大一〇	一	五	
物價の漸落と財界恢復期	諸井　四郎	〔東經〕	大一〇	八三	二〇八二	
財界の前途と製粉界の豫想	諸井　四郎	〔財經〕	大一〇	八	一	
製絲金融論	荒木　秀一	〔銀研〕	大一〇	一	一	
歐洲大戰後に於ける本邦金融市場の發達	諸井誠二郎	〔經究〕	大一〇	一	五—七	
金融緩漫と財界の前途	池田　謙三	〔東經〕	大一〇	八三	二〇七六	
マネーマーケット論	川口　西三	〔商濟〕	大一〇	一	一	
貿易金融に就て	服部文四郎	〔國經〕	大一〇	三〇	六	
金融物價賃銀貿易考察	志立鐵次郎	〔財經〕	大一〇	八	九	
整理期金融方針＝日本銀行金利引下不可	志立鐵次郎	〔財經〕	大一〇	八	三	
經濟界と金融機關	田中鐵三郎	〔經究〕	大一〇	一	一	
起業金融	春日井　薫	〔國國〕	大一〇	九	三	
我が大經營化の金融的源泉	高島佐一郎	〔國經〕	大一〇	三一	四—五	
我國金融市場の缺陷	河合　良成	〔經究〕	大一〇	一	六	
金融機關と事業會社との特殊關係	河津　暹	〔東經〕	大一〇	八三	二〇七八	
我國金融界の缺陷	河合　良成	〔新聞〕	大一〇	一	一八六九	
金融季節を論ず	松崎　壽	〔商經〕	大一〇	一	二	
我國銀行と貿易金融	松崎　壽	〔銀研〕	大一〇	一	一	
貿易金融機關設置の可否	清水文之輔	〔東經〕	大一〇	八三	二〇九六	
金融、金融市場及金融機關	松崎　壽	〔商經〕	大一一	一	二六	
財界先見性に就て	島村　彥郎	〔銀研〕	大一一	二	五—六	
有價證券市場に於ける短期金融	櫻田　勝三	〔銀研〕	大一一	三	二	
資金融通の性質と預金利子歩合	白井　廉久	〔銀研〕	大一一	二	五	
地方金融と勤業農工兩銀行の合同	志村源太郎	〔財經〕	大一一	九	二	
金儲けの心理	タウシツクグ	〔我等〕	大一一	四	一〇	
本邦水產金融問題	細矢　祐治	〔銀研〕	大一一	三	五—六	
財界前途に關する一考察	植野　勳	〔銀研〕	大一一	二	二	
農業金融と私考察	中山玖麻雄	〔銀研〕	大一一	二	四	
信託讓渡と動產金融	細矢　祐治	〔商經〕	大一一	一	二六	
工場抵當及財團金融說論	細矢　祐治	〔銀研〕	大一一	四五	四—五	
金融機關としての信託會社	細矢　祐治	〔銀研〕	大一一	三	一—二	
日米金融市場と市場利率	平野　清	〔銀研〕	大一一	二	三	

			年	巻	號	頁
貨幣又は金融に關する卑見の批評に對して	山崎覺次郎	〔經論〕	大一一	一	一	
金融機關の民衆化＝我金融機關改善案	志立鐵次郎	〔財經〕	大一一	九	四	
物價問題と金融收縮	田宮準一郎	〔國國〕	大一一	一〇	一	
飯島幡司著「金融經濟講義」	增井　光藏	〔國經〕	大一一	三三	二	
國際金融と國際貿易	服部文四郎	〔銀研〕	大一一	二	六	
ゼノア會議と國際金融問題	平野　清	〔銀研〕	大一一	三	二	
政府に對する確定債權と銀行資金の融通	藤城　敬二	〔銀研〕	大一一	三	三	
財界循環と金融の法則	勝田　貞次	〔銀研〕	大一一	三	四	
輸入貿易の金融問題	清水文之輔	〔東經〕	大一一	八四	二〇九	
本邦金融組織と當面の銀行政策	左右田誠一	〔銀研〕	大一三	四	四	
株式市場と金利と金融市場	左右田誠一	〔銀研〕	大一三	五	三	
會計と金融	太田　哲三	〔會計〕	大一三	一三	四	
財界の循環性と金利政策に就て	左右田誠一	〔商事〕	大一三	四	一	
外資輸入と金融市場の影響如何	左右田誠一	〔銀研〕	大一三	五	一	
財界復興促進策	藤原銀次郎	〔ヱコ〕	大一三	一	二	
金融機關の整備殊に銀行改善の要諦	杉　程次郎	〔銀叢〕	大一三	一	一	
救濟問題と銀行及金融	横田　義夫	〔銀叢〕	大一三	一	六	
震災金融の諸問題	平野　清	〔銀研〕	大一三	五	三	二〇二
震災金融に直面して	堀江　歸一	〔ヱコ〕	大一三	一	一	二〇二
金融の趨勢と中間景氣	池田　龍藏	〔銀研〕	大一三	四	三	
株式市價と金融及景氣との關係	杉　程次郎	〔新報〕	大一三	三三	三	
金融機關の整備殊に銀行制度改善問題の要諦	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	一五	
當面の金融問題	增井　光藏	〔國經〕	大一三	三四	二	
高島佐一郎著「金融經濟の諸問題」	山口竹次郎 吉田貞一 佐々木駒之助	〔銀叢〕	大一三	一	五	
災害と金融	星野　行則	〔銀叢〕	大一三	一	五	
震災後の復興と金融問題	神戸　正雄	〔時經〕	大一三	一	一六	
其後の金融方策と其效果	神戸　正雄	〔銀叢〕	大一三	一	二	
外資輸入問題の考察	木島陽太郎	〔銀叢〕	大一三	一	六	
小產業に對する金融	勝田　貞次	〔銀研〕	大一三	五	三	
モラトリアム撤廢後の財界循環の經路	三宅嘉十郎	〔銀研〕	大一三	五	三	
支拂猶豫令撤廢後の金融界推移	神戸　正雄	〔銀叢〕	大一三	一	一	
安田銀行大合同の財界に及す影響	松崎　壽	〔銀研〕	大一三	五	四	
後興資金の財源						
銀行の被害程度と財界の前						

途
事業金融と證券市場　福井源一〔銀研〕大三　五
財團金融と日本勸業銀行　松崎壽〔商經〕大三　一
經營資本循環速度並に收支相殺點の測定　松崎壽〔銀研〕大三　四
地方銀行と不動產金融　河谷武夫〔商經〕大三　一
工業金融と兼營組織　小池充彥〔銀叢〕大三　一
工場抵當及財團金融貸借契約書案文例　松島喜作〔銀叢〕大三　一
支拂猶豫令觀及向後の金融對策　細矢祐治〔銀研〕大三　四
製糸資金論　三宅嘉十郎〔銀研〕大三　五
復興と外資輸入論　太田義繁〔銀研〕大三　五
株式金融の研究　橋本喜作〔銀叢〕大三　一
財界循環より觀たる震災財界の前途　荒木秀一〔銀叢〕大三　一
金融、金融市場及金融機關　勝田貞次〔銀研〕大三　五
株式金融論　青木誠一〔銀研〕大三　四
株式金融の方法及批判　荒木秀一〔銀研〕大三　四
銀爲替と株式と金融　丹羽豐〔銀叢〕大三　一
外資輸入計畫は何を語るか　成瀨義春〔財經〕大三　一〇
悲しむべき外資輸入　堀江歸一〔エコ〕大三　一
帝都復興及商工業復興の金融對策　松崎壽〔銀研〕大三　五

融機關
生絲問屋金融制度の改善傾向　大森繁治〔銀叢〕大一三　四
金融經濟國策確立の急務　高山武雄〔銀研〕大一三　六
現下金融の大勢と將來の對策　三宅嘉十郎〔銀研〕大一三　六
金融統計と其の材料　細矢祐治〔銀研〕大一三　七
金融統計の種類と株式　石卷良夫〔銀研〕大一三　七
支那動亂と內地金融　熊順一〔金融〕大一三　一
財界當面の對策と將來の對策　遠藤麟太郎〔銀叢〕大一三　二
經濟復興資金の融通に就て　堀江歡吉〔銀叢〕大一三　二
最近の貿易と物價と金融と株式金融とコールマネー　神戶正雄〔時經〕大一三　一
輸出貿易助長金融政策　荒木秀一〔銀叢〕大一三　二
明治時代に於ける金融組織の發展　神戶正雄〔時經〕大一三　一
復興經濟途上の財政及金融　增井光藏〔國經〕大一三　二六
經濟復興金融の理論と實際　細矢祐治〔銀研〕大一三　七
金融循環より見たる震災財界の前途　細矢祐治〔銀研〕大一三　六
金融問題或問　遠山貞一〔銀研〕大一三　六
吾財界の前途と銀行の任務　河津遲〔金融〕大一三　二
財界恢復と銀行業者　保井猶造〔銀叢〕大一三　三
　高柳松一郎〔銀叢〕大一三　二
震災前後に於ける金融界の變化と其後の趨勢　山室宗文〔銀叢〕大一三　三
我金融の根本的疾患　渡邊廣重〔エコ〕大一三　二
蠶絲金融と倉庫關係　高山武雄〔銀研〕大一三　七
建築金融論　春日井薰〔銀研〕大一三　六
蠶糸低利資金觀　高山武雄〔銀研〕大一三　七
建築金融組合の研究　春日井薰〔銀研〕大一三　七
蠶糸金融策としての米資輸入問題　高山武雄〔銀研〕大一三　七
生絲金融の諸問題　太田義繁〔銀研〕大一三　六
原資金の調達に就て　高山武雄〔銀研〕大一三　六
生絲金融の問題　神戶正雄〔時經〕大一三　一
大震火災と金融問題　杉程次郎〔新報〕〔銀叢〕大一三　二四　二
復興事業と不動產金融　松崎壽〔銀研〕大一三　六
爲替問題と金融對策　平野清一〔銀研〕大一三　六
既設信用組合を無視せる小商工資金の融通　松崎伊三郎〔洋經〕大一三　二〇
不動產金融と地券制度　平岡金兵衛〔銀研〕大一三　六
ドーズ案の實施と財界の前途　三宅嘉十郎〔銀研〕大一三　七
外資輸入と通貨膨脹に就て　柳原二郎〔銀研〕大一三　六
爲替尻資金操縱に就て　大久保正喜〔銀研〕大一三　七
財界復興に對する矛盾の要　福田敬太郎〔國經〕大一三　二一
資本の流通と有價證券　松崎教授著「銀行及金融」　細井要次郎〔銀研〕大一三　五
財界先見の認識論的基礎　勝田貞次〔銀研〕大一三　六
金融指導と預金協定　勝田貞次〔金融〕大一三　一
財界先見認識に就き福田教授の批評に答ふ　勝田貞次〔銀研〕大一三　六
景氣動緩和策と金融組織　勝田貞次〔銀研〕大一三　七
財界金融と財界循環　福田敬太郎〔銀研〕大一三　六
財界先見の基構に就て　勝田貞次〔銀研〕大一三　七
我國に於ける正貨の增減と金融緊閉との關係　小川福太郎〔經叢〕大一三　一九
世界の貨幣交通　作田莊一〔經叢〕大一三　一九
元祿享保前後に於ける金融論　中村孝也〔經商〕大一三　三
世界金融市場の二大分野　平野清〔エコ〕大一三　二
我邦金融資本の趨勢　浦田武雄〔マル〕大一三　一
外債成立と金融　堀江歸一〔エコ〕大一三　二
財政々策と金融政策　土方成美〔經研〕大一三　一
金融資本の貿易政策　猪俣津南雄〔マル〕大一三　一
低資の對支融通を中止せよ　長岡克曉〔エコ〕大一三　二
株式金融政策　荒木秀一〔銀叢〕大一三　三
工業金融研究の一方法　松島喜作〔銀叢〕大一三　三
金融會社及金融組合の本質　名和聲〔金融〕大一三　一
社會問題解決策としての金

求
輸出振興策と貿易金融　川口　酉三〔商業〕大一三　五
對外金融政策　松崎　壽〔銀研〕大一三　七
金融資本現狀　北崎　進〔經商〕大一三　三
金融機關としての信託會社　山田幸太郎〔金融〕大一四　二
地方銀行と不動產の制限的　大塚　良治〔金融〕大一四　一
資金化　戸田　常造〔銀業〕大一四　五
希臘時代の金融業に就て　高野　忠雄〔金融〕大一四　二　七—八
爲替相場の理論と實際及び之が金融政策　服部文四郎〔早政〕大一四　一
財政整理の財界に及ぼす影響　結城豐太郎〔エコ〕大一四　三
財政と金融の改善　堀江　歸一〔エコ〕大一四　三　六—八
我國金融機關の發生及び其の發達　石澤久五郎〔金融〕大一四　二　七—八
本邦株式金融市場の構成　加藤　和根〔銀業〕大一四　四　二—五
普通銀行の國際金融業務　松崎　壽〔銀研〕大一四　八　四
歐洲戰爭に基づく國際金融上の關係　堀江　歸一〔三學〕大一四　一九　一
失業對策としての金融政策　佐倉　重夫〔社政〕大一四　一　五—八
神戸生絲金融問題管見　高山　武雄〔銀業〕大一四　四　一
商工金融と銀行支店制度の改善　藤城　敬二〔銀研〕大一四　八　四
水產資本融通問題　山本美越乃〔經業〕大一四　二〇　一
內外銀行金融鳥瞰　山本　峻吉〔銀業〕大一四　四　二—六
金融市場の意義　道家齊一郎〔金融〕大一四　二　二
土地及建物の金融に就て　都上　城三〔銀業〕大一四　四　一—六
金融組織上に於ける金準備の作用と效果　勝田　貞次〔銀業〕大一四　四　五
季節的金融に關する調査　河村　重之〔金融〕大一四　二　三—四
金融市場に之ぼす諸影響　平野　清〔金融〕大一四　二　四—七
地方金融に對する郵便貯金の地位　平塚米治郎〔金融〕大一四　二　三
本年度蠶絲金融の特徵　高山　武雄〔銀研〕大一四　九　四
不動產金融に就て　大久保正喜〔銀研〕大一四　八　二
商工資金の移動量及其樣式　都上　城三〔銀業〕大一四　五　二
我が財界と圓價恢復の將來　山崎　靖純〔イン〕大一四　二　六
小賣業に於ける資金の廻轉率　矢野　剛〔商事〕大一四　五　一
爲替恢復と財界循環　丹羽　豐〔銀業〕大一四　四　五
財界現狀と今後の景氣　梶原　仲治〔エコ〕大一四　三　一—五
財界の前途に就て　濱岡　五雄〔銀業〕大一四　四　一
通貨と資金とを區別する理由　高橋　龜吉〔銀研〕大一四　九　三
好轉の見込なき財界の前途　藤原銀次郎〔エコ〕大一四　三　一〇
金融の繁閑と公社債募集市場との關係　吉田　繁吉〔銀業〕大一四　四　四
一般金融經濟と金錢信託政策　細矢　祐治〔銀研〕大一四　八　三
天保十四年の御用金につき　幸田　成友〔商研〕大一四　五　二—二
企業資金の供給と金融機關　宗像　久敬〔金融〕大一四　二　八
都市下層金融制としての質屋考　岡野文之助〔都問〕大一四　一　七—八
內國資本保護の商業政策的方法　菅谷　重平〔銀業〕大一四　四　五
財界の不況と銀行政策　本田　文雄〔銀業〕大一四　五　二—二
正貨現送と外資抑制　堀田　正由〔金融〕大一四　二　一—二
財界の現狀と其對策　佐藤富士雄〔銀業〕大一四　五　四—四
資金の意味に就て　中村　重夫〔銀研〕大一四　八　六—六
輸出及工業組合と輸出金融　神戸　正雄〔時經〕大一四　一　三—三
自己資金と他人資本とに就て　中村　茂男〔會計〕大一四　一六　一
金融界の渦紋と銀行の安處　伊庭　謙造〔銀研〕大一四　九　一—一
民間外資抑制の暴擧　松永安左衛門〔エコ〕大一四　三　二—三
金融界の現狀と前途　結城豐太郎〔エコ〕大一四　三　二—二
我觀金融機關　丹羽　豐〔金融〕大一四　二　二—二
事業界の不安と金融界の混亂　越戸　佳三〔銀業〕大一四　五　六
金の現送と財界の動搖　丹羽　豐〔銀業〕大一四　五　五—五
金融統計の大量觀察法　石卷　良夫〔銀研〕大一四　九　四—四
銀行の本質と金融組織の歸趨　勝田　貞次〔銀業〕大一四　五　五
財界指導と金融作用　勝田　貞次〔銀業〕大一四　九　一
金融と事業　松崎　壽〔金融〕大一四　二　五
企業金融機關の新陣容　綾藤登喜男〔イン〕大一五　三　三—五
山片幡桃の二つの意見書について　土屋　喬雄〔國家〕大一五　四〇　二
財界整理の意味と政府當局者　高橋　龜吉〔銀研〕大一五　一〇　一
下坂財界は尙不振　梶原　仲治〔エコ〕大一五　四　一—三
財界好轉の機運動く　鈴木　島吉〔銀業〕大一五　六　一
財狀の豫測に就て　松尾　藤平〔銀業〕大一五　六　五—六
財界の將來とその對策　高木友三郎〔新聞〕大一五　一　二四—九
財界好轉と金解禁問題　米山　梅吉〔エコ〕大一五　四　三
新貨幣の觀念と金融　川島清治郎〔金融〕大一五　三　一
債券市場と金融　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四—五
金融界大觀　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四—四
死線に立つた日本　神戸　正雄〔時經〕大一五　一　四—二
金融問題短評　田中　一郎〔銀業〕大一五　六　二—六
金融問題短評　上村　照吉〔銀業〕大一五　六　一—五
本邦蠶絲金融の實際　高山　武雄〔銀業〕大一五　六　二
農村振興と金融の改善　田尻　直人〔エコ〕大一五　四　五
金融資本網の健實性　向井　鹿松〔三學〕大一五　二〇　四
金融資本網の組織　向井　鹿松〔三學〕大一五　二〇　三
プロレタリアの金融機關　道家齊一郎〔金融〕大一五　三　一
金融制度の整理　堀江　歸一〔エコ〕大一五　四　八

明治初年の官營と金融　土方　成美〔經論〕大一五　四
庶民金融改善の要　岩崎　尙夫〔エコ〕大一五　四
金融業者と公共事業の新組織　フロシンガーム〔イン〕大一五　三
金融機關としての信託會社　吉田　眞一〔銀叢〕大一五　六
金融景氣の特色と其限界　橋本　生藏〔エコ〕大一五　四
我國の證券金融制度に就て　岡田　純夫〔銀研〕大一五　一〇
金融の實勢と預金利下問題　池田　成彬〔エコ〕大一五　四
金融界の反動と社債の前途　後藤登喜男〔イン〕大一五　三
金融緩慢の實體と其將來觀　山崎　靖純〔イン〕大一五　三
財界推移と景氣の前途　井上辰太郎〔エコ〕大一五　四
起業金融と信託會社　吳　文炳〔イン〕大一五　三
映畫金融業務一班　石卷　良夫〔銀研〕大一五　一〇
金融統計の本質　石卷　良夫〔銀研〕大一五　一〇
紐育準備銀行の利上と世界の金融大勢　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇
金融上の新傾　物價指數社債に就て　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇
財界先見の一要素としての利潤限界　岩崎　博〔銀研〕大一五　一〇
貿易企業上より觀たる輸出金融問題　上坂　酉三〔銀研〕大一五　一〇
外資輸入抑止の可否　松崎　壽〔銀研〕大一五　一〇
戰後に於ける倫敦の金融上の地位　松野清次郎〔商經〕大八　一　一四
大戰當時の英國金融對策　吉田　繁吉〔銀叢〕大二　一　五
倫敦金融市場論　須藤　文吉〔銀研〕大二　四　七
倫敦並に紐育の金融的地位　平野　清〔商經〕大二　一　三一
大戰當の初に於ける倫敦金融市場の混亂　上道　光彥〔金融〕大一三　一　三
英國に於ける短期資金　濱野　壽〔銀研〕大一三　七　三
國際金融中心市場としての倫敦の地位　山室　宗文〔銀叢〕大一四　四　六

支那

上海の金融機關　小島憲一郎〔日經〕大四　一七　三
歐洲戰亂後の支那財界　山本唯三郎〔財經〕大四　二　九
長沙の金融　田中　忠夫〔亞經〕大九　四　一一二
支那金融機關の現狀　善生　永助〔財經〕大九　七　二一四
支那の財界と中央財政　長岡　克曉〔亞經〕大一三　七　二
撥兌に就て　田中　忠夫〔亞經〕大一三　八　一
上海に於ける金業交易所　福田敬太郎〔銀研〕大一三　七　五
支那の農業金融に就て　田中　忠夫〔銀研〕大一四　八　二
支那の庶民金融機關　木村賢太郎〔金融〕大一四　二　九

朝鮮

朝鮮金融機關現狀　飯島　幡司〔國經〕大五　二〇　三
朝鮮財界と債券發行に就て　野中　清〔イン〕大一四　一　三

印度

印度金融市場論　十龜　盛次〔國經〕大三　一七　二一四
印度の貨幣並に金融制度に關する研究　堀江　歸一〔三學〕大五　一〇　二
印度の金融と印度證券　堀江　歸一〔三學〕大六　一一　三
印度に於ける外資輸入問題　田中　金司〔國經〕大一五　四〇　四

英國

英國金融市場の組織　池島　誠三〔國家〕明四四　二六　一二
倫敦金融と外國銀行支店　スポールディング〔三學〕大二　一七　二
歐洲開戰後の倫敦金融市場　堀江　歸一〔三學〕大三　八　八
歐洲戰爭中の倫敦金融市場　堀江　歸一〔三學〕大三　八　九
歐洲戰亂物發當時に於ける倫敦金融市場　增井　幸雄〔三學〕大三　八　一〇
開戰當時の倫敦金融市場　笠間　昇雄〔國家〕大三　二八　一三
一九一四年八九月に於ける倫敦金融市場と英蘭銀行　〔三學〕大四　九　二一三
歐洲戰亂と倫敦金融市場　山室　宗文〔國家〕大四　二九　二一四
倫敦金融市場と事變通貨の供給　堀江　歸一〔三學〕大四　九　五
恐慌後の倫敦金融市場に於ける種々の變態　堀江　歸一〔三學〕大四　九　八
世界金融の中心として倫敦の地位　神戸　正雄〔經濟〕大六　四　四
世界金融市場としての倫敦　松野清次郎〔商經〕大八　一　一四

獨逸

獨逸の戰時財界及金融　〔國經〕大四　一八　一
獨逸金融上の動員　ベンヂキクス〔三學〕大四　九　一〇
交戰第一年間の獨逸の金融及財政　高島佐一郎〔國經〕大五　二一　二一五
獨逸の產業と金融機關　〔資料〕大六　三　九
戰爭と獨逸の金融及通貨政策　高島　誠一〔國經〕大七　二四　四一五
戰爭と獨逸の金融市場　桑田　藤吉〔商經〕大七　一　一一二
獨逸の金融と中央銀行　堀江　歸一〔エコ〕大二　一　一一二
獨逸國に於る建築金融制度　武谷　成直〔銀研〕大一四　九　三

米國

金融市場としての紐育の地位を論ず　松本伊三郎〔國經〕明四〇　二　四
米國の金融と事業　山內　正瞭〔國家〕明四〇　二　一
合衆國金融市場に於ける獨立國庫の地位　內池　廉吉〔國經〕明四一　五　一
紐育金融市場に於ける利率の趨勢　河津　暹〔國家〕明四二　二三　一一二
米國の金權　戶田　海市〔日經〕明四三　七　二
紐育株式取引所と金融市場　山室　宗文〔法協〕明四四　二九　一
歐洲戰亂と米國金融市場　松崎　壽〔三學〕大四　九　二
英佛公債の成立と米國金融市場　內池　廉吉〔國家〕大五　三〇　二

		年	卷	號
米國金融界の新氣運	雪堂生〔財經〕	大五	三	八
歐洲戰爭と米國金融市場	色部貢〔國家〕	大六	三	二
米國戰時金融政策	大內兵衛〔國家〕	大八	三	六
一九二〇年米國財界の回顧と其前途	青木嗣夫〔經究〕	大一〇	一	四
米國の貿易金融施設とエッヂ法	依田信太郎〔銀研〕	大一〇	一	三
米國戰後の貿易金融會社	依田信太郎〔銀研〕	大一一	二	一
桑港震災時の金融狀態	池田了實〔銀研〕	大二	五	三
米國資本の輸出	荒山泰次〔銀叢〕	大二	一	三
上海に於ける近時の貨幣及金融に就て	西山榮久〔亞經〕	大三	七	三
米國の金融商人と放資機關	勝田貞次〔銀研〕	大三	四	七
倫敦並に紐育の金融的地位	平野清〔商經〕	大三	一	三
米國に於ける金融の諸機關	北村廣太郎〔銀叢〕	大三	二	一
米國の映畫金融に就て	石卷良夫〔銀研〕	大三	七	五
米國の金融政策	堀江歸一〔エコ〕	大三	二	二一
米國商業金融研究	岩崎靜也〔銀叢〕	大一二	二一六	四
米國大平洋岸大都市在留日本人の金融機關	小西次郎〔銀研〕	大四	九	五
米國に於ける銀行國庫關係の革新	奥田勳〔銀研〕	大五	一〇	四
露國金融界の三大勢力と二露國金融界の三大勢力と二				
大潮流	棗田藤吉〔商經〕	大五	一	三
露國金融制度の變遷	谷口吉彦〔經叢〕	大一五	二三	二
勞農露國に於ける金融制度の復活	谷口吉彦〔經叢〕	大一五	二三	五
其他				
東洋金融市場論要綱	中村忠彰〔法政〕	大七	一五	三—四
埃太利の食物供給及金融	〔國經〕	大四	一八	一
【金輸出解禁】 參照＝外國爲替。貨幣。金。金融。在外正貨。				
米國の金輸出解禁に就て	門脇龍雄〔國經〕	大七	二四	二
通貨收縮と金解禁及在外正貨準備廢止問題	三宅喜十郎〔銀研〕	大一	三	四
金輸出解禁問題と我國際爲替に及ぼす影響に就て	加藤貞雄〔銀研〕	大一	三	四
金輸出解禁問題	戸田海市〔經叢〕	大一一	一五	五
金輸出解禁問題	〔資料〕	大一一	八	一〇
金貨の輸出解禁に就て	阪谷芳郎〔東經〕	大一一	八四	二〇一
吾國解禁問題に對する米國專門家の意見	武藤山治〔財經〕	大二	一〇	二
正貨輸出禁止解除と外資輸入反對撤回	神戸正雄〔時經〕	大二	一	二
金輸出解禁は是か非か	勝田貞次〔銀研〕	大一三	七	二
金解禁の可否	高城仙次郎〔法研〕	大一三	三	三
正貨現送の尙早を論ず	三宅喜十郎〔銀研〕	大一三	六	四
國債暴落と金輸出解禁論に就て	杉本正一〔銀叢〕	大一三	二	六
現下尙金輸出解禁に適せず	伊藤竹之助〔エコ〕	大一三	二	三
藏相の金解禁反對論を中心として	成瀨義春〔財經〕	大一三	一	四—一六
金の輸出禁止は亡國的政策	武藤山治〔エコ〕	大一三	二	三
爲替安定と部分的金輸出解禁	山室宗文〔エコ〕	大一三	二	二三
爲替改策と金輸出解禁問題	松崎壽〔銀研〕	大一四	八	一
爲替恢復策としての金輸解禁と兌換停止	海老原竹之助〔銀研〕	大一四	八	一
所謂金解禁の惡影響	成瀨義春〔財經〕	大一四	二	一—二
景氣の良否と金解禁問題	岡村透〔銀叢〕	大一四	四	一—二
濱口藏相の變說改論（五十議會に於ける金解禁問答）	成瀨義春〔財經〕	大一四	二	三
金解禁問題不徹底	成瀨義春〔財經〕	大一四	三	四
英國の金解禁問題に就て	前田董一〔金融〕	大一四	二	四
二十世紀のマーカンティリズムと紀元千六百年代の金自由輸出論	春日井薰〔經商〕	大一四	四	五
農相の金解禁亡國論	成瀨義春〔財經〕	大一四	二	五
金輸解禁論の科學的基礎	春日井薰〔銀研〕	大一四	八	五
金解禁議案の論戰	成瀨義春〔財經〕	大一四	二	七
金解禁非解禁問題の重點	土方成美〔エコ〕	大一四	三	八
英國の金輸出解禁	堀江歸一〔エコ〕	大一四	三	一〇
英國の金解禁とその影響	井上準之助〔エコ〕	大一四	三	一〇
正貨現送と外資抑制	堀田正由〔金融〕	大一四	二	一一
正貨の現送と外資輸入の制限	神戸正雄〔時經〕	大一四	一	四〇
我國金輸出解禁問題	大館堯壽〔新報〕	大一四	三五	三
英國の金輸出解禁と我國爲替調節策と金輸出解禁問題	神戸正雄〔時經〕	大一四	一	三五
正貨の現送と外資輸入の制限	松崎壽〔商經〕	大一四	一	四〇
金輸出解禁論に就いて	神戸正雄〔時經〕	大一四	一	四〇
金解禁に代るべき方策	島田德〔新報〕	大一五	三六	二
財界好轉と金解禁問題	成瀨義春〔財經〕	大一五	一三	二
金輸出解禁の利弊と世論。	米山梅吉〔エコ〕	大一五	四	三
銀の一部輸出解禁	松崎壽〔銀研〕	大一五	一〇	五
先づ正貨現送を止めよ	神戸正雄〔時經〕	大一五	一	四三
最近の爲替相場恢復と金解禁の時機	伊東四志〔洋經〕	大一五	一	二八四
【金利】 參照＝銀行。金融。利子。	古矢吉雄〔銀研〕	大一五	一〇	六
銀行利率と市場利率との意				

		年	卷	號
義並に相互關係に就て	山崎覺次郎〔國家〕	明三八	一九	五
金利の物價に及ぼす影響	山室　宗文〔法協〕	明四一	二六	一
紐育金融市場に於ける利率の趨勢	河津　暹〔國家〕	明四二	二三	一—二
正味利廻りに關する新說	高田　勝雄〔國經〕	明四二	七	三
日本銀行の利子政策に就て	坂田　實〔洋經〕	明四二	一	四七九
本邦金利の將來	植松　考昭〔洋經〕	明四三	一	四三三
英國に於ける銀行利率と市場利率	池島　誠三〔日經〕	明四四	一〇	一—三
借入金利子の決算方法	佐藤　雄能〔東經〕	明四五	六五	一六二四
金利の趨勢	服部文四郎〔日經〕	大九	一三	六
遊離資本と金利	熊崎　良〔國經〕	大三	一七	二
利子歩合に及ぼす外資輸入の影響	高城仙次郎〔三學〕	大三	八	四
金融の大勢と金利	添田　壽一〔財經〕	大四	二	三
金利と金融との關係	渡邊　鐵藏〔國家〕	大五	三〇	三
再び金融と金利との關係に就て	渡邊　鐵藏〔國家〕	大五	三〇	四
金利と有價證券相場との關係	渡邊　鐵藏〔國家〕	大五	三〇	九
戰爭と金利	高城仙次郎〔三學〕	大五	一〇	二
戰後英國の金利と對外放資	飯島　幡司〔國經〕	大六	二三	四—五
戰後の金利	飯島　幡司〔國經〕	大六	二三	六
商品の金利の取扱	中島　精二〔會計〕	大七	四	一
資金融通の性質と利子歩合との關係	高城仙次郎〔三學〕	大七	三	八—一〇
銀行利率と市場利率	松崎　壽〔商經〕	大九		一七
爲替關係より見たる內國金利	中山玖麻雄〔銀研〕	大一〇	一	二
整理期金融方針＝日本銀行金利引下不可	志立鐵次郎〔財經〕	大一〇	八	三
コールの利子及運用	荒木　秀一〔銀研〕	大一一	二	二—三
公社債の放資と利廻計算	須藤　文吉〔銀研〕	大一一	二	三—五
日米銀行利率と割引政策	平野　清〔銀研〕	大一一	二	四
利子歩合論上に於ける信用說	勝田　貞夫〔銀研〕	大一一	二	六
利下の必要ありや	成瀨　義春〔財經〕	大一一	九	一四
財界の循環性と金利政策に就て	左右田誠一〔商事〕	大一二	四	一
金利引下問題	神戶　正雄〔時經〕	大一二		三
金利の騰落と債券市價	池田　了實〔銀叢〕	大一二	一	一
金利變動の統計的研究	荒木　秀一〔銀叢〕	大一二	一	二—五
現時の金利引下問題	松崎　壽〔銀研〕	大一二	四	一
貨幣價値と金利歩合	白井　廉久〔銀研〕	大一二	四	六
利子歩合に就て	山本恭次郎〔長叢〕	大一二	二	六
金利引下の要望	神戶　正雄〔時經〕	大一二	一	一七
株式市場と金利と金融市場	左右田誠一〔銀研〕	大一二	五	三
東西金利市場の相違に就て	谷口　吉彥〔經叢〕	大一三	一八	二

		年	卷	號
金利引下論の誤謬	松崎　壽〔銀研〕	大一三	六	三
利子計算上の重要問題	荒木　秀一〔銀叢〕	大一三	三	三—六
金利問題の考察	小池　充彥〔銀叢〕	大一三	二	三—五
金利引下論に於ける通貨論の誤謬	遠山　貞一〔銀研〕	大一三	六	四
金利引下問題	堀江　歸一〔エコ〕	大一三	二	四
我事業界と金利政策を如何	山成　喬六〔エコ〕	大一三	二	四
金利引下に關する諸說を評す	松崎　壽〔銀研〕	大一三	七	一
信託會社の興起と金利の將來	米山　梅吉〔エコ〕	大一三	二	七
保證準備擴張論と金利問題	結城豐太郎〔エコ〕	大一三	二	一〇
利下の可能性と危險性	成瀨　義春〔財經〕	大一三	二	一一
我國の金利は何故に高きか	三浦鐵太郎〔洋經〕	大一三	一	一一—一二
金利引下論の根據	高橋　龜吉〔洋經〕	大一三	一	一〇八—一一〇
利子計算上の重要問題	荒木　秀一〔銀叢〕	大一四	四	一
利率低下の合理的考察	都城　生〔銀叢〕	大一四	四	四
日銀利下の可否を論ず	高城仙次郎〔銀研〕	大一四	八	四
金利に關する一研究	蜷川　虎三〔經叢〕	大一四	二〇	五
日銀利下の斷行を評す	松崎　壽〔銀研〕	大一四	八	五
日本銀行の金利引下	小川鄕太郎〔イン〕	大一四	一	五
日本銀行の公定歩合引下に就て	杉　程次郎〔新報〕	大一四	三五	六
		〔銀叢〕大一四	四	六
日本銀行の金利政策	堀江　歸一〔エコ〕	大一四	三	七
金利と物價の關係に就いて	土方　成美〔社料〕	大一四	一	七
我國の金利は高きか	高城仙次郎〔銀研〕	大一四	九	一
何故我國の金利は下らざるか	葛　雄一郎〔金融〕	大一四	二	九
日銀利下と銀行の貸出政策	土方　成美〔エコ〕	大一四	三	九
異論の餘地なき利下斷行	井上辰九郎〔エコ〕	大一四	三	九
金利に關する諸相	春木忠三郎〔銀研〕	大一四	五	二
我國の金利が米國より高き理由	高城仙次郎〔銀研〕	大一四	九	二
預金利子の協定難	堀江　歸一〔エコ〕	大一四	三	一八
金利引下と產業振興策	松崎　壽〔銀研〕	大一四	九	三
我國の金利は如何にして引下げ得るか	高城仙次郎〔銀研〕	大一四	九	三
金利と物價との相關關係に就て	谷口　吉彥〔經叢〕	大一四	二	五
利子歩合の季節的變動	高城仙次郎〔銀研〕	大一四	九	五
日銀の利下	神戶　正雄〔時經〕	大一四	一	三五
印度に於ける銀行利率の季節的變動と其調節策	平野　清〔商經〕	大一四	一	三七
吾國金利の諸相とその統制	杉本　一雄〔銀叢〕	大一五	六	三—四
紐育準備銀行の利上と世界の金融大勢	岩崎　博〔銀研〕	大一五	一〇	三
日本銀行の金利政策	堀江　歸一〔エコ〕	大一五	四	四
金融の實勢と預金利下問題	池田　成彬〔エコ〕	大一五	四	八

日銀歩合と市中歩合との關係　高城仙次郎〔銀研〕大一五 一〇 五
大藏省提案の債券複利計算の可否　〔銀研〕大一五 一〇 五—六
金利と物價との關係　高城仙次郎〔銀研〕大一五 一〇 六
金利引下策の行詰　神戸 正雄〔時經〕大一五 一 四七

ク 部

【クインスランド】

クインスランドに於ける勞働仲裁裁判制度　岩下 堅造〔社政〕大一一 一 三

【クウレイ】(Charles Horton Cooley, 1864-)

クーレイ教授　綿貫 哲雄〔社雜〕大一五 一 二四

【區劃整理】

區劃整理震災地跡の土地建物全部移動法に就て　復堂 生〔新聞〕大一三 一 二三四
區劃整理批判　小久江美代吉〔新聞〕大一三 一 二三九
區劃整理に關する憲法違反問題と其の實行難　復堂 生〔新聞〕大一三 一 二三四
再び區劃整理に就て　小久江美代吉〔新聞〕大一三 一 二三四六
區劃整理の缺陷　木内傳之助〔新聞〕大一三 一 二三八四
區劃整理と無產階級　布施 辰治〔新聞〕大一三 一 二三八五
區劃整理に關する一考案　武田鬼十郎〔新聞〕大一四 一 二三五一
土地區劃整理と法の惡用　中山 利平〔新聞〕大一四 一 二三二九 二三八一

【苦汗制度】

參照＝家内工業。
スウエッチングを論ず　財部 靜治〔京法〕昭三九 一 四—六
スウエッチング・システムの經濟的機能に就て　山内 正瞭〔新報〕昭四〇 一七 三

【藥】

富山の賣藥業　和田 一郎〔國家〕昭四一 三 二三
賣藥の本義及範圍　窪田靜太郎〔法協〕大二 三 七、八
本邦輸出入の藥材、化學藥及製藥　加藤 銀藏〔統集〕大五 一 [illegible]
富山賣藥業の經營　猪谷 善一〔國經〕大一三 三五 三

【グッドセル】(Willystine Goodsell, 1870-)

グッドセル教授の父權的家族制度の研究　渥美 鐵三〔我等〕大一一 四 一二

【工藤重義】

工藤法學博士の卒去　河津 暹〔國家〕大七 三 八

【クナップ】(Georg Friedrich Knapp, 1842-)

クナップ貨幣國定學說の研究方法　宮田喜代藏〔國經〕大一年卷三號 六
クナップの三分ノ一準備法觀　福定與四郎〔國家〕大一 三六 一三
クナップの貨幣國定學說に就て　宮田喜代藏〔商叢〕大二 一 一

【クニース】(Karl Gustav Adolf Knies, 1821-1898)

クニース氏の「獨立の學問としての統計學」を讀む　高野岩三郎〔統雜〕明三七 一九 二八四

【熊澤蕃山】

集義和來に現れたる熊澤蕃山の經濟學說　河上肇〔國家〕明四〇 二 10

【熊本】

熊本市職業調査と東京市勢調査　横山雅男〔統集〕明四一 一 二二五 二二八

舊熊本藩の鄉土制度　大竹虎雄〔農經〕大一四 一
參照＝共濟組合。ギルド。

【組合】

產業組合。消費組合。信用組合。生產組合。農業組合。勞働組合。購買組合。

職業組合論　ルヴォン〔法協〕明二六 二一 一一二 二七 一二 二一一
商工組合の起源に關する諸說一斑　松崎藏之助〔法協〕明二九 一四 三 二〇 一一 一二
周代五家の組合　戸水寛人〔國家〕明三一 一二 一三一
佛國に於ける組合の統計　大原祥一〔統集〕明三五 一 二五一
組合契約論　吾孫子勝〔國經〕明四二 七 一一三
獨身者の組合運動　神戸正雄〔經叢〕大四 一 三
商工業組合の活動　森貞二郎〔東經〕大四 七一 一七五
支那の組合制度　田中保平〔亞經〕大八 三 四
組合の性質に就て　森下憲之丞〔會計〕大一一 一一 四
伊太利の組合運動　高橋正熊〔社政〕大一 一 二
印度に於ける組合運動　水上鐵治郎〔社政〕大一一 一 二一
支那の組合制度を論ず　木村增太郎〔亞經〕大二一 七 一
獨逸の通信吏員組合　若林米吉〔社政〕大二 一 三七
組合の分類に就ての考察　森重太郎〔社雜〕大一三 一 五
出荷組合の奬勵　河田嗣郎〔エコ〕大一三 二 一九
蓄產組合の不法活動に對する救濟方法　齋藤巖〔新聞〕大一三 一 二三九
社團と組合　西本辰之助〔法研〕大一四年卷 四號
銀行組合法の制度を望む　石卷良夫〔銀研〕大一四 八 六
組合法問題に於ける資本家の「危險思想」　櫛田民藏〔我等〕大一五 八 二

【グミュール】(Max Gmür)

グミュール教授の慣習法論　岩田新〔志林〕大九 三 三二 三三

【クラーク】(John Bates Clark, 1847-)

資本觀念に關するクラーク教授の學說を評論す　中川角太郎〔新報〕明四一 一八 四七
クラーク教授の生產力說を難ず　五百旗頭眞次郎〔國經〕大六 二三 二三
クラーク教授の資本の機能に就て　金原賢之助〔三學〕大10 一五 六
利子說明の基礎に關するボエム・バヴェルクとクラークとの論爭　金原賢之助〔三學〕大10 一五 八、九
クラアクの資本觀　高田保馬〔國經〕大二 二四 一
クラアクの分配理論の研究　三宅鹿之助〔經研〕大三 一 一
クラーク「經濟靜態及び動態」(譯)　林要〔同論〕大三 一 一三
クラアクの競爭並に獨占理論　油本豐吉〔經論〕大四 三 四

【クラーク】(John Maurice Clark, 1884-)

J. M. Clark 教授の「經濟學社會化論」(譯)　八木澤善次〔新報〕大一三 三四 三三

【クラッベ】(Hugo Krabbe, 1857-)

クラッベの「近代國家觀」　大山郁夫〔我等〕大一三 六 四一八

【クリーグスマン】(Nikolaus Herrmann Hartwig Kriegsmann, 1882-1914)

クリーグスマン教授戰死す　富田山壽〔京法〕大四 10 七

【クリート】

クリート問題の眞相　逸見晋〔國際〕明四一 八 二
最近クリート史　有賀長雄〔外時〕明四一 一三 二

【グリム】(Jakob Ludwig Grimm, 1785-1863)

ヤコブ・グリムと獨逸法　寺田四郎〔國國〕大三年二卷五號

【グルウイッチ】(Geog Gurwitsch)

ギールケの有機體及び社會法の概念（グルキッチ）　能勢克男〔同論〕大二三　一　一三

【クルノー】(Antoine Augustin Cournot, 1801-1877)

クルノー研究　平塚壽郎〔國經〕大九二八　六

三つの著述を通じて見たるオグユタン・クールノーの經濟學說　中山伊知郎〔商研〕大一四　五　二

【グレイ】(Henry M. Grey)

グレー氏の著書ロイドの過去と現在を讀みて　藤本幸太郎〔商研〕大二三　二　一

【吳文聰】

吳副社長葬記　〔統雜〕大七　一　三九〇

副社長吳文聰君を吊ふ　横山雅男〔統雜〕大七　一　三九一

評議員吳文聰君を悼む　横山雅男〔統集〕大七　一　四五一

故吳文聰君追憶學術講演會　〔統雜〕大八　一　三九四

故吳文聰先生を追慕す　細野繁藏〔統雜〕大八　一　三九九

親友吳君を思ふ　高橋琢也〔統雜〕大一三　一　四五一

吳君を追懷す　平塚二定郎〔統雜〕大一三　一　四五二

吾鄉の先輩吳氏を思ふ　松井茂〔統雜〕大一三　一　四五三

先輩吳文聰君を憶ふ　水科七三郎〔統雜〕大一四　一　四六七

統計界の先進吳君を憶ふ　和田千松郎〔統雜〕大一四　一　四七二

【クロース】(Benedetto Croce, 1866-)

ベネデットー・クロースの新哲學　江木衷〔辯協〕大七三　一八一

【グロース】(Hans Gross, 1847-1915)

故ハンス・グロース教授　牧野英一〔志林〕大五一八　六

【グロースマン】(Hermann Grossmann)

グロオスマン「戰爭と化學工業」（譯）　朴堂學人〔財經〕大七八六　七一二一一三

【グローチウス】(Hugo Grotius (de Groot), 1583-1645)

グロシアス氏以前に於ける國際法學者及グロシアス氏　花井卓藏〔新報〕明三九年六卷六七號

國際法の始祖ヒュウゴ・グロチウス　高橋作衛〔國際〕大元一四

法及び戰爭に關するグロチウスの思想　井川恭〔京法〕大七一三　二—四

グローチウスに於ける國際法と自然法との關係　横田喜三郎〔國際〕大二四二四　五

フーゴー・グローチウス著「平戰法規論」の由來　穗積陳重〔國際〕大二四二四　五

國際法の始祖フーゴー・グローチウス　山田三良〔國際〕大二四二四　五

グローシアスの幼青年時代　泉哲〔國際〕大二四二四　五

グロチウス及び其名著「戰爭及平和法規論」の國際法學上の地位　立作太郎〔國際〕大二四二四　五

グロチウースの戰爭觀に就て　松原一雄〔國際〕大二四二四　五

フーゴー・グローチウス戰爭及び平和法論に於ける海洋自由論　板倉卓造〔國際〕大二四二四　五

グローテイウスを基點として　牧野英一〔志林〕大二四二七　六

グローチウス著「平戰法規論」の版數に就て　山田三良〔國際〕大二四二四　六

グローチウスの自由海洋論　立作太郎〔國家〕大二四三九　七

【黑田如水】

黑田如水の刑法觀　福本日南〔刑評〕昭四四　三　六

【クロポトキン】(Kniaz Peter Aleksiezvich Kropotkin(Krapotkin),1842-1921)

クロポトキンの史觀　田中萃一郎〔三學〕大四九　四

クロポトキンの社會思想の研究　森戸辰男〔經學〕大九一　一

クロポトキンの生活の一面　森戸辰男〔我等〕大九二　五

ラツセル、クロポトキン兩氏の過激派觀　田邊忠男〔財經〕大九七　一〇一一一

クロポトキンの相互扶助說　森戸辰男〔我等〕大九二　一一三

クロポトキンの「倫理學」　森戸辰男〔我等〕大一四七　一

【軍艦】

參照＝商船。潛航艇。

軍艦論　松波仁一郎（國家）明二七年　八卷　八五號
私艦論　松波仁一郎（國家）明二八　九　九五
軍艦論　高橋　作衛（法協）明三〇　一五　一三
外國の港灣に於ける艦船及其乘員取締法　伊藤巳次郎（外時）明三二　二　二〇二
國際關係に於ける海軍用船の地位　相良　維男（國家）明三四　一五　一六
外國水兵の犯罪　石渡　敏一（法政）明三五　六　二〇四
軍艦論　遠藤　源六（法政）明三六　七　二一四
ベレールス氏軍艦本質論　中村　進午（新報）明三六　一三　一〇
軍艦に非ざる公船の取扱　立　作太郎（國際）明三七　二　四一七
回航中の日進春日に就て　松原　一雄（新報）明三七　一四　五　（新聞）明三七　一　二〇八
御用船論　松波仁一郎（法協）明三八　一三　三
外國領水に於ける軍艦　立　作太郎（國家）大三　二八　八
軍艦の海難救助を論ず　松波仁一郎（海法）大二　一　八

【軍國主義】

參照＝軍備。軍備縮少。戰爭。平和。
現代獨逸の軍國主義とトライチケの學說　小野塚喜平次（國家）大四　二九　一一二
獨逸の軍國主義　三上　正毅（國國）大四　三　八
マキアベリズムと獨逸の軍國主義　大山　郁夫（國家）大四　二九　九一一〇
獨逸大學に於ける軍國主義　織田　萬（京法）大五　一一　五
戰後に於ける軍國主義と民主主義　戶田　海市（經叢）大六　五　三
米國の軍國主義化と日米問題の將來　秋山　襄（辯協）大六　二一　八
米國に於ける軍國主義と資本主義　森戶　辰男（外時）大六　五二　二九二
軍國主義及平和運動　稻田周之助（新報）大七　二八　七
軍國主義の辯　卜部正太郎（三學）大七　一二　九
國家主義、帝國主義、軍國主義、戰爭謳歌　杉村陽太郎（外時）大一〇　三三　三九八
華府會議と平和主義對軍國主義　石川安次郎（外時）大一〇　三四　四一〇
米國に徵して軍國主義を省察す　村瀨武比古（法政）大一一　一　一
Militalism in Japan　Matsunami（海法）大一一　一　六
軍國主義に就て　佐野　學（我等）大一二　五　六
互助作用の支配と軍國組織の崩壞　長谷川萬次郎（我等）大一四　七　三

【軍事】

參照＝海軍。軍備。軍備縮少。軍法會議。徵兵。
英國常備兵並に義勇兵人員の調査　磯部　四郎（統集）明一六　一　一九

徵兵と學生の關係（講演）　曾我　祐準（國家）明二六　七　七七號
軍事統計　伊藤　祐穀（統集）明三一　一　一一〇九
軍事統計　鵜澤　總明（統雜）明三二　一　高六六三　高六六四
デシャルダン氏の「デザルマン」（解兵論）を讀む　高橋　黎三（國家）明三三　一三　東一〇六　東一〇七
附萬國平和會議の前途　橫山　雅男（統集）明三六　一　二八七
各地方に於ける軍事思想　光岡　安藝（國家）明四一　三　一
行政的武器使用に關する軍法　島村他三郎（志林）明四一　一〇　八
師團長が徵兵及召集事務に關し所管內町村長に對する訓令權　矢作　榮藏（國家）明四一　三　一〇
軍隊と農業教育　磯部　四郎（辯協）明四一　三　二八
陸海軍刑法改正案に就て　橫山　雅男（統集）明四四　一　三六三
徵兵統計の話　匿名士（國際）大二　一　六
外交軍事財政の兼修　寺田　四郎（國家）大三　二八　九
軍隊の夠留權（ツアーベルン事件の法律的觀察）　高田　保馬（京法）大三　九　一二
三年兵役制批議　植原悅二郎（國國）大四　三　一
獨逸の軍閥と我國の軍閥　山梨　半造（日社）大四　三　一一二
軍隊教育（講演）　松鎭　仙史（統雜）大四　一　二五二
獨逸陸軍將校の生計費　石黑　忠悳（統雜）大四　一　三五五
陸軍衞生統計に就て　山川健次郎（日社）大五　四　一一二
尙武教育の必要　織田　萬（京法）大五　一一　二
戰死者の孤兒に關する法律案　卜部百太郎（三學）大五　一〇　五
英國の强制徵兵制度　黑木　三次（國家）大六　三一　一〇
軍隊の解散と勞働市場　牧野　義智（國際）大七　一六　六
戰時に於ける軍機と外交との關係　潮　惠之輔（法政）大七　一五　六
軍事救護法の制定に就て　某辯護士投（新聞）大八　一　一九九二
誤れる憲兵廢止論　菊の舍主人（新聞）大八　一　二〇〇五
誤れる憲兵廢止論を駁す　松井　等（亞經）大九　四　二
宋代に於ける兵制と社會政策　某　氏（國家）大一〇　三五　三
歩兵一年半現役論　三好　一八（臺法）大一〇　一五　七一一〇
軍機保護に關する臺灣法制　江木　翼（財經）大一〇　八　六
海軍整理の根本方針　今中　次磨（我等）大一一　四　五
軍事行政組織の政治的考察　蜷川　新（外時）大一二　三八　四五三
世界の軍事大勢　建部　遯吾（外時）大一三　三八　四五五
震災と外交及軍隊　小林鐵太郎（社政）大一三　一　三二
廢兵の再教育　中尾　龍夫（外時）大三　四〇　四八〇
軍制問題と世論の諸相　成田　篤（エコ）大一三　二　二三
工場能率と在鄕軍人の利用　伊丹　松雄（外時）大一四　四一　四九〇
英國に於けるOTCの效果及現狀　伊丹　松雄（外時）大一四　四一　四九二
佛國に於ける軍事豫備教育　荒木　櫻洲（新聞）大一四　一　二四五五
元帥停年制度論

軍人を起訴したる違法に對する非常上告の判決の主文　平井彥三郎〔新報〕大五年卷二六號三
米國に於ける軍事教育　堤　隆〔法曹〕大一五　四　三

【軍事費】

軍費論　田島　錦治〔明法〕明三六　六一
物價騰貴は軍費の增加に原因す　莊田　秋村〔東經〕明四五　六五
軍事費辯護說　神戸　正雄〔京法〕大二　八　一三
軍事費整理の一端に就て　松原　政一〔辯協〕大二　七　一七三
軍債一千億圓　雪堂　生〔財經〕大六　四　四
獨逸の軍費と軍事公債　津村　秀松〔國經〕大六　二二　六
軍縮剩餘金最善の使途　武藤　山治〔財經〕大一一　九　二
軍事費の見方に注意すべき要件　成田　篤〔エコ〕大一三　二　二二

【軍需品】

軍事工業と民間工業との關係　升田　憲元〔日經〕大三　一五　七
歐洲交戰國の軍需品問題　稻田周之助〔日經〕大四　一七　六
兵器製造民營に就て　大河內正敏〔財經〕大四　二　九
軍需品の製造と供給　辻村　楠造〔財經〕大四　二　一〇
交戰國に於ける兵器問題　大河內正敏〔財經〕大四　二　三
露國軍需註文と粗製濫造　松崎伊三郎〔洋經〕大四　一　七五
戰時に於ける軍用金屬供給問題　松原　行一〔財經〕大五　三　三
米國民間兵器製造の現狀　近藤兵三郎〔國國〕大五　四　四
英國に於ける軍需品問題　刑部　齋〔國家〕大五　二〇　九一二
軍器軍需要の製造と其の奬勵策　本多　精一〔財經〕八五　三　一〇
現戰爭に於ける軍需品供給問題　立　作太郎〔國際〕大六　一五　七一八
軍需物件の購入方法　工藤　重義〔國家〕大六　三二　一〇
軍需工業動員法に就て　櫛田　民藏〔經叢〕大七　七　一
工業動員法の運用と軍需工業　辻村　楠造〔財經〕大七　五　四

【クンツエ】(Johannes Emil Kuntze)

クンツエ氏の「ゲザンムトアクト」論に就て　志田鉀太郎〔法協〕明三六　二二　六
聯邦國成立とクンツエ氏の共同行爲說　澤永　太吉〔京法〕明三九　一　一〇

【クント】(Walter Kundt)

クント「獨逸海外貿易發展策につきて」(譯)　河津　遥〔日經〕昭四　一一　一〇一一

【群馬】

群馬縣の製絲業　河田　嗣郎〔經叢〕大六　五　一　年卷號
群馬縣生絲販賣組合の研究　上田貞次郎・緒方清〔國經〕大七　二五　四

【軍備】

參照＝海軍。軍備縮少。國防。（尙各國を見よ）
軍備擴張休止の萬國會議　有賀　長雄〔外時〕明三一　一　八
軍備擴張の大勢　植松　考昭〔洋經〕明四一　一　四四二七　三四八
豫算案と軍備擴張熱　瀧　臺水〔東經〕明四一　毛　一四二六
米國の商業政策と軍備　堀越善重郎〔東經〕明四二　五九　一四七三
軍備競爭と共財源　稻田周之助〔日經〕大二　一三　二
太平洋上の國防問題　沼田　照義〔國際〕大二　一三　九
滿洲放棄乎軍備擴張乎　三浦鐵太郎〔洋經〕大二　一　四六二〇　六二七
憲政上より見たる增師問題　植原悅二郎〔國國〕大三　二　一
軍備擴張と財政の危機　八田祐二郎〔財經〕大三　一　一
コミッション付の海軍擴張と國民經濟　高城仙次郎〔日經〕大三　一五　一
軍備充實の意義　安田與四郎〔日經〕大三　一五　三
軍備、國防及國是の概念　西本國之輔〔國國〕大三　二　三
軍備擴張と直接稅の增收　田邊　高雄〔三學〕大三　八　三
無意義なる二個師團增設案　鎌田　榮吉〔財經〕大三　一　二
根本的軍備改良論　犬養　毅〔國國〕大四　三　二
增師問題と大陸主義　蒼鹿樓主人〔財經〕大四　二　二
對外政策と增師問題　太田黑敏男〔國國〕大四　三　三
軍備競爭と軍備制限　神川　彥松〔外時〕大七　二八　三三八
平和が困憊か＝日米海軍競爭の狂愚　志立鐵太郎〔財經〕大一〇　八　四
軍備とは國策の基幹　志立鐵次郎〔財經〕大一〇　八　一一
日米軍備の現狀　村田　懋磨〔外時〕大一〇　三四　四〇七
世界の經濟と軍備　後藤　新平〔東經〕大一一　八四　二一〇〇
國際間に於ける猜疑心と軍備　三宅覺太郎〔外時〕大一　三五　四一四
太平洋防備問題　松波仁一郎〔外時〕大一一　三五　四一五
軍備充實と世界の大勢　蜷川　新〔外時〕大一一　三六　四一四
歐米軍備競爭の新勢　小山精一郎〔外時〕大二　三七　四四六
軍事費より觀た列國軍備　成田　篤〔エコ〕大三　三　八
Protocol for the Pacific settlement of international disputes〔國際〕大一三　二三　一〇
民主政治と軍備標準法　伊藤　正德〔財經〕大一四　一三　一
經濟的軍備促進策　成田　篤〔エコ〕大一四　三　二

【軍備縮少】

參照＝海軍。軍國主義。軍備。戰爭。平和。
平和會議と軍備制限問題　大隈　重信〔外時〕明四〇　一〇　一一五
英獨軍備制限問題　末廣　重雄〔京法〕明四二　四　一一
生活難講究と軍備制限協商　莊田　秋村〔東經〕明四五　六五　一六三五

所謂華盛頓會議　稲原　勝治〔外時〕大六　年卷二五　號三〇一
軍備競爭と軍備制限　神川　彦松〔外時〕大七　二八　三二八
軍備縮少問題奈何　蜷川　新〔外時〕大八　三〇　三六三
國際聯盟と軍備制限問題　小山精一郎〔國際〕大九　一九　二
國際聯盟と軍備制限　蜷川　新〔外時〕大九　三二　三八二
軍備縮少論　志立鐵次郎〔財經〕大一〇　八　二
軍備制限の小觀　田川大吉郎〔國聯〕大一〇　一　四
軍備縮少太平洋極東問題會議について　阪谷　芳郎〔國聯〕大一〇　一　六
實業家の見たる軍備制限問題　武藤　山治〔財經〕大一〇　八　六
軍備縮少會議に際し日本國民の覺醒を促す　尾崎　行雄〔國聯〕大一〇　一　七
世界安定第一歩　志立鐵次郎〔財經〕大一〇　八　七
太平洋會議と軍備問題　上杉　愼吉〔財經〕大一〇　八　八
太平洋會議と帝國の態度　武富　時敏〔財經〕大一〇　八　八
歡ぶ可き太平洋會議　志立鐵次郎〔財經〕大一〇　八　八
軍備縮少と日本の將來　澁澤　榮一〔國聯〕大一〇　一　八
太平洋會議と世界の民衆　〔我等〕大一〇　三　九
華盛頓會議に就て　陸奥　廣吉〔財經〕大一〇　八　一〇
軍備制限と極東問題　辻村　楠造〔財經〕大一〇　八　一〇
華盛頓會議と米國の輿論　田中萃一郎〔國國〕大一〇　九　一一
軍備縮少會議の開幕　志立鐵次郎〔財經〕大一〇　八　一三
經濟上より見たる軍備制限問題　瀧本　誠一〔東經〕大一〇　八二　二〇八
陸軍縮少と經濟問題　宮島清次郎〔東經〕大一〇　八三　二〇八
軍備擴張と物價關係　奥田　竹松〔東經〕大一〇　八二　二〇八七
軍備縮少及太平洋並極東問題會議に就て　阪谷　芳郎〔東經〕大一〇　八二　二〇八九
デサルムマンの解（軍備制限の要諦）　高橋　榮三〔國際〕大一一・一〇　二一　七
海洋の自由と軍備制限　小山精一郎〔國際〕大一一・一〇　二一　八―九
海軍協定案と日英米海軍力　村田　懋麿〔外時〕大一〇　三三　三九〇
國際的軍備制限問題の史的研究　伊藤　述史〔外時〕大一〇　三三　四〇二
所謂太平洋會議　江木　翼〔外時〕大一〇　三四　四〇二
軍備制限と太平洋會議の提案　稲原　勝治〔外時〕大一〇　三四　四〇二
軍備制限會議　松波仁一郎〔外時〕大一〇　三四　四〇三
太平洋會議と我國民の決心　副島　道正〔外時〕大一〇　三四　四〇三
華盛頓會議と英國　米田　實〔外時〕大一〇　三四　四〇三
華府會議觀　石川安次郎〔外時〕大一〇　三四　四〇三
軍備制限問題を中心として　村田　懋麿〔外時〕大一〇　三四　四〇四
軍備制限に就て　田中萃一郎〔外時〕大一〇　三四　四〇五
華府會議交渉上の失敗　高村　經德〔外時〕大一〇　三四　四〇五
支那の將來と太平洋會議　鷲尾正五郎〔外時〕大一〇　三四　四〇五
太平洋會議と軍備制限問題　小山精一郎〔外時〕大一〇　三四　四〇六
帝國の華盛頓會議對策　村田　懋麿〔外時〕大一〇　三四　四〇六

太平洋會議と日本　望月小太郎〔外時〕大一〇　年卷三四　號四〇七
華盛頓會議を達觀す　建部　遯吾〔外時〕大一〇　三四　四〇九
華盛頓會議を評す　田中萃一郎〔外時〕大一〇　三四　四一〇
華府會議は平和主義對軍國主義　石川安次郎〔外時〕大一〇　三四　四一〇
海軍協定案と日本　一海軍通〔外時〕大一〇　三四　四一〇
華盛頓會議評史　外交時報記者〔外時〕大一〇　三四　四一〇・四一七
華盛頓會議を嚴戒せよ　三宅覺太郎〔外時〕大一〇　三四　四一一
國防の基準と軍備縮少限度　河野　恒吉〔財經〕大一一　九　一
陸軍半減論を提唱す　關　直彦〔財經〕大一一　九　二
軍備制限に關する條約　立作太郎〔國際〕大一一　二　三
華府會議と日米　添田　壽一〔國聯〕大一一　二　四
ワシントン會議所感　林　毅陸〔國聯〕大一一　二　四
華府會議と移民問題　澁澤　榮一〔財經〕大一一　九　四
華府會議と戰時國際法　立作太郎〔國際〕大一一　二　四
軍備縮少の根本方針　辻村　楠造〔財經〕大一一　九　五
ワシントン會議と其の後　澤田　節藏〔國聯〕大一一　二　五
海軍制限條約に付て　杉村陽太郎〔國際〕大一一　二　五・一八
ワシントン會議に於ける海軍軍備制限（講演）　堀　悌吉〔法政〕大一一　一九　七
海軍制限條約　〔國際〕大一一　二一　八
新太平洋四國協約　末廣　重雄〔外時〕大一一　三五　四二
支那から見た華府會議の功罪　清水　泰次〔外時〕大一一　三五　四三
華盛頓會議批判資料　田中萃一郎〔外時〕大一一　三五　四一五
海軍制限と國民　安岡　秀夫〔外時〕大一一　三五　四一五
華府會議の齎せる支那の利益と不利益　矢野　仁一〔外時〕大一一　三五　四一六
陸軍縮少問題に就て　惠美　孝三〔外時〕大一一　三五　四一六
華盛頓會議の世界的失敗　建部　遯吾〔外時〕大一一　三五　四一七
英佛の想敵關係と潛艇協定敗　伊藤　正德〔外時〕大一一　三五　四一八
四國協約の留保附批准　稲原　勝治〔外時〕大一一　三五　四一九
華府會議に於ける支那の業績　楢崎　觀一〔外時〕大一一　三五　四一九
我陸軍は果して縮少し得べきか　三宅覺太郎〔外時〕大一一　三五　四一九
華府會議と我帝國　林　毅陸〔外時〕大一一　三五　四一〇
華盛頓會議條約と世界の平和　泉　哲〔外時〕大一一　三五　四一〇
軍備制限と米國海軍　松波仁一郎〔新聞〕大一一　一　一九二五
華府會議の功罪　添田　壽一〔東經〕大一一　八四　二一〇二
海軍比率協定の眞相　小松　綠〔東經〕大一一　八四　二一〇六
加藤內閣と軍備縮少　末廣　重雄〔外時〕大一一　三六　四二五
軍縮論の不可解點　蜷川　新〔外時〕大一一　三六　四二七
四國條約と保留　江木　翼〔外時〕大一一　三五　四二一
再び四國條約について　江木　翼〔外時〕大一一　三六　四二四
江木氏の「四國條約論」を

讀む　平河町人〔外時〕大一一年三六巻　四二六號
華府會議の積極政策　澤田謙〔外時〕大一一三六　四三七
支那の軍備縮少問題　清水泰次〔國際〕大一一三　七
帝國の前途と軍縮の眞意義　末廣重雄〔外時〕大一一三八　四五五
震災後の軍縮論批判　三宅覺太郎〔外時〕大一一三八　四五七
軍備縮少會議の再開に就て　泉哲〔外時〕大一一三九　四六六
第二海軍々縮會議と日本　森山達枝〔外時〕大一一三九　四六八
滅師問題　神戸正雄〔時經〕大一一三　一　二七
世界の平和と軍縮會議　水野廣德〔國知〕大一一四　五　四
一九二一、二年華府會議と來るべき軍縮會議　米田實〔國知〕大一一四　五　五
各國海軍費と第二軍縮會議　成田篤〔エコ〕大一一四　三　六
華府會議に溢れた想敵觀念　伊藤正德〔財經〕大一一四　一一　六一八
海軍軍備制限條約の財政的意義　武井大助〔國家〕大一一四　三九　十八
安全保障問題に來るべき軍縮會議　三枝茂智〔國知〕大一一四　五　昭一〇一二
補助艦建造計畫問題　川島清治郎〔エコ〕大一一四　三　二三
姑息なる補助艦の一部承認　成田篤〔エコ〕大一一四　三　二四
第二軍備縮少會議如何　稻田周之助〔外時〕大一一四　四一　四八六
第二軍縮會議に直面して　伊藤三郎〔外時〕大一一四　四一　四八七
米國の軍備縮少外交　大島高精〔外時〕大一一四　四一　四八九
列國海軍の配置と第二軍縮會議　成田篤〔外時〕大一一四　四一　四九〇
第二華府會議と日本の體面問題　岡本剛〔外時〕大一一四　四一　四九〇
第二軍縮會議を中心に佛國と華府會議　稻原勝治〔外時〕大一一四　四一　四九〇
列强の補助艦艇競爭と日本　坂本俊篤〔外時〕大一一四　四一　四九〇
平和議定書の末路と軍縮會議　石丸藤太〔外時〕大一一四　四一　四九八
ロカルノ條約と軍縮問題　坂本俊篤〔外時〕大一一四　四一　五〇一
補助艦問題の嚴正批判　坂本俊篤〔外時〕大一一四　四二　五〇四
聯盟六星霜の軍縮運動　石丸藤太〔外時〕大一一四　四二　五〇五
軍縮會議と日本　三枝茂智〔國知〕大一一五　六　一
補助艦建造と潛水艦廢止問題　石丸藤太〔國知〕大一一五　六　六
軍縮問題と日本　坂本俊篤〔外時〕大一一五　四三　五〇六
暗礁上の補助艦問題　高木信威〔外時〕大一一五　四三　五〇七
國際聯盟と軍備縮少　成田篤〔外時〕大一一五　四三　五〇七
軍縮會議と日本の安全保障問題　奥野七郎〔外時〕大一一五　四三　五〇九
軍縮會議準備委員會の議題を評す　石丸藤太〔外時〕大一一五　四三　五〇九
軍縮會議と日本　坂本俊篤〔外時〕大一一五　四三　昭五〇九 新五一〇
軍縮豫備會議の收穫　町田梓樓〔外時〕大一一五　四三　五一五
聯盟軍縮會議の根本觀　坂本俊篤〔外時〕大一一五　四三　五一七
小林順一郎〔外時〕大一一五　四三　五一七

【軍備制限】軍備縮少を見よ

【軍法會議】

軍法會議の公開を論ず　松波仁一郎〔國家〕大一一年三巻　二八號　三
軍法會議論　松波仁一郎〔志林〕大一一　一六　三
軍法會議と辯護權　松波仁一郎〔新報〕大一一　二四　四
海軍軍法會議と上訴權　松波仁一郎〔法協〕大一一　三二　七
軍法會議の文官判士論　松波仁一郎〔國家〕大一一　二八　八
軍法會議（講演）　花井卓藏〔辯協〕大一一　一八　一八五
海軍軍法會議の公開　松波仁一郎〔新聞〕大一一　一　昭九二六 新九三〇
軍法會議常設論　松波仁一郎〔國家〕大一四　二九　四
佛國軍法會議の裁判管轄權　寺田四郎〔志林〕大一五　一八　六一一
軍法會議の本質に就て　富山單治〔法叢〕大一〇　六　三
軍法會議法に就て　志水小一郎〔新報〕大一〇　一一　八一九
軍法會議法の一瞥　田崎治久〔新聞〕大一〇　一　一八二九
獨逸人に對する佛國軍法會議の判決　鹽田環〔志林〕大一一　二五　五
マインツ佛國軍法會議の判決　鹽田環〔法協〕大一二　四　七
獨逸に於ける軍法會議廢止　松永義雄〔辯協〕大一二　二八　三

ケ部

【刑（ケイ）】

刑罰を見よ

【經（ケイ）營（エイ）】

參照＝科學的管理法。企業。事業。

企業及經營の意義に關する疑問　上田貞次郎〔國經〕明四三　九　五
經營と企業の意義に就て　關一〔國經〕明四三　九　四
企業と經營　坂西由藏〔國經〕明四四　一〇　一
再び企業と經營との意義に就て　關一〔國經〕明四四　一〇　二
事業經營の新勢と會計學　二宮丁三〔會計〕大六　二　三
事業經營學に就て（講演）　志田鉀太郎〔保評〕大七　一一　四
日支共同經營論　中橋德五郎〔法論〕大七　一　八
經營權分配制度を論ず　堀江歸一〔三學〕大九　一四　七
獨逸に於ける經營の社會化に就て　岡田重次〔國經〕大一〇　三一　一一二
我が大經營化の金融的源泉　高島佐一郎〔國經〕大一〇　三一　四一五
獨逸に於ける經營協議會制度　上田孝三〔社政〕大一〇　一　一一
經營上より觀たる原價計算　石黑武松〔會計〕大一一　一一　五
經營學に於ける經營概念の方法論的研究　杉村廣藏〔商研〕大一一　二　一
伯林商科大學經營學研究室の組織及經營　平井泰太郎〔國經〕大一二　三五　六
伯林商科大學經營學研究室當期題材　平井泰太郎〔國經〕大一三　三六　五
會計より觀たる物價と經營との關係に就て　原口亮平〔國經〕大一四　三八　三
經營組織に關する勞働立法に就きて　森山武市郎〔法治〕大一四　四　三一九
市場經濟と經營經濟　向井鹿松〔三學〕大一四　一九　九

【景（ケイ）氣（キ）】

參照＝恐慌。金融。經濟事業。

商業不景氣回復論　渡邊洪基〔統集〕明二〇　一　論六八　事七二
好景氣は何れの時を以て來るべき　植松考昭〔洋經〕明四二　一　四四七二　五四八五
日韓合邦と景氣恢復　飯島千代太〔東經〕明四三　六一　一五四一
不景氣の再來　植松考昭〔洋經〕明四四　一　四五六四　五六八
不景氣觀　井上辰五郎〔日經〕大三　一五　五
不景氣の由來及び効果　氣賀勘重〔三學〕大四　九　一
不景氣は資本活用の好機　本多精一〔財經〕大四　二　二
景氣循環論の一節　池田實〔商經〕大六　一　七

金融調節は景氣持續の要道　本多精一〔財經〕大六　四　一
好景氣の反動と物價　神戸正雄〔經叢〕大九　一〇　一〇
不景氣來と失業問題　宇都宮治郎〔社政〕大一〇　一　五
中間景氣の研究　飯田清三〔銀研〕大一一　三　五
景氣は何時回復するか　山形東根〔東經〕大一一　八四　二〇五
金融の趨勢と中間景氣　堀江歸一〔エコ〕大一二　一　一
株式市價と金融及景氣との關係　池田龍藏〔銀研〕大一二　四　三
我國の景氣を刺戟する外部事業　神戸正雄〔時經〕大一二　一　六
景氣循環による社會的弊害の緩和策　池田龍藏〔三學〕大一二　一七　八
景氣判斷と對策樹立の一材料としての物價指數　村本福松〔商經〕大一二　一　三二
不景氣の原因　石橋湛山〔洋經〕大一二　一　一〇四一
不景氣と租稅　神戸正雄〔經叢〕大一三　一八　四
景氣變動緩和策と金融組織　勝田貞次〔銀研〕大一三　七　四
景氣恢復の時期如何　堀江歸一〔エコ〕大一三　二　一八
不景氣策　神戸正雄〔時經〕大一三　一　二五
貨幣購買力の意義と景氣の基調　勝田貞次〔銀研〕大一四　八　一
景氣の良否と金解禁問題　岡村透〔銀叢〕大一四　四　一一二
物價と景氣　岡田喜三郎〔銀叢〕大一四　四　四
生活線より見たる景氣現象　勝田貞次〔商事〕大一四　五　四
景氣豫報の實理　津田武二〔國經〕大一四　三八　三九
景氣不景氣の循環に就て　道家齊一郎〔金融〕大一四　二　一一六　七
今年の景氣　神戸正雄〔時經〕大一四　一　三一
財界推移と景氣の前途　井上辰九郎〔エコ〕大一五　四　二
景氣回復の道程　堀江歸一〔エコ〕大一五　四　二
金融景氣の特色と其限界　橋本庄藏〔エコ〕大一五　四　三
積極政策と景氣恢復　堀江歸一〔エコ〕大一五　四　三
景氣循環と銀行　岩崎勳〔銀叢〕大一五　六　六

【藝（ゲイ）妓（ギ）】

參照＝娼妓。

社會の改善と藝娼妓問題　寺尾亨〔刑評〕明四二　一　二
藝妓見番の會計　中西新兵衛〔會計〕大一一　一〇　五

【經（ケイ）濟（ザイ）】

參照＝海運。貨幣。恐慌。銀行。金融。景氣。經濟學。經濟政策。工業。交通。財政。產業。資本。社會。商業。信用。貯蓄。統計。農業。物價。保險。貿易。

經濟上に於ける强者と弱者　松崎藏之助〔志林〕明三三　二　三
戰爭と經濟　土子金四郎〔國家〕明三七　八　九二
經濟と法律　添田壽一〔新報〕明三三　九　九五
外交と經濟に關する實況竝學理　金井延〔明法〕明三四　一　明二〇　五二一

法律と經濟　梅　謙次郎〔志林〕明三四　三　二五
エコノミックスとテクニックス　金井　延〔新報〕明三五　一三　五
技術と經濟　神戸　正雄〔國家〕明三五　一六　一八三
經濟と經濟行爲の概念に關する誤謬　福田　德三〔國家〕明三六　一七　二〇〇
穀價の高低と國民經濟　河津　暹〔法協〕明三七　二三　四一〇
經濟の本則と營利主義　福田　德三〔法政〕明三七　八　一三
國民經濟の堅忍持久　金井　延〔法協〕明三八　二三　五一六
經濟單位及經濟組織　山内　正瞭〔新報〕明三八　一五　八
自然と經濟との關係　石橋　五郎〔國經〕明三九　一　四
先づ國民經濟の基礎を鞏固にせよ　加納　久宣〔日經〕明四〇　一　二
經濟と道德　河上　肇〔日經〕明四〇　一　二一三
國民經濟發展の標的を論ず　河津　暹〔日經〕明四〇　一　九
經濟的活動の道義的指揮　神戸　正雄〔日經〕明四〇　一　一〇
權力と法律と經濟　松崎藏之助〔法協〕明四〇　二五　一三
病的經濟論　前橋伊八郎〔明學〕明四一　一　一二五
國際經濟競爭と我が國民經濟政策の大本　神戸　正雄〔京法〕明四一　三　二
經濟組織に關する研究　阿部　秀助〔志林〕明四一　一〇　九
法律と經濟との關係について　仁保　龜松〔京法〕明四一　三　一〇
〔辯協〕明四一　三　二四

「經濟十二論」梗概　河上　肇〔京法〕明四一　三　一一
經濟範圍擴張の大勢　小林丑三郎〔東經〕明四一　六〇　一五一七
經濟上に於ける人格の價値　河田　嗣郎〔日經〕明四二　七　一
地方經濟に就て　床次竹次郎〔三學〕明四三　四　三
經濟行爲の觀念　河上　肇〔國經〕明四三　八　三
經濟行爲の本質を論じて其の賤視せらるゝ所以に及ぶ　河上　肇〔國家〕明四三　二四　六
社會主義と經濟　莊田　秋村〔東經〕明四三　六一　一五三七
Sozialismus, Sozialwirtschaft und Sozialpolitik　H. Waentig〔國家〕明四三　二四　一三
社會主義、社會經濟及社會政策　ウエンチッヒ〔國家〕明四四　二五　一
經濟生活の內容及基礎を論じて河上教授の教を乞ふ　寺尾　隆一〔日經〕明四四　八　一一二
戰爭と財政及經濟　松崎藏之助〔法協〕明四五　三〇　一
經濟と道德の調和　桑田　熊藏〔新報〕明四五　三三　一
水力電氣と國民經濟との關係を論ず　早尾　惇實〔國家〕明四五　二六　七
國民經濟上の杞憂　堀切善兵衛〔國國〕大二　一　一
經濟と倫理　鹽澤　昌貞〔國經〕大二　一四　二
外國貿易と國民經濟の權衡　堀切善兵衛〔三學〕大二　七　一
經濟生活の要素　山縣　憲一〔國經〕大二　一五　五一六
盜賊と經濟　神戸　正雄〔日經〕大二　一三　八

經濟法律演習論　小川鄕太郎〔京法〕大二　八　九
經濟道德論　小林丑三郎〔東經〕大二　六一八
續經濟道德論　大澤菊太郎〔東經〕大二　六一八
支那古代に於ける法制經濟關係文字　後藤朝太郎〔國家〕大二　二一七
經濟的努力論　堀切善兵衛〔三學〕大三　二一九
經濟的進步　米田庄太郎〔京法〕大三　九　一一一
流行の心理と現代經濟生活　米田庄太郎〔國經〕大三　一一六　一一六
商業學の意義と存在並に國民經濟に關する關係　熊崎　良〔國經〕大三　一六　二一三
經濟現象としての現戰役　安田與四郎〔日經〕大三　一六　三一五
經濟上の根本問題　添田　壽一〔財經〕大三　一　四
經濟と道德との關係　田島　錦治〔京法〕大三　九　五
經濟生活に對する國家の干涉　細井安次郎〔國經〕大三　一七　一
經濟生活論　鹽島　仁吉〔東經〕大三　六九　一一七
經濟と技術　增井　光藏〔國經〕大四　一八　一一四
基本的なる經濟的權利　米田庄太郎〔京法〕大四　一〇　三一六
社會問題と經濟及び道德　山田　利淳〔東經〕大四　七一　一九六
經濟主義に就て　戶田　海市〔經叢〕大四　一　四
危險分散主義の原則（合理的經濟並生活の一原則）　神戸　正雄〔經叢〕大四　一　四
ライプチヒ大學の經濟演習　西　彥太郎〔經叢〕大五　二　一
戰爭と經濟國家主義　櫛田　民藏〔國家〕大五　三〇　九一二
經濟雜話　田島　錦治〔經叢〕大五　一一六
經濟漫錄　瀧本　誠一〔經叢〕大六　二一七
區別さるべき經濟生活の二樣式　丸谷　喜市〔國經〕大六　二三　三一四
經濟と技術　舞出長五郎〔國家〕大六　三一　一一
國民經濟の基礎を擴大す可し　堀切善兵衛〔三學〕大六　一一　一二
保險と經濟　小島昌太郎〔保雜〕大六　一　一四二
經濟的行爲と道德的行爲との關係　田島　錦治〔經叢〕大七　二　一一二
世界經濟の成立　作田　莊一〔亞經〕大七　一一二
戰時經濟と「社會的最小限」　森戸　辰男〔國家〕大七　三三　六
經濟生活の意義　山口正太郎〔商經〕大七　一　一
藝術と經濟　阿部　秀助〔三學〕大八　一三　一一〇
經濟生活革新運動　河津　暹〔國家〕大八　三　二一三
經濟道德の新解釋　石澤久五郎〔國經〕大八　一七　三一六
經濟循環期論　財部　靜治〔經叢〕大八　八　二一六
經濟現象の定量的觀察　山口正太郎〔商經〕大八　一　一四
大經濟地域及小經濟地域　馬場　鍼〔國經〕大九　二九　五
經濟生活の道德化　神戸　正雄〔經叢〕大九　一〇　六
人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察　石川　興二〔經叢〕大九　一〇　六

		年	卷	號
ゲセルの「自由經濟論」	園　乾治〔三學〕	大九	一四	九
論語に於ける經濟道德	齋藤　要〔法政〕	大九	一七	一〇
經濟社會に對する史的考察	淺野　研眞〔法政〕	大九	一七	一二
無自覺なる經濟生活	波多野　堯〔洋經〕	大九	一	四九一二
古美術と經濟	黑田太久馬〔東經〕	大九	八二	二〇六三
經濟單位の概念と其變遷	伊藤　久秋〔商濟〕	大六	一〇	一
經濟生活の本質	大野　辰見〔商經〕	大一〇	一	二三
經濟進步の一面觀	平井常次郎〔商經〕	大一〇	一	四二二
世界經濟の整理	小林丑三郎〔經商〕	大一一	一	一
世界經濟の思想と其實況	福田敬太郎〔國經〕	大一一	三三	一一三
經濟生活と法律生活との矛盾	館田　謙吉〔經商〕	大一一	一	二一四
經濟道と經濟術	作田　莊一〔經叢〕	大一一	四四一二	二一六
經濟力保存論	河津　暹〔經商〕	大一一	一	一一六
世界經濟の研究	岡野文之助〔國聯〕	大一一	二	三
支那史料に現はれたる日本最古の經濟生活	橋本　增吉〔亞經〕	大一一	六	四
經濟と自由	堀　經夫〔經叢〕	大一一	一五	四
我國經濟生活の諸特徵	佐野　學〔我等〕	大一一	四	五
ウキリアム・モリスの觀たる中世經濟生活	加田　哲三〔三學〕	大一一	一六	五—六
世界經濟上の諸問題	堀江　歸一〔銀研〕	大一一	二	五
現代經濟組織の社會哲學的批判	納　武津〔東經〕	大一一	八四	二一〇〇

		年	卷	號
社會及經濟	櫛田　民藏〔我等〕	大一一	四	二
時局緊急の經濟關係諸勅令	神戸　正雄〔經叢〕	大一一	四	二
經濟と自然	大內　武次〔經商〕	大一一	二	一七八
經濟封鎖の研究	齋藤　春次〔新報〕	大一一	三三	六—八
經濟行動と心理學	福富　一郎〔臺法〕	大一一	一七	一〇
世界經濟と植民政策	長田　三郎〔商經〕	大一一	一	三一
經濟社會の存立及其發達を論ず	津田　武二〔國經〕	大一一	三五	六
世界經濟と日米貿易	アボット〔東經〕	大一一	八五	二一三五
世界經濟の意義	作田　莊一〔經叢〕	大一一	一七	六
經濟社會と貨幣概念	土方　成美〔社雜〕	大一一	一	一一二
國民經濟と世界經濟	財部　靜治〔經叢〕	大一一	一九	二
經濟組織の發達と貨幣の職能	增井　光藏〔國經〕	大一一	三七	二
經濟現象の一考察	山口正太郎〔國經〕	大一一	三七	三
經濟單位に關する考察	田中　俊彥〔長彙〕	大一一	四	三
經濟調査の理論と方法	松田　義雄〔國家〕	大一一	三八	五—六
共同經濟	田中　貢〔經商〕	大一一	三	六
吾國古代の經濟生活	大內　武次〔經商〕	大一一	三	八—九
關東震災の對策と經濟生活の樣式	竹島富三郎〔商經〕	大一一	一	三三
法律と經濟	竹井　廉〔新聞〕	大一一	一	二二七一
儀式經濟	大內　武次〔經商〕	大一一	一四	三一〇二

		年	卷	號
白人經濟對東洋經濟	柏田　忠一〔亞經〕	大一四	九	一
宗教生活と經濟生活カルヴィニズムの英國經濟に及ぼせる影響について	笹森　健三〔商濟〕	大一四	六	一
倫理と經濟との關係	財部　靜治〔經叢〕	大一四	二〇	一—二
法律及經濟の一元論的考察	山內　正瞭〔商研〕	大一四	五	二
經濟生活に於ける心理學の應用	水上森太郎〔法治〕	大一四	四	二—三
經濟と社會	岸本誠二郎〔經研〕	大一四	二	四
「行動」の社會性と「經濟行爲」の反社會性	長谷川萬次郎〔我等〕	大一四	七	五
政治と經濟の改造	小林丑三郎〔經商〕	大一四	四	八
經濟危機の社會心理的觀察	川邊喜三郎〔社雜〕	大一四	一	二
國民經濟の國際化	高柳松一郎〔國知〕	大一四	五	二
經濟一斑	志村源太郎〔統集〕	大一四	一	四三二〇 四三二一
效用及び費用の概念と經濟の概念	高木友三郎〔法集〕	大一四	一	一
カアバアの新經濟革命論	野村兼太郎〔我等〕	大一五	八	一
經濟とは何ぞや	高田　保馬〔經研〕	大一五	三	二
經濟の哲學的基礎	小林丑三郎〔經商〕	大一五	五	二
國民經濟か世界經濟か	西　雅雄〔マルヽ〕	大一五	四	四
新經濟原則と新經濟生活	勝田　貞次〔イン〕	大一五	三	五
經濟生活の基礎條件	松下　芳男〔法政〕	大一五	二三	五—六
南亮三郎著「最新學說流通經濟の原理」	丸谷　喜市〔國經〕	大一五	四〇	六

參照＝價格。價値。貨幣。銀行。金融。經濟。經濟政策。限界效用。財產。財政。產業。資本。資本主義。社會學。社會主義。需要と供給。商業。所得。消費。人口。信用。生產。租稅。地代。賃銀。統計。富。農業。貧困。物價。分配。貿易。報酬漸減。利益分配。利子。利潤。勞働と資本。勞働及び勞働階級（スミスの國富論に就ては「スミス國富論」を見よ）

【經濟學】

		年	卷	號
經濟學は應用せられたる人生學の結果	歲市　利美〔統集〕	明一七	一	四三八 四四七
經濟學竝統計學を論ず	殖田直太郎〔統集〕	明二〇	一	七三
經濟學上人員學の應用	河合　利安〔スタ〕	明二一	一	一九 六七
統計學と經濟學との關係	橫山　雅男〔統集〕	明三一	一	九七
ボアソナード氏の經濟論を評す	金井　延〔法協〕	明二六	一〇	一二
現時日本に於ける經濟學の地位を論して所感を述ふ	田島　錦治〔法協〕	明二九	一四	八
經濟學研究の方法としての統計	吳　文聰〔統雜〕	明二九	一	一二八

題目	著者	年	卷	號
經濟學小史	岩政　憲三〔新報〕	明三〇	七	七五
ワグネル述獨逸諸大家の經濟學及社會主義	持地六三郎〔國家〕	明三〇	七	四二二
經濟學の定義及分科に付て	高野岩三郎〔國家〕	明三一	八	四二二
經濟學の基本原理及其重要なる所以を論す	神戸　正雄〔國家〕	明三四	一二	一七二
經濟の意義、種類を論じ吾國歷史上經濟階級の實際的活動に及ぶ	山内　正瞭〔國家〕	明三五	一三	四一八七
時勢と經濟學	金井　延〔志林〕	明三六	五	四〇
經濟理法を論す	小林丑三郎〔明法〕	明三六	一	五一
經濟學の根本問題に關し現代諸大家の學說を評して自家の所見を述ふ	河上　肇〔國家〕	明三六	一三	一九八
トマス・ダキノの經濟學說	福田　德三〔國家〕	明三六 一七 一九	一九六 六一	八一
經濟學の起原と其沿革に就て	和田垣謙三〔法政〕	明三七	八	一一二
經濟學の分類に就て	山内　正瞭〔志林〕	明三八	七	三
經濟基本論に對する疑義	山内　正瞭〔志林〕	明三八	七	五
經濟意義論の大要	山内　正瞭〔新報〕	明三八	一五	六
正統經濟學派及歷史經濟學派の經濟政策に對する關係竝に地位を論ず	松崎藏之助〔國經〕	明三九	一	六
歷史竝經濟學派と經濟的史風	阿部　秀助〔志林〕	明四〇	九	二—六
獨逸經濟學派の趨勢	高岡　熊雄〔國經〕	明四〇	二	三
諸經濟學派の經濟政策觀	松崎藏之助〔日經〕	明四〇	一	四
經濟學者無用論及其批評	河上　肇〔明學〕 〔日經〕	明四〇 明四〇	一 一	一二五 四—五
最新經濟學派殊に社會政策及社會主義の經濟政策に對する關係竝に地位を論す	松崎藏之助〔國家〕	明四〇	二	五
福田博士の「經濟學講義」集義和來に現れたる熊澤蕃山の經濟學說	瀧本　美夫〔國經〕	明四〇	三	六
經濟學史の研究に就て	河上　肇〔國家〕	明四〇	二	一〇
東洋經濟學の建設	阿部　秀助〔志林〕	明四〇	九	一一
英國經濟學界の近狀	山路　愛山〔日經〕	明四一	四	一—二
中井竹山の草茅危言に於ける經濟學說	原島　茂〔國經〕	明四一	四	四—五
佛國經濟學界の近狀	松崎　壽〔國經〕	明四一	五	五
輓近伊太利經濟學の發達と斯學研究の新趨向	高木　二郎〔國經〕	明四一	四 五	平—六 一
經濟學參考書搜索指針	神戸　正雄〔京法〕	明四一	三	七—八
アシュレー教授の大學經濟科繁榮策に就て	神戸　正雄〔京法〕	明四一	三	一二
經濟學史上の一奇觀	河上　肇〔京法〕	明四一	四	一
	小川　節〔三學〕	明四一	一	一

題目	著者	年	卷	號
經濟原論の內容區分に付て	瀧本　美夫〔國經〕	明四一	七	一
經濟學の內容區分に關する瀧本君の論文に就ての疑點一二	福田　德三〔國經〕	明四一	七	二
歸納的眞理の價値の大小	河上　肇〔國經〕	明四一	七	二
經濟學研究法に就て福田博士に教を乞ふ	河上　肇〔國經〕	明四一	七	五
陽明學と經濟學	山路　愛山〔日經〕	明四一	五	五
經濟學上に法則なし	河上　肇〔日經〕	明四一	五	七
經濟學の基本觀念に關する管見	吉野　作造〔日經〕	明四一	五	九—一一
正統學派の功罪及び經濟學の現狀	河上　肇〔日經〕	明四一	五	九—一二
法律學と經濟學の接觸點	山口　弘一〔國經〕	明四一	八	一—二
實際經濟政策に對する經濟學の意義	小泉　信三〔三學〕	明四二	三	三
經濟學上の常規を論す	財部　靜治〔新報〕	明四四	二	三—五
我國經濟學界の急務	他島　誠三〔日經〕	明四四	一〇	五
經濟學と經濟法則	河上　肇〔國經〕	明四四	一	六
計理學と經濟學との關係に就て	佐野　善作〔日經〕	明四四	九	一二
日英經濟思想の相違	大越　成德〔東經〕	明四四	六三	一五九
ロンドン經濟政治學校講義目錄	上田貞次郎〔國經〕	明四五	一三	一二
福田博士著「經濟學教科書」を讀む	寺尾　隆一〔國經〕	明四五	一二	三
經濟學の原理に關する一疑點	稻田周之助〔日經〕	明四五	一〇	八
レオン・クラア及びロザンヌ學派	高田　保馬〔國經〕	大元	一三	五—六
經濟學上の法則と其研究法	瀧　正雄〔京法〕	大二	八	一—二
左右田學士の「經濟法則の論理的性質」を讀む	高田　保馬 瀧　正雄〔京法〕	大二	八	一—四
福田博士に答ふ	左右田喜一郎〔國經〕	明四五	一二	一
獨逸最近の經濟學（講演）	阿部　秀助〔國家〕	大二	二七	二
囚はれたる經濟學	大西猪之助〔國經〕	大二	一四	二—五
「內外經濟名著」の刊行	河上　肇〔京法〕	大二	八	六
經濟學者と社會學者	山口鎌治郎〔國經〕	大三	一六	二
德川時代の經濟學說に就て（講演）	瀧本　誠一〔國家〕	大三	二八	四
純理的國民經濟學の對象及根本概念	飯島　幡司〔國經〕	大三	一七	四
十七、八世紀に於ける和蘭經濟學說	福田　德三〔三學〕	大三	八	四—九
維新前の經濟書に就いて（講演）	內田　銀藏〔國家〕	大三	二八	四—六
經濟學の職分	作田　莊一〔國家〕	大三	二八	六
世界經濟學の要求と其意義	阿部　秀助〔日社〕	大三	一	一—二

		年	卷	號
經濟學に自然法ありや	飯島　幡司〔國經〕	大四	一九	五
カント認識論と純理經濟學	左右田喜一郎〔國經〕	大四	一九	五
經濟學の三樣式	安田與四郎〔日經〕	大四	一六	八
經濟學認識論の若干問題	左右田喜一郎〔經叢〕	大四	一	二—四
孔孟の政治經濟說管見	田島　錦治〔經叢〕	大四	一	二
經濟學の科學的性質の變遷	大矢和　昇〔三學〕	大四	九	一二
デヴキッド・ヒュームの經濟學說		大四	一〇	一
經濟學に於ける法則の意義	福田　德三〔經叢〕	大四	一二	一二
瀧本誠一氏の草茅危言摘義の解題に就て	山口正太郎〔國經〕	大五	二一	二一—四
本多利明の經濟說	鈴木券太郎〔經叢〕	大五	三	二—三
ラヴレー「ミール」學說の研究	本庄榮治郎〔經叢〕	大五	二	一—六
本多利明の經濟說に關し本庄學士の敎を乞ふ	大塚金之助〔經叢〕	大五	三	一—四
本多利明の經濟說に關し福田博士の高敎に答ふ	福田　德三〔經叢〕	大五	三	一
神惟孝の事に就き鈴木券太郎氏に答ふ	本庄榮治郎〔經叢〕	大五	三	二
米國經濟學思潮の今昔	瀧本　誠一〔經叢〕	大五	三	四
所得を中心とする經濟理論の結構	高島佐一郎〔三學〕	大五	一〇	四—一〇
グレシャムの法則と德川時代の經濟學說	小泉　信三〔三學〕	大五	一〇	四—一〇
理形式主義經濟學	福田　德三〔三學〕	大六	一二	一二
經濟學に於ける論理主義と心理主義	山口正太郎〔國經〕	大七	二四	一
經濟原理四分法の辯	三邊　金藏〔三學〕	大七	三	一—二
自然科學派經濟學	大西猪之介〔國經〕	大七	二四	二—六
純理論派經濟學の立脚點と其限界	山口正太郎〔國經〕	大七	二五	四
名譯讀餘の感想	高島佐一郎〔國經〕	大七	二四	四
德川時代の經濟學說	本庄榮治郎〔經叢〕	大七	七	六
經濟學と社會的過程	舞出長五郎〔國家〕	大七	三三	八
Tableau Economique(經濟表)の解說	三邊　金藏〔三學〕	大七	一三	四—一〇
クセノフォンの諸著に現はれたる經濟思想	高橋誠一郎〔三學〕	大七	一三	三
新カント派認識論と經濟學	山口正太郎〔商經〕	大七	一	三
德川時代に於ける大阪の經濟學說	瀧本　誠一〔商經〕	大七	一	九—一〇
近世に於ける經濟思想の變遷	高橋誠一郎〔我等〕	大八	一	三
經濟學部の分立	河津　遜〔國家〕	大八	三三	四
Ophélimité の極大を論す	手塚　壽郎〔國經〕	大八	二七	四
フキッシャー「世界改造と經濟學者の任務」	三上　正毅〔國國〕	大八	七	五
國民經濟學と私經濟學との關係	渡邊　鐵藏〔國家〕	大八	三三	六—七
トオマス・ホッブスの政治哲學中に現はれたる經濟學說	高橋誠一郎〔三學〕	大八	一三	七
優生學と經濟學	糸井　靖立〔國家〕	大八	三三	七—九
ジョン・ロックの哲學と其經濟學說との交涉	高橋誠一郎〔三學〕	大八	一三	八—九
私經濟學の本質及其研究範圍	渡邊　鐵藏〔國家〕	大八	三三	九—一二
デヴイド・ヒュームの經濟學說	高橋誠一郎〔三學〕	大八	一三	四—一〇
私經濟學發達史	渡邊　鐵藏〔國家〕	大八	三三	三
米國經濟學史略	財部　靜治〔商經〕	大八	一	一五
意志の自由と經濟學	舞出長五郎〔經學〕	大九	一	一
第十八世紀英國經濟學の道德哲學的基礎	東　晉太郎〔國經〕	大九	二八	一—二
アウスピッツ・リーベン曲線	手塚　壽郎〔國經〕	大九	二八	二
大西敎授著「伊太利亞の旅」と「囚はれたる經濟學」	左右田喜一郎〔國經〕	大九	二八	四
附福田博士著「經濟學研究」合卷	石川　與二〔經叢〕	大九	一〇	四
經濟學不進步の原因に就きて	增井　幸雄〔三學〕	大六	一一	一
代の經濟學說	高橋誠一郎〔三學〕	大六	一一	一
フランソア・ケネーの經濟論	米田庄太郎〔經叢〕	大六	四	一—五
經濟心理學の組織的研究	河上　肇〔經叢〕	大六	四	二
「一經濟學者の第二思想」を讀む	武藤　長藏〔經叢〕	大六	四	三
アーノルド・トインビーと經濟書	高橋誠一郎〔三學〕	大六	一一	四
沙翁の著書として誤傳せられたる匿名代の經濟論	堀內　泰吉〔國經〕	大六	二三	四
商業敎育と經濟學	山口正太郎〔國經〕	大六	二三	五
心理學者の經濟學觀	矢野　貫城〔國經〕	大六	二三	五
ムーア敎授の經濟學說に就て	石澤久五郎〔國經〕	大六	二三	五—六
英國の產業革命當時と其後に於ける經濟思想と產業政策との關係	舞出長五郎〔國家〕	大六	三一	八
希臘經濟思想の特質及び價値	舞出長五郎〔國家〕	大六	三一	一〇
經濟學史について	高橋誠一郎〔三學〕	大六	一一	四—一〇
サー・キリアム・ペチイの國富論	西村文太郎〔國國〕	大六	七	六—一二
天理學派論				
カント國家及法律哲學と論				

題目	著者	誌名	年	卷	號
Tacitus 並に Caesar の記錄に對する一見解	津田 武二	〔國經〕	大九	二八	五
ラスキン「ムネラ・プルヴエリボッブスの政治	大熊 信行	〔國經〕	大九	二九	一—二
經濟學の發端 Richard Cantillon	福田敬太郎	〔國經〕	大九	二九	四—五
アンドリユー・ヤラントンの經濟論	高橋誠一郎	〔三學〕	大九	一四	六
英國現代の經濟學者と社會主義	三田村一郎	〔經叢〕	大九	二	六
東洋の經濟思想と荒政	小島 憲	〔國國〕	大九	八	六—一〇
フイヒテの經濟觀	阿部 秀助	〔三學〕	大九	一四	四—一〇
フォルトレーの經濟論	山口正太郎	〔商經〕	大九	—	三—一二
ロオドベルトスの經濟學說補遺					一九
社會法學派經濟學	小泉 信三	〔三學〕	大一〇	一五	一—三
リーフマン經濟原論の心理的立脚地	伊藤 久秋	〔商濟〕	大一〇	一	—
シユテフインガトの經濟哲學の解說	山口正太郎	〔國經〕	大一〇	三〇	二
經濟學者と一社會主義者との立會演說	山口正太郎	〔同論〕	大一〇	—	五
經濟的合理主義の基礎	河上 肇	〔社問〕	大一〇	—	二八
戰後の經濟思想	福田敬太郎	〔國經〕	大一〇	三一	六
	小林丑三郎	〔社政〕	大一〇	—	一〇
中世に於ける經濟思想	關 未代策	〔國國〕	大一〇	九	一二
經濟學の革命	河上 肇	〔經叢〕	大一一	一〇	二
牛津劍橋兩大學經濟學科新課程			大一一	一五	一
古代希臘及び羅馬に於ける經濟思想	北村 五良	〔國經〕	大一一	三一	一
中世經濟思想史序論	關 未代策	〔國國〕	大一一	一〇	一
經濟哲學の概念と其の限界	向井 章	〔法政〕	大一一	一九	一—四
經濟學界の發表數種	館田 謙吉	〔經商〕	大一一	一	一
Adam Smith 以前	小泉 信三	〔我等〕	大一一	四	一
經濟靜學觀	關 未代策	〔經商〕	大一一	一	一—五
清教倫理的經濟思想	高田 保馬	〔國經〕	大一一	三一	三—四
アダム・スミスと經濟學	福田敬太郎	〔國經〕	大一一	三一	三—四
中世經濟思想の特色	河合榮治郎	〔國家〕	大一一	三六	
ジエレミー・ベンサムと經濟學	向井 章	〔法政〕	大一一	一九	五
サー・ヰリヤム・テンプルの經濟論	河合榮治郎	〔經論〕	大一一	一	一
ジエイ・エス・ミルと經濟學の定義	高橋誠一郎	〔三學〕	大一一	一六	七—九
トウロブリアンド島人の原始經濟學に就て（譯）	榎本 鑛治	〔三學〕	大一一	一六	七—九
經濟學の自然科學的基礎	石田秀一郎	〔同論〕	大一一	—	七
リスト歷史派經濟學	上原 好咲	〔三學〕	大一一	一六	四—一
	山口正太郎	〔經叢〕	大一一	一五	五—二
					六

題目	著者	誌名	年	卷	號
原田法學士譯「ボリユー經濟學原論」	小川福太郎	〔經叢〕	大一一	一五	六
現代經濟學の一面	加田 哲二	〔財經〕	大一一	九	一六
貨幣中心の經濟學	大野 辰見	〔商經〕	大一一	一	二六
心理學的經濟學說に關する若干の考察					二九
經濟學に於ける自然法則の觀念（譯）	高垣寅次郎	〔商研〕	大一〇	一	一
經濟學史上のウイリアム・タムソン（譯）	阿部 賢一	〔同論〕	大一一	七	八
プラトーの經濟思想	波多野 鼎	〔同論〕	大一一	一	九
歷史派經濟學と史學方法論	住谷 悅治	〔同論〕	大一一	一	九
アダム・スミスの經濟學	山口正太郎	〔商經〕	大一一	一	二八
飯島幡司著「ヂイド修正經濟學原論」を讀む	關 未代策	〔經商〕	大一一	一	二七
恒藤恭著「ジムメルの經濟哲學」	高島佐一郎	〔國經〕	大一二	三五	一
古典派、俗流、歷史派及マルクス派經濟學	增井 光藏	〔國經〕	大一二	三五	一
タブーとしての近代經濟學說	ルクセンブルグ	〔原雜〕	大一二	一	一
歷史派經濟學發達の經路	出井 盛之	〔我等〕	大一二	五	一
レーデラー教授の經濟學理論上の結構	山口正太郎	〔經叢〕	大一二	一七	一—二
	有澤 廣巳	〔經論〕	大一二	二	一
希臘經濟思想概觀	梅北 末初	〔商研〕	大一一	二	一
經濟學史上のベツカリヤ	小川福太郎	〔經叢〕	大一二	一七	三
經濟學に於ける概念構成の問題	李 永霖	〔國經〕	大一二	三四	二—三
經濟學及び社會思想の唯物史觀概論	櫛田 民藏	〔我等〕	大一二	五	三
希臘思想の背景と經濟論の萌芽	谷口彌五郎	〔我等〕	大一二	五	四
クエイカの經濟思想	上田辰之助	〔國經〕	大一二	三四 三五	三 一
カントに歸つて經濟學を論ず	勝田 貞次	〔三學〕	大一二	一七	五
リカアド經濟論文集の刊行	谷口 吉彥	〔經叢〕	大一二	一七	六
經濟原論と經濟政策	大內 武次	〔經商〕	大一二	二	六
所謂經濟法學の出現に就て	竹井 廉	〔志林〕	大一二	二五	六—七
アダム・スミスと其後の佛蘭西經濟學說	增井 幸雄	〔三學〕	大一二	一七	七
アダム・スミスの理論經濟學概論	小島 信三	〔三學〕	大一二	一七	七
アダム・スミスの理論經濟學體系に就て	松浦 要	〔新報〕	大一二	三三	八
經濟學の科學的性質と經濟法則の意義	勝田 貞次	〔三學〕	大一二	一七	八
現代社會思潮と最近の經濟思想	永井 亨	〔社政〕	大一二	—	三九

題目	著者	誌名	年	巻	號	頁
經濟學と統計學	郡　菊之助	〔商叢〕	大二	一	一	一
リストの國民經濟學	古屋　美貞	〔同論〕	大二	一	一	二
經濟學の自然哲學的基礎（ブルガコフ）	恒藤　恭	〔同論〕	大二	一	一	三
アダム・スミスのフイヂオクラート批評	村松恒一郎	〔商研〕	大二	三	一	一
經濟現象に於ける權力關係	長谷川萬次郎	〔原雜〕	大二	二	一	二
經濟學の基礎觀念	小林丑三郎	〔經商〕	大二	三	一	一
ケネーの經濟表と唯物史觀との交渉	櫛田　民藏	〔原雜〕	大二	二	一	一
スミスと浪漫派經濟學	山口正太郎	〔經叢〕	大二	一八	一	一
和學者の經濟學說	瀧本　誠一	〔三學〕	大二	一八	一	一
マルクスの經濟學說を克服する唯一の方法	カウツキー	〔原雜〕	大二	二	一	二
高橋龜吉著「經濟學の實際知識」	山川　均	〔マル〕	大二	一	九	二
ヘーゲルの哲學史とマルクスの經濟學史	久留間鮫造	〔原雜〕	大二	二	二	二
ラッサール經濟學說の研究	山口正太郎	〔我等〕	大二	六	二	二
經濟學の再建と消費問題	柳澤　泰爾	〔經商〕	大二	三	三	三
數理經濟學に於ける二つの傾向と其の綜合の試みとに就て	中山伊知郎	〔商研〕	大二	三	二	二
經濟學理の基調としての人性考察	東　晉太郎	〔國經〕	大二	三六	三—四	
米國經濟學史上のケリーと其の著述	武藤　長藏	〔長彙〕	大二	四	四・	
經濟學諸概念の社會心理學的考察	上原　好吠	〔三學〕	大二	一八	五—六	
バウエル「社會主義經濟論の一發展」	赤松五百麿	〔我等〕	大二	六	六	
經濟學方法論上の一疑問	土方　成美	〔國家〕	大二	三八	七	
作用經濟學と其構成法に就て	勝田　貞次	〔國經〕	大二	三七	六	
西洋經濟思想の波日は國富論出版の年を以て嚆矢となすが如し	竹内　謙二	〔國家〕	大二	三八	八	
新經濟學の曙光	八木澤善次	〔新報〕	大二	三四	八	
エンゲルス「經濟學批判大綱」（譯）	後藤信夫・喜治隆一	〔我等〕	大二	六	八	
J. M. Clark「經濟學社會化論」（譯）	八木澤善次	〔新報〕	大二	三四	四〇—四二	
經濟靜態及び動態（クラーク）	林　要	〔同論〕	大二	一	一三	
ゼノフォン經濟思想	住谷　悅治	〔同論〕	大二	一	一五	
二、三、の經濟學教科書に就て	大野　辰見	〔商經〕	大二	一	三四	
經濟學に於ける抽象的推理の效用	小林　義雄	〔商叢〕	大二	二	一	

題目	著者	誌名	年	巻	號	頁
經濟學の發達	淡川　康一	〔商叢〕	大二	二	一	
快樂主義經濟學說の心理的基礎（特にゼレミー・ベンサムの學說を中心として の研究）	高垣寅次郎	〔商研〕	大二	三	二	
歷史派經濟學と社會政策	高橋誠一郎	〔社政〕	大二	一	四〇	
加特力教經濟學の衰滅	高橋誠一郎	〔社政〕	大二	一	四九	
アインスタイン相對性原理と經濟法則の客觀性	二木　保幾	〔社科〕	大二	一	一	
最近の巴里大學並に佛蘭西經濟學界の一般	江藤　誠之	〔國經〕	大二	三八	二	
理論經濟學の創始者としてのリカルド	村松恒一郎	〔商研〕	大二	五	二	
經濟學的認識の價値性質	杉村　廣藏	〔商研〕	大二	五	二	
三つの著述を通じて見たるオグユタン　クールノーの經濟學說	中山伊知郎	〔商研〕	大二	五	二	
經濟靜態に就て	高田　保馬	〔經研〕	大二	二	二	
經濟學批判の方法論	福本　和夫	〔マル〕	大二	三	一—五	
英國經濟學發展の一大觀	財部　靜治	〔經叢〕	大二	二〇	三	
商書周書に見はれたる政治經濟思想	田島　錦治	〔經叢〕	大二	二一	二	
徒然草に現はれたる經濟思想	中村　信一	〔法政〕	大二	三	一	四
「マルクス經濟學大綱」を讀む	西　雅雄	〔マル〕	大二	三	一	
經濟哲學の二問題		〔資料〕	大二	一	六	
中井竹山の經濟思想	本庄榮治郎	〔經研〕	大二	二	一	
自然的地理的環境の經濟學的考案	伊藤　秀一	〔三學〕	大二	一九	七	
ベルンシュタインの經濟形態論	松下　芳男	〔法政〕	大二	二	九—一二	
重農主義と國民經濟學の成立	青木　孝義	〔法政〕	大二	二	一三	
「國富論」以後	高橋誠一郎	〔三學〕	大二	一九	一三	
フイヂオクラット經濟學に顯はるゝ二つの思想動機と其哲學的基礎	村松恒一郎	〔商研〕	大二	四	三	
經濟概念の論理的前提に就ての疑問	高垣寅次郎	〔商研〕	大二	四	二	
大學としての政治學經濟學の過去を顧みて政治經濟學部の使命に及ぶ	高田　早苗	〔早政〕	大二	一	一	
經濟學力法論概說	二木　保幾	〔早政〕	大二	一	一	
新しい經濟學への一貢獻	出井　盛之	〔早商〕	大二	一	一	
經濟學の基調としての社會學に關する考察	小林　郁	〔社雜〕	大二	一	一四	
經濟靜學と經濟動學との調						

和
經濟學の發達　喜多村利雄〔商經〕大一四年　卷一　號三七
マーシャル經濟思想に於ける綜合とその意義　淡川　康一〔商叢〕大一五　三　一
現代印度の經濟學　猪谷　善一〔社科〕大一五　二　一
通俗マルクス經濟學への一貢獻　出井　盛之〔我等〕大一五　八　一
マルクス「經濟學批判」の腹案に就いて（譯）　北澤新次郎〔我等〕大一五　八　一
カッセル「理論的社會經濟學」の研究　久留間鮫造〔原雜〕大一五　四　一
グスタフ・カッセル「經濟學根本思想」の一節　高島佐一郎〔國經〕大一四　三八　四・六　三九　一・六　四〇　二
經濟學の前提を爲す哲學心理學及社會學の諸條件と經濟學との關係　高木　壽一〔三學〕大一五　二〇　二
輓近佛國に於ける社會主義經濟學說　井關　孝雄〔法政〕大一五　二三　二―三
「大學」に見はれたる經濟思想　關　未代策〔經商〕大一五　五　二―三
「經濟學批判」の完成　田島　錦治〔經叢〕大一五　二三　三
ケネー「經濟表の範式」に就て　西　雅雄〔マル〕大一五　四　三
經濟學史上より見たる最近經濟學の地位　三邊　金藏〔三學〕大一五　二〇　四
「經濟學批判」の批判　大館　堯壽〔新報〕大一五　三六　四
ケネーとアダム・スミス　西　雅雄〔マル〕大一五　四　五
Le fait Social の性質と經濟學の研究方法　瀧本　誠一〔三學〕大一五　二〇　六
經濟學と統計學　松浦　要〔新報〕大一五　三六　六
經濟學の倫理性　郡　菊之助〔統雜〕大一五　一　四七七
經濟學文獻の邦譯二つ　高橋誠一郎〔社政〕大一五　一　六七
正統派經濟學に於ける人間性論　岩崎　卯一〔社雜〕大一五　一　二三
社會生活の進化と經濟學　古屋　美貞〔同論〕大一五　一　一九
經濟學の範圍及び研究方法　酒井正三郎〔商叢〕大一五　三　一
チャップマンの經濟學觀　前馬　治一〔商叢〕大一五　三　一
郡　菊之助〔商叢〕大一五　三　一

【經濟史】

參照＝經濟。經濟學。經濟事情。經濟政策。產業。社會。法制史。（尙各國名を見よ）

ラクザの帳簿に現はれたる伊太利經濟史の一節　福田　德三〔國經〕明四〇　三　六
ウグタリズの時代と其學說　福田　德三〔國經〕明四一　四　四五
經濟未生已前の人類狀態　河上　肇〔國經〕明四三　六　二
日本經濟史研究の材料に就て　內田　銀藏〔國家〕明四三　二三　七―九
經濟史の材料に就て　內田　銀藏〔東經〕明四三　五九　一四九二
室町時代の經濟史的事實の一端　松本彥次郎〔三學〕明四五　六　三
經濟發達階段の心理化　米田庄太郎〔國經〕明四五　一二　四―六
拙著「經濟史總論」に就き松崎商學士の批判に答ふ　內田　銀藏〔國經〕大元　一三　五
日本經濟史料（室町時代記錄の部）　松本彥次郎〔三學〕大二　七　一―二
日本中世經濟史料　松本彥次郎〔三學〕大二　七　四
支那古代の社會史經濟史と其研究補助學としての說文學　田崎　仁義〔國經〕大二　一四　一六
日本經濟の發展　石井　宗吉〔國國〕大二　一　一二
經濟史觀の前九年後三年の役　松本彥次郎〔三學〕大三　八　六
玉葉の經濟史的研究　松本彥次郎〔三學〕大三　八　九―一〇
第十九世紀に於ける獨逸經濟發達の一斑　高島佐一郎〔三學〕大四　九　十一
ビュッヒアーの經濟發達段階說は其獨創に非す　神戸　正雄〔經叢〕大五　三　三
リストの經濟發達階段說に就て　本庄榮治郎〔經叢〕大六　五　四
ヒルデブランドの經濟階段說に就て　本庄榮治郎〔經叢〕大六　五　五
「ヴェアギルド」の經濟史的研究　津田　武二〔國經〕大八　二七　二―五
ビュッヘルの經濟階段說に就て　本庄榮治郎〔經叢〕大八　八　六
經濟史の研究に就て　瀧本　誠一〔三學〕大八　一三　一一
近刊の經濟史に關する三著述　本庄榮治郎〔經叢〕大九　一一　二
本庄法學士の「經濟史研究」　內藤吉之助〔國家〕大九　三四　七
歐米經濟史界の趨勢と其研究法　木村　莊五〔三學〕大九　一四　九―一〇
竹越氏の日本經濟史に就て　本庄榮治郎〔經叢〕大九　一一　六
日本經濟史研究の必要と困難　本庄榮治郎〔經叢〕大一〇　一三　一
ロシヤ經濟史概說　佐野　學〔國家〕大一〇　三五　五
經濟史研究に就て　野村兼太郎〔三學〕大一〇　一五　七―一二
エルンスト・フリードリッヒの經濟階段說　黑正　巖〔經叢〕大一一　一四　三
經濟發達の常序に就きて　財部　靜治〔商經〕大一一　一　四二七　三二八
カンニングハムの經濟史の立場　本位田祥男〔經論〕大一一　一　一
經濟發達階段學說に對するゲオルグ・フォン・ベロウの批評　土屋　喬雄〔經論〕大一二　二　一
日本の經濟史の特性　本庄榮治郎〔經叢〕大一二　一六　六
經濟發達階段說の性質　石田秀一郎〔同論〕大一三　一　一四
ヒルデブランドの階段說の

立脚點に就て　石田秀一郎〔同論〕大一三　一　一五
本庄博士講筵大阪經濟史に就て　肥田昌三〔商經〕大一三　一　三四
原始黃金時代の回復　石川三四郎〔我等〕大一四　七　三
經濟史上に於ける宗教の地位　石濱知行〔我等〕大一四　七　四
商業史と經濟史　大野辰見〔商經〕大一四　一　三九—四〇
古代英國經濟史考斷片　野村彙太郎〔三學〕大一五　二〇　一
世界經濟の成立過程　作田莊一〔經叢〕大一五　三　一—四
經濟の發達に就て（講演）　本庄榮治郎〔彦パ〕大一五　一　一
Thomas More, Utopia を通じて見たる當時の經濟狀態　本位田祥男〔經論〕大一五　四　四
經濟史講話　田崎仁義〔長學〕大一五　七　四—五
經濟史の研究方法　福本和夫〔社科〕大一五　二　五
參照＝海運。貨幣。恐慌。競爭。銀行。金融。景氣。經濟政策。工業。財政。產業。社會。商業。物價。貿易。（尙各國名を見よ）

【經濟事情】

明治十年以後の我邦經濟事情　田口卯吉〔統集〕明三　一　九四
日獨經濟小觀　田島錦治〔內外〕明三五　一　一
國際經濟競賣と我國民經濟政策の大本　神戸正雄〔京法〕明四一　三　二
世界經濟上に於ける農業及工業の調和　氣賀勗重〔國經〕明四一　四　三
經濟界の前途に就て　瀧臺水〔東經〕明四一　五七　一四二三
日本國民經濟の轉廻　松崎藏之助〔國經〕明四二　七　一
本邦經濟界の趨向　米澤貞二〔國經〕明四三　九　三
經濟的海外膨脹論　服部文四郎〔外時〕明四三　一三　四
伊藤公と財政經濟（講演）　澁澤榮一〔國家〕明四三　二四　七
水災の經濟界に及ぼす影響如何　北崎進〔東經〕明四三　六二　一五六
財政經濟の將來　片岡直溫〔洋經〕明四四　一　四七三—四七六
ベルンに於ける經濟學會議に就て（講演）　阪谷芳郎〔法協〕明四五　三〇　一
經濟談　阪谷芳郎〔新報〕明四五　二三　五
改元と經濟　黑澤龍濱〔東經〕明四五　六六　一六五八
經濟上の大日本主義　植松考昭〔洋經〕明四五　一　四八三—四八四
我國經濟の地位　高野岩三郎〔統集〕明四五　一　三七四
明治大帝の崩御と經濟上の影響　阪谷芳郎〔日經〕大元　一　一〇
明治後半期の經濟的變化　安田與四郎〔洋經〕大元　一　四六一二—四六一三
氣候と世界經濟　石橋五郎〔國經〕大二　一五　二
帝國經濟上の概觀（講演）　早川千吉郎〔國家〕大二　二七　五
憐れむべき日本の世界經濟上の地位　神戸正雄〔京法〕大二　八　六

戰爭と經濟　阪谷芳郎〔國國〕大二　一　六
中央調査局建設の議　神戸正雄〔日經〕大二　二　七
財政經濟問題の骨子　本多精一〔財經〕大三　一　一
經濟的戰時準備有りや　辻村楠造〔日經〕大三　一六　四
大藏大臣の經濟觀を評す　高城仙次郎〔三學〕大三　八　六
我國經濟の實況　田尻稻次郎〔財經〕大三　一　七
歐洲戰亂の經濟的教訓　本多精一〔財產〕大三　一　八
パナマ運河の日本經濟上に及ぼす影響　堀光龜〔新報〕大三　二四　八—九
戰後の經濟界に於けるの策　本多精一〔財經〕大三　一　九
交戰國の軍費と戰時經濟　辻村楠造〔財經〕大三　一　九
歐洲戰亂と我經濟界　井上辰九郎〔日經〕大三　一五　一〇
大局上經濟的不利益にあらず　小池國三〔日經〕大三　一五　一〇
戰後に於ける日本の資本的獨立　堀江歸一〔財經〕大三　一　一
歐洲戰爭の我經濟に及ぼす影響　戶田海市〔京法〕大三　九　一三
歐洲大戰爭の經濟界に及ぼす影響如何　稻田周之助〔日經〕大三　一五　一二
戰爭と經濟　落水居逸人〔東經〕大三　七〇　自一七六七　至一七七〇
閉却せられたる興國の要訣　田中穗積〔洋經〕大三　一　大七二
經濟界の憂は歐洲戰後　本多精一〔財經〕大四　二　一
戰後の經濟的變動　田尻稻次郎〔財經〕大四　二　一
國步艱難の秋なり（戰後の經濟界を論ず）　河津暹〔財經〕大四　二　一
戰爭が齎せる經濟の混亂　河田嗣郎〔京法〕大四　一〇　一
歐洲交戰國の資本回收と日本經濟　戶田海市〔財經〕大四　二　一
世界的經濟戰爭　テリー〔國際〕大四　一四　四
戰後の國際經濟競爭と日本の地位　本多精一〔財經〕大四　二　五
歐洲開戰の一周年＝世界經濟の變動と日本地位　本多精一〔財經〕大四　二　八
依然たる財政經濟上の懸案　本多精一〔財經〕大四　二　九
財政經濟單本位の國際競爭　本多精一〔財經〕大四　二　一一
戰爭と經濟組織　櫛田民藏〔法協〕大四　三三　一二
歐洲大亂と本邦の經濟界　丹羽豐〔東經〕大四　七一　自一七八五　至一七九五
我國經濟界の將來　田尻稻次郎〔財經〕大五　三　一
中歐經濟同盟設に就て　小川鄕太郎〔經叢〕大五　二　二
戰後の經濟的革新　阿部秀助〔三學〕大五　一〇　一—五
經濟界の現勢と潛勢と大勢　本多精一〔財經〕大五　三　二
聯合國經濟同盟に對する我國の態度　戶田海市〔經叢〕大五　三　三
解決されざる財政經濟問題　本多精一〔財經〕大五　三　三
多難なる我が經濟界の前途　橋本圭三郎〔財經〕大五　三　四
時局と戰時經濟上の教訓　辻村楠造〔財經〕大五　三　四
我國の立脚地より觀たる經

			年	卷	號
濟同盟	河津　暹	〔財經〕	大五	三	五
戰時經濟論	岡本兵太郎	〔國家〕	大五	三〇	五
戰後に於ける世界の經濟戰	阪谷　芳郎	〔財經〕	大五	三	五
聯合國經濟同盟論	河津　暹	〔國家〕	大五	三〇	五—六
戰後の經濟戰に對する準備	神戸　正雄	〔經叢〕	大五	三	六
戰後經濟調査の要目に就て	本多　精一	〔財經〕	大五	三	六
日支兩國の經濟關係	添田　壽一	〔財經〕	大五	三	七
排獨經濟聯合と日本の立脚地	本多　精一	〔財經〕	大五	三	七
經濟問題と日本	神戸　正雄	〔國際〕	大五	一四	八
經濟界の前途如何	早川千吉郎	〔財經〕	大五	三	九
米國の資本と日本の頭腦	雪　堂　生	〔財經〕	大五	三	九
巴里經濟會議の決議に就て	阪谷　芳郎	〔財經〕	大五	三	一二
聯合國經濟同盟問題	戸田　海市	〔外時〕	大五	二四	臨二八三 五二八五
戰後の經濟競爭と我國の問題	河津　暹	〔外時〕	大五	二四	二八六
經濟同盟の價値	小林丑三郎	〔東經〕	大五	七三	一八四九
我國當面の經濟問題	辻村　楠造	〔財經〕	大六	四	一
戰後に對する二大準備	河田　嗣郎	〔經叢〕	大六	四	一
過去一ヶ年に於ける財政經濟の大勢	熊谷貞次郎	〔國國〕	大六	五	二
米獨斷交と我國經濟界	小川郷太郎	〔經叢〕	大六	四	三
本年の我が經濟界如何	伊藤　欽亮	〔財經〕	大六	四	四
經濟上に於ける安全第一	内田　嘉吉	〔財經〕	大六	四	五
日支經濟關係改善の骨子	本多　精一	〔財經〕	大六	四	六
戰後の經濟準備に就て	橋本圭三郎	〔財經〕	大六	四	六
日米協定と日本の經濟	神戸　正雄	〔經叢〕	大六	五	六
經濟上の變態と其の調節策	橋本圭三郎	〔財經〕	大六	四	一〇
戰後の國際經濟同盟	雪　堂　生	〔財經〕	大六	四	臨二一 臨二三
對敵經濟封鎖策の効果如何	山本源太郎	〔東經〕	大六	七	一九二六
戰後の經濟と自給政策	田尻稻次郎	〔財經〕	大七	五	一
戰後經濟準備と資金充實策	早川千吉郎	〔財經〕	大七	五	三
戰時經濟談	上田貞次郎	〔保評〕	大七	一	四
我帝國の經濟活力に就て	岡　實	〔國家〕	大七	三	六
經濟調査機關再興の必要	志立鐵次郎	〔財經〕	大七	五	六
我國現下の經濟問題	橋本圭三郎	〔財經〕	大七	五	六
東洋に於ける日本の經濟上及び金融上の位置	井上準之助	〔國家〕	大七	三一	八—九
内外經濟界に及ぼす講和の影響	本多　精一	〔財經〕	大七	五	一二
戰後經濟と物價調節問題	添田　壽一	〔財經〕	大七	五	一二
經濟的反動の趨向	氣賀　勘重	〔三學〕	大八	一三	一
財政問題よりも經濟問題	橋本圭三郎	〔財經〕	大八	六	一
大戰の本邦經濟界に及ぼせる影響の統計的觀察	原田作之助	〔國經〕	大八	二七	二
經濟界の將來に就いて	志立鐵次郎	〔財經〕	大八	六	二
憲法と財政經濟	神戸　正雄	〔經叢〕	大八	八	三
戰後の我が經濟的地位	早川千吉郎	〔財經〕	大八	六	三

			年	卷	號
講和會議に反映せる日本の經濟的地位	本多　精一	〔財經〕	大八	六	六
今後の經濟に處する途	木村　雄次	〔財經〕	大八	六	六
世界の經濟事情と我が產業政策	添田　壽一	〔財經〕	大八	六	一二
過去の五年と未來の五年	安田與四郎	〔洋經〕	大八	一	八六四
經濟界不安の繼續	戸田　海市	〔經叢〕	大九	一	二
經濟界の將來は樂觀か悲觀	早川千吉郎	〔財經〕	大九	七	二
經濟界の推移と將來の準備	井上準之助	〔財經〕	大九	七	三
新時代の經濟生活	大隈　重信	〔東經〕	大九	八一	二〇六〇
日獨今後に於ける經濟關係に就て	ゾル　フ	〔東經〕	大九	八二	二〇七〇
經濟界と金融機關	田中鐵三郎	〔經究〕	大一〇	一	一
日本に於ける社會上及び經濟上の推移に就て	ジョーンス	〔國經〕	大一〇	三一	一
思想問題と經濟問題との關係	稻田周之助	〔新報〕	大一〇	三一	一
經濟界の前途と吾人の覺悟	利田　豐治	〔財經〕	大一〇	八	二
米國の世界不況救濟論	平沼　淑郎	〔財經〕	大一〇	八	五
經濟界更新の急務と其政策	小林丑三郎	〔財經〕	大一〇	八	六
經濟聯盟大會に就て	福井　盛太	〔辯協〕	大一〇	二五	七
理想主義より見たる經濟問題	中込本治郎	〔社政〕	大一〇	一	臨一一 五一二
東亞經濟力樹立に關する私見	高橋　是清	〔外時〕	大一〇	三四	四〇〇
複雜なる經濟界の現狀	箕浦　勝人	〔東經〕	大一〇	八三	二〇八三
東亞大陸策樹立の要	長尾　半平	〔東經〕	大一〇	八三	二〇九四
世界の經濟問題概論	志立鐵次郎	〔財經〕	大一一	九	一
海外經濟近情	志立鐵次郎	〔財經〕	大一一	九	三
世界經濟の復活と獨逸賠償問題	中島久萬吉	〔國聯〕	大一一	二	八
支那關稅改正と日支經濟關係	高柳松一郎	〔財經〕	大一一	九	一四
國際經濟會議に就て	高岡　熊雄	〔財經〕	大一一	九	一
國際經濟會議	諸井　四郎	〔東經〕	大一一	八四	二一〇一
國際經濟戰と產業參謀本部	後藤　新平	〔外時〕	大一一	三五	四一五
世界の經濟と軍備	後藤　新平	〔東經〕	大一一	八四	二一〇〇
經濟問題と國際爭議の關係	清水文之輔	〔東經〕	大一一	八四	二一〇九
經濟議會論	丸谷　喜市	〔國經〕	大一一	三三 三四	四—六 一
我國經濟の將來	小林丑三郎	〔經商〕	大一二	二	三
國際日本の政治及經濟	岡　實	〔國知〕	大一二	三	三
復興事業と經濟界の現況	河田　嗣郎	〔經叢〕	大一二	一七	五
經濟的豫見とその限界	福田敬太郎	〔國經〕	大一二	三五	五
經濟的亡國論	池田　龍藏	〔エコ〕	大一二	一	五
我國經濟發達の一轉期	瀧谷　善一	〔エコ〕	大一二	一	六—七
新年の經濟界の景況と國民の社會的自覺	神戸　正雄	〔時經〕	大一二	一	五
内外經濟事情の研究	藤谷　園藏	〔商事〕	大一二	二	六

		年	卷	號
經濟封鎖の法律的概觀	塚本　毅〔外時〕	大一三	五七	四二
明年度豫算と經濟社會	堀江　歸一〔エコ〕	大一三	三八	四九
經濟界の前途	神戸　正雄〔時經〕	大一三	一	八—九
經濟復興に關する諸研究	〔資料〕	大一三	一〇	一
大正十三年の經濟社會	堀江　歸一〔エコ〕	大一三	二	一—二
我國經濟恢復に關する一二の考察	河津　暹〔經論〕	大一三	三	二
經濟的豫見論について	福田敬太郎〔國經〕	大一三	三六	三
官役調査會の成績	伊藤　政行〔財經〕	大一三	一	五
復興景氣と戰爭經濟學	津田　武二〔國經〕	大一三・三六		五
社會主義より見たる經濟狀態	濱島　覺成〔經商〕	大一三	三	七
歐米諸國經濟調査機關の施設及批判	〔資料〕	大一三	一〇	
經濟的國難の彼方	丹羽　豐〔銀叢〕	大一三	二	六
刻下の經濟問題に關する考案	中岡源一郎〔エコ〕	大一三	二	二
經濟難救治の根本主義と國民精神	成田　篤〔エコ〕	大一三	二	一
世界經濟界に於ける日本の地位	伊藤米治郎〔外時〕	大一三	四〇	四七五
經濟界の根本的恢復案	神戸　正雄〔時經〕	大一三	一	二三
矛盾に充ちたる我經濟界	神戸　正雄〔時經〕	大一三	一	二三
我邦現時の經濟界の症狀、病源及療法	神戸　正雄〔時經〕	大一三	一	二六
經濟的豫見の發達と目的	福田敬太郎〔國經〕	大一四	三八	四
ドーズ案の國際經濟理論	增井　光藏〔國經〕	大一四	三九	四
復興途上の世界經濟	森　賢吾〔國知〕	大一四	五	九
內外經濟戰の一進一退	神戸　正雄〔時經〕	大一四	一	三三
經濟界の現狀と國產愛用運動	神戸　正雄〔時經〕	大一四	一	三五
貿易及對外經濟大觀	神戸　正雄〔時經〕	大一四	一	三七
政變と經濟界	神戸　正雄〔時經〕	大一四	一	三八
最近經濟界大觀	神戸　正雄〔時經〕	大一四	一	四一
先づ經濟的國是を進めよ	坂本　霞溪〔金融〕	大一四	二	一二
經濟戰線と外交	太田　正孝〔外時〕	大一四	四一	四八八
本邦に於ける社會經濟組織の推移	高野岩三郎〔原雜〕	大一五	四	一
高橋龜吉氏編「日本經濟の解剖」	生松　淨〔經研〕	大一五	三	一
國際經濟會議の意義	平野英一郎〔外時〕	大一五	四三	五一三
最近三年の內外經濟問題	堀江　歸一〔エコ〕	大一五	四	七
國際經濟會議に就て	大熊　眞〔國知〕	大一五	六	一
經濟循環の統計的觀察	小林　新〔統集〕	大一五	一	五三七
經濟界根柢	米山　梅吉〔經評〕	大一五	一	二
經濟界の安定と振興	堀江　歸一〔エコ〕	大一五	四	一二
最近の經濟界	神戸　正雄〔時經〕	大一五	一	四六
貿易及爲替を中心としたる我經濟界	神戸　正雄〔時經〕	大一五	一	四五

【經濟政策】

參照＝經濟。經濟學。經濟事情。產業政策。

		年	卷	號
國家經濟獨立主義	倉知　鐵吉〔法政〕	明三五	六	五六
經濟政策（講演）	金子堅太郎〔國家〕	明三五	一六	一八五
輸出入の超過と一國經濟政策	神戸　正雄〔國家〕	明三五	一六	一八五
正統經濟學派及歷史經濟學派の經濟政策に對する關係並地位を論す	松崎藏之助〔國經〕	明三九	一	六
經濟政策編纂	河上　肇〔日經〕	明四〇	一	一
諸經濟學派の經濟政策觀	松崎藏之助〔日經〕	明四〇	一	四
最新經濟學派殊に社會政策及社會主義の經濟政策に對する關係並に地位を論す	松崎藏之助〔國家〕	明四〇	二	五
經濟政策と基礎觀念	關　一〔明學〕	明四〇	一	一二八
國際經濟競賣と我國民經濟政策の大本	神戸　正雄〔京法〕	明四一	三	二
經濟政策の倫理的方面	筑山　生〔東經〕	明四一	五七	一四三七
鐵血宰相の經濟政策を追想す	河津　暹〔日經〕	明四一	三—二	四—三
經濟政策と所謂實際問題	松崎藏之助〔法協〕	明四二	二七	一
經濟財政金融策	田尻稻次郎〔日經〕	明四四	四	六
學者政策を論するの權威ありや	河上　肇〔京法〕	明四二	四	一—一一
實際經濟政策に對する經濟學の意義	小泉　信三〔三學〕	明四三	三	三
立法事業と經濟政策	稻田周之助〔日經〕	明四四	八	一〇
經濟政策の科學的性質	山本　祐作〔國家〕	大二	二七	一〇
經濟政策上の緩急	氣賀　勘重〔國經〕	大三	一七	五
經濟政策と經濟的自由	氣賀　勘重〔三學〕	大三	八	六
世界の大勢に適應するの道	仲小路　廉〔財經〕	大三	一	八
經濟政策に對する私見	山本美越乃〔京法〕	大三	九	一一
經濟政策の意義に就て（山本京大助教授の論文を讀む）	松崎　壽〔三學〕	大四	九	三
「經濟政策」の意義に於て	山本美越乃〔三學〕	大四	九	五
松崎壽氏に答ふ	松崎　壽〔三學〕	大四	九	六
再び經濟政策の意義に就て	山本美越乃〔三學〕	大四	九	九
山本助教授に質す	松崎　壽〔三學〕	大四	九	一一
「經濟政策」に關して再び				
松崎壽氏に答ふ				
經濟政策に關する山本助教授の答辯に答ふ				

地方經濟振興策　堀切善兵衛〔三學〕大五一〇　六
經濟政策の基礎觀念　松崎　壽〔志林〕大六一九　八
戰時經濟政策の批判　森戸　辰男〔國家〕大六三一　一一
法律化しつゝある經濟政策　謝花　寛齋〔新聞〕大八　一一五七四
我が最高經濟政策と海運政策　小島昌太郎〔經叢〕大九一一　三
誤れる財政經濟政策　武富　時敏〔財經〕大九七　七
經濟界更新の急務と其政策　小林丑三郎〔財經〕大一〇八　六
對支經濟政策　瀧本　誠一〔亞經〕大一一六　一
經濟的日支親善の意義　前田幸太郎〔亞經〕大一一六　一
整理緊縮の財政經濟政策　阪谷　芳郎〔財經〕大一一九　五
チヤアルス・ダヴエナントの經濟策　高橋誠一郎〔三學〕大一一一六　一〇
四大經濟的國策　今西　兼二〔東經〕大一一八四　二〇九九
危し微溫的經濟策　森山　小六〔東經〕大一一八四　二一〇七
經濟原論と經濟政策　大内　武次〔經商〕大一二二　二　六
對支經濟政策の基調　西川　喜一〔亞經〕大一二八　三
アダム・スミスの經濟政策　上田貞次郎〔商研〕大一二三　一
經濟政策の極致　向井　鹿松〔三學〕大一三一八　七
消極的經濟政策の意義　堀江　歸一〔エコ〕大一三二　一三
經濟政策學の對象、其成立の可能性及限界　馬場　敬治〔經論〕大一三三　二
對支經濟政策と日本　堀江　歸一〔エコ〕大一三二　二三
經濟政策定立上の豫件　阿部　賢一〔社科〕大一四一　四
セイの經濟政策論　增井　幸雄〔三學〕大一四一九　八
ヴイルブラント「經濟政策の根本思想」（譯）　中山伊知郎〔商研〕大一三　四　一
普選と新經濟政策　高橋　龜吉〔洋經〕大一四　一一四三一一四六
新經濟政策とロシア勞働立法　末川　博〔經叢〕大一五　三三　六
對外經濟的國策樹立の急務　上田貞次郎〔外時〕大一五　四三　五一四

【經濟（ケイザイ）地理（チリ）】

參照＝各國名。

經濟地理學研究に對するグルーベル博士の見解　黑正　巖〔經叢〕大九一一　六
經濟地理學研究に關するシユミツドの見解　伊藤　秀一〔三學〕大一五一一〇　三

【經濟（ケイザイ）哲學（テツガク）】

經濟學を見よ

【經濟（ケイザイ）統計（トウケイ）】

ハウスホーフエル氏經濟生活のスタチスチック　吳　文聰〔スタ〕明四一　一　三一
經濟生活のスタチスチック　吳　文聰〔スタ〕明三三　一　四二七九三三
經濟スタチスチック論　吳　文聰〔スタ〕明三三　一　四二九三三

經濟統計の基本　河合　利安〔統集〕明二八年　一六九
經濟に關する統計の方法に就て　花房直三郎〔統集〕明三三　一　二二七
經濟統計に就て　道家齊一郎〔統雜〕大一四　一　四六七
經濟統計に關する一方法　中川　友吉〔統集〕大一四　一　五三一
經濟統計の發達　大内　武次〔經商〕大一五　五　一
藤本博士著「經濟統計」と卷川學士譯「經濟統計調要」　郡　菊之助〔國經〕大一五　四〇　一

【警察（ケイサツ）】

參照＝監獄。言論の自由。司法警察。新聞紙。犯罪。

警察罰令權の監視を論す　久米　金彌〔國家〕明二〇　一　四
警察根本法を殺す勿れ　江木　衷〔新報〕明二四　一　一〇
一八八九年伊國公安取締法（保安警察法）　〔法記〕明二五　二　三
警察權の所有權に對する關係　阿成樓主人〔新報〕明二六　三　三一
帝國現行警察法規に就て　森田　茂吉〔法協〕明二八　一三　五一六
警察と臣民の權利　一木喜德郎〔國家〕明二九　一〇　一〇七
警察法研究の必要　松井　茂〔國家〕明二九　一〇　一〇九
警察權の根據　渡邊清太郎〔法政〕明三三　四　四三二　三三四　一一一　二一七
本邦警察の沿革　松井　茂〔法協〕明三二　一七　一八
言論の自由　宮本平九郎〔志林〕明三四　三　二〇
法治の觀念より論及して學者の所謂警察の主義を排す　鮫島東四郎〔法政〕明四三　五　四三
警察の意義を論す　副島　義一〔明法〕明三五　一　三六
營業の自由と警察權　岡　實〔新報〕明三五　一二　一二
警察作用竝警察作用の分類　島田　俊雄〔新報〕明三六　一三　三
〔法政〕明三六　七　二一七
模倣性と豫防警察　穗積　陳重〔國家〕明三六　一七　一九二
警察權の限界　美濃部達吉〔新聞〕明三六　一　四一四四四　三一四四六
行政警察處分令行爲の根據及限界　鮫島東四郎〔新聞〕明三六　一　四一六三　三一六六六
個人の自由に對する警察干渉權の限界　泉二　新熊〔新報〕明三七　一四　四一五
比較內務行政組織論　ボルンハック〔內外〕明三七　三八　三　四　一一三　六
佛國に於ける無屆社團の法律上の地位　マルガ〔法協〕明三九　二四　三
出版と著作　佐々木惣一〔京法〕明四一　三　四一六
社會と警察　留岡　幸助〔辯協〕明四一　一三　一三一
地方警察とは何ぞや　佐々木惣一〔明學〕明四一　一　一三四
獨逸の新結社法に就て　佐々木惣一〔京法〕明四二　四　二
行政犯の性質を論じて警察犯に及ぶ　佐々木惣一〔京法〕明四二　四　三
結社警察に就て　織田　萬〔京法〕明四三　五　一
警察の觀念を論して憲法第

九條に依る獨立命令權の範圍に及ぶ　美濃部達吉〔志林〕明四三　一二　二—六
朝鮮の內務行政殊に警察行政に就て　松井茂〔國家〕明四三　二四　三
朝鮮警察の今昔　松井茂〔法記〕明四四　二一　一
警察許可の限界　市村光惠〔京法〕明四五　七　一
朝鮮警察の今昔　松井茂〔刑評〕明四四　三　六—七
農村と警察　横井時敬〔日經〕明四五　一一　二
警察の觀念　美濃部達吉〔法協〕大元　三〇　八
殖民地警察の特質　對馬郁之進〔京法〕大元　七　九
警察の觀念を論ず　美濃部達吉〔評論〕大元　一　一
警察權の限界を論ず　美濃部達吉〔法協〕大二　三一　三
警察許可を論ず　美濃部達吉〔新報〕大二　二三　八—一一
警察官の拔劍　美濃部達吉〔新報〕大三　二四　三
國際警察權　泉哲〔國際〕大三　一三　四
女巡査　タイト〔國國〕大三　二九—一〇
警察と人民　丸山鶴吉〔新聞〕大三　一　九—一八
英國法制上警察權の限界　村田岩次郎〔三學〕大四　九　一
極東と國際警察權　泉哲〔國國〕大四　三　一
第一回國際司法警察會議　牧野英一〔志林〕大四　一七　八
警視廳の探偵犬の無能なるを喜ぶ　鈴木富士彌〔辯協〕大四　一九　一九八
警察制度の改善を望む　今井力三郎〔新聞〕大四　一　一〇一三
國際行政警察　泉哲〔國際〕大五　一五　二
都市の警察自治を論ず　村田岩次郎〔三學〕大五　一〇　五
米大陸に於ける國際警察チロン「國際團體と警察」（譯）　泉哲〔國際〕大五　一四　七
警察行政に就て　東讓三郎〔國際〕大五　一四　一〇
警視廳制度の改正に就て　清水澄〔新聞〕大五　一　一二—一四
朝鮮警察の沿革　中野勇治郎〔新聞〕大五　一　一四—一五
新警察を要求す　對馬郁之進〔京法〕大六　一一—一二　一九—二〇
所謂高等警察に就て　工藤日東〔辯協〕大六　二一　二
警察許可の限界　水野錬太郎〔法政〕大六　一四　六
警視廳の裸體畫取締問題　市村光惠〔法論〕大六　一　七
官吏の待遇を論じて警察官の優遇問題に及ぶ　布施辰治〔新聞〕大六　一　一三—一七
社會と警察力（講演）　小川鄕太郎〔法論〕大七　一　一四
警察官の觀念及服制　松井茂〔日社〕大一〇　九　一—二
社會と警察　對馬郁之進〔法叢〕大一〇　五　三
勞働爭議に對する警察權行使の範圍　松井等〔社政〕大一〇　一　七
頒曆取締法　谷健太郎〔新聞〕大一〇　一　一八—一九
警察行政に就て　石原雅二郎〔法政〕大一一　一九　九
警察の軍隊化に就て　荒木櫻洲〔新聞〕大一一　一　一九六—七
警察署の人事相談所は憲法違反なるや否　山口鹿太郎〔新聞〕大一一　一　一〇三—一〇四　三〇三—三〇六
風俗警察に就いて　松倉慶三郎〔新聞〕大一一　一　二〇四二
市村光惠〔法叢〕大一三　九　二
警察制度の創設　尾佐竹猛〔法曹〕大一三年　二　三—六
繪畫彫刻と風俗警察　草野豹一郎〔新報〕大一三　三四　七
警察官の既決權を剝奪す可し　和光未房〔法新〕大一三　一　二
司法官と警察官の抗爭に就て　荒木櫻洲〔新聞〕大一三　一　二二—二七
羽翼を斷たれた移動警察　山川道三〔新聞〕大一三　一　二三—二三
監察機關を設くるの議　播磨龍城〔新聞〕大一三　一—三三一七　三三—三三一八
矛盾した警視廳官制の批判　荒木櫻洲〔新聞〕大一四　一—二四六三
警察の所屬は孰れが是乎　荒木櫻洲〔新聞〕大一四　一—二四六七
支那の警察制度　三田勝〔法曹〕大一五　四　一—五

【警察犯處罰令】

警察犯處罰令及違警罰即決例を評す　石山彌平〔辯協〕明四一　一三　一二四
警察犯處罰令と即決例　川島千司〔辯協〕明四一　一三　一二六
行政犯の性質を論じて警察犯に及ぶ　佐々木惣一〔京法〕明四二　四　三

【刑事】

萬國刑事聯合會に就て　クルーゼン〔法政〕明三三　四　四一
漢堡の國際刑事協會大會　牧野英一〔法協〕明三九　二四　八
刑事雜感　伊谷龜太郎〔京法〕明四一　三　一二
刑事雜說　勝本勘三郎〔志林〕明四二　一一　二—三
最近刑事雜觀　富田山壽〔京法〕明四二　四　七—一〇
刑事大檢擧論　宮島次郎〔辯協〕明四二　一　一三三
刑事雜記　花井卓藏〔刑評〕明四三　二　四—八
韓國刑事一斑　安住時太郎〔刑評〕明四三　二　六
巡視せし地方刑事界の實況　河村讓三郎〔刑評〕明四三　二　七
泰西刑事界近狀　小川平吉〔刑評〕明四四　三　一
刑事雜感　天野德也〔刑評〕明四四　三　二—三
臺灣刑事狀況　手島兵次郎〔刑評〕明四四　三　五
刑事論斷片　岡田庄作〔國國〕大七　六　二—五
國際刑事學協會スイス部の復活　大喜多光〔志林〕大一二　二五　五
國際刑事學協會ドイツ部會第十八回會議の議題及び決議　大喜多光〔志林〕大一二　二五　二
國際刑事學協會の近況　大塚鄕二〔志林〕大一三　二六　一一
國際刑事學協會獨逸部會大會　大塚鄕二〔志林〕大一四　二七　九
刑事制度の一大缺陷　佐伯復堂〔新聞〕大一四　一—二四五〇

【刑事社會學】

犯罪社會學を見よ

【刑事人類學】

犯罪人類學を見よ

【刑事政策（ケイジセイサク）】

参照＝感化事業。監獄。刑事統計。犯罪。免囚保護。

		年	巻	號
刑事政策	岡田朝太郎〔明法〕	明三三	一	四一
刑事政策に於ける二問題	菱谷　精吾〔法協〕	明三七	二三	二—三
刑事政策と勞働問題	牧野　英一〔志林〕	明三九	八	四—六
刑事政策の梗概	泉二　新熊〔法記〕	明四〇	一七	四三一—四
刑事政策學に就て	寺崎　勝治〔新聞〕	明四〇	一	四四二
刑事政策瑣言	菱谷　精吾〔志林〕	明四一	一〇	二—四
刑事政策大綱に就て	アムシュル〔刑評〕	明四一	一	四
刑事政策の强硬限度	菱谷　精吾〔法政〕	明四一	一三	五
刑事政策の二大主義	大場　茂馬〔刑評〕	明四二	一	三
亞米利加の刑事政策	泉二　新熊〔法記〕	明四二	一九	八—一〇
刑事政策上の諸問題	牧野　英一〔新聞〕	明四二	一	四三八一—五八四
刑事政策の要求の二三	勝本勘三郎〔新報〕	明四三	二〇	五
刑事政策上の三大姉妹事業	小山　溫〔刑評〕	明四三	二	一
刑事政策大綱自序	大場　茂馬〔新聞〕	明四三	一	六一六
刑事政策に就て	卜部喜太郎〔刑評〕	明四四	三	一—二
刑事政策論の要領	大場　茂馬〔新報〕	明四五	二三	五
死刑の刑事政策上の價値	吉田　知道〔刑評〕	大元	四	一一
朝鮮の刑政に就て	石山　彌平〔辯協〕	大元	一六	一六八
刑政研究會	牧野　英一〔法協〕	大三	三	二
德川時代の刑政	三上　參次〔新聞〕	大三	一	四六八
支那往時の刑事政策一斑	不破　清警〔新聞〕	大三	一	四七一—五九九四
歐米に於ける刑事政策上の努力	泉二　新熊〔法記〕	大四	二五	三
刑事政策としての勞働權	K　I　生〔新聞〕	大七	一	一四一〇
刑事政策と保安處分	長尾　景德〔臺法〕	大八	一三	五—六
佛教思想と刑事政策	竹内　三郎〔法政〕	大八	一六	九
刑事政策制度の概要	泉二　新熊〔志林〕	大九	二三	六
刑事政策と精神病者	福島　一郎〔新聞〕	大一〇	一	一八三六

【刑事訴訟（ケイジソショウ）】

参照＝刑事訴訟法。刑事略式手續。檢事。抗告。公訴。控訴。公判。裁判。裁判所。私訴。證據。上告。上訴。搜査。訴訟費用。辯護士。保釋。豫審。

		年	巻	號
刑事訴訟を論し朝野の學者及政治家に留意を望む	井本　常治〔辯協〕	明三三	三	一八
刑事訴訟の現狀及其改善	佐藤　博愛〔新報〕	明三三	九	四九八—五一〇〇
刑事訴訟に關する意見	磯谷幸次郎〔法記〕	明三三	一〇	一〇三
幼年者に對する監督保護と刑事訴訟手續	泉二　新熊〔法記〕	明四一	一八	二
刑事訴追の强制に關する獨逸國の立法問題	豐島　直通〔法記〕	明四二	一九	四
裁判公開主義	富田　山壽〔志林〕	明四二	一一	一三
直接審理論	富田　山壽〔京法〕	明四三	五	六—九
ビルクマイエル「刑事訴訟の革新」（譯）	山岡萬之助〔法記〕	明四四	二一	八
刑事訴權	板倉松太郎〔志林〕	明四五	一四	一
刑事訴訟上の一大繁文縟禮	磯谷幸次郎〔新報〕	明四五	二三	三
刑事訴訟政策論	岡田　庄作〔國家〕	大五	四	一〇
刑事訴訟の終了	板倉松太郎〔新報〕	大七	二八	一〇
刑事訴訟手續の併合	林　賴三郎〔新報〕	大八	二九	八
刑事訴訟に於ける審判の範圍を論す	原　惣兵衛〔法政〕	大一〇	一八	六
刑務官の眞使命	後藤　文夫〔臺法〕	大一四	一九	八

訴訟主體

代言人の地位	植村　俊平〔新報〕	明二四	一	一三
代言制の進化	穗積　陳重〔法協〕	明二五	一〇	二
代言人論	鹽谷恒太郎〔新報〕	明二五	二	一五
被告人の辯護權	卜部喜太郎〔新報〕	明二九	六	六六
陳述禁止と忌避申請	信岡雄四郎〔辯協〕	明三一	二	一〇
檢事と上官の關係	鳩山　和夫〔辯協〕	明三三	四	三八
刑事被告人の待遇	大石健太郎〔新聞〕	明三四	一一	六七
辯護士の職務關係に就て	石山　彌平〔新報〕	明三四	一一	一三八
辯護權の縮少、人權の蹂躪	信岡雄四郎〔志林〕	明三五	四	三八
外國水兵の犯罪	石渡　敏一〔法政〕	明三五	六	四五四—五五
刑事裁判に於ける辯護人の位置	新井要太郎〔辯協〕	明三六	七	六九
國際司法共助に關する我國の現行制度	松田　道一〔志林〕	明四〇	九	一一
辯護權の性質	豐島　直通〔新報〕	明四一	一八	二
刑事辯護論	富田　壽山〔京法〕〔辯協〕	明四一	三	大—一一
心神喪失者に對する公訴と其裁判	大場　茂馬〔新報〕	明四二	一九	一〇
刑事訴訟と被告人の當事者能力	大場　茂馬〔新報〕	明四二	一九	一一
辯護人の任務	大場　茂馬〔新報〕	明四三	二〇	一
刑事辯護の要訣	鹽谷恒太郎〔刑評〕	明四三	二	七
刑事辯護論	高野　茂基〔新聞〕	大四	一	一〇〇八
刑事訴訟に於ける人	板倉松太郎〔新報〕	大八	二九	三
刑事被告人の心理	石崎皆市郎〔臺法〕	大一一	一六	一—三
刑事辯護制に就いて	尾佐竹　猛〔法曹〕	大一三	二	一
刑事辯護制の採用に就て	尾佐竹　猛〔辯協〕	大一三	二八	五
辯護人の地位	津田　進〔法政〕	大一三	三	九
公設辯護人の制度に就て	小野清一郎〔志林〕	大一四	二七	三
資力なき刑事被告人の辯護	小野清一郎〔社政〕	大一四	一	五四
刑事訴訟法第四二條の解釋より所謂假辯護屆の効力に及ぶ	小田　寛〔新聞〕	大一四	一	二四五二

訴訟行爲

参照＝證據。

豫審判事受託判事は罰金の刑に該る被告人に對して拘引狀を發することを得				

る乎　平佐榮太郎〔法協〕明三一　一六　四一五
保釋論　花井　卓藏〔辯協〕明三三　四　三七
刑事訴訟法の猶豫期間　信岡雄四郎〔志林〕明三四　三　二〇
裁判所は無罪の判決言渡後檢事の控訴申立前保釋の決定を爲すを得さるか　清家　宇吉〔新聞〕明三七　一　一九一
控訴期間中控訴提起前に於て第一審裁判所は保釋を許否するの權限なきか　平井彦太郎〔新聞〕明三八　一　三一六
保釋の取消權を論す　川島　龜夫〔辯協〕明三六　七　七〇
ローメン「未決拘留の賠償」（譯）　竹山　三朗〔明學〕明四〇　一　一一五
現行犯の場合に於ける司法警察官の特別處分事件　豐島　直通〔新報〕明四一　一八　四
行刑猶豫の取消決定ありたるとさは直ちに逮捕狀を發することを得るや　出口　元久〔新聞〕明四一　一　五三九
檢事及司法警察官の爲す特別處分　大場　茂馬〔新報〕明四二　一九　二
刑事訴訟行爲の無効を論す　富田　山壽〔志林〕明四二　一一　六一一三
刑事行爲に於ける條件觀念の一斑　板倉松太郎〔志林〕明四三　三　二
拘留の取消　富田　山壽〔京法〕明四四　六　一二
未決拘留に就て同僚に望む　山内　公允〔新聞〕明四五　一　七八四

力　津田　進〔新報〕大一四　三五　九
未決拘留に關する法律に付て　北島　與吉〔法曹〕大一五　四　六
參照＝違警罪卽決。刑事訴訟。刑法。少年法。陪審法。

【刑事訴訟法】

刑事訴訟法の改正を論す　豐島六一郎〔法政〕明三三　三　一九
改正刑事訴訟法草案に對する意見　栗原藤太郎〔新報〕明三四　二　一三五
　〔新聞〕明三四　一　四五一　四五六
刑事訴訟法と違警罪卽決例　野村　嘉六〔新聞〕明三六　一　一三八
人權問題として刑事訴訟法の一部改正を絕叫す　佐々木清綱〔新聞〕明三六　一　一三九
刑事訴訟法の改正に付て　中川孝太郎〔法協〕明三七　三　九
刑事訴訟法の改正に就て　平沼騏一郎〔辯協〕明三一　三　二〇
個人識別法と刑事訴訟法の改正　〔法記〕明四一　八　五
刑事訴訟法改正漫言　大場　茂馬〔新報〕明四一　一八　八
刑事制度の變遷と刑事訴訟法の改正　富田　山壽〔京法〕明四一　三　八一一三
刑訴改正私考　鵜澤　總明〔新聞〕明四二　一　五四三
豐島學士著修正刑事訴訟法新論殊に其第三編第七章（訴訟行爲の性質及び効力）を論す　大濱　隆〔新聞〕明四二　一　四五八　五五九
令狀正本の意義に就て　溝淵　孝雄〔法記〕大二　二三　八
判事の自由裁量と上告裁判所の權限　天野　德也〔辯協〕大二　一七　一七二　五一七三
刑事訴訟法上の里程の猶豫に就て　天野　敬一〔辯協〕大三　六　一八三
訊問を爲ささる判事の拘留狀發布　林　賴三郎〔新報〕大四　二五　一〇
不適法なる正式裁判請求と不適法なる附帶犯審理決定　板倉松太郎〔志林〕大五　一八　五
豫審判事は自己に被告人を引渡すべく拘引狀の發布を管轄地外の豫審判事又は區裁判所判事に囑託することを得るか　平井彦三郎〔新聞〕大七　一　一四八九
未決拘留論　飯島　荒爾〔新聞〕大八　一　一五一　五一七　五一九
刑事法上の期日及期間　津田　進〔新報〕大一一　三二　八一九
被告人召喚記載事項と召喚狀の効力　八太　茂〔新聞〕大一一　一　二〇四三
刑事時効の期間及起算點　津田　進〔法曹〕大一二　一　一
刑事時効の中斷及停止　津田　進〔法曹〕大一二　一　三
刑事手續の改正を論す　千賀　孝善〔法曹〕大一三　二　一一九
未決拘留を改善すべし　齋藤　巖〔新聞〕大一三　一　二一九七
刑事訴訟法の時に關する効力）を論す　富田　山壽〔京法〕明四三　五　四一五
刑事訴訟法改正私議　井本　常治〔辯協〕明四四　一五　一五二
刑事訴訟法改正私議　川島　仟司〔辯協〕明四四　一五　一五五
刑事訴訟法改正私議　石川　彌平〔辯協〕明四四　一五　一五六
刑事訴訟法改正私議　笠原文太郎〔辯協〕明四四　一五　一五六
刑事訴訟法改正私議　平松　市藏〔辯協〕明四四　一五　一五七　五一五八
刑事訴訟法改正の大眼目　新井要太郎〔辯協〕明三　一八　一八七
刑事訴訟法と直接審理主義　林　賴三郎〔新報〕大四　二五　三
刑事訴訟法改正案批評　猪股　淇清〔辯協〕大五　二〇　一〇
刑事訴訟法改正案を評す　中川孝太郎〔新聞〕大五　一　一一九三
讀刑事訴訟法改正案　不破　清馨〔新聞〕大五　一　一一九五
刑事訴訟法改正案を評す　松本　重敏〔新聞〕大五　一　一一九八　五一二〇二
刑事訴訟法改正草案（未定稿）を評す　雉本　朗造〔京法〕大六　一二　一
刑事訴訟法改正草案に就て　岡田　庄作〔國國〕大六　五　一一二
刑事訴訟法改正案要旨　平沼騏一郎〔法記〕大六　二七　一一三
刑事訴訟法改正案の要旨　平沼騏一郎〔法協〕大六　三五　一一六
刑事訴訟法改正案を評す　磯谷幸次郎〔新報〕大六　二七　二
刑事訴訟法改正の根本義　播磨辰治郎〔辯協〕大六　二一　二
刑事訴訟法改正案に對する私議　大澤　眞吉〔辯協〕大六　二一　二
刑事訴訟法改正案に就て　木村　尙達〔法政〕大六　一四　二一七
刑事訴訟法改正案に就て　宮本　英脩〔京法〕大六　一三　二一五
刑事訴訟法改正案私議　新井要太郎〔辯協〕大六　二一　二一七

刑事訴訟法改正の根本義と幕府の拷問制度　播磨　龍城〔國國〕大六年六五巻三號
刑事訴訟法改正案と陪審制度　猪股　淇清〔國國〕大六年六五巻三號
噫檢事訴訟法　岩田　唯雄〔國國〕大六年六五巻四號
法學に於ける訴訟法の地位　板倉松太郎〔法政〕大六年六一四巻七號
刑事訴訟法改正案を讀む　岩井　尊文〔新聞〕大六年一一〇八巻一二三二號
刑事訴訟法改正案要旨　平沼騏一郎〔新聞〕大六年一一一九巻一二四七號
刑事訴訟法改正に就て　播磨　龍城〔新聞〕大六年一一一三巻一二三三號
刑訴改正案と陪審制度　猪股　淇清〔新聞〕大六年一一一三巻一二三三號
刑事訴訟法改正案の要旨　平沼騏一郎〔新聞〕大六年一一一八巻一二三三號
刑事訴訟法改正案に就て　谷田勝之助〔新聞〕大六年一一二〇巻一二三三號
日本刑事訴訟法　富田　山壽〔法論〕大七年一一二二巻一二四二號
刑事訴訟法改正に就て　原　嘉道〔新聞〕大八年一一四九八
刑事訴訟法の規定の缺陷と其運用　林　賴三郎〔新聞〕大一〇年一一七八二
彈劾主義と陪審制度　谷　健太郎〔辯協〕大九年二四巻二
刑事訴訟法改正案成立の經過及要綱　林　賴三郎〔新報〕大一一年三二巻三
改正刑事訴訟法案に對する卑見　小齊甚治郎〔辯協〕大一一年二六巻三
改正刑事訴訟法に就て　八太　茂〔辯協〕大一一年二六巻五
刑事訴訟法改正の要旨　林　賴三郎〔臺法〕大一一年一六巻五—七
改正刑事訴訟法の特質　岡田　庄作〔法治〕大一一年一巻七・八
新刑訴の姦通罪其の他との關係　上田恒三郎〔臺法〕大一一年一六巻九
刑事訴訟法案を評す　大谷忠四郎〔新聞〕大一一年一一九四九
日本刑事訴訟法史論　花井　卓藏〔新報〕大一二年三三巻一
新刑事訴訟法の特色　林　賴三郎〔新報〕大一二年三三巻一
新刑事訴訟法に關する特例　三好　一八〔臺法〕大一三年一八巻二
新刑事訴訟法と告訴權の拋棄　林　賴三郎〔新報〕大一三年三四巻五
刑事訴訟法史論　花井　卓藏〔臺法〕大一三年一八巻六
新刑事訴訟法と新聞記事　富岡　重雄〔法新〕大一三年一五—六
新刑事訴訟法に就て　淺野豐三郎〔新聞〕大一三年一二一〇三
新刑事訴訟法の要綱　林　賴三郎〔新聞〕大一三年一二一〇六
新刑事訴訟法の實施に就て　齋藤　巖〔新聞〕大一三年一二一〇九
新法實施の効果如何　不破　清警〔新聞〕大一三年一二一二五
日本新刑事訴訟法と獨逸新陪檢規定に就て　小南又一郎〔新聞〕大一三年一二三五一
刑事訴訟法の改善歟改惡歟　播磨　龍城〔新聞〕大一三年一三七〇
新刑事訴訟法の實蹟　岸井　辰雄〔辯協〕大一四年二九巻一
刑事訴訟法の解釋　板倉松太郎〔法政〕大一四年二三巻五

墺太利

墺太利刑事訴訟法改正案に就て　山岡萬之助〔新聞〕明四三年一六三五

獨逸

獨逸に於ける刑事訴訟法改正の委員會決議の要領　中川孝太郎〔法協〕明三八年二三巻七號
獨逸に於ける刑事訴訟法改正運動の經過並に其改正の主要點の一たる裁判所構成問題に對する草案規定の理由　武田鬼十郎〔法記〕大六年二七巻二
ドイツ新刑事訴訟法草案に就て　小野清一郎〔志林〕大一一年二四巻六—八

【刑事統計】

參照＝犯罪統計。
刑事統計報告　〔統集〕明一八年四八巻二號
佛國刑事統計の話　高橋　二郎〔統雜〕明三六年一四八巻八八九
本邦民刑事統計に就て　石川　惟安〔統雜〕明三〇年一三九巻八八九
萬國統計會議決議刑事統計調査法　高橋　二郎〔統集〕明三六年一二七一巻二七二
獨逸帝國刑事裁判統計調査法　相原　重政〔統集〕明三七年一二七五
伊國刑事統計の組織及刑事統計國際比較の困難に關するエル・ポジオ氏の報告　高橋　二郎〔統集〕明四一年一四三二巻五三三
刑事統計の研究と新刑法の運用　牧野　英一〔志林〕明四二年一一巻一
獨逸の刑事統計に就て　谷田　三郎〔刑評〕明四三年二巻七
刑事統計の特質　光岡　安藝〔刑評〕明四四年三巻八

【藝術】

藝術上の犯人　小杉　天外〔刑評〕明四三年二巻二
藝術の企業化に就て　岡田　重次〔國經〕大元年一三巻三
藝術と經濟　阿部　秀助〔三學〕大八年一三巻一—一〇
文藝の官營　權田保之助〔國家〕大八年三巻六
勞働の藝術化　森戸　辰男〔國家〕大八年八巻三巻一一
ウキリアム・モリスの文明觀と藝術觀と勞働觀　河田　嗣郎〔經叢〕大九年一〇巻一
民衆藝術の一考察　横山　有策〔我等〕大一一年四巻一
藝術と藝術的人生觀　大山　善男〔我等〕大一一年四巻二
藝術と道德（講演）　石丸　悟平〔法政〕大一一年一九巻九
社會政策より見たる藝術　圓谷　弘〔法政〕大一五年二三巻二

【刑事略式手續】

刑事略式手續法論　岡田　庄作〔國國〕大二年一五—七
刑事略式手續法論　篠崎　昇〔志林〕大二年一五六—七
刑事略式手續諸問題　豐島　直通〔法協〕大二年三二巻九
刑事略式命令に就て　高木　國尙〔新聞〕大二年一八五九
刑事略式手續法に就て　駒澤　辰明〔新聞〕大二年一八七八

略式手續に於ける忌避申請に就て　野村　嘉六〔新聞〕大二　一　九〇〇
刑事略式手續法廢止論　眞下　五郎〔辯協〕大五　二〇　一一二
略式命令異議申立及正式裁判申立を代理によりて爲したる場合の効力　西川豐之助〔辯協〕大五　一〇　一〇
略式命令に對する管見　保阪　白嶺〔新聞〕大二　一　二〇五三
略式命令請求書は果して起訴狀に非る乎　不破　清馨〔新聞〕大二　一　二一五六

【形成權】

形成權（私權の新分類）　石坂音四郎〔京法〕明四〇　二　一〇
形成權の消滅時効を論ず　藥師寺傳兵衛〔國國〕大六　五　一三
形成權の性質　長島　毅〔新報〕大二　三二　一一
形成權の消滅時効に關する新考案　江口　繁〔新聞〕大二　一　二〇八八
エンネツクチエルス形成權の一種としての取得權　後藤　清〔商論〕大一五　一　二
ゼツケル「民法上の形成權」（譯）　後藤　清〔法政〕大一五　五　五一六

【繼續航海】

一八五六年戰時法及連續航海の先例十件　高橋　作衛〔國家〕明二九　一〇　一一三
繼續航海の法則に關する米國主義を論して「ブンデスラート」號事件に及ぶ　秋山雅之助〔志林〕明三五　四　三三
繼續航海主義　立　作太郎〔國家〕明三八　一九　四
繼續航海を論ず　遠藤　源六〔明學〕明三九　一　一〇三
戰時禁制品に關する連續航海主義の擴張（英國の捕獲審檢新判例批評）　立　作太郎〔新報〕大五　二六　一
連續航海に關する英米の主張　泉　哲〔三學〕大六　一　五
Continuous Voyage—The Present Position　Baty〔國際〕大二　二三　二

【刑の執行猶豫】

刑の執行猶豫を論す　長島鷲太郎〔法協〕明二六　一一　五一七
刑の執行猶豫法に就て　富井　政章〔志林〕明三三　二　八
刑の執行猶豫論　小山　松吉〔新聞〕明三四　一　二三
刑の執行猶豫制度　鵜澤　總明〔辯協〕明三四　五　四七　五四八
刑の執行猶豫　岡田朝太郎〔內外〕明三五　一　二一四
刑の執行猶豫の立法例　岡田朝太郎〔明法〕明三五　一　四三八　五三九
憲法上の赦免大權と新刑法案の刑の執行の猶豫の免除　穗積　八束〔新報〕明三六　一三　一
刑の執行猶豫の法理　岩井　尊文〔法協〕明三六　二　三
刑の執行猶豫に就て　岡田朝太郎〔法協〕明三六　二　三
刑の執行猶豫に關する法律を論す　岡松參太郎〔內外〕明三八　四　二
刑の執行猶豫に關する法律に就て　勝本勘三郎〔內外〕明三八　四　四一五
刑の執行猶豫　泉二　新熊〔法協〕明三八　二三　五一六
刑罰猶豫制度の趣旨　淺見倫太郎〔新聞〕明三八　一　二七四
刑の執行猶豫　金子富次郎〔新聞〕明三八　一　二七七
刑の執行猶豫法及裁判所構成法中改正法律に就き　淺野豐三郎〔新聞〕明三九　一　三七三
刑の執行猶豫と併科刑たる財產刑　牧野　英一〔志林〕明四一　一〇　九
執行猶豫の期間滿了後の犯罪の執行猶豫　牧野　英一〔志林〕明四一　一〇　一一
刑の執行猶豫に關する要件に就て　小嶋　傳〔法政〕明四一　一三　一一
執行猶豫の取消決定ありたるときは檢事は直ちに逮捕狀を發することを得るや　出口　元久〔新聞〕明四一　一　五三九
刑の執行猶豫の要件　牧野　英一〔志林〕明四一　一〇　一一
刑の執行猶豫中の者の法律上の地位　遠藤　源六〔法記〕明四三　一九　一
刑の執行猶豫　花井　卓藏〔刑評〕明四二　一　一
刑の執行猶豫に就て　遠藤　源六〔明學〕明四一　一　一三一
執行猶豫に關する大審院の判例を讀む　末松　正行〔新聞〕明四二　一　五七七
刑の執行猶豫に關して　成瀨　邑雄〔新聞〕明四三　一　五九九
過失犯の拘留と執行猶豫の無視　池田　直江〔辯協〕明四三　一四　一三九
刑の執行猶豫取調に關する一疑義　田中　智作〔新聞〕明四三　一　六七〇
田中氏の刑の執行猶豫取締に關する疑義を讀む　山中　天外〔新聞〕明四三　一　六七九
刑の執行猶豫取消に關する疑義に付て山中天外君に質す　田中　智作〔新聞〕明四四　一　六九一
刑の執行猶豫に關し裁判所の猛省を促す　綿野　玉次〔新聞〕明四四　一　七四七
辯護士綿野玉次君の刑の執行猶豫論を讀む　山內　公允〔新聞〕明四四　一　七五六
刑の執行猶豫を論す　伊藤藤三郎〔刑評〕明四五　四　五
近時に於ける刑の執行猶豫に就て　植松　金章〔辯協〕明四五　一六　一六〇
刑の執行猶豫と公民權停止

の關係を論ず　横山勝太郎〔辯協〕大一一六　一七〇
執行猶豫の全廢と譴責刑の新設を提案す　長岡　熊雄〔新聞〕大二　一　九一〇
刑の執行猶豫の條件として の禁酒　牧野　英一〔志林〕大三　一六
贅執行猶豫廢止論　不破　清馨〔新聞〕大三　一　九一五
執行猶豫言渡の取消と禁錮以上の處刑　山岡萬之助〔新報〕大四　二五　六
刑の執行猶豫に就て　山岡萬之助〔新聞〕大四　一　一〇一〇
刑の執行猶豫を論す　大場　茂馬〔新報〕大六　二七　九
支那法と刑の執行猶豫　東川　德治〔京法〕大七　一三　一三
刑の執行猶豫を論す　津田　進〔法記〕大八　二八　一一一二
上訴と刑の執行猶豫　津田　進〔志林〕大八　二一　一一四
刑の執行猶豫の言渡と免官處分との關係　島村他三郎〔新報〕大一〇　三一　四

【刑罰】

參照＝感化院。監獄。刑の執行猶豫。刑法。犯罪。

ダルケ氏行刑論抄譯　小山　松吉〔法記〕明二九　六　五九
行刑論　小河滋次郎〔法政〕明三三　四　三八
コックス「刑罰の本領」（譯）　仲小路　廉〔法記〕明三三　一〇　一〇四
懲戒及刑罰に就て　岡　實〔新報〕明三五　一三　七
刑罰に關する新學說に就て　グラニエー〔新聞〕明三五　一　四八四　五九五
舜帝の刑法に於ける刑の發達　田能村梅士〔明法〕明三六　一　六二
刑の觀念に關する研究　鵜澤　總明〔明學〕明三九　一　一〇九
刑期に關する所見一斑　菱谷　精吾〔法記〕明四〇　一〇　一〇四
國家刑罰權の目的　川島　仟司〔辯協〕明四〇　一一　四一〇
刑罰權の眞正基礎　フランク〔明學〕明四〇　一　一三〇
刑罰權の社會的基礎　樋口　秀雄〔明學〕明四一　一　四一〇
性相學上の刑罰を論す　播磨　龍城〔明學〕明四一　一　一一三
原始の刑罰觀念　鵜澤　總明〔明學〕明四一　一　四一七
課刑學に就て　ボイス〔新聞〕明四一　一　四七二
新刑法と刑罰個別論　牧野　英一〔法記〕明四一　一九　一
刑罰權の觀念　松野　祐裔〔刑評〕明四二　一　一
應報刑論　鵜澤　總明〔刑評〕明四二　一　一一二
復讐刑論　鵜澤　總明〔刑評〕明四二　一　三
善良の風俗と目的刑　牧野　英一〔志林〕明四二　一一　九
應報刑と保護刑　小竹　早雄〔國家〕明四二　二三　一一
年賀と目的刑主義　鞍嶺　子〔志林〕明四三　一一　一
社會初期の刑罰　鵜澤　總明〔刑評〕明四三　二　一
刑罰の社會的效果に就て　樋口　秀雄〔刑評〕明四三　二　二一二
蒙古の刑罰　佐々木安五郎〔刑評〕明四三　二　五
刑罰論　レックス〔刑評〕明四三　二　一二
倫理學者の觀たる刑の目的　藤井健治郎〔刑評〕明四四　三　一一
刑の目的　横山勝太郎〔辯協〕明四四　一五　一五四

性相學上犯罪及刑罰觀　播磨　龍城〔新聞〕明四四　一　四六九八　五〇七九　二
刑罰の目的を論す　岡田　庄作〔刑評〕明四五　四
性と刑　花井　卓藏〔辯協〕大元　一六　一六九
刑罰の目的　大場　茂馬〔評論〕大元　一
ビルク・ヨハン・ティレン氏ル・ヨハン・マイヤー「ドクト論「刑法改正の主義第一刑罰の社會的任務刑罰組織」に就ての評論」（譯）　岡田　庄作〔志林〕大元　一四　一一七　一一二
刑罰と保安處分とに就て　牧野　英一〔志林〕大二　一五　九
罪と罰　花井　卓藏〔新報〕大二　二三　一〇
犯罪の主觀主義と刑罰の主觀主義　牧野　英一〔志林〕大二　一五　一〇
性と刑　花井　卓藏〔國國〕大二　一〇　一〇
法無ければ刑なし　武田鬼十郎〔法記〕大二　二三　一一
取締と刑罰　市村　富久〔評論〕大二　二　一五
法なければ刑なしの原則　武田鬼十郎〔新報〕大二　二二　一一二
法なければ刑なしとの原則と我刑法　武田鬼十郎〔新報〕大三　二四　六
武田鬼十郎〔法記〕大三　二四　四
刑罰法定主義　牧野　英一〔日社〕大三　一　四一五
刑罰の本義　十時　彌〔日社〕大四　三　一一一
目的刑主義者の主張する刑罰の絕對要素　武田鬼十郎〔新報〕大四　二五　三
刑罰の觀念を明かにす　大場　茂馬〔新報〕大五　二六　五
刑罰の效力　大場　茂馬〔新報〕大五　二六　七
刑罰法上に於ける應報思想と目的觀念　木村　尙達〔法政〕大六　一四　一
處罰論　大場　茂馬〔新報〕大六　二七　一一二
處罰の意義及び研究　大場　茂馬〔法政〕大六　一四　二
處刑者に對する「刑罰の能作」と「刑罰不感應の理」　谷本　弘二〔國國〕大六　五　五一六
刑罰に類似する處分　大場　茂馬〔新報〕大六　二七　六一七
處罰條件と訴追條件　大場　茂馬〔國國〕大六　五　七
刑罰と保安處分とに就て　池田　重雄〔志林〕大六　一九　九一二
刑罰法上に於ける豫防思想　木村　尙達〔法記〕大六　二七　一〇
罪刑の消滅を論ず　大場　茂馬〔國國〕大六　五　一〇
理想的刑罰　大場　茂馬〔國國〕大六　五　一二
刑罰法令の遡及效及追及效を論ず　宮本　英脩〔京法〕大七　一三　一
現代科學に於ける刑罰問題　南　勝治〔志林〕大七　二〇　三一六
嚴罰か寬罪か　泉田吉次郎〔新聞〕大七　一　一四四七
臺灣人の刑罰感應性と刑量裁定との關係　上內恒三郎〔臺法〕大八　一三　二一五
罪刑法定主義の歷史的考察　瀧川　幸辰〔法叢〕大八　一　六
刑法の目的と刑罰の目的　杉本　榮次〔臺法〕大九　一四　七
一般豫告の爲めの嚴罰論　齋藤　巖〔新聞〕大九　一　一七八〇
決定論的應報刑の一典型（メ

ルケルの決定論に就て）　瀧川　幸辰〔法叢〕大一〇　五　二—四
ビルクマイヤー「刑罰と保全處分」　瀧川　幸辰〔法叢〕大一〇　五　六
刑罰の本質としての應報　瀧川　幸辰〔法叢〕大一〇　五　一—六
刑罰とは何ぞや　宮本　英脩〔法叢〕大一一　八　七
刑罰の統一的立場から　寺崎　勝治〔法政〕大一一　一九　一〇
刑罰の否定と教化的考察　千賀　孝善〔法記〕大一一　三三　一〇
行刑の結果報告に就て　寺崎　勝治〔法記〕大一一　三一　一三
家人奴婢の犯罪及び之に科せられたる刑罰　瀧川政次郎〔志林〕大一二　二五　三
支那古代の刑罰思想　加藤　行吉〔辯協〕大一二　二七　二—四
國際聯盟制度と刑罰制裁問題　塚原　太郎〔國知〕大一二　三　六
米國に於ける刑罰學發展の傾向　山名　壽三〔法政〕大一三　二〇　九
刑餘りありて教足らざるなきか　松倉慶太郎〔新聞〕大一二　一　二〇九五
松倉辯護士の刑餘ありて教足らざるなきかを讀んで　藤塚　林平〔新聞〕大一二　一　二一〇三
刑罰は犯罪豫防の手段なり經驗に基く實地刑罪執行上の提唱　河邊　義一〔新聞〕大一二　一　二一五四
刑罰について　清水　鼎良〔法曹〕大一三　二　二
刑罰の時代的變遷　瀧川　幸辰〔法叢〕大一三　三　三
　　檜橋　渡〔新聞〕大一三　一　二三〇三
刑罰は必ずしも犯罪者に對するに非ず　松倉慶三郎〔新聞〕大一三　一　二三一三
ベンサムの功利主義的犯罪及び刑罰觀　永澤　邦男〔法研〕大一四　四　二
斷罪の資料としての行刑成績報告　寺崎　勝治〔新報〕大一四　三五　五
支那古代の刑罰觀念に就て　加藤　行吉〔法政〕大一四　三三　六—八
公刑罰の成立について　小野清一郎〔志林〕大一四　二七　九
刑罰の廢止と社會政策の振興　松倉慶三郎〔新聞〕大一四　一　二四四一
モーリス「犯罪學の發達と刑罰觀念の變遷」（譯）　安東　禾村〔法新〕大一五　一　四七三—四七五
嚴罰主義と寛刑主義　中根　四郎〔新聞〕大一五　一　二五一四

刑罰の適用

法國輕減加重新法　岩野　新平〔法記〕明三五　二　五
酌量減輕と改正刑法草案　花岡　敏夫〔法協〕明三一　一六　一二
伊庭想太郎被告事件を論して酌量減輕の法廷に及ぶ　花井　卓藏〔新報〕明三一　九　九四
特別宥恕竝罪樣の列擧に付て　岡田朝太郎〔志林〕明三四　三　二一
闕席判決と刑の時效　平島直太郎〔新聞〕明三六　一　一三三
闕席判決と刑の期滿免除に付き平島氏に質す　岡本　至德〔新聞〕明三六　一　一二八
刑期量定の標準と被告人の惡性及其特別關係　大場　茂馬〔法記〕明四一　一八　四
民事刑事の一抵觸問題　飯島　喬平〔法協〕明四一　二六　六
刑罰の適用に就て　泉二　新熊〔法協〕明四一　二六　七
量刑の標準と刑期の量定　大場　茂馬〔新報〕明四一　一八　九
舊刑法の刑と新刑法の刑との間に併合罪に屬する規定を適用する場合　牧野　英一〔志林〕明四一　一〇　一三
新刑法第五條削除論　横山勝太郎〔辯協〕明四一　一三　一三
新刑法第五條に就て　宮島　次郎〔辯協〕明四一　一三　一三
新刑法第六條と新舊刑法の比照　山内牧三郎〔新聞〕明四一　一　五〇八
刑法第六條新舊刑法の對照に就て　錦江　學人〔新聞〕明四一　一　五三六
親告罪に對する新舊二法の比照　長岡　熊雄〔新聞〕明四一　一　五三六
及川辯護士の所謂新刑法の疑義に就て　湊川　漁夫〔新聞〕明四一　一　五三六
不動產を沒收することを得るか　T　N生〔新聞〕明四一　一　四八四
未決拘留日數の通算に就て　小崎　傳〔法政〕明四一　一三　一
刑罰の裁量と賠償的分子　牧野　英一〔志林〕明四一　一一　一〇
刑法第十九條の疑義　反　齋生〔新聞〕明四一　一　五五六
刑の量定標準に關する大審院の判決を讀む　大矢　早利〔新聞〕明四二　一　五七九
刑の執行の時效に就て　齋藤常三郎〔京法〕明四三　五　二—五
刑の裁量に就て　元田　肇〔刑評〕明四三　二　八
刑期の量定に對する批評に就て　平沼騏一郎〔刑評〕明四三　二　一〇
過失犯の拘留と執行猶豫の無視　池田　直江〔辯協〕明四三　一四　一三九
老年犯罪者に對する科刑に就て　今村　正美〔新聞〕明四三　一　六二三
新舊刑法比照の結果輕き舊法を適用して懲役刑に處する場合に新法時代の未決拘留を刑期に通算することを得るや　山内　公允〔新聞〕明四三　一　六三五
刑の執行に關して余が所信を述ふ　市場學而郎〔刑評〕明四五　四　四
刑法第一四條の適用に就て　岡田　庄作〔志林〕明四五　一四　六
量刑標準の研究　瀧本駒太郎〔新聞〕大二　一　四四八—四四九
刑の量定に就きて　阿部文二郎〔新聞〕大三　一　八四六—八四八
懲役又は贓額二倍以下の罰金に處すべき場合に於て懲役刑を選擇したるときは贓額を判示するの必要なきか　菱川　憲正〔新聞〕大五　一　一一六七
刑法、比照新舊、從輕處斷

の規則に就て　岡田朝太郎〔法政〕大六一四　年卷　三　號
量刑の標準　大場茂馬〔法記〕大六二七　七
罪刑の減輕　大場茂馬〔新報〕大六二七　八
量刑の標準を論ず　大場茂馬〔國國〕大六五　八—九
現行法に於ける自由刑の執行　泉二新熊〔新報〕大七二八　一
稍狹き法定刑と酌加　岡田朝太郎〔志林〕大七二〇　一
科刑の標準たる遠因及性格　山岡萬之助〔法政〕大七一五　一—二
量刑學の講座を新設せよ　今井力三郎〔辯協〕大七二三　五
賃借權の贈賄と沒收の適用　林賴三郎〔新報〕大九三〇　九
刑の輕重の比照　泉二新熊〔新報〕大九三〇　一〇
刑の量定に就て　新保勘解人〔法記〕大一一三二　二
刑の自由裁量　鈴木英男〔臺法〕大一一一六　二
行刑上より見たる量刑　松本助太郎〔臺法〕大一一一六　四
刑の裁量私見　杉本榮次〔臺法〕大一一一六　五
遺產に對する財產刑の執行に付て　泉二新熊〔新報〕大一〇三一　一〇
愛の刑量を論ず　永野直〔臺法〕大一一一六　一二
刑罰量定論　新保勘解人〔新聞〕大一一一九二二—一九二五　一二
自由刑執行の累進制度　正木亮〔志林〕大一二二五　六—一〇
團體的犯罪に對する量刑論　石橋信〔新聞〕大一二一—二一〇〇
自由刑執行上の假出獄の價値　正木亮〔法政〕大一三二一　二—六
累進的刑罰執行論　正木亮〔法曹〕大一三二一　六—七
審院判決に就て　福田一覺〔新聞〕明三七—一九九　年卷　號
小河氏著笞刑論を讀む　鈴木宗言〔新聞〕明三七—四二一二五二一
主刑の一種としての監獄制度　西山廣業〔新聞〕明三七—二三五
贓物の意義　赤羽乙二郎〔新聞〕明三七—二四八
沒收刑執行に對する一大疑義　奥戸善之助〔新聞〕明三八—三一四
不定期刑の制度に就て　小河滋次郎〔法協〕明三九二四　一一
沒收刑に就て　小暗傳〔新聞〕明三九—四二二六五三二八
沒收の範圍に就て　二木清夫〔新聞〕明三九—三三六
小暗先生の教を仰ぐ　寺崎勝治〔新聞〕明三九—三六一
死刑に就て　勝本勘三郎〔京法〕明四〇二四
死刑の存廢に就て　勝本勘三郎〔志林〕明四〇九五
新刑法無期刑論　花井卓藏〔新報〕明四〇一七六—八
死刑廢止論　花井卓藏〔新報〕明四〇一七　十—一
無期刑廢止論　花井卓藏〔辯協〕明四〇二一　一〇九
死刑廢止の實例　〔新聞〕明四〇—四二〇
死刑存廢論　小河滋次郎〔明學〕明四〇—一一三
選擇刑とは何ぞや　野田保規〔新聞〕明四〇—四五六七
不定期刑に付て　佐々木鐵藏〔新聞〕明四一—四五四二
罰金、科料の徵收と詐害行爲　牧野英一〔志林〕明四三一三　八
差別刑論　谷田勝之助〔新聞〕明四三—六五四
鵜澤總明〔刑評〕明四三四四　二—一一—二　九
關東州阿片令に就て科刑不當改正を要す　小野實雄〔新聞〕大一三—二三四一
累進制度に關する考察　正木亮〔臺法〕大一四一九二—五
刑の量定の基調　泉二新熊〔法曹〕大一五四三

刑罰の種類

刑法第二七條に就ての意見　杜陵山人〔新報〕明二六三二九
過料の性質を論ず　三宅長策〔新報〕明二六三三一
減死刑論　長島鷲太郎〔新報〕明二七四三六
死刑の沿革　卜部喜太郎〔新報〕明二八五四八
刑法改正案第一編第二章第一節に付て　名村伸〔法協〕明三四一九三
現行刑法中監視制度に就て　藤本充安〔法協〕明三四一九四
監視制度に就て　名村伸〔法協〕明三四一九六
北米エルマイラ監獄に於ける不定期刑に就て　〔新聞〕明三四—四〇
監視期間の起算點に付て　小河滋次郎〔法政〕明三四五四五
監視期間の起算點を論ず　小田幹治郎〔志林〕明三五四二七
狩獵法と沒收に就て　平島直太郎〔志林〕明三五四三三
臺灣笞刑例に就て　伊藤喜八〔新聞〕明三五—一〇七
小河氏著笞刑論を讀む　小河滋太郎〔法協〕明三七三四—五
臺灣に於ける笞刑處分例を評す　鈴木宗言〔法協〕明三七三三六—七
酒類密造借用物件沒收の大　花井卓藏〔辯協〕明三七八八〇

私刑に就て　樋口秀雄〔刑評〕明四四三七
沒收を論ず　阿部文二郎〔刑評〕明四五四二
死刑小感　花井卓藏〔刑評〕明四五四二
選擇刑の性質を論ず　山中靜次〔刑評〕明四五四四
沒收刑の性質及び效力　伊藤藤三郎〔刑評〕明四五四七
沒收論　津川彌三郎〔新聞〕明四五—七八〇
拷問制度の沿革　藤田知治〔刑評〕大元四九—一二
死刑の刑事政策上の價値　吉田知道〔刑評〕大元四一一
刑法總則所謂沒收の目的物に就て　勝本勘三郎〔志林〕大二一五九
死刑可否論　寺田四郎〔辯協〕大三一八一八六
刑法第一四條を適用すべき場合　淺野豐三郎〔新聞〕大二—八九〇
拷問の事實取調書の卷頭に辯ず（信州赤穗騷擾事件檢擧の不法を論ずる也）　播磨龍城〔新聞〕大三—九九〇
再び拷問取調書の卷頭に題す　播磨龍城〔新聞〕大三—九九三
三たび拷問取調書の卷頭に題す　播磨龍城〔新聞〕大三—九九六
拷問取調の卷頭に辯す　播磨辰治郎〔辯協〕大四一九一九三
拷問と刑事裁判　石山彌平〔辯協〕大四一九一九九
差別刑論　鵜澤總明〔國國〕大五四二
日本古代法の追放刑論　三浦周行〔京法〕大五一一五—七

死刑論　大場茂馬〔新報〕大五・二六　八
自由刑論　大場茂馬〔新報〕大五・二六　九
譴責刑の歴史的發達　岡田庄作〔志林〕大六・一九　一―三
刑事訴訟法改正の根本義と幕府の拷問制度　播磨龍城〔國國〕大六・五　三
國民思想の上より觀たる極刑の弊害　太田資時〔辯協〕大六・二一　三
明治初年の拷問制度と其弱點　播磨龍城〔國國〕大六・五　六
沒收を論ず　津田進〔法記〕大六・二七　九
沒收の效力を論ず　藥師寺傳兵衛〔國國〕大七・六　一
死刑廢止論者の一典型　瀧川幸辰〔法叢〕大八・二　四
笞刑可否論　三好一八〔臺法〕大八・一三　九
不定期刑とは何ぞ　泉二新熊〔新報〕大八・二九　四一〇　五二一
死刑拷問など（ベッカリアとナタレの見解に就て）　瀧川幸辰〔法叢〕大九・四　二
民族待遇と笞刑廢止　谷野格〔臺法〕大一〇・一五　一
無期刑論　花井卓藏〔評論〕大一〇・一〇　八
死刑に就ての雜筆　牧野英一〔志林〕大一〇・二三　八―九
不定期刑と刑罰、保安處分の併用　豐島直通〔法曹〕大一三・二　三
苦使といふ罰に就いて　瀧川政次郎〔志林〕大一三・二六　五
死刑廢止一考　高山和雄〔辯協〕大一四・二九　二
差別刑論と獨逸新刑法草案　鵜澤總明〔正義〕大一四・一　三
死刑廢止不可論　神田終〔臺法〕大一五・二〇　四
象刑とは何ぞや　東川德治〔志林〕大一五・二八　五
月極め刑　大森洪太〔新聞〕大一五・一―二四九九　參照＝監獄。刑事訴訟法。刑の執行猶豫。刑罰。治安維持法。犯罪。

【刑法】

國際刑法裁判管轄主義　バテルノステロ〔法協〕明三四・九　七
刑法中親屬に依る條項の改正を要する議　井上毅〔國家〕明三四・五　五二
刑法改正私考　片山國嘉〔法記〕明三八・五　三九
國際刑法一斑　寺尾亨〔國家〕明三八・九　一〇六
現行刑法解釋卑見　勝本勘三郎〔法協〕明三〇・一五　十一五
刑法草案に就て　横田國臣〔法協〕明三一・一六　四
再び刑法全部改正の非を論す　鵜澤總明〔法協〕明三四・一九　四
富井博士の刑法改正案贊成說を讀む　梅謙次郎〔志林〕明三四・三　一六
刑法改正案　飯田宏作〔志林〕明三四・三　一―六
刑法改正案に關する管見　鵜澤總明〔新聞〕明三四・一　四六六―四六七
改正刑法草案を難ず　牧野英一〔法政〕明三四・五　四三
清浦氏の刑法改正意見を讀む　岸本辰雄〔新聞〕明三四・一　一八
刑法改正意見　富井政章〔新聞〕明三四・一　一九
刑法非改正論の一節に付き岸本法律學士に質す　岡田朝太郎〔新聞〕明三四・一　一九
刑法改正反對論　岡松參太郎〔新聞〕明三四・一　二〇
刑法非改正論を評す　岡田朝太郎〔新聞〕明三四・一　二〇
岡田學士に答へ併せて質す　岸本辰雄〔新聞〕明三四・一　二一
岡松君に　岡田朝太郎〔新聞〕明三四・一　二三
再び刑法改正順序に付き　岡松參太郎〔新聞〕明三四・一　二三
刑法改正に關する意見　河原榮次郎〔新聞〕明三四・一　二三
刑法改正案第一七二條の免換券に就て　岡松參太郎〔新聞〕明三四・一　二五
刑法改正案を難ず　鵜澤總明〔新聞〕明三四　二七　四〇〇　三〇
刑法改正案に付て　岡田朝太郎〔明法〕明三五・一　三〇
刑法改正案と國際刑法　山口弘一〔明法〕明三七・一　六八
犯罪進化と刑法の解釋　牧野英一〔法政〕明三八・九　八
民法と刑法との關係　泉二新熊〔法協〕明三八・二三　四一〇　五二一
刑法改正案に對する私見　磯邊四郎〔辯協〕明三九・一〇　九九
刑法改正案と海賊の處罰　山田三良〔法協〕明三九・二四　一三
民法と刑法との關係　富田山壽〔京法〕明四〇・三九　一一
刑法改正案の要點　富井政章〔志林〕明四〇・九　三
　〔新聞〕明四〇・一　四一六　五四一八
民法と刑法との關係　鳩山秀夫〔志林〕明四〇・九　六―七
改正刑法の大體に付て　勝本勘三郎〔京法〕明四〇・二　九
民事責任と刑事責任との差異を論して刑法の基礎觀念に及ぶ　牧野英一〔志林〕明四〇・九　一〇
新刑法と裁判官　勝本勘三郎〔志林〕明四〇・九　一一
刑法改正案批評　藤澤茂十郎〔新聞〕明四〇・一　四〇〇七　五四一一
刑法改正案評論　河西博文〔新聞〕明四〇・一　四三五　五四四
新刑法に就て　勝本勘三郎〔新報〕明四一・一八　一―二
刑法改正案理由　松本銀次郎〔法政〕明四一・一三　一―三
改正刑法管見　勝本勘三郎〔京法〕明四一・三　七
新刑法と不成文刑法　大場茂馬〔法政〕明四一・一三　七
刑法所感　小嶋傳〔法政〕明四一・一三　一〇
新刑法の實施に就て（時事刑法觀）　牧野英一〔法協〕明四一・二六　一〇
新刑法に於ける罰刑法定主義　牧野英一〔國家〕明四一・二三　一三
新刑法實施に付て希望　今村恭太郎〔辯協〕明四一・一三　一三四
國法上より觀たる新刑法　佐々木惣一〔京法〕明四一・三　四一三　四三　九―一〇
改正刑法管見　勝本勘三郎〔京法〕明四一・三　四一一　四四　七―一一
刑法時事觀　牧野英一〔法協〕明四一・二七　一
刑法に就て　穗積陳重〔刑評〕明四一・一　二
第十九世紀に於ける刑事立法の發達　リスト〔國家〕明四一・二三　三
現行刑法に於ける國際上の疑問　大場茂馬〔國際〕明四一・八　三

新刑法の運用　三浦英五郎〔刑評〕明四三　一　三
舊刑律と新刑法　泉二　新熊〔法協〕明四三　二七　四
刑法の立法事業　横田　國臣〔刑評〕明四三　一　四
新刑法と時代思潮　河上　肇〔日經〕明四三　五　一〇
刑法適用一斑を讀む　吉田平治郎〔新聞〕明四三　一　五三六
新刑法に就て　富井　政章〔東經〕明四三　五九　一四九四
世界最新の刑法草案　大場　茂馬〔新聞〕明四三　一　六〇八
新刑法の例示規定に就て　宮島　次郎〔辯協〕明四三　一三　一三四
新刑法と豫審　新井要太郎〔辯協〕明四三　一三　一二七
刑法運用の一大變調　小山五郎一〔辯協〕明四三　一三　一三一
新刑法の運用に就て　富井　政章〔刑評〕明四三　二　一
新刑法の效果　木名瀨禮助〔刑評〕明四三　二　一
刑法時事觀　牧野　英一〔法協〕明四三　二八　一一二
松田前法相と刑法　菊池　武夫〔刑評〕明四三　二　二
老刑法と老犯人　花井　卓藏〔新報〕明四三　二〇　八
最近三大刑法案に就て　泉二　新熊〔志林〕明四三　三　二
刑法の經世觀　花井　卓藏〔新報〕明四四　二　三・八
〔辯協〕明四三　一四　一四八
刑事立法政策　〔刑評〕明四四　一三　一五〇
刑事法の活用　勝本勘三郎〔新報〕明四四　二　一八
加藤清正の法度書と新刑法の精神　卜部喜太郎〔新報〕明四四　二　四
大寶令の刑法　鈴木　天眼〔刑評〕明四四　二　四
池邊　義象〔京法〕明四四　六　二
刑法と慣習法　富田　山壽〔刑評〕明四四　三　三
刑法運用の現狀　花井　卓藏〔新聞〕明四四　一　七二七
新刑法實施の結果に就て　谷田　三郎〔法記〕明四五　二三　一
〔法協〕明四五　三〇　二
刑事立法の變遷に就て　勝本勘三郎〔志林〕明四五　一四　二
刑法と正義觀念　大場　茂馬〔評論〕大元　一　一
新刑法の主義　山岡萬之助〔法記〕大元　二三　一〇
刑法實施の効果　植松　金章〔辯協〕大元　一六　一七〇
ビルクマイヤー述『ドクトル ヨハン・ライレン氏論「刑法改正の主義第一刑罰の社會的任務刑罰組織」に就ての評論』（譯）　岡田　庄作〔志林〕大元　一一七四　二一二
刑法と社會性の發展　天野　德也〔評論〕大二　二　四一四　五一六
我刑法は最優良の刑法か最劣惡の刑法か　大場　茂馬〔新報〕大三　二四　二
刑法の解釋方法に就て　牧野　英一〔志林〕大三　一六　四
法なければ刑なしとの原則と我刑法　武田鬼十郎〔新報〕大三　二四　六
〔法記〕大三　二四　四
佛教の正法律（二千五百年前の法律特に刑法）　花井　卓藏〔辯協〕大三・一八　一八六
刑法上に於ける目的思想に付て　武田鬼十郎〔新聞〕大三　一　九八八
刑法の補助科學の教育　寺田　精一〔志林〕大四　一六　一七　九一二三
刑法に於ける主觀主義の適用と其の制限　牧野　英一〔志林〕大五　一八　五
我神代の刑法　澤田順次郎〔國國〕大五　四　三
德川刑法の論評　中田　薫〔志林〕大五　一八　四
世界の刑法　岡田朝太郎〔志林〕大五　一八　七一八
刑法に於ける危險性　山岡萬之助〔法政〕大六　一四　六
刑法の演習問題　小野清一郎〔志林〕大七　二〇　二一八
戰前及戰後に於ける刑法の社會的任務　小野清一郎〔志林〕大七　二〇　五一六
刑法の根本觀念　宮本　英脩〔法論〕大七　一　一四
不孝勲不幸勲道德刑法の根本問題　播磨　龍城〔新聞〕大七　一　一四四九　二四一五
日本刑法の主義　不破　清警〔新聞〕大七　一　一四一八
羅馬尼一刑法學者の日本刑法評　寺田　四郎〔志林〕大八　二　四一五
犯罪及び刑法の社會的及び進化的意義　牧野　英一〔志林〕大八　二　四一〇　二一二
刑法に於ける進化的精神　大塚　郷二〔志林〕大九　二一　四一九
刑法の目的と刑罰の目的　杉本　榮次〔臺法〕大九　一四　七
理論及實施に於ける民法及刑法　石崎皆一郎〔臺法〕大九　一四　八
刑事學の新思潮と新刑法を讀む　山本　龜市〔志林〕大九　三　一〇
刑法の實證論的改正の企　牧野　英一〔法協〕大一〇　三九　二
刑法の解釋と主觀主義　牧野　英一〔志林〕大一〇　二三　一〇
刑事法に關する研究　鵜澤　總明〔辯協〕大一一　二六　一一七
刑法惡きか執法官其人なきか　緒方　清繼〔臺法〕大一一　一六　二
第四十五議會通過の新法律と刑法典　泉二　新熊〔法政〕大一一　一九　六
刑法の改正に就て　岡田朝太郎〔法政〕大一一　一　六・七
刑法上の孝道觀　長岡　熊雄〔新聞〕大一一　一　二〇三二
刑法今後の趨勢に就て　草豹　一郎〔新聞〕大一二　一　二〇六九
國家社會的共存生活の規準の爲否我が刑法の爲めに　播磨　龍城〔新聞〕大一二　一　二〇七三
科學の使命と刑法　安平　政吉〔法曹〕大一三　二　一
刑法に於ける社會防禦と階級防禦　大塚　春富〔辯協〕大一三　二八　三
最近刑法上の諸問題　清水　鼎良〔法曹〕大一三　二　四
三箇の問題　牧野　英一〔志林〕大一三　二六　六
本邦固有刑法の特色　泉二　新熊〔法新〕大一三　一　二
新理想主義刑法論の提唱　島田　武夫〔法新〕大一三　一　一三
刑法に於ける正義　小野清一郎〔志林〕大一四　二七　一
無政府主義と刑法　豐島　直通〔法曹〕大一四　三　五
小題三則　牧野　英一〔志林〕大一四　二七　一〇
刑法一大改正評論　不破　清警〔新聞〕大一四　一　二四六〇
各國の刑法改正事業一瞥　小齋甚治郎〔正義〕大一五　二　二一五

伊太利

イタリヤ刑法改正豫備草案正文　牧野英一〔志林〕大一〇・一一・二四　一九

イタリヤ刑法改正豫備草案に就て　泉二新熊〔新報〕大一一・三・三　八

英國

英國刑法大意　花井卓藏〔刑評〕明四三・一二・一〇　一一

英吉利國刑法歴史一斑　谷野格〔刑評〕明四三・一二　一一

墺太利

ドイツ・オーストリアの刑法統一問題　小野清一郎〔志林〕大一一・二・一四　二四

墺太利刑法改正一九二二年案正文　〔志林〕大一二・二・五　二七

支那

支那刑法志　松嶺子〔新報〕明二八・五　五

清國の刑法草案に付て　岡田朝太郎〔志林〕明四三・一二　二

大清刑律草案　〔志林〕明四三・一二　二

清國改正刑事草案（總則）　岡田朝太郎〔法協〕明四四・二・九　三

中華民國に於ける刑政の一斑　板倉松太郎〔法記〕大九・三・一〇　四

中華に於ける動靜刑法の一斑　板倉松太郎〔法政〕大一一・一二　一　六・八

漢代刑名一斑　東川德治〔志林〕大一三・二・六　八

獨逸

獨逸刑法論　〔志林〕大一〇・二・三　九—一二

刑法改正に關する獨逸社會民主黨の決義に就て　リスト〔法協〕明三一・一・六　一一〇

獨逸刑法草案に對する獨逸諸學者の批評　泉二新熊〔志林〕明三九・八　一三

獨逸刑法草案（現行法對比）　鳩山秀夫〔法協〕明四三・二・八　二—六

獨逸新刑法草案に就て　古川五郎〔刑評〕明四四・二・一〇—一二・四　一一

獨逸刑法改正一九一九年草案正文　松岡林平〔法記〕大一〇・三・一　四

獨伊刑法改正案の對照　〔志林〕大一一・二・一四　二—一一

ドイツ、オーストリアの刑法統一問題　泉二新熊〔新報〕大一一・三・一　八

ドイツに於ける刑法改正事業の研究　小野清一郎〔志林〕大一一・二・一四　二四

最近獨逸刑法の變更　小野清一郎〔志林〕大一二・二・一二　九・一二・一・一二

差別刑論と獨逸新刑法草案　安平政吉〔法曹〕大一三・二　三

獨逸刑法一九二五年草案の成立　鵜澤總明〔正義〕大一四・一　三

新獨逸刑法草案について　大塚鄉二〔志林〕大一四・二・七　五

獨逸刑法一九二五年草案正文　藥師寺志光〔法協〕大一四・四・三　六

獨逸新刑法草案に就て　〔志林〕大一四・二・七　六—八

ドイツ刑法協會の成立　守安富太郎〔法曹〕大一四・三　七

大塚鄉二〔志林〕大一四・二・七　一

獨逸新刑法草案評論　守安富太郎〔法曹〕大一五・四　一—六

佛蘭西

チャーレス五世の刑法　岡田朝太郎〔志林〕明三五・四　三〇

佛國刑法百年紀念號發刊に付て　富井政章〔志林〕明四三・一二　二

佛蘭西刑法の發達　牧野英一〔志林〕明四三・一二　二

米國

北米合衆國の刑法典　泉二新熊〔刑評〕明四三・二　二—三

委内瑞拉合衆國新刑法法典概評　岡田朝太郎〔法協〕大六・三・五　二—九

米國加洲刑法釋義　岩本英夫〔法治〕大一五・五　六

露西亞

露國新刑法　泉二新熊〔法政〕明三九・一〇　三—一一

ソヴイエット・ロシアの刑法　小野清一郎〔國家〕大一二・三・七　一—二

勞農露西亞の刑法に就て　小泉英一〔法曹〕大一四・三　五

其他

羅馬法上に於ける私犯法と刑法との發達關係一般　木村禮祐〔辯協〕大二・一・七　一—三

歐洲大陸刑法典籍解題　寺田四郎〔志林〕大四・一・七　二

婆利維亞刑法々典　岡田朝太郎〔法協〕大九・八・三七・三八　八—一二

チエコ・スロヴアキアの刑法草案に就て　小野清一郎〔國家〕大一二・三・七　五

ポーランドの刑法草案に就て　小野清一郎〔志林〕大一三・二・五　八

瑞西刑法一九一八年草案正文　〔志林〕大一三・二・一四　八—九　七—一二　一

暹羅王國刑法法典

刑法の效力

國外の犯罪に對する刑法の效力を論す　岡田朝太郎〔早法〕大一三・三　一

新なる非刑罰の遡及力に付て　大島喜三郎〔法協〕明二九・一四　一二

時に關する刑罰法規效力の範圍　泉二新熊〔新報〕明三六・一三　一三

刑法の遡及力に付て　小嶋傳〔法記〕明三九・一六　三

新刑法第五條削除論　泉二新熊〔志林〕明四〇・九　一一

新刑法第六條と新舊刑法の比照　横山勝太郎〔辯協〕明四一・一三　一二

刑法第六條新舊刑の對照に就て　宮島次郎〔辯協〕明四一・一三　一三

刑法第二條と國民自衛權との關係　山内牧二郎〔新聞〕明四一・一　五〇八

刑法の場所的及び人的效力に關する研究問題　錦江學人〔新聞〕明四一・一　五二六

歐米各國に於ける刑法の適　秋山雅之助〔志林〕明四二・一　二

泉二新熊〔法記〕明四四・二・一　一〇

用
時に關する刑法の施行力の範圍を論す　柿原　武雄〔法記〕明四五　三　六
刑法解釋の基礎及要點　大場　茂馬〔新報〕大九　二二　九
刑法第六條に付きて　大場　茂馬〔法協〕大九　三〇　一〇
　　花村　美樹〔朝司〕大一　一　七

刑法進化主義　穂積　陳重〔法協〕明一〇　五　四三六／三九
刑法學理の一新　富井　政章〔法協〕明二四　九　四四九／五
刑法學理の一新　富井　政章〔國家〕明二四　五　四四九／五〇
第八回萬國刑法學會記事　〔法記〕明三三　一〇　九九
刑法學の施行の學說に就て　淺見倫太郎〔新聞〕明三六　一　四一四四／一四八
刑法新派の基礎を論す　牧野　英一〔志林〕明三七　六　六四
ベッカリアの經歷及其學說の大要　古賀　廉造〔志林〕明三八／三九　七／八　九／五
刑法上の新舊學派を評して改正刑法に及ぶ　勝本勘三郎〔新報〕明四一　一八　一／二
刑法理論に於ける舊派新派及び最新派となる今の通理　大場　茂馬〔新報〕明四二　一九　四
クラシック學派の主張とゾチオロヂッチェ學派の主張の異同　大場　茂馬〔法記〕明四二　一九　五
牧野助教授著「刑事學の新思潮と新刑法」を讀む　吉野　作造〔國家〕明四二　二三　八
刑事三學派に就て　山岡萬之助〔法記〕明四三　二〇　二
保護刑主義の代表者たるリスト氏と應報刑主義の代表者たるビルクマイヤー氏と論爭を批評して我刑法の規定に及ぶ　勝本勘三郎〔京法〕明四三　五　五一／二
大場茂馬氏の刑法各論を讀む　在長野利事業〔新聞〕明四三　一　六一七
大場氏の刑法各論に對する某判事の論評を讀む　本郷　藍七〔新聞〕明四三　一　四六二／六二七
黑田如水の刑法觀　福本　日南〔刑評〕明四四　三　六
刑事舊學派の主張　山岡萬之助〔刑評〕明四四　三　一〇
泉二學士の日本刑法論の一節を讀む　河井善太郎〔新聞〕明四四　一　七〇八
刑法學及び其補助科學　大場　茂馬〔評論〕大九　一　一
刑法新派の要領及び之に對する評論　大場　茂馬〔法記〕大九　二三　九
刑法俗論を讀む（附予の懺悔と冀望）　村瀨　孝文〔新報〕大二　二三　九
現代に於ける刑事法學の思潮に就て　原　夫次郎〔志林〕大二　一五　一／一〇
憲法の精神と背馳する帝大教授法學士牧野英一君の刑法論　天野　德也〔新聞〕大二　一　九〇八

道義の準則と背馳する刑法論　天野　德也〔新聞〕大三　一　四九／二七／五九／二八
最近十五年間に於ける刑法學の變遷　牧野　英一〔新聞〕大四　一　一〇〇〇
豫防主義を批評す（講演）　大場　茂馬〔日社〕大四　二　三／四
刑法學の任務及び方法　山根　要治〔志林〕大八　二一　三
チエザレ・ベッカリアとトマソナタレ（刑法學の先驅者）　瀧川　幸辰〔法叢〕大九　四　一
心理强制主義と意思の自由　瀧川　幸辰〔法叢〕大九　四　三
舊學派より見たる新學派（ビルクマイヤー「リスト氏は刑法に何を殘すか」解說）　瀧川　幸辰〔法叢〕大一〇　六／五　二／四／五
刑法法理と刑事政策　岩井　尊文〔新聞〕大一〇　一　一九／一八
故獨外相ラテナウ氏の刑法未來觀　宮本　英脩〔法叢〕大一一　八　二
タルドの刑事社會學と刑法　風早八十二〔國家〕大一二　三七　八
二人の刑法學者の思出　瀧川　幸辰〔法叢〕大一三　一　六
國際刑法協會の大會　大塚　鄕二〔志林〕大一四　二七　七
刑法的觀察と私法的觀察　島田　武夫〔法政〕大一五　二三　一
刑法各論の對象及び方法に就て　小野清一郎〔志林〕大一五　二八　三
刑法主觀主義に對する疑惑　坂本　英雄〔法曹〕大一五　四　三／一六

【刑法施行法】（ケイホウシコウホウ）

新刑法施行法第六條第一號の場合に併合の規定に依る理由　〔志林〕明四一　一〇　六
刑法施行法第六條の解釋　遠藤　源吉〔新報〕明四一　一八　八／〔法政〕明四一　一五　八
刑法施行法に就て　淺野豐三郎〔新聞〕明四一　一　四九九
刑法施行法第八條と刑法第二一條との關係　遠藤　源六〔明學〕明四一　一　一三一
果して刑法施行法の缺點なるか　山內牧二郎〔新聞〕明四一　一　五〇九
刑法施行法第五八條について　瓊浦　學人〔新聞〕明四一　一　五〇九
刑法施行法第一九條により刑名を變更せられたる他の法律と新舊法の比照に付て　山內牧二郎〔新聞〕明四一　一　五一四
再び遠藤博士の垂教を仰ぐ　山內牧二郎〔新聞〕明四一　一　五一四
山內檢事の刑法施行法第一九條刑法第二五條に由る新舊法の比照に付ての論說を評す　鈴木　生〔新聞〕明四一　一　五一五